リットン報告書

国際聯盟支那調査委員会・編

中央公論社

1932

リットン報告書

東京都千代田区丸ノ内二ノ八（仲十二号館六号四一一室）
芳澤中國記念事業財團
電話（28）四一〇八番

リットン報告書（和文）

中央公論十一月號別冊附錄

內容目次

緒論

一九三一年九月二十一日ノ支那ノ正式出訴　一九三一年九月二十一日在「ジユネーヴ」支那政府代表ハ聯盟事務總長ニ書翰ヲ送リ九月十八日ヨリ十九日ニ至ル夜中奉天ニ於テ發生セル事件ヨリ起レル日支間ノ紛爭ニ關シ理事會ノ注意ヲ喚起センコトヲ求メ且規約第十一條ニ基キ「國際ノ平和ヲ危殆ナラシムル事態ノ此ノ上ノ進展ヲ阻止スル爲卽時手段ヲ執ランコト」ヲ理事會ニ訴ヘタリ。

九月三十日理事會ハ左ノ決議ヲ可決セリ。

「理事會ハ

一、理事會議長カ日支兩國ニ致セル緊急通告ニ對スル右兩國ノ囘答及該通告ニ從ヒ爲サレタル措置ヲ了承ス。

二、日本カ滿洲ニ於テ何等領土的目的ヲ有セサル旨ノ日本政府ノ聲明ノ重要ナルヲ認ム。

三、日本政府ハ其臣民ノ生命ノ安全及其財產ノ保護カ有效ニ確保セラルルニ從ヒ日本軍隊ヲ鐵道附屬地內ニ引カシムル爲既ニ開始セラレタル軍隊ノ撤退ヲ出來得ル限リ速ニ續行スヘク最短期間內ニ右ノ意嚮ヲ實現センコトヲ希望スル旨ノ日本代表ノ聲明ヲ了承ス。

四、支那政府ハ日本軍隊撤退ノ續行竝支那地方官憲及警察力恢復ノ成就ニ從ヒ鐵道附屬地外ニ於ケル日本臣民ノ安全及其財產ノ保護ノ責任ヲ負フヘキ旨ノ支那代表ノ聲明ヲ了承ス。

五、兩國政府カ兩國間ノ平和及良好ナル了解ヲ攪亂スル虞アル一切ノ行爲ヲ避ケンコトヲ欲スルヲ信シ、兩國政府ハ各自ニ事件ヲ擴大シ又ハ事態ヲ惡化セサル爲ノ必要ナル一切ノ措置ヲ執ルヘシトノ保障ヲ日支兩國代表ヨリ與ヘラレタル事實ヲ了承ス。

六、兩當事國ニ對シ其間ノ通常關係ノ恢復ヲ促進シ且之カ爲前記約定ノ履行ヲ續行且速ニ終了スル爲兩國カ一切ノ手段ヲ盡スヘキコトヲ求ム。

七、兩當事國ニ對シ事態ノ進展ニ關スル完全ナル情報ヲ屢々理事會ニ送ランコトヲ求ム。

八、緊急會合ヲ餘儀ナクスルカ如キ未知ノ事件發生セサル限リ十月十四日（水曜日）同期日ニ於ケル事態審査ノ爲更ニ壽府ニ會合ス。

九、理事會議長カ其同僚特ニ兩當事國代表ノ意見ヲ求メ

タル後事態ノ進展ニ關シ當事國又ハ他ノ理事會員ヨリ得タル情報ニ依リ前記理事會招集ノ必要ナキニ至レリト決定スル場合ハ右招集ヲ取消スヿヲ議長ニ許可ス。」

右決議採擇前ノ討議中支那代表ハ「日本ノ軍隊及警官ノ迅速且完全ナル撤退竝ニ完全ナル原狀恢復ヲ確保スル爲ニ理事會ノ計畫スヘキ最良ノ方法ハ中立ノ委員會ヲ滿洲ニ派遣スルコトナリ」トノ支那政府ノ見解ヲ表明セリ。

十月十三日乃至二十四日ノ理事會　理事會ハ紛爭ヲ考究スル爲更ニ十月十三日ヨリ二十四日迄會議ヲ開催シタルガ日本代表ノ反對ノ結果該會議ニ於テ提案セラレタル決議ニ對シ全會一致ヲ得ルコト能ハザリキ。

十一月十六日乃至十二月十日ノ巴里ニ於ケル理事會　理事會ハ再ビ十一月十六日「パリ」ニ會合シ約四週間ノ間熱心ニ事態ヲ研究セリ。十一月二十一日日本代表ハ九月三十日ノ決議ガ其ノ精神ニ於テ且條章ニ於テ遵守セラルベキコトヲ日本政府ハ念ジ居ルモノナルコトヲ述ベタル後一ノ調査委員會ヲ現地ニ送ランコトヲ提案セリ。右提案ハ次イデ他ノ一切ノ理事會員ノ歡迎スル所ト爲リ、一九三一年十二月十日左ノ決議ハ全會一致ヲ以テ採擇セラレタリ。

十二月十日ノ決議「理事會ハ

一、兩當事國カ嚴肅ニ遵守スル旨宣言シ居レル一九三一年九月三十日理事會全會一致可決ノ決議ヲ再ヒ確認ス

依テ理事會ハ右決議ノ定ムル條件ニヨリ日本軍ノ鐵道附屬地內撤收カ成ルヘク速ニ實行セラレンカ爲日支兩國政府ニ對シ右決議實施ヲ確保スルニ必要ナル一切ノ手段ヲ講センコトヲ要請ス。

二、十月二十四日ノ理事會以來事態更ニ重大化シタルニ鑑ミ理事會ハ兩當事國カ此上事態ノ惡化スルヲ避クルニ必要ナル一切ノ措置ヲ執リ又此ノ上戰鬪又ハ生命ノ喪失ヲ惹起スルコトアルヘキ一切ノ主動的行爲ヲ差控フヘキヲ約スルコトヲ了承ス。

三、兩當事國ニ對シ情勢ノ進展ニ付引續キ理事會ニ通報センコトヲ求ム。

四、其他ノ理事國ニ對シ其關係地域ニ在ル代表者ヨリ得タル情報ヲ理事會ニ提供センコトヲ求ム。

五、上記諸措置ノ實行トハ關係ナク

本件ノ特殊ナル事情ニ顧ミ日支兩國政府ニ依ル兩國間紛爭問題ノ終局的且根本的解決ニ寄與センコトヲ希望シ

國際關係ニ影響ヲ及ホシ日支兩國間ノ平和又ハ平和ノ基礎タル良好ナル了解ヲ攪亂セムトスル虞アル一切ノ事情ニ關シ實地ニ就キ調査ヲ遂ケ理事會ニ報告センカ

爲メ五名ヨリ成ル委員會ヲ任命スルニ決ス。

日支兩國政府ハ委員會ヲ助クル爲メ各一名ノ參與委員ヲ指名スルノ權利ヲ有シ兩國政府ハ委員會カ其必要トスヘキ一切ノ情報ヲ實地ニ就キ入手センカ爲ノ各般ノ便宜ヲ委員會ニ供與ス。

兩當事國カ何等カノ交渉ヲ開始スル場合ニハ右交渉ハ本委員會所定任務ノ範圍内ニ屬セサルヘク又何レカノ當事國ノ軍事的施措ニ苟モ干渉スルコトハ本委員會ノ權限ニ屬セサルモノト了解ス。

本委員會ノ任命及審議ハ日本軍鐵道附屬地外撤收ニ關シ九月三十日ノ決議ニ於テ日本政府ノ與ヘタル約束ニ何等影響ヲ及ホスモノニ非ス。

六、現在ヨリ一九三二年一月二十五日ニ開カルヘキ次回通常理事會期迄ノ間ニ於テ本件ハ依然理事會ニ繫屬スルモノニシテ議長ニ於テ本件經過ヲ注意シ若シ必要アラハ新ニ會合ヲ召集センコトヲ求ム。」

議長ノ宣言　右決議ヲ採用スルニ當ル議長「ブリアン」氏ハ左ノ宣言ヲ爲セリ。「茲ニ提出セラレタル決議ハ異レル二方針ニ則リテ措置スヘキコトヲ規定ス。即チ(一)平和ニ對スル直接ノ脅威ヲ終熄セシムルコト(二)二國間ニ存スル紛爭ノ原因ノ終局的解決ヲ容易ナラシムルコトナリ。日支兩國ノ關係ヲ攪亂スルガ如キ事情ノ調査ハ夫レ自體望マシキコトナルガ、今回ノ會期中右調査ガ兩當事國ニ對シ受諾シ得ベキモノナルコトヲ發見シタルハ理事會ノ欣快トスル所ナリ。依テ理事會ハ十一月二十一日理事會ニ提出セラレタル委員會設置案ヲ歡迎セリ。決議ノ末項ハ右委員會ノ任命及職能ヲ規定ス。

余ハ茲ニ決議ニ付項ヲ逐ヒテ説明ヲ加ヘントス。

第一項―本項ハ九月三十日理事會カ全會一致ヲ以テ採擇セル決議ヲ再ヒ確認シ、同決議中ニ記サレタル條件ノ下ニ日本軍ヲ成ルヘク速ニ鐵道附屬地内ニ撤退スルコトヲ特ニ强調スルモノナリ。理事會ハ此ノ決議ヲ最モ重要視シ且兩國政府カ其ノ九月三十日ニ爲シタル約束ノ完全ナル履行ニ努ムヘキコトヲ確信ス。

第二項―前回ノ理事會以來事態大ニ惡化シ且當然ノ憂慮ヲ抱カシムルニ至リタル諸種ノ事件ノ發生シタルハ不幸ナル事實ナリ。此ノ上戰鬪ヲ惹起スルコトアルヘキ一切ノ主動的行爲及事態ヲ惡化セシムル虞アル他ノ一切ノ行動ヲ差控フルコト最モ緊要ナリ

第四項―本項ニ於テ當事國外ノ理事國ハ現地ニ在ル自國代表者ヨリ接受スル情報ヲ引續キ理事會ニ提供センコトヲ求メラル。

此ノ種情報ハ過去ニ於テ頗ル價値アルモノナルコトヲ證シタルヲ以テ諸地點ニ斯ノ如キ代表者ヲ派遣シ得ル各國ハ現在ノ方法ヲ繼續シ且之ヲ改善スル爲出來得ル限リノコトヲ爲スヘキコトニ同意セリ。

之カ爲兩當事國ニシテ希望スルニ於テハ此等代表者ヲ派遣スヘキ地點ヲ兩當事國カ右各國ニ指示シ得ル樣右各國ハ兩當事國ト接觸ヲ保ツヘシ。

第五項—本項ハ調査委員會ノ設置ヲ規定ス。本委員會ハ純然タル諮問的性質ヲ有スルモノナルモ其ノ所定任務ハ廣汎ナリ。本委員會カ調査ノ要アリト認ムル問題ハ、苟モ國際關係ニ影響ヲ及ホシ、日支間ノ平和又ハ平和ノ基礎タル良好ナル了解ヲ攪亂セントスル處アル事態ニ關スルモノナル限リ原則トシテ除外セラレサルヘシ。兩國政府ハ何レモ其ノ特ニ審査ヲ希望スル問題ニ付之カ考慮ヲ委員會ニ請求スルノ權利ヲ有ス。委員會ハ理事會ニ報告スヘキ問題ヲ定ムルコトニ付充分ナル考量ヲ有シ且望マシキ場合ニ於テ中間報告ヲ爲スノ權能ヲ有ス。

九月三十日ノ決議ニ遵ヒ兩當事國ノ爲シタル約束カ委員會ノ到着ノ時迄ニ實行セラレサル場合ニ於テハ委員會ハ出來得ル限リ速ニ理事會ニ對シ其ノ事態ニ付報告スヘシ。「兩當事國カ何等カノ交渉ヲ開始スル場合ニハ右交渉ハ本委會所定任務ノ範圍內ニ屬セサルヘク又何レカノ當事國ノ軍事的施措ニ苟モ干渉スルコトハ本委員會ノ權限ニ屬セサル」旨特ニ規定セラル。此ノ後段ノ規定ハ何等委員會ノ調査權能ヲ制限セス又委員會カ其ノ報告ニ必要ナル情報ヲ得ル爲行動ノ充分ナル自由ヲ有スヘキコト明白ナリ。」

兩當事國ノ留保及批判　日本代表ハ決議ヲ受諾スルニ當リ決議第二項ニ關スル留保ヲ爲シ「本項ハ滿洲各地ニ於テ猖獗ヲ極ムル匪賊及不逞分子ノ活動ニ對シ日本臣民ノ生命及財產ノ保護ニ直接備フルニ必要ナルヘキ行動ヲ日本軍カ執ルコトヲ妨クルノ趣旨ニ非ストノ了解ノ下ニ」日本政府ノ名ニ於テ本項ヲ受諾スルモノナル旨ヲ述ベタリ。

支那代表ハ又決議ヲ受諾セルモ原則ニ關スル其ノ或意見及留保ガ左ノ如ク議事錄ニ挿入セラレンコトヲ求メタリ。

「一、支那ハ規約ノ一切ノ規定、其ノ加入セル一切ノ現存條約竝ニ國際法及國際慣例ノ承認セラレタル原則ニ基キ支那ノ有シ又ハ有シ得ヘキ一切ノ權利、救濟方法及法律的地位ヲ完全ニ留保スルヲ要シ且之ヲ留保ス。

二、支那ハ理事會ノ決議及理事會議長ノ聲明ニ依リ明白ナラシメラレタル施措ヲ以テ必要ニシテ且相關關係ヲ有スル左ノ四個ノ本質的ニシテ相關關係ヲ有スル要素

ヲ包含スル實際的措置ト認ム。

（イ）敵對行爲ノ卽時停止

（ロ）日本ノ滿洲占領ノ能フ限リ短期間内ニ於ケル清算

（ハ）今後生シ得ヘキ一切ノ事件ニ關スル中立國人ノ觀察及報告

（ニ）理事會ノ任命シタル委員會ニ依ル全滿洲ノ事態ニ關スル現地ノ包括的調査。

右施措ハ條章及精神ニ於テ右ノ基本的要素ニ基クモノナルカ故ニ其ノ完全性ハ右要素ノ一タリトモ豫定ノ如ク具體化セラレ且實際ニ現實化セラレサル場合ニハ明白ニ破壞セラルヘシ。

三、支那ハ決議中ニ規定セラルル委員會ハ其ノ現地ニ到着セルトキ日本軍隊ノ撤退カ完成セラレサルトキハ右ノ撤退ニ關シ調査シ且勸告ヲ載セタル報告ヲ爲スコトヲ其ノ第一任務ト爲スヘキモノト了解シ且希望ス。

四、支那ハ右協定ハ滿洲ニ於ケル最近ノ事件ヨリ發生セル支那及支那人ニ對スル損害賠償ノ問題ヲ直接ニモ暗默的ニモ害スルコトナキモノト想定シ此ノ點ニ關シ特別ナル留保ヲ爲ス。

五、茲ニ提出セラレタル決議ヲ受諾スルニ當リ支那ハ理事會カ此ノ上戰鬪ヲ惹起スルコトアルヘキ一切ノ主動的行爲及事態ヲ惡化セシムル虞アル他ノ一切ノ行動ヲ避クル樣日支兩國ニ命令シ以テ此ノ上ノ戰鬪及流血ノ慘ヲ阻止セラルルコトニ付理事會ノ努力ヲ謝ス。決議カ終熄セシムルコトヲ眞ニ目的トシタル事態ヨリ生シタル無法律ノ狀態カ存在スルコトノ口實ヲ以テ右ノ命令ヲ破ルヘカラサルコトハ之ヲ明白ニ指摘セサルヘカラス。現ニ滿洲ニ在ル無法律ノ狀態ノ多クハ日本軍ノ侵入ニ依リテ生シタル通常生活ノ中絕ニ因ル所多キコトヲ看過スヘカラス。通常ノ平和的生活ヲ恢復スル唯一ノ確實ナル方法ハ日本軍ノ撤退ヲ迅速ナラシメ且支那官憲ヲシテ平和及秩序維持ノ責任ヲ負ハシムルコトニ在リ。支那ハ如何ナル外國ノ軍隊ニ依リテモ其ノ地域ノ侵入及占領ヲ許容スルコトヲ得ス。支那官憲ノ警察職務ヲ冒スコトヲ右軍隊ニ許スコトハ一層爲シ得サル所ナリ。

六、支那ハ他ノ列國ノ代表者ヲ通シテ爲ス中立的意見及報告ノ現在ノ方法ヲ繼續シ且改善スルノ意嚮ヲ滿足ヲ以テ了承ス。而シテ支那ハ斯カル代表者ヲ派遣スルコト望マシト思考セラルル地方ヲ時々必要ニ應シ指示スヘシ。

七、日本軍ノ鐵道附屬地內ヘノ撤收ヲ規定スル本決議ヲ受諾スルニ當リ支那ハ右鐵道附屬地內ニ於ケル軍隊維持ニ關シ其ノ常ニ執リ來レル態度ヲ何等放棄スルモノニ非サルコト了解セラレサルヘカラス。

八、支那ハ其ノ領土的又ハ行政的保全ヲ害スル如キ政治的ノ紛議（例ヘハ所謂獨立運動ヲ助クルカ如キ又ハ之カ爲ニ不逞分子ヲ利用スルカ如キ）ヲ挑發セントスル日本側ノ一切ノ試ヲ以テ事態ノ此ノ上ノ惡化ヲ避クヘシトノ約束ノ明白ナル違反ト看做スヘシ。」

調査委員會ノ任命　委員會委員ハ次デ理事會議長ニ依リ選定セラレ兩當事國ノ贊成ヲ得タル上一九三二年一月十四日ノ理事會ニ於テ左ノ如ク最終的ニ承認セラレタリ。

エイチ、イー、アルドロヴアンデイ伯爵（伊國人）
アンリ、クローデル中將（佛國人）
リットン伯爵（英國人）
フランク、ロッス、マッコイ少將（米國人）
ハー、エー、ハインリッヒ、シユネー博士（獨逸人）

委員會ノ構成　歐洲諸國ノ委員ハ米國委員ノ代表者ト一月二十一日「ジュネーヴ」ニ於テ二回ノ會合ヲ催シタルガ右會合ニ於テ「リットン」卿ハ滿場一致ヲ以テ委員長ニ選擧セラルルト共ニ委員會ノ事業ノ假計畫ハ是認セラレタリ。

日支兩國政府ハ十二月十日ノ決議ニ基キ委員會ヲ補助スル爲夫々一人ノ參與員ヲ指名スル權限ヲ有シタルニ付右參與員トシテ「トルコ」駐劄特命全權大使吉田伊三郎及前總理大臣、前外交部長顧維鈞ヲ任命セリ。

國際聯盟事務總長ハ聯盟事務局部長「ロバート、ハース」ニ委員會ノ事務總長ヲ委囑セリ。

委員會ハ其ノ事業中「ジー、エィチ、ブレークスリー」敎授（米國「クラーク」大學敎授「ドクトル、オヴ、フィロソフィー」、「エル、エル、ディ」）、「デネリー」氏、（「佛蘭西大學敎授」）、「ベン、ドルフマン」氏（「ピー、エー」及「エム、エー」、米國「カリフォルニア」大學「ウイリアム、ハリスン、ミルス」「フェロー」）、「エー、ディー、エー、デ、カット、アンジェリノ」博士、「ティー、エー、ハイアム」大佐（「カネーディアン、ナショナル」鐵道會社長補佐員）、威海衛駐在英國領事「ジー、エス、モッス」氏（「シー、ビー、」イー」、「エィチ、ビー、エム」）、「シー、ウォルター、ヤング」博士（「エム、エー」、「ドクトル、オヴ、フィロソフィー」在「ニュー、ヨーク」世界時事問題協會ノ極東代表者）ノ專門的進言ニ依リ補助セラルル所アリタリ。

（註）　事務總長ハ委員會書記局員トシテ左記諸氏ヲ配置セリ。「ベルト」氏（情報部員）、「フォン、コッツェ」

氏(國際事務局ニ關スル事務擔任ノ事務次長補佐員)

「パスチュホーフ」氏(政治部員)、(タブリュー、ダブリュー、アスター」氏(臨時事務局員ニシテ委員長ノ秘書役)、「シャレール」氏(情報部員)

「ピー、ジューヴレー」少佐(佛國軍醫、「クローデル」將軍ノ隨員)「ビッドル」中尉(「マッコイ」將軍ノ隨員ニシテ又事務局ノ一般事務ニモ協力セリ)

「ドベイール」氏(在橫濱佛國副領事ニシテ日本語通譯者)青木氏及吳秀峯氏(情報部員ニシテ委員會書記局ト協力セリ)

委員會ノ歐洲諸國委員ハ二月三日「ル、アーヴル」及「プリマス」ヲ出帆シ二月九日「ニュー、ヨーク」ニ於テ米國委員ノ參加ヲ得タリ。

聯盟規約第十條、第十一條及第十五條ニ基ク支那ノ聯盟出訴　斯ル間ニ於テ極東ノ形勢ノ發展ハ支那政府ヲシテ一月二十九日聯盟規約第十條第十一條及第十五條ニ基キ聯盟ニ對シ新ナル出訴ヲ爲サシメタリ。一九三二年二月十二日支那代表者ハ理事會ニ對シ聯盟規約第十五條第九項ニ基キ紛爭ヲ總會ニ附託スルコトヲ要請セリ。然レトモ委員會ハ理事會ヨリ何等ノ新ナル指令ヲモ受領セザリシニ付十二月十日ノ理事會決議ニ從ヒ理事會ヨリノ命令ヲ解釋シ行ケリ。右ノ中ニハ左記ノモノヲ含ム。

一、理事會ニ付議セラレタル日支間ノ紛爭ノ調査、但シ紛爭ノ原因其ノ發展ノ狀態及調査當時ノ情況ヲ含ム。

二、兩國間ノ根本的利益ヲ調整スヘキ日支紛爭ノ解決策ニ對スル考慮。委員會ノ使命ニ關スル此ノ概念ハ事業ノ計畫ヲ決定セリ。

一九三二年二月二十九日委員會東京到着　紛爭ノ本舞臺タル滿洲ニ到著セザル以前ニ兩國ノ利害關係ヲ確ムル爲ニ日支兩國政府及各方面ノ意見ヲ代表スル人士ト接觸ヲ保チタリ。卽チ委員會ハ二月二十九日東京ニ到着シ同地ニ於テ日本參與員ノ參加ヲ受ケタリ。尙委員ハ日本國皇帝陛下ヨリ謁見ノ光榮ヲ賜リタリ。東京ニハ九日間ノ滯在ヲ爲シタル處右期間中ハ日日閣員(及其ノ他)トノ會見ヲ爲シタルガ右ノ中ニハ犬養總理大臣、芳澤外務大臣、陸軍大臣荒木中將、海軍大臣大角大將ヲ含ミタリ。右ノ外有力銀行家、實業家及種々ノ團體ノ代表者等トモ會見ヲ遂ゲタリ。吾人ハ右等人士ヨリ滿洲ニ於ケル日本ノ權益及日滿ノ歷史的關係ニ關スル情報ヲ受領セリ。上海事件ニ關シテモ議スル所アリタリ。東京出發後吾人ハ京都ニ於テ「滿洲國」ナル國名ノ下ニ滿洲ニ建國アリタル次第ヲ知リタリ。大阪ニ於テハ實業界ノ代表者トノ會見ノ手筈ヲ定メタリ。

上海（三月十四日―二十六日）委員會ハ三月十四日上海ニ到着シ支那參與員ノ參加ヲ得タリ。同地滯在二週間ヲ一般調査ノ外吾人ガ曩ニ東京滯在中芳澤外相ト議シタル最近ノ戰鬪ニ關スル事實及休戰ノ可能性ニ關シテモ成ルベク知ランコトヲ努ムルニ用ヒタリ。吾人ハ荒廢地域ヲ訪ヒ最近ノ戰鬪動作ニ關スル日本ノ陸海軍當局ノ陳述ヲ聽取セリ。吾人ハ又若干ノ支那政府閣員及廣東ヲモ含ム實業、教育界其他ノ主腦者トモ會見セリ。

南京（三月二十六日―四月一日）三月二十六日委員會ハ南京ニ赴キタルガ其ノ一部途中杭州ニ立寄タリ。翌週中委員會ハ國民政府主席ニ面謁スルノ榮ヲ得タリ。行政院長汪精衛氏、軍事委員會委員長蔣介石將軍、外交部長羅文幹氏、財政部長宋子文氏、交通部長陳銘樞氏、教育部長朱兆華氏其他ノ政府要員トモ會見セリ。

楊子江沿岸（四月一日―七日）吾人ハ更ニ充分代表的輿論及支那各地ノ現狀ヲ知ランガ爲途中九江ニ立寄リタル上四月一日漢口ニ赴キタリ。委員會ノ代表者ハ湖北省及四川省ノ宜昌、萬縣及重慶ヲ視察セリ。

北平（四月九日―十九日）四月九日委員會ハ北平（北京ノ現稱）ニ到着シタルガ同地ニ於テハ張學良將軍及九月十八日迄滿洲ノ施政ニ參與シタル官吏ト會見セリ。九月十八日夜奉天兵營ノ指揮官タリシ支那將軍ヨリ證據ノ提出アリタリ。吾人ノ北平滯在ハ支那參與員顧維鈞博士ノ入滿困難ノ爲延引セリ。

入滿ニ當リテ委員會ハ二團ニ分レタリ。卽チ一行中ノ或者ハ山海關ヲ經由シテ鐵道ニ依リ奉天ニ赴キタルガ顧博士ヲ含ム他ノ者ハ海路大連ヲ經由シ日本ノ鐵道附屬地內ニ止マルコトト爲レリ。

顧博士ニ對スル「滿洲國」領域入國ノ反對ハ委員會ガ日本ノ鐵道附屬地ノ北方ニ於ケル終點タル長春到着ノ際終ニ撤回セラレタリ。

滿洲（四月二十日―六月四日）吾人ハ滿洲內ニ六週間止マリタルガ其ノ間奉天、長春、吉林、哈爾賓、大連、旅順、鞍山、撫順及錦州ヲ視察シタリ。吾人ハ又齊々哈爾ニモ赴カント欲シタルモ哈爾賓滯在中附近ニ間斷ナキ戰鬪アリ且當時日本ノ軍當局ヨリ東支鐵道ノ西部線ノ旅行ニ關シ委員會ノ安全ヲ保障シ得ザル旨ヲ告ゲラレタルニ鑑ミ隨員ノ一部ノミ航空機ニ依リ齊々哈爾ニ赴キタリ。彼等ハ同地ヨリ洮昂鐵道及四洮鐵道ニ依ル旅行ニ依リ奉天ニ於テ委員會ノ一行ニ合セリ。

滿洲滯在中吾人ハ豫備報告ヲ起草シ四月二十九日之ヲ「ジュネーヴ」ニ送付セリ（附屬書參照）。

吾人ハ關東軍司令官本庄中將、其他ノ陸軍將校及日本ノ領事官憲ト數次ノ會談ヲ爲シタリ。長春ニ於テハ「滿洲國」執政即目下ハ其ノ「ヘンリー」溥儀ナル名ニ依リ知ラルル前皇帝宣統帝ヲ訪問セリ。吾人ハ又日本ノ國籍ヲ有スル官吏、顧問ヲ含ム「滿洲國」政府要員及各省省長トモ會見ヲ重ネタリ。各地方住民代表ヲモ接見シタルガ右ハ概ネ日本人又ハ「滿洲國」當局ニ依リ引合ハサレタリ。公ノ會見ノ外ニ吾人ハ支那人及外國人ノ多數ト會見ヲ遂グルヲ得タリ

北平（六月五日—二十八日） 委員會ハ六月五日北平ニ歸着シタルガ同地ニ於テ蒐集シタル尨大ナル資料ノ吟味開始セラレタリ。行政院長汪精衞氏、外交部長羅文幹氏及財政部長宋子文氏トハ更ニ二回ノ會見ヲ遂ゲタリ。

東京（七月四日—十五日） 六月二十八日委員會ハ朝鮮經由東京ニ向ヘリ。委員會ノ日本ヘノ出發ハ海軍大將齋藤子爵ノ內閣ニ於ケル外務大臣ノ任命ヲ見ザリシ爲遲延セリ。七月四日東京到着後總理大臣海軍大將齋藤子爵、外務大臣內田伯爵及陸軍大臣荒木中將ヲ含ム新內閣ノ首腦ト會見シタルガ之ニ依リ吾人ハ滿洲ノ情況ノ發展竝ニ日支關係ニ關スル政府ノ現在ノ見解及政策ヲ知リタリ。

北平（七月二十日） 斯ノ如クニシテ日支兩國政府ト重ネテ接觸ヲ遂ゲタルニ付委員會ハ北平ニ歸着シ報告書ノ起草ニ着手セリ。

參與員 委員會ノ事業ニ對シテ終始多大ノ盡力ヲ惜マザリシ兩參與員ハ數多ノ貴重ナル證據書類ヲ提出セリ。一參與員ヨリ受領セル材料ハ之ヲ他ノ參與員ニ提示シ以テ之ニ對スル批判ヲ爲スノ機會ヲ與ヘタリ。是等ノ書類ハ發表セラルベシ。

附屬書ニ表示セラレタル如ク會見セル人物及團體ノ數ノ多キコトハ以テ吾人ノ審査シタル證據ノ如何ニ多數ニ上リタルカヲ知ルニ足ルベシ。更ニ吾人ノ旅行中吾人ハ多量ノ印刷物、請願、要請及書翰ヲ受領セリ。單ニ滿洲ニ於テノミニテモ英文、佛文及日本文ノモノヲ除キ約千五百五十通ノ漢文ノ書翰及四百通ノ露文書翰ヲ受領セリ。是等ノ書類ノ整理、飜譯及研究ハ多大ノ勞力ヲ必要トシタルガ一地ヨリ他地ヘノ間斷ナキ移動ニモ拘ラズ之ヲ遂行シ七月北平ニ歸着後日本ヘノ最終訪問ニ出發前完成スルコトヲ得タリ。

委員會ノ事業ノ計畫及旅程ヲ決定シタル委員會ノ使命ニ關スル概念ハ又同樣ニ報告書ノ構想ヲ指導セリ。

十二月十日ノ決議ニ基ク使命ノ概念ハ委員會ノ報告書ノ構想ヲ定メタリ 吾人ハ先ヅ第一ニ紛爭ノ根本的原因ヲ成ス滿洲ニ於ケル兩國ノ權益ヲ記述シテ歷史的背景ヲ明ナラシメント試ミタリ。

次デ現在ノ事變勃發直前ニ於ケル個々ノ案件ヲ審議シ更ニ一九三一年九月十八日以來ノ事件ヲ記述セリ。終始問題ノ考察ニ當リテハ吾人ハ過去ノ行爲ニ對スル責任ヨリモ寧ロ將來ニ於テ之ヲ繰返スコトヲ避クル方法ヲ發見スルコトノ必要ヲ强調セントスルモノナリ。最後ニ報告書ハ委員會ノ直面シタル種々ノ問題ニ關シ理事會ニ附議センコトヲ欲スル若干ノ省察及考察竝ニ紛爭ノ永續的解決ヲ計リ且日支兩國間ノ良好ナル了解ノ再建ヲ成就スル爲吾人ノ可能ナリト認ムル方針ニ基ク若干ノ提言ヲ以テ結バレ居レリ。

第一章　支那ニ於ケル近時ノ發展ノ概要

現在ノ紛爭ノ完全ナル了解ニ必要ナル事前ノ狀態ニ關スル知識　現在ノ紛爭ガ始メテ國際聯盟ニ持出サルルニ至レル一九三一年九月十八日ノ事件ハ、日支間ノ關係緊張ヲ加ヘ來レルヲ示セル長期ノヨリ重要ナラザル軋轢ノ連鎖ノ結果ニ外ナラズ。現在ノ紛爭ヲ完全ニ理解センガ爲メニハ右二國間ノ最近ノ關係ノ主要ナル要素ニ關スル知識ヲ必要トス。從テ問題ノ研究ヲ滿洲事態以外ニ及ボシ且現在ノ日支關係ヲ決定スル有ラユル要素ヲ最モ廣汎ナル局面ニ付觀察スル必要アリタリ。例ヘバ支那共和國ノ國民的翹望、日本帝國及舊露西亞帝國ノ膨脹政策、現時「ソ」聯邦ヨリノ共產主義宣布及右三國ノ經濟的及軍略的必要等ノ如キハ如何ナル滿洲問題ノ研究ニ當リテモ根本的ニ重要視セラルベキ要素ナリ。

支那ノ此ノ部分ハ地理的ニ日露兩國ノ領域ノ間ニ介在スルヲ以テ滿洲ハ政治的ニ紛爭ノ中心トナリ右三國間ノ戰爭ハ此ノ土地ニ於テ行ハレタリ。實ニ滿洲ハ相衝突スル要求及政策ノ遭遇點ニシテ現在ノ紛爭ノ具體的事實ヲ充分ニ正解スルニ先チ先ヅ之等ノ相衝突スル要求及政策ヲ考査スルヲ要ス。故ニ吾人ハ先ヅ右根本的要素ヲ順次檢討セントス。

一、近代支那ノ發展

支那ハ進展シツヽアル國家ナリ　支那ニ於ケル主動的要素ハ徐々ニ行ハレツヽアル國民自體ノ近代化ナリ。現代支那ハ其國民生活ノ有ラユル方面ニ於テ過渡的證跡ヲ示シツツ進展シツツアル國家ナリ。政治的擾亂、內亂、社會的及

經濟的不安ハ中央政府ノ衰微ヲ齎スト共ニ一九一一年ノ革命以來支那ノ特徴トナリタリ。之等ノ狀態ハ支那ノ接觸シ來レル有ラユル國家ニ不利ナル影響ヲ及ボシ來レルモノニシテ、匡救セラルルニ至ル迄ハ常ニ世界平和ニ對スル脅威タルベク又世界經濟不況ノ一原因タルベシ。

一八四二年支那始メテ外國人ニ開放セラル　現在ノ狀態ニ至ル迄ノ諸段階ニ就キテハ本報告ニ於テハ詳細ナル歷史ヲ記載スルヲ得ズ、單ニ簡單ナル概要ヲ述ブルニ止ムベシ。支那ハ個々ノ西洋人ト交際シタル最初ノ數世紀中ハ、西洋ヨリノ影響ノ關スル限リニ於テハ實際上孤立セル國家タリキ。此孤立狀態ハ、第十九世紀ノ初ニ當リ近代的交通機關ノ改良ガ距離ヲ狹メ極東ヲ他ノ諸國ヨリ容易ニ到達シ得ルニ至ラシムルニ及ビテ當然終了スベキ運命ニアリタリ。然レドモ此時ニ當リテモ支那ガ此新ナル接觸ニ應ゼントスルノ用意無カリキ。一八四二年ノ戰爭ノ終末ヲ告ゲタル南京條約ノ結果トシテ支那ノ數港ハ外國人ノ貿易及居住ノ爲ニ開カレタリ。外國ノ影響ハ之ヲ採リ入ルル何等ノ準備ヲモ爲シ居ラザル政府ヲ有スル國ニ導入セラレタリ。外國ノ商人ハ政府ガ外國人ノ行政的、法律的、司法的、知識的及衞生的必要ニ對スル設備ヲ爲シ得ザル以前ニ其諸港ニ居住シ始メタリ。外國商人等ハ自己ノ慣レタル狀態及標準ヲ齎シタリ。諸條約港ニハ外國都市建設セラレ組織、行政及商業ノ外國式方法採用セラレタリ。外國ト支那トノ此ノ對照ヲ緩和シ得ベカリシ兩方ヨリノ努力モ效果ナク軋轢ト誤解トノ長年月之ヨリ繼續スルニ至レリ。

度々ノ武力衝突ニ於テ外國武器ノ大ナル效力ヲ見タル支那ハ兵器廠ヲ建テ西洋式方法ニ依リテ軍隊ヲ教練シ力ヲ以テ力ニ對抗セントシタリ。範圍ニ於テ限ラレタル支那ノ此方向ヘノ努力ハ結局失敗スベキ運命ニ在リタリキ。支那ガ外國人ニ對抗シ得ンガ爲ニハ更ニ根本的ナル改革ヲ必要トシタルモ支那ハ斯カル改革ヲ望マザリキ。寧ロ反對ニ支那ハ外國人ニ對シ支那ノ文化ト主權ヲ護ラント欲シタリキ。

日本トノ比較　日本モ始メテ西洋ノ影響ニ對シ國ヲ開キタル當時同樣ナル諸問題、卽擾亂的ナル諸思想トノ新ナル接觸、相異ル標準ノ衝突、其結果タル外國居留地ノ設定、一方的關稅協定及治外法權要求等ノ諸問題ニ面セザルヲ得ザリキ。然レドモ日本ハ內政上ノ改革ニ依リ、自己ノ近代的要求ノ標準ヲ西洋ノ標準迄高ムル事ニ依リ及外交交涉ニ依リ之等ノ諸問題ヲ解決セリ。日本ニ依ル西洋諸思想ノ同化ハ未ダ完全ナラザルヤモ知レズ、又相異ル時代ノ新舊思想間ノ軋轢ハ時ニ之ヲ見ルコトアルヤモ知レズ。然レドモ日本ガ自己ノ古キ傳統ノ價値ヲ減ズルコトナク西洋ノ科學

ト技術ヲ同化シ西洋ノ標準ヲ採用シタル速度ト完全性ハ偏ク賞歎セラレタリ。

支那ノ問題ハ更ニ頗ル困難ナリ　日本ノ同化改革ノ問題ガ如何ニ困難ナリシニモセヨ支那ガ直面セル諸問題ハ支那ノ領土ノ擴大ナルコト、支那ノ人民ニ國家的統一ノ缺如セルコト及徵收セラレタル收入ノ全體ガ中央國庫ニ到達セザル傳統的財政組織ヲ有スルコトニ依リ、更ニ頗ル困難ナリ。支那ガ解決スルコトヲ要スル問題ハ日本ガ直面シタル問題ニ比シ更ニ頗ル複雜ニシテ二者ヲ比較スルハ不正當ナリトスルモ而モ支那ノ必要トスル解決ハ結局日本ノ採用セル如キ方針ニ依ラザルヲ得ズ。支那ノ外國人ヲ接受スルコトニ對スル嫌惡及支那在住外國人ニ對スル支那ノ態度ハ當然重大ナル結果ヲ生ムベキモノナリキ。此ノ態度ハ其當事者ノ注意ヲ外國人ノ勢力ニ對スル反抗及其制限ニ集中セシメ、支那ガ外國居留地ニ於ケル進步セル諸狀態ノ經驗ニ依リ利益スルコトヲ妨ゲタリ。其結果トシテ支那ヲシテ新ラシキ諸狀態ニ對抗シ得シムル爲ニ必要ナル建設的改革ハ殆ンド全ク着手セラレザリキ。

諸外國トノ衝突ニ依ル支那ノ損害　各自ノ權利及國際關係ニ關スル相容レザル二思想ノ不可避的衝突ハ戰爭及論爭トナリ其結果ハ次第ニ主權ノ割讓及一時的又ハ永久的ノ領土喪失トナレリ。支那ハ黑龍江ノ北岸ニ於ケル大地域及沿海州、琉球諸島、香港、「ビルマ」、安南、東京、「ラオス」、交趾支那（印度支那ノ諸地方）、臺灣、朝鮮其他數個ノ朝貢國ヲ失ヒ、又其他ノ領土ヲ長期ニ涉リ租貸シタリ。又外國法廷、行政、警察及軍事施設ヲ支那ノ領土ニ於テ許容セリ。自國ノ輸出入關稅ヲ自由ニ規定スル權利ハ一時喪失セラレタリ。支那ハ外國人ノ生命及財產ニ對スル危害ニ對スル賠償ヲ支拂ヒ又戰敗シテハ巨額ノ償金ヲ支拂ヒタルガ之等ハ其後常ニ支那財政ノ重荷タルニ至レリ。支那領土ノ諸外國ノ勢力範圍ヘノ分割ニ依リ國家トシテノ存在サヘモ脅サルルニ至レリ。

一九〇〇年團匪擾亂後改革運動起ル　一八九四―九五年ノ日支戰爭ニ於ケル敗北及一九〇〇年團匪反亂ノ慘憺タル結果ハ支那主導者中ノ心アル者ノ眼ヲ開キ根本的改革ノ必要ヲ感ゼシメタリ。改革運動ハ當初ハ滿洲朝廷ノ指揮ヲ甘ンジテ受クル意アリシモ其目的及指導者ガ西太后ノ手ニ欺キ取ラレテ後ハ同王朝ヨリ離反シ光緒帝ハ其百日ノ改革ノ代償トシテ一九〇八年崩御ニ至ル迄事實上ノ牢獄生活ヲ送リタリキ。

滿洲王朝ノ崩壞　滿洲王朝ハ支那ヲ二百五十年間統治シタリキ。同王朝ハ其後年ニ至リテハ太平亂（一八五〇―六

五年）雲南ニ於ケル回教徒ノ叛亂（一八五六—七三年）及支那「ターキスタン」ニ於ケル叛亂（一八六四—七七年）等度々ノ叛亂ニヨリ力ヲ失ヒタリキ。殊ニ太平亂ハ同帝國ノ基礎ヲ搖シ王朝ハ其威嚴上遂ニ回復スル事ヲ得ザル大ナル打撃ヲ受ケタリ。而シテ一九〇八年西太后ノ崩御後、其內部ノ虛弱ヨリシテ遂ニ倒壞セリ。

革命主義者ハ幾度カ反亂ノ小計畫ヲ試ミタル後南支那ニ於テ成功セリ。斯クテ短期間ノ間革命ノ指導者孫逸仙博士ヲ臨時大統領トスル共和政府南京ニ樹立セラレタリキ。一九一二年二月十二日當時ノ皇太后ハ幼兒タル皇帝ノ名ニ於テ退位ノ勅書ニ署名シ次テ袁世凱ヲ大總統トスル臨時立憲政治開始セラレタリ。皇帝ノ退位ト共ニ各省、縣及地方ニ於ケル皇帝ノ代表者ハ皇帝ノ權威ニ基キテ彼等ガ有シ來レル勢力及道德的威嚴ヲ失ヘリ。彼等ハ普通ノ人間トナリ其決定ヲ强制シ得ル限リニ於テノミ人民ハ彼等ニ服從スルコトトナレリ。斯クテ各省ニ於テ文官都督ガ武官タル都督ニ依リテ代ラルルニ至リタルハ當然ノ結果ナリ。中央主權者ノ地位モ亦同樣ニ最モ强大ナル軍隊ヲ有スル軍閥首領又ハ省又ハ地方ノ有力軍閥ノ最モ强大ナル一團ニ依リ支持セラレタル軍閥首領ニヨリテノミ保持セラレ得ルニ至レリ。

北方ニ於ケル軍閥專制ノ傾向　南方ヨリモ北方ニ於テ顯著ナリシ軍閥獨裁ノ傾向ハ、軍隊ガ革命ニ對シテ屢々與ヘタル援助ニ依リテ人氣好カリシ事實ニ依リテ容易トナリタリキ。首領軍人ハ革命ヲ成功セシメタル功勞ニ對シ報酬ヲ要求スルニ躊躇セザリキ。彼等ノ大部分ハ北方ノ首領ニシテ或程度迄所謂北洋軍閥—日支戰爭後袁世凱ニ依リテ訓練セラレタル模範軍隊ニ於テ低キ身分ヨリ高キ地位ニ上リタル人々—トシテ一群ヲ爲シタリキ。之等ノ軍人ハ袁世凱ニトリテハ、西洋ニ於ケル組織ノ特徵タル團體ニ對スル忠實ノ觀念未ダ發達セザル支那ニ於テハ最モ重要ナル個人的忠誠ノ絆ニ依リ結バレ居ルヲ以テ比較的信頼シ得ルモノナリキ。之等ノ軍人ハ袁世凱ニ依リ其支配下ニ在ル諸省ノ督軍ニ任命セラレタリ。之等ノ諸省ニ於テ權力ハ彼等ノ手中ニ止リ、從テ省ノ收入ハ彼等ガ自由ニ取リテ以テ自己ノ個人的軍隊及部下ノ爲ニ使用シ得ルニ至レリ。

南方ニ於ケル狀態　南方諸省ニ於テハ一ニハ諸外國トノ交際ノ結果トシテ又一ニハ人民ノ異レル社會的慣習ノ爲ニ事態ヲ異ニシタリ。南支那ノ人民ハ常ニ軍閥ノ獨裁政治及外部ヨリノ公務干渉ヲ好マザリキ。孫逸仙博士其他南方ノ指導者ハ立憲主義ノ理想ニ忠實ナリキ。然レドモ楊子江ノ南方ノ諸省ニ於テハ軍隊ノ改造ハ未ダ餘リ進歩シ居ラズ又

設備整ヘル造兵廠ヲ有セザリシ爲、彼等ハ其背後ニ有力ナル軍隊ヲ有セザリキ。

一九一三年ニ於ケル袁世凱ニ對スル叛亂　遷延ニ遷延ヲ重ネタル後一九一三年第一ノ議會ガ北京ニ於テ開催セラレタル時ニハ袁世凱ハ既ニ其軍事的地位ヲ確立シ只缺クル所ハ各省軍隊ノ忠誠ヲ確保スルニ足ル財源ノミナリキ。世ニ善後借款ト云ハルル大外債ハ彼ニ必要ナル財力ヲ供給セリ。然レドモ彼ガ右借款ヲ議會ノ同意ヲ得ズシテ締結シタル行爲ニ依リ國民黨ニ屬スル彼ノ政治的反對者ハ孫博士ノ指導ノ下ニ結合シ公然彼ニ背反スルニ至レリ。軍事的ノ意味ニ於テハ南方ハ北方ヨリモ弱カリシガ、北方ノ勝チ誇レル督軍連ガ南方ノ數省ヲ征略シ之ヲ北方ノ將軍ノ下ニ置クニ至リテ更ニ其弱キヲ加ヘタリ。

一九一四年ヨリ一九二八年ニ至ル內亂及政治的不安　其後袁世凱ニ解散セラレタル一九一三年ノ議會ヲ回復セシメ又ハ僞國會ヲ開カントスル數次ノ企畫、王政ヲ樹立セントスル二度ノ計畫、大總統及內閣ノ幾度トナキ變更、軍隊首領間ニ於ケル服屬關係ノ不斷ノ變化及一省又ハ數省ノ一時的獨立ノ多クノ宣言ヲ見タリキ。廣東ニ於テハ孫博士ヲ首班トスル國民黨政府ハ一九一七年以來時ニ活動ヲ止メタルコトアルモ兎モ角存續スルニ成功セリ。此十數年間ニ於テ支那ハ各軍閥間ノ戰爭ニ依リ荒廢セラレ至ル所ニ存在スル匪賊ハ零落セル農夫、飢饉ニ襲ハレタル諸地方ノ絕望セル住民及給料不渡ノ兵士ヲ加ヘテ愈其數ヲ增シ有力ナル軍隊ヲ成スニ至レリ。南方ニ於テ戰ヒツツアリシ立憲主義ノ人々サヘモ幾度トナク彼等自身ノ中ニ發生スル軍事的確執ノ危險ニ曝サレタリ。

國民黨ノ改組　一九二三年自己ノ主義ノ勝利ヲ得ルノ爲ニハ確定セル「プログラム」、嚴重ナル黨規及組織的宣傳ノ必要ナル事ヲ露國革命ニ依リテ確信スルニ至レル孫逸仙博士ハ彼ノ「綱領」及「三民主義」(民族、民權、民生)ノ中ニ略述セル「プログラム」ヲ以テ國民黨ヲ改造セリ。系統的組織ハ黨ノ規律及中央執行委員會ノ仲介ニ依ル行動ノ統一ヲ確保セリ。政治訓練處ハ宣傳者及地方黨支部ノ組織者ヲ教育スルト共ニ他方黃埔ニ於ケル軍官學校ハ露國士官ノ援助ノ下ニ黨ノ理想ヲ抱懷セル指導者ヲ有スル能率アル軍隊ヲ黨ノ爲ニ作リ上ゲタリ。斯クシテ國民黨ハ間モナク廣ク民衆ト接觸スル用意成ルニ至レリ。同情者ハ斯クシテ地方黨支部又ハ黨ト聯絡セル農夫工人組合ニ組織セラレタリ。斯クシテ先ヅ民衆ノ心ヲ獲チ得タル國民黨ハ一九二五年孫博士ノ死後國民黨軍ノ北伐ニ成功シ一九二八年ノ末ニハ多年存セザリシ名目上ノ統一ニ成功シ暫時ハ實際上ノ統一ヲ

モ或程度迄實現セリ。孫博士ノ「プログラム」ノ第一段卽チ軍事的段階ハ斯クシテ成功スルニ至レリ。

黨獨裁ノ下ニ於ケル訓政ノ第二期開始セラレ得ルコトトナレリ。

右時期ハ民衆ノ自治政治ノ技術上ノ敎育及國家ノ再建ニ獻ゲラルルベキ時期ナリキ。

中央政府ノ樹立　一九二七年南京ニ中央政府樹立セラレタリ。同政府ハ黨ニ依リテ統制セラレタリ—實際ニ於テ政府ハ黨ノ一重要機關ニ過ギズ。政府ハ五院（行政、立法、司法、監察、考試ノ諸院）ヨリ成レリ。人民ガ一部ハ直接ニ又一部ハ其選擧セル代表者ヲ通ジテ自ラ政府ヲ指揮スベキ最後ノ段階卽立憲政治ノ段階ヘノ推移ヲ容易ナラシムル爲ニ、政府ハ能フ限リ孫博士ノ「五院憲法」—「モンテスキユー」ノ三權分立ニ支那ノ古來ノ二制度タル監察院ト考試院トヲ加ヘタルモノ—ノ方針ニ依リテ構成セラレタリ。

各省ニ於テモ同樣ニ省政府ノ組織ニ付キテ委員制度採用セラレタルガ他方村落、都市及地方ニ於テハ人民ハ地方自治政治實行上ノ敎育ヲ受クルコトトナレリ。黨ハ今ヤ其政治的及經濟的再建ノ計畫ヲ實行スルノ用意ナリタルモ、內部ノ不和、私的軍隊ヲ有スル諸將軍ノ定期的叛亂及共產主義ノ脅威ノ爲ニ實行シ得ザリキ。**實際ニ於テ中央政府ハ幾**度トナク其生存ノ爲ニ戰フコト必要ナリキ。

中央政府ノ權威ハ外部ヨリ否認セラレ內部ノ平和ニ依リ弱メラレタリ　暫時ハ統一ハ表面ニ於テハ保持セラレタリ。然レドモ有力ナル軍閥ガ相互ニ同盟ヲ結ビテ南京ニ向ヒテ進軍セル場合ニハ統一ノ外觀サヘモ保持スルコト不可能ナリキ。此等軍閥ハ一度モ目的ヲ達セザリシモ彼等ハ戰敗ノ後ニ於テモ輕視セラレ得ザル潛勢力タリキ。加フルニ彼等ハ決シテ中央政府ニ對スル戰爭ハ叛逆行爲ナリトノ態度ヲ採ラザリキ。彼等ノ眼中ニ於テハ此戰爭ハ單ニ彼等ノ黨派ト單ニ國都ニ在住シ諸外國ニ依リ中央政府トシテ承認セラレタル他ノ黨派トノ間ノ爭覇ノ戰鬪ニ過ギザリキ。此上下關係ノ缺如ハ、黨ソノモノノ中ノ重大ナル不和ニ依リ中央政府ガ孫博士ノ疑フ可カラザル後繼者タルノ資格弱メラルル爲愈々以テ危險ナリ。此新ナル分裂ノ結果トシテ南方ノ有力ナル諸首領ハ離反シ廣東ニ退キタルガ同地方ノ地方官憲及國民黨ノ地方支部ハ屢々中央政府ト獨立ニ行動シ來レリ。右概要ノ敍述ヨリ見ルニ支那ノ分裂的諸勢力ハ今尙强キモノノ如シ。此ノ結合ノ缺如ノ原因ハ國民ノ大衆ガ支那ト諸外國トノ間ノ關係緊張セル時期ヲ除キテハ國家ヲ基礎トセズ家族及地方ヲ基礎トシテ考フル傾向ニ在リ。現今ニ於テハ自己獨立主義的感情ヲ超越セル指導者モ在リト

雖モ、眞ノ國家統一ガ獲サルルガ爲ニハ先ツ更ニ多數ノ市民ガ國家的見地ヲ有スルニ至ランコト必要ナルハ明瞭ナリ。

現時ノ支那ト華府會議當時ノ支那トノ比較 避クルコトヲ得ザル政治的、社會的、知識的及道德的亂雜ヲ示シツツアル支那ノ過渡期ノ狀況ハ支那ノ性急ナル友人ヲ失望セシムルモノニシテ平和ニ對スル危險トナリタル不和怨恨ヲ作リタルモ、而モ種々ノ因難、遷延及失敗ニモ拘ラス事實ニ於テ相當ノ進歩ガ遂ゲラレタルハ事實ナリ。現在ノ紛爭ヲ論議スル際ニ於テ常ニ聞ク一議論ハ支那ハ「組織アル國家ニ非ス」又ハ「完全ナル混沌及意想外ノ無政府ノ狀態ニ在リ」而シテ支那ノ今日ノ狀態ハ當然支那ヨリ聯盟ノ一員タル資格ヲ失ハシメ支那ヨリ規約ニ基ク保護要求權ヲ奪フモノナリトノ言說ナリ。

之ニ關シテハ華府會議ニ際シ參加各國ガ全ク異リタル態度ヲ取リタルコトヲ記憶スルコト必要ナルベシ。而モ當時ニ於テモ支那ハ北京及廣東ニ於テ二箇ノ全然異ル政府ヲ有シ又奧地ノ交通通信ヲ屢妨害スル多數ノ匪賊ニ依ル擾亂ヲ受ケタル一方ニ於テ支那全體ヲ其ノ渦中ニ投ズベキ內亂ノ準備行ハレツツアリタリ。一九二二年一月十三日卽チ華府會議ノ尙開催中ニ在リタルトキ中央政府ニ發送セラレタル最後通諜ニ續キ開始セラレタル右內亂ノ結果トシテ中央政府ハ同年五月顚覆シ右政府ニ代リ北京ニ樹立セラレタル政府ニ對スル滿洲ノ獨立ハ同年七月張作霖ニ依リ宣言セラレタリ。此ノ如ク獨立ヲ主張スル政府ハ實ニ三個アリタリ。而モ實際上自立セル省又ハ省ノ部分若干存在セリ。現在ニ於テハ中央政府ノ權威ハ尙若干省ニ於テ薄弱ナリト雖モ中央ノ權力ハ少クトモ公然トハ否認セラルルコトナク若シ中央政府ガ現在ノ儘ニ維持セラルルニ於テハ地方行政、軍隊及財政ハ漸次國家的性質ヲ帶ブルニ至ルベキモノト期待スルコトヲ得ベシ。敍上ノ諸理由ハ他ノ諸理由ト共ニ聯盟總會ヲシテ昨年九月支那ヲ理事國トシテ選擧セシムルニ至リタルモノナルコト疑ヲ容レズ。

支那ノ復興ニ對スル努力 現政府ハ其ノ歲出及歲入ノ均衡竝ニ健全ナル財政的原則ノ遵守ニ努メ來レリ。諸種ノ課稅ハ統一セラレ且簡單化セラレタリ。正當ナル豫算ノ制度ナキ場合ニハ財政部ハ每年度ノ歲出及歲入ノ說明書ヲ發表シ來レリ。中央銀行ハ設立ヲ見タリ。國家財政委員會任命セラレ其ノ委員ニハ銀行及商業界ノ有力者包含セラル。財政部ハ又徵稅ノ方法未ダ甚ダ滿足ナラザル地方ノ財政ヲ監督スルニ努メツツアリ。總テ此等ノ新ナル措置ハ政府ノ功ニ歸セラルベキモノナルモ而モ政府ハ間斷ナキ內亂ノ爲ニ其

ノ內債ヲ一九二九年以來約十億弗（銀）增加スルコトヲ餘儀ナクセラレタリ。政府ハ資金ノ缺乏ニ妨ゲラレ其ノ野心ニ滿チタル復興ノ諸計畫ヲ實行スルコトヲ得ズ又國內ノ殆ド總テノ問題ノ解決ニ缺ク可カラザル交通通信ノ改良ヲ完成スルコトヲ得ザリキ。政府ハ數多ノ事項ニ付失敗シタルコト疑ナキモ而モ既遂ノ業績多々アリ。

國民主義　近代支那ノ國民主義ハ支那ガ今ヤ過渡シツツアル政治推移ノ時期ニ於ケル一ノ通常ナル事象ニシテ之ト同樣ナル國民的感情及翹望ハ同樣ノ狀態ニ置カレタル如何ナル國ニ於テモ見ルコトヲ得ベシ。然レドモ國民的統一ヲ意識スルニ至レル人民ガ外的制肘ヲ離脫セント欲スル自然的欲望ニ加フルニ國民黨ノ勢力ハ一切ノ外部的勢力ニ益々反感ヲ抱カントスル異常ナル色彩ヲ支那ノ國民主義ニ注入シ來リ其ノ目的ヲ擴大シテ尙「帝國主義的壓迫」ノ下ニ在ル一切ノ亞細亞民族ノ開放ヲ包含セシムルニ至レリ。今日ノ支那ノ國民主義ニハ其ノ再現ヲ希フ過去ノ偉大サニ對スル記憶モ亦多分ニ盛ラレアリ。右主義ハ租借地、鐵道附屬地ニ於テ外國ノ手ニ依リ行使セラルル行政上及他ノ純粹ニ商業的ナラサル諸權利、租界ニ於ケル行政權、竝ニ外國人ガ支那ノ法律、法廷及課稅ニ服從セザルコトヲ意味スル治外法權ノ返還ヲ要求ス。輿論ハ國民的屈辱ト看做サルル此等ノ權利ノ存續ニ強ク反對ナリ。

治外法權問題ニ對スル諸外國ノ態度　諸外國ハ概シテ此等ノ要望ニ對シ同情アル態度ヲ取リ來レリ。一九二一—一九二二年ノ華府會議ニ於テハ右要望ノ妥當ナルコト原則トシテ容認セラレタルモ只之ヲ滿足セシムベキ最善ノ時期及方法ニ付テハ意見ノ相違存シタリ。

此等ノ權利ヲ直ニ抛棄スルニ於テハ財政上其ノ他ノ內面的困難ニ基キ支那ガ今直ニ達成スルコトヲ得ザルガ如キ程度ノ行政、警察及司法ヲ樹立スル責任ヲ支那ニ負擔セシムルニ至ルベシトスルコト當時ノ感想ナリキ。當時單一ニ取扱ハレタル治外法權ノ問題ハ若シ之ヲ尙早ニ撤廢スルニ於テハ諸外國トノ間ニ他ノ別個ナル諸問題ヲ誘發シタルナルベシ。又若シ外國人ガ支那ノ多數ノ地方ニ於テ支那國民ノ蒙リツツアリタルト同樣ノ不公正ナル待遇及過酷ナル課稅ヲ受クルコトト爲ルニ於テハ國際關係ハ改善セラレズ、却ツテ惡化スベシトスルコト亦當時ノ感想ナリキ。此等ノ留保ニ拘ラズ特ニ華府會議ニ於テ又同會議ノ結果トシテ達成セラレタルモノ多々アリタリ。卽チ支那ハ五箇所ノ租借地中ノ二、多クノ租界、東支鐵道附屬地ノ行政權、關稅自主權及郵政權ヲ回收シ均等ノ基礎ニ立ツ多クノ條約モ亦商議セラレタリ。

支那ハ華府會議ヲ機トシ其ノ困難ヲ解決スル爲ノ國際的協調ノ道程ニ上リタルヲ以テ若シ右道程ニ從ヒ進ミタルニ於テハ爾後ノ十年間ニ於テ更ニ顯著ナル進歩ヲ遂グルコトヲ得タルナルベシ。只支那ハ其ノ毒々シキ排外宣傳ノ遂行ニ依リ妨害セラレタリ。右宣傳ハ特ニ二方面ニ於テ實行セラレ其ノ結果現在ノ紛爭ヲ惹起セル雰圍氣ノ釀成ヲ誘導セリ。卽チ第七章ニ記述セル經濟的「ボイコット」ノ利用及諸學校ニ對スル排外宣傳ノ注入之ナリ。

諸學校ニ於ケル國民主義　一九三一年六月一日發布セラレタル支那ノ臨時約法ニハ「三民主義ハ中華民國ニ於ケル教育ノ基本的原則タルベシ」トノ規定アリ(「人民ノ教育」ノ章第四十七條)。孫逸仙ノ思想ハ恰モ從來古典ノ有シタル權威ヲ持ツガ如キモノトシテ今ヤ諸學校ニ於テ教授セラレ孫先生ノ遺訓ハ革命以前ニ於テ孔子ノ教訓ガ受ケタルト同樣ノ尊敬ヲ受ケツツアリ。然レドモ不幸ニシテ靑少年ノ敎育ニ當リ注意ハ國民主義ノ建設的方面ニ對スルヨリモ寧ロ其ノ否定的方面ニ注ガレタリ。諸學校ノ教科書ヲ熟讀スル者ハ其ノ著者ガ愛國心ヲ燃スニ憎惡ノ焰ヲ以テシ男性的精神ノ養成ヲ虐待ヲ受ケ居レリトノ意識ノ上ニ置クコトニ努メタリトノ印象ヲ得。此ノ結果トシテ學校ニ於テ植付ケラレ且社會生活ノ有ラユル方面ヲ通ジテ實行セラレタル毒々シキ排外宣傳ハ學生ヲ驅ッテ政治運動ニ從事セシムルコトト爲リ時ニハ國務大臣其ノ他ノ官憲ノ身體、居宅又ハ官廳ノ襲擊又政府ノ顚覆ヲ計ルガ如キ事態ニ立至ラシメタリ。斯ノ如キ態度ハ有效ナル內部的改革又ハ國民的素質ノ改善ヲ伴ハザリシ爲諸外國ヲ驚愕セシメ現在諸外國ノ唯一ノ保障タル諸權利ノ抛棄ヲ益々躊躇セシムルニ至レリ。

法律及秩序ノ諸問題。適當ナル交通通信ノ必要　法律及秩序ノ維持ノ問題ニ關聯シ現在支那ニ於テ交通通信ノ手段ノ見ルベキモノナキハ重大ナル障碍ナリ。國家ノ軍隊ヲ迅速ニ輸送スベキ交通及通信ノ便ガ充分ニ備ハルニ非ザレバ法律及秩序ノ維持ハ假令全部ニ非ズトスルモ其ノ大部分ハ地方官憲ノ手ニ委セラレザルベカラズ。而シテ地方官憲ハ中央政府ノ遠隔ナル爲地方的問題ノ處理ニ當リ自ラノ裁量ニ依ルコトヲ許サレザルベカラズ。斯ノ如キ狀態ニ在リテハ獨立セル考慮及行動ハ容易ニ法律ノ規矩ヲ逸脫シ其ノ結果地方ハ漸次私有ノ領地ナルガ如キ貌ヲ呈スルニ至ル。

地方軍隊　地方ノ軍隊ハ其ノ指揮官ニ與スルモ國民ニ與セズ。中央政府ノ命ヲ以テ一軍ノ指揮官ヲ他ノ軍ニ轉任セシムルコトハ多クノ場合ニ於テ不可能ナリ。中央政府ガ全國ニ亘リ其ノ威令ヲ敏速且永久ニ行フ爲ノ物的手段ヲ有セザル限リ內亂ノ危險ハ存續セザルヲ得ズ。

匪賊　支那ノ全歴史ヲ通ジ存在シ且今日モ支那ノ有ラユル地方ニ存在スル匪賊ノ問題ニ對シテモ右ト同樣ノ考察ヲ加フルコトヲ得。匪賊ハ支那ニ於テ嘗テ絶エタルコトナク政權ハ未ダ嘗テ之ヲ掃滅スルコトヲ得ザリキ。適當ナル交通及通信ノ便ヲ缺キタルコトハ政權ガ四圍ノ狀況ニ隨ヒ增減スル此ノ害惡ヲ芟除スルコトヲ得ザリシ理由ノ一ナリ。之ニ加ハル他ノ理由ハ特ニ惡政ノ結果トシテ支那ニ頻發セル地方的騷擾及叛亂ニ之ヲ求ムルコトヲ得ベシ。假令斯ノ如キ叛亂ガ無事鎭壓セラレタル後ニ於テモ叛民ノ投合シタル匪賊團ハ支那ノ諸地方ニ於テ活動ヲ繼續セリ。右ハ太平亂（一八五〇—六五年）ノ鎭壓後ニ於テ特ニ顯著ナリキ。近時ニ於テハ給料不渡ニシテ他ニ生活ノ途ヲ樹ツルコトヲ得ズ且內亂ニ從事シテ掠奪ニ慣レタル兵卒モ亦匪賊ノ源ト爲リタリ。

支那ノ各地ニ於テ匪賊ヲ增加セシムルニ至レル他ノ原因ハ洪水及旱魃ナリ。此等ハ寧ロ常規的ニ發生シ常ニ飢饉及匪賊ヲ隨伴セリ。問題ハ急速ニ增加スル人口ノ壓迫ニ依リ惡化セラレタリ。人口稠密ナル地域ニ於テハ通常ノ經濟的困難ハ更ニ增加シ僅ニ生命ヲ支フルノミニシテ不時ノ災厄ニ備フルノ餘裕ナキ人民ノ間ニ在リテハ其ノ生活狀態ノ極メテ些少ナル惡化モ多數ノ者ヲ生活不能ナラシムルニ至レリ。從テ匪賊ハ當時ノ一般的經濟的狀態ノ影響ヲ蒙ムル事大ナリシナリ。匪賊ハ富有ナル時代又ハ地方ニ於テハ減少セルモ上記何レカノ理由ニ依リ生存競爭深刻ト爲リ又ハ政治的狀態ガ攪亂セラレタル場合ニ於テハ必ズ增加シタリ。

匪賊ガ一旦或地域ニ於テ其ノ勢力ヲ確立スルニ至レル時ハ內地ニ於ケル交通及通信ノ便缺如シタルニ依リ之ヲ實力ヲ以テ鎭壓スルコト困難ト爲レリ。接近困難ニシテ數哩ヲ行クニモ幾日カヲ要スルガ如キ地方ニ於テ武裝セル多數ノ賊團ハ自由ニ行動シ出沒ヲ恣ニシ、其ノ居所及行動ヲ知ルコトヲ得ザラシメタリ。

匪賊ノ討伐ヲ永ク放置シ、屢々アリシガ如ク兵士モ之ト內應スルトキハ水陸ノ路ニ依ル交通ハ妨害セラルルニ至ル。此ノ如キ事態ノ發生ハ只適當ナル警察力ニ依リテノミ之ヲ阻止スルコトヲ得。奧地ニ於テハ必然的ニ出沒戰ヲ惹起スルガ故ニ匪賊ノ討伐益々困難ナリ。

共産主義ハ中央政府ニ對スル挑戰ナルコト　地方軍閥ノ私兵及全國ニ瀰漫スル匪賊ノ集團ハ支那ノ內部的平和ヲ攪亂スルモノナリト雖モ、此等ハ其レ自體トシテ、今ヤ中央政權ノ權力ニ對スル脅威タラザルニ至レリ。然レドモ此處ニ他ノ原因ヨリスル此ノ種ノ脅威アリ。即チ共産主義之ナリ。

一九二一年、支那ノ共産主義ノ淵源　支那ノ共産主義運動ハ其ノ發生ノ初期ニ於テハ知識及勞働ノ二階級ニ限ラレ一九一九年乃至一九二四年ノ期間ニ相當ノ勢力ヲ得ルニ至レリ。當時支那ノ農村地方ハ殆ド此ノ運動ノ影響ヲ蒙ラザリキ。一九一九年七月二十五日ノ「ソヴィエト」政府ノ宣言ハ舊帝政政府ガ支那ヨリ「奪取」セル一切ノ特權ヲ喜ンデ拋棄スベキコトヲ宣言セルモノトシテ支那全國殊ニ知識階級ノ間ニ好感ヲ以テ迎ヘラレタリ。一九二一年五月「中國共産黨」正式ニ組織セラレ宣傳ハ特ニ上海ノ勞働階級ノ間ニ行ハレ同地ニ赤色「シンヂケート」組織セラレタリ。一九二二年六月ノ第二回大會ニ於テ當時黨員三百ヲ超エザリシ共産黨ハ國民黨トノ合作ヲ決議セリ。孫逸仙ハ共産主義ニハ反對ナリシモ支那共産黨員ヲ個人トシテ入黨セシムルコトニハ反對セズ。一九二二年ノ秋「ソヴィエト」政府ハ「ヨッフェ」ヲ主班トスル一團ヲ支那ニ派遣シ孫「ヨ」兩者ノ間ニ行ハレタル重要會談ノ結果一九二三年一月二十六日ノ共同宣言ト爲リ右宣言ニ依リ「ソヴィエト」政府ハ支那ノ統一及獨立ノ爲ニ其ノ同情ト援助トヲ與フベキ旨ノ保障ヲ與ヘタリ。一方共産黨ノ組織及「ソヴィエト」式統治組織ハ當時ノ支那ニ於ケル狀態ノ下ニ於テハ之ヲ輸入スルコト不可能ナル旨明瞭ニ聲明セラレタリ。右協定ニ基キ一九二三年末迄ニ若干ノ軍事及政治顧問「モスコー」ヨリ派遣セラレ「孫逸仙ノ監督ノ下ニ國民黨ノ內面的構成及廣東軍ノ改革ニ從事シタリ」。

一九二四年三月召集セラレタル國民黨第一回全國代表大會ニ於テ支那共産黨員ハ國民黨ニ加入スルコトヲ正式ニ承認セラレタルガ只之ニ對シテハ斯ノ如キ黨員ハ以後「プロレタリア」革命ノ準備ニ參加スベカラザル旨ノ條件附セラレタリ。斯クシテ容共時代開始セラルルニ至レリ。

容共時代、一九二四—二七　右時期ハ一九二四年ヨリ一九二七年ニ及ブ。一九二四年初期ニ於テ共産黨員ハ二千名又赤色「シンヂケート」ハ六萬ノ會員ヲ擁シタリ。然レドモ共産黨員ハ間モナク國民黨內部ニ於テ勢力ヲ扶植シ舊來ノ國民黨員ヲシテ之ニ對シ不安ヲ感ゼシムルニ至レリ。右共産黨員ハ一九二六年末ノ中央委員會ニ於テ一提案ヲ爲シタルガ右提案中ニハ勞働者、農民及兵士ニ屬スルモノヲ除ク一切ノ不動産ノ國有、國民黨ノ改組、共産主義ニ反對スル一切ノ軍閥頭目ノ芟除、共産黨員二萬並ニ勞働者及農民五萬ノ武裝ノ如キモノ迄モ包含セラレタリ。然レドモ右提案ハ否決セラレ爲ニ共産黨員ハ從前國民軍ノ編成ニ最努力シタルニモ拘ラズ國民黨ノ企圖セル北方軍閥ノ討伐ニ對シ援助ヲ許與スルコトヲ中止スルニ至レリ。然ルニ後ニ至リ

右討伐ニ加ハリ北伐ガ中央支那ニ及ビ一九二七年武漢ニ於テ國民黨政府樹立セラルルヤ國民黨要人ガ其ノ軍隊ノ南京及上海占領ニ至ル迄合作ヲ肯ゼザルニ乘ジ同政府內ノ實權ヲ掌握スルニ成功セリ。武漢政府ハ湖南及湖北ノ兩省ニ於テ幾多ノ純然タル共產主義的施政ヲ實行シ國民革命ハ將ニ共產革命ニ轉化セシメラレントスルニ至リタリ。

國民黨及共產黨ノ分裂、一九二七年　國民黨要人ハ遂ニ共產黨ノ脅威重大ニシテ最早之ヲ寛容シ得サルコトヲ決斷シ、自己ノ勢力ガ南京ニ確立セラレ一九二七年四月十日別個ノ國民政府同地ニ組織セラルルヤ布告ヲ發シテ南京政府ハ直ニ軍隊及行政部ヨリ共產主義ヲ驅逐スベキ旨命令セリ。七月十五日從來在南京國民黨要人トノ合作ヲ肯ゼザリシ在武漢國民黨中央執行委員ノ大多數モ國民黨ヨリ共產黨員ヲ除去シ「ソヴィエト」顧問ノ支那退去ヲ命ズル決議ヲ採擇セリ。右決定ノ結果國民黨ハ其ノ統一ヲ回復シ南京政府ハ廣ク同黨ノ承認ヲ受クルニ至レリ。

南昌及廣東事件　容共時代ニ於テ數箇ノ軍隊共產主義ニ加擔スルニ至レリ。此等軍隊ハ國民軍ノ北伐ニ際シテハ大部分江西地方ニ遺留セラレタルガ此軍隊ヲ連絡シ且國民政府ニ對シ事ヲ擧ゲンコトヲ說得スル爲共產黨員派遣セラレタリ。一九二七年七月三十日江西省首府南昌ノ駐屯軍ハ他ノ部隊ト共ニ叛亂シ人民ニ對シ幾多ノ暴虐ヲ行ヒタルモ八月五日政府軍ノ擊破スル所ト爲リ南方ニ退去セリ。十二月十一日廣東ニ共產主義者ノ暴動アリ。同市ハ二日間其ノ手中ニ歸シタリ。南京政府ハ右二叛亂ニハ「ソヴィエト」政府代表者ノ活潑ナル干與アリタルモノト認メ、一九二七年十二月十四日ノ命令ヲ以テ一切ノ支那駐在「ソヴイエト」聯邦領事ノ認可狀ヲ撤回セリ。

共產黨軍ノ武力鬪爭ノ繼續　內亂ノ再發ハ一九二八年乃至一九三一年ノ時期ニ於テ、共產黨ノ勢力ノ伸張ニ幸セリ。赤衞軍ハ編成セラレ江西、福建兩省ニ於ケル廣大ナル地域ハ「ソヴィエト」化セラレタリ。中央政府ガ共產主義ノ鎭壓ニ力ヲ用フルコトヲ得ルニ至リシハ漸ク一九三〇年十一月卽チ北方軍閥ノ强力ナル聯合ヲ擊破シタル稍後ノ事ナリ。共產軍ハ江西、湖南兩省ノ各地ニ策動シ當時二、三ケ月ノ間ニ二十萬人ノ死者ト約十億弗（銀）ニ上ル物的損害トヲ惹起シタル旨報ゼラレタリ。此等軍隊ハ今ヤ其ノ勢力强大ト爲リ政府ノ第一回討伐軍ヲ擊退シ第二回ノ討伐軍ヲ粉碎スルニ至レリ。第三回討伐軍ハ總司令蔣介石將軍ノ指揮ノ下ニ數度ノ會戰ニ於テ共產軍ヲ擊破シ一九三一年七月半ニ至ル迄ニ共產軍ノ最モ重要ナル根據地ヲ陷レ共產軍ハ福建方面ニ總退却ヲ行ヘリ。

蔣介石將軍ハ共匪ノ蹂躙シタル地方ノ再興ヲ目的トスル政治委員會ヲ組織スル一方赤軍ヲ追擊シテ之ヲ江西省南西ノ山岳地帶ニ擊退セリ。

斯ノ如ク南京政府ハ將ニ主要ナル赤軍ヲシテ活動ノ餘地ナカラシメントシ居タル處偶々支那ノ各地ニ各種ノ事件發生シ政府ヲシテ其ノ攻擊ヲ中止シ軍隊ノ大部分ヲ撤退スルノ餘儀ナキニ至ラシメタリ。卽チ北方ニ於テハ石友三將軍叛亂ヲ起シ一方廣東軍湖南ニ侵入シテ右石軍ニ策應スルアリ、之ト時ヲ同クシテ奉天ニ於テハ九月十八日事件發生セリ。此等ノ情勢ニ乘ジ赤軍ハ再ビ攻擊ヲ開始シ討伐ノ戰勝ニ依リ收メラレタル成果ハ幾何モナクシテ殆ド完全ニ失ハレタリ。

現在ニ於ケル共產黨組織ノ範圍　福建、江西兩省ノ大部分及廣東ノ若干部分ハ信賴スベキ報道ニ據レバ、完全ニ「ソヴィエト」化セラレ居レリ。共產黨ノ勢力範圍ハ更ニ廣大ニシテ楊子江以南ノ支那ノ大部分竝ニ楊子江以北ノ湖北、安徽及江蘇各省ノ諸地方ニ跨レリ。

上海ハ共產主義宣傳ノ中心地ト爲レリ。共產主義ノ個人的同情者ハ恐ラク支那ノ各都市ニ發見セラレ得ベシ。現在ハ二箇ノ共產主義地方政府ガ江西及福建ニ於テ組織セラレタルニ止ルト雖モ比較的小ナル「ソヴィエト」組織ハ數百ニ達ス。共產主義政府自體ハ地方ノ勞働者及農民ノ會議ニ依リ選擧セラレタル委員會ニ依リ組織セラル。右共產主義政府ハ實際ハ支那共產黨ノ代表者ニ依リ支配セラレ居リ支那共產黨ハ其ノ目的ノ爲ニ訓練セラレタル人員ヲ派遣シ而モ其ノ派遣人員ノ大多數ハ曩ニ「ソヴィエト」聯邦ニ於テ訓練セラレタルモノナリ。

支那共產黨中央委員會ノ支配下ニ在ル地方委員會ハ先ヅ省委員會ヲ支配シ省委員會ハ更ニ縣委員會ヲ支配ス。斯クシテ工場、學校、兵營等內ニ組織セラレタル共產主義細胞ニ及ブ。

共產主義者ニ用ヒラルル方法　一縣ガ赤軍ニ依リ占領セラレ其ノ占領ガ多少ナリトモ永久的性質ヲ有スト認メラルルニ於テハ其ノ縣ヲ「ソヴィエト」化スル爲努力ス。如何ナル民衆ノ反對モ恐怖主義ニ依リ彈壓セラル。共產主義政府ハ上記ノ如クシテ建設セラルルナリ。斯ノ如キ政府ノ完全ナル組織ハ左記ノ組織卽チ內政局、反革命主義者ニ對スル爭鬪ノ爲ノ局(「ゲー・ペー・ウー」)財政局、農業經濟局、敎育局、衞生局、郵便及電信局、交通局竝ニ軍事委員會及勞働者及農民取締委員會ヲ包含ス。斯ノ如キ精細ナル政府組織ハ完全ニ「ソヴィエト」化セラレタル縣ニ於テノミ存在ス。他處ニ於テハ比較的微溫的ナル組織ナリ。行動綱領

ハ債務ヲ破棄シ竝ニ私ノ大地主又ハ寺院、僧院及教會ノ如キ宗教團體ヨリ强力ヲ以テ接收セル土地ヲ「プロレタリア」及小農ニ分配スルニ在リ。課稅ハ簡單化セラレ農民ハ其ノ土地ノ生產高ノ一定部分ヲ納付セザルベカラズ。農業改良ノ爲灌漑、農村信用制度及組合ヲ發達セシムル手段ガ講ゼラル。小學校、病院及調劑所モ建設セラルルコトアリ。

斯ノ如ク最貧困ナル農民ハ共產主義ニ依リ驚クベキ利益ヲ得ルニ反シ富有及中產階級ノ地主、商人竝ニ地方紳士ハ即時沒收又ハ徵發及罰金ノ何レカニ依リ完全ニ沒落セシメラル。而シテ此ノ農業綱領ヲ適用スルコトニ於テ共產黨ハ群衆ノ支持ヲ得ルコトヲ期待ス。此ノ點ニ關シ其ノ宣傳ト行動トハ共產主義原理ガ支那ノ社會組織ト衝突スルノ事實ニモ拘ラズ非常ナル成功ヲ贏チ得タリ。壓制的課稅、不法徵發、横領及兵卒又ハ匪賊ニ依ル掠奪ノ結果ヨリ生ジタル不平極度ニ行ハル。特殊ナル「スローガン」ガ農民、勞働者、兵卒及知識階級ノ爲ニ又特ニ婦人ニ適スル様工夫セラレテ使用セラル。

支那ニ於ケル共產主義ノ特質 支那ニ於ケル共產主義ハ「ソヴィエト」聯邦以外ノ多數ノ國ニ於ケルガ如ク既存ノ政黨員ニ依リテ支持セラルル政治上ノ主義ニモ非ズ。又他ノ政黨ト權力ヲ爭フ特別ノ黨組織ニモ非ズ。支那共產主義ハ國民政府ノ事實上ノ競爭相手ト爲レリ。支那共產主義ハ其ノ獨特ノ法律、軍隊及政府竝ニ其ノ行動ノ特別ノ地域的分野ヲ有ス。此等ノ事態ニ關シテハ他ノ如何ナル國ニ於テモ比較スベキモノナシ。加之支那ニ於テハ共產主義ノ戰鬪ニ依リ生ゼル混亂ハ國家ガ國内改造ノ重大時期ヲ經過シツツアル事實ニ依リ一層重大化セラレ更ニ最近ノ十一月間ノ例外的重大性ヲ有スル對外危機ニ依リ一段ト複雜化セラレタリ。國民政府ハ共產主義ノ勢力ヲ利用シ各縣ノ支配ヲ再ビ得テ一度此等ノ各縣ニ於テ其ノ權力ヲ回復シタル曉ニハ經濟的更生ノ政策ヲ遂行セント決心シタルモノト認メラル。然レトモ既述ノ國民政府ノ地位ヲ弱メタル内外ノ困難ヲ別トスルモ軍事行動ニ於テ國民政府ハ資本ノ缺乏ト不完全ナル交通トニ依リ惱サレタリ。支那ニ於ケル共產主義ノ問題ハ斯ノ如ク國民的改造ノ大問題ト關聯スル所アリ。一九三二年夏南京政府ハ重要ナル軍事行動ハ赤色抵抗ノ徹底的鎭壓ヲ其ノ目的トスル旨聲明セリ。軍事行動ハ開始セラレ上記ノ如ク再獲得地方ノ全般的ノ社會的及行政的再組織ヲ伴フベキ筈ナリシガ現在ニ至ル迄何等ノ重要ナル結果モ公表セラルルニ至ラズ。

此等事態ノ日支關係ニ及ボセル影響 日本ハ支那ノ最近接セル隣國ニシテ且最大ナル顧客ナルヲ以テ日本ハ本章ニ

於テ記述セラレタル無法律狀態ニ依リ他ノ何レノ國ヨリモ苦ミタリ。支那ニ於ケル居留外人ノ三分ノ二以上ハ日本人ニシテ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ數ハ約八十萬ヲ算ス。故ニ現在ノ狀態ニ於テ支那ノ法律、裁判及課稅ニ服從セザルベカラズトセバ之ニ依リ苦シム國民ヲ最多ク有スル國ハ卽日本ナリ。日本ハ其ノ條約上ノ權利ニ代ルベキ滿足ナル保護ガ期待シ得ラレザルニ於テハ到底支那側ノ願望ヲ滿足セシムルコト不可能ナルヲ感ジタリ。日本ノ支那ニ於ケル利益ハ特ニ滿洲ニ於テ著シキモノアル處他ノ大多數ノ國ノ利益ガ撤回セラルルノ時機ニ際シ更ニ顯著ニ主張セラルルニ至レリ。日本ノ支那ニ於ケル其ノ臣民ノ生命及財產ノ保證ニ對スル不安ハ內亂又ハ地方的混亂ニ際シ屢干涉ヲ行ハシメタリ。斯ノ如キ行動ハ痛ク支那ノ憤激ヲ買ヒ特ニ一九二八年濟南ニ於テ起レル武力衝突ニ依リ行ハレタル時ニ於テ然リ。近年日本ノ主張ハ支那ニ於テハ他ノ列國ノ總テノ權利以上ニ國民的願望ニ對スル重大ナル挑戰ナリト認メラルルニ至レリ。

支那改造問題ニ對スル外國ノ關心　本問題ノ日本ニ及ボセル影響ハ列國以上ニ大ナリト雖モ日支間ノミノ問題ニハ非ズ。支那ハ例外的權力及特權ハ其ノ國民的榮譽及主權ヲ侵害スルモノナリト感ズルノ故ヲ以テ此等ノ特權ヲ直ニ還付スルコトヲ要求ス。諸外國ハ支那ニ於ケル狀態ガ此等諸外國ノ國民ノ保護ニ充分ナルニ至ラザル限リ右支那側ノ希望ニ應ズルコトヲ躊躇セリ。蓋シ此等外國人ノ利益ハ特別ノ條約上ノ權利ニ依リ獲得セラルレバナリ。

本章ガ記述セント試ミタル過渡期ニ於テ不可避ナル擾亂過程ハ輿論ノ力ヲ發達セシムルニ至リ此ノ輿論ノ力ハ恐ラク中央政府ガ國家ノ統一ト改造トヲ完成スルニ失敗シテ弱メラレ居ル限リ其ノ外交政策ノ遂行ニ當リ中央政府ヲ困却セシムルモノナルベシ。外國關係ニ於ケル支那ノ國民的願望ノ實現ハ內政ノ分野ニ於テ近代的政府ノ機能ヲ發揮スル能力ノ如何ニ基クモノナリ。而シテ右分野ノ關係ノ不調和ニシテ除去セラレザル限リ、國際的軋轢及事件ノ發生ノ危險、「ボイコット」並ニ武力干涉ハ繼續セラルベシ。

國際協力ハ解決ノ最善ノ希望ヲ與フ　現在ノ國際的軋轢ノ極端ナル事例ハ再ビ支那ヲシテ國際聯盟ノ干涉ヲ求ムルノ餘儀ナキニ至ラシメタルガ若シ滿足ナル解決ガ達成セラルルニ於テハ支那ヲシテ一九二二年華府ニ於テ有益ナル結果ヲ以テ著手セラレタル國際協力ノ政策ノ利益ヲ覺知セシムルコトヲ得ベシ。現在支那ハ其ノ國民的改造ヲ援助ヲ藉ラズシテ完成スルニ必要ナル資本ヲモ、訓練セラレタル專門家ヲモ有セズ。孫逸仙博士自身モ此ノ事實ヲ認メ現ニ同

國ノ經濟的發展ニ對スル國際的參加ノ計畫ヲ作成セリ。國民政府モ亦近年其ノ諸問題ノ解決ニ於テハ一九三〇年以來財政問題ニ於テ一九三一年國民經濟委員會ノ組織以來國際聯盟技術委員會ト連絡シテ經濟的計畫及發展ニ關スル問題ニ於テ並ニ同年ノ大洪水ニ依リ蒙レル災害救濟ニ於テ國際援助ヲ求メ且之ヲ受諾セリ。國際協力ノ此ノ行路ニ從ヒ支那ハ其ノ國民的理想ノ達成ニ向ツテ最確實ニシテ最速ナル進歩ヲ爲スベク而シテ斯ノ如キ政策ハ諸外國ニトリ中央政府ノ求ムル所ノモノヲ與ヘテ世界列國トノ平和關係ヲ危殆ナラシムルノ虞アル軋轢ノ有ラユル原因ヲ能フ限リ速ニ且有效ニ除去スルコトニ於テ援助ヲ與フルコトヲ一層容易ナラシムベシ。

第二章　満洲

記述　支那ノ他ノ部分及露西亞トノ關係

一、記述

序論　満洲ハ支那ニ於テハ東三省トシテ知ラルル廣汎且豐饒ナル地域ニシテ僅々四十年以前ニハ殆ド開發セラレ居ラズ、現在ニ於テスラ猶人口稀薄ナルヲ以テ支那及日本ノ過剰人口問題解決ニ益々重大ナル役割ヲ演ズルニ至レリ。數百萬ノ窮乏セル農民ハ山東省及河北省ヨリ満洲ニ流入セル一方製品及資本ハ日本ヨリ同地方ニ輸出セラレ食料及原料ト交換セラレタリ。斯ノ如ク満洲ハ支那及日本ノ各自ノ必要ニ應ズルコトニ依テ日支双方ノ有力ナル伴侶タル實ヲ擧ゲタリ。卽チ日本ノ活動ナクンバ満洲ハ斯ノ如キ大ナル人口ヲ誘致且收容シ得ザリシナルベク又支那農民及勞働者ノ移住ナクンバ満洲ハ斯クモ急速ニ發展シ以テ日本ニ對シ市場並食料、肥料及原料ヲ供給スルコト能ハザリシナルベシ。

満洲ハ先ヅ軍略上ノ要地トシテ續テ農業及鑛業上ノ資源トシテ垂涎セラレタル地域ナリ　然レドモ他國ノ協力ニ依倚スルコト多大ナル満洲ハ上述ノ理由ニ依リ先ヅ日露ノ間ニ於テ次デ支那及其ノ二強隣邦間ニ於ケル紛爭ノ地域トナルノ運命ヲ有シタリ。當初満洲ハ之等政策ノ大衝突ノ地域タルニ止マリ満洲ノ占據ニ依リ極東政治ヲ支配シ得ルモノト考ヘラレタルガ其ノ後満洲ノ農業鑛業及林業上ノ資源發見セラルルニ及ビ満洲其ノモノヲ垂涎セラルルニ至レリ。

先ヅ露西亞ハ支那ノ犧牲ニ於テ特殊ノ條約上ノ權利ヲ獲得シタルガ其ノ南滿洲ニ關スルモノハ後日日本ニ讓渡セラレ而モ斯クノ如クニシテ獲得セラレタル特權ハ其後南滿洲ノ經濟的開發ヲ促進スル手段トシテ行使セラレタリ。軍略上ノ理由ハ依然トシテ重要ナルモノアルモ露西亞及日本ハ夫夫滿洲開發ニ積極的ニ從事シ廣汎ナル經濟的利益ヲ得タル爲其ノ外交政策ヲ固持スルコト益々甚シキニ至レリ。

支那農民ノ土地占據　支那ハ當初開發ノ方面ニ活動スルコトナク殆ド滿洲ヲ其ノ支配ヨリ露西亞ノ手ニ移サムトセリ。而シテ滿洲ニ於ケル支那ノ主權ヲ再ビ確認セル「ポーツマス」條約後ニ於テモ同地方開發ニ當レル露西亞及日本ノ經濟的活動ハ支那ノ夫レニ比シヨリ顯著ニ世界ノ目ニ映ジタリ。此ノ間數百萬ノ支那農民移住シタルガ右ハ將來ニ於ケル土地所有ノ根據ヲナセルモノニシテ事實平和的ニシテ目立タザルモ實質的ノモノナリキ。露西亞及日本ガ北滿及南滿ニ於ケル各自ノ勢力範圍ノ設定ニ從事セル間ニ支那農民ハ土地ヲ所有スルニ至リ今ヤ滿洲ハ正シク支那ノモノナリ。斯ル狀態ニ於テ支那ハ再ビ其ノ主權ヲ主張スルノ好機會ヲ待望スルコトヲ得タルガ一九一七年ノ露西亞革命ハ北滿ニ於テ支那ニ此ノ機會ヲ與ヘタリ。支那ハ過去久シキニ亙リ等閑ニ附シ居タル地方ノ開發及統治ニ一層積極的活動ヲ開始シ近年ニ於テハ南滿洲ニ於ケル日本ノ勢力ヲ減少セシメムト試ミタルガ右政策ノ結果軋轢高マリ遂ニ一九三一年九月十八日其ノ頂點ニ達セリ。

人口　全人口ハ約三千萬ト算セラレ其ノ中二千八百萬ハ支那人又ハ同化セル滿洲人ナリト稱セラル。朝鮮人ノ數ハ八十萬ニシテ其ノ大部分ハ朝鮮國境ノ所謂間島地方ニ集合シ爾餘ノ者ハ滿洲ニ廣ク分散ス。蒙古種族ハ內蒙古ニ接スル牧地ニ居住シ其ノ數少シ。滿洲ニ於ケル露西亞人ハ約十五萬アル模樣ナルガ其ノ大部分ハ東支鐵道沿線地方特ニ哈爾賓ニ在リ。約二十三萬ノ日本人ハ南滿洲鐵道沿線ノ居留地及關東州租借地(遼東半島)ニ主トシテ集中シ居レリ。滿洲ニ於ケル日本人露西亞人及其ノ他ノ外國人(朝鮮人ヲ除ク)ハ四十萬ヲ超過セズ。

面積　滿洲ハ佛蘭西及獨逸ヲ合シタル大サノ面積ヲ存スル廣大ナル地域ニシテ約三十八萬平方哩ト算セラル。支那ニ於テハ之ヲ常ニ「東三省」ト稱ス。蓋シ其ノ行政區劃ハ南部ニ遼寧(奉天)。東部ニ吉林、北部ニ黑龍江ノ三省ニ分タルルヲ以テナリ。遼寧ハ面積七萬平方哩、吉林ハ十萬平方哩、黑龍江ハ二十萬平方哩以上ト算セラル。

地理　滿洲ハ其ノ特性大陸的ナリ而シテ東南部ニ長白山脈、西北部ニ大興安山脈ノ二山脈アリ。右兩山脈間ニ滿洲

大平原横ハリ其ノ北部ハ松花江盆地ニ南部ハ遼河盆地ニ屬ス。右兩盆地ノ分水界ハ歴史的ニ相當重要ナルモノナルガ滿洲平原ヲ南北ニ分ツ一ノ山脈ナリ。滿洲ハ西ハ河北省及內外蒙古ニ境ヲ接ス。內蒙古ハ以前三個ノ特別行政地域卽熱河、察哈爾及綏遠ニ分レ何レモ一九二八年國民政府ニ依リ省トシテノ完全ナル地位ヲ賦與セラレタリ。內蒙古特ニ熱河ハ常ニ滿洲ト關係ヲ保チ滿洲問題ニ多少ノ影響ヲ與ヘ居レリ。滿洲ハ其ノ西北、東北及東ニ於テハ「ソ」聯邦ノ西伯利亞ニ、東南ニ於テハ朝鮮ニ境シ南ニ於テハ黃海ニ臨ム。遼東半島ノ南端ハ一九〇五年以來日本ニ保有セラレ其ノ面積千三百平方哩ヲ超エ、日本ノ租借地トシテ統治セラル。加之日本ハ租地外ニ亙リ南滿洲鐵道ヲ敷設セル狹キ地帶ニ對シ或種ノ權利ヲ行使ス。右地帶ノ全面積ハ僅々百八平方哩ナルモ線路ノ長サハ六百九十哩ニ達ス。

經濟的資源　滿洲ノ地味ハ一般ニ豐饒ナルモ其ノ開發ハ交通ノ利便ニ左右セラレ多數ノ重要都市ハ河川及鐵道ニ沿ヒテ繁榮ス。過去ニ於ケル開發ハ大體河川系統ニ賴リシモノナルガ右河川系統ハ鐵道ガ交通機關トシテ第一位ヲ占ムルニ至レル今日ニ於テモ依然トシテ甚ダ重要ナリ。大豆、高粱、小麥、粟、大麥、米、燕麥ノ如キ重要穀產額ハ十五年間ニ倍加シ、一九二九年此ノ種穀產物ハ八億七千六百萬「ブッシェル」以上ト算セラレタリ。一九三一年ノ滿洲年鑑所揭ノ算定ニ依レバ、一九二九年ニハ全面積ノ一二八・四「パーセント」ハ耕作シ得ルニ拘ラズ僅々一二・六「パーセント」開墾セラレ居ルニ過ギズ。從テ經濟狀態改善セラルルニ於テハ將來生產額ノ著シキ增大ヲ期待シ得ベキガ如シ。一九二八年度ニ於ケル滿洲ノ農產物ノ全價格ハ一億三千萬金磅以上ト算セラレ其ノ大部分ハ輸出セラル。絹紬又ハ柞蠶亦滿洲ノ他ノ重要輸出品ナリ。

木材及鑛物　山嶽地方ハ木材及鑛物殊ニ石炭豐富ナリ。鐵及金ノ鑛床モ亦存在ストセラレ他方良質ノ油頁岩、白雲石、菱苦土石、耐火粘土、滑石珪土モ多量ニ發見セラレタリ。從テ鑛業ハ極メテ有望ナリト期待セラル。(第八章並ニ本報告附屬ノ特別研究第二及第三參照)

二、支那ノ他ノ部分トノ關係

淸朝沒落ニ至ル迄ノ歷史　滿洲ハ有史以來各種「ツングース」族居住シ蒙古韃靼人ト自由ニ雜居シタルガ優越セル文明ヲ有スル支那移住民ノ影響ヲ受ケ團結心ニ目覺メ數個ノ王國ヲ建設シ此等王國ハ時ニ滿洲ノ大部分並ニ支那及朝鮮ノ北部地方ヲ支配セリ。殊ニ遼、金及淸朝ハ支那ノ大部分又ハ全部ヲ征服シ數世紀間之ヲ支配シタリ。一方支那ハ有力ナル皇帝ノ下ニ北方ノ侵入ヲ防止シ之ニ代テ自ラ滿洲

ノ大部分ニ其ノ主權ヲ樹立スルヲ得タリ。移住支那人ノ植民ハ古代ヨリ行ハレ周圍ノ地方ニ支那文化ノ影響ヲ及ボシタル支那人ノ都邑ハ同ジク古代ヨリ存在セリ。卽チ二千年間永久的ノ據所維持セラレ支那文化ハ滿洲ノ極南部ニ於テ常ニ行ハレタルガ右文化ノ影響ハ事實上滿洲全體ニ其ノ權力ヲ振ヘル明朝（一三六八年―一六四四年）ノ統治中極メテ强大トナリタリ。滿洲人ガ一六一六年滿洲ニ於ケル明朝ノ施政ヲ覆ヘシ一六二八年萬里長城ヲ越エテ支那ヲ征服セル以前既ニ滿洲人ノ間ニハ支那文化普及シ著シク支那人ニ同化セラレタリ。滿洲軍中ニハ多數ノ支那人アリテ旗トシテ知ラルル別個ノ部隊ニ編成セラレタリ。

右征服後清朝ハ支那ノ重要都市ニ守備兵ヲ置キ滿洲人ノ一定職業ニ從事スルヲ禁ジ滿洲人支那人間ノ雜婚ヲ禁止シ支那人ノ滿洲及蒙古移住ヲ制限セリ。右ノ措置ハ人種的差別ヨリハ寧ロ政治的差別ニ基キ清朝ノ永久的支配ヲ擁護スルノ目的ニ出デタルモノナリ。而シテ右措置ハ多數ノ支那旗人ニハ及バズ彼等ハ事實上滿洲人同樣ノ特權的地位ヲ享有セリ。

滿洲人及其ノ味方タル支那人ノ出境ハ滿洲ノ人口ヲ著シク減少セシメタルモ南部ニ於テハ支那人ノ部落ハ依然トシテ存在シ右部落ヨリ少數ノ移住者ハ奉天省ノ中央部ヲ橫斷シテ分散セリ。而シテ其ノ數ハ排斥法ヲ潛ルニ成功シ又ハ時々同法ノ變改ヲ利シテ支那ヨリ斷エズ移住民入込メル爲增加シタリ。滿洲人及支那人ハ益々同化シ支那語ハ實質上滿洲語ニ代ハルニ至レリ。尤モ蒙古人ハ同化セラレズ之等移住民ノ爲奧地ニ後退セシメラレタリ。最後ニ北方ヨリスル露西亞人ノ南下ヲ阻止スル爲淸朝政府ハ支那移住民ヲ奬勵スルニ決シ一八七八年滿洲各地ヲ開放シ且移住民ニ各種ノ奬勵ヲ與ヘタル結果一九一一年ノ支那革命當時滿洲ノ人口ハ千八百萬ト算セラレタリ。

一九〇七年卽退位ノ數年前清朝ハ滿洲ニ於ケル施政ヲ改革スルコトニ決定セリ。滿洲各省ハ從前獨自ノ政體ヲ有スル關外領域トシテ統治セラレ、省行政ヲ考試ニ及第セル學者ノ手ニ委スル支那ノ慣例ハ滿洲ニ於テハ行ハレズシテ純粹ナル軍政施カレ、右軍政ノ下ニ滿洲官吏及慣習維持セラレタリ。支那ニ於テハ官吏ハ其ノ出生セル省ニ於テハ官職ニ就クヲ許サレザリキ。滿洲各省ニハ督軍アリテ軍事ノミナラズ一切ノ施政ニ付キ完全ナル權力ヲ行使シタルガ後ニ至リ文武政ノ分離試ミラレタルモ其ノ結果ハ滿足ナラザリキ。卽各權限ノ分界妥當ナラズ屢々誤解及陰謀アリ其ノ結果能率ヲ擧グルニ至ラザリキ。依テ一九〇七年右ノ試ハ放棄セラレ特ニ外交政策ノ方面ニ於ケル權力集中ノ目的ヲ以

テ三名ノ督軍ニ代フルニ全滿洲ニ對スル總督ヲ置クコトトシ總督ノ監督ノ下ニ省長省行政ヲ掌リタリ。右改組ハ支那ノ省政府組織ヲ招來セル後日ノ行政改革ノ爲路ヲ開キタルモノナリ。清朝ノ右最後ノ措置ハ一九〇七年以後滿洲ノ政治ヲ掌レル有能ナル爲政家ニ依リ大ナル效果ヲ收メタリ。

清朝沒落後　一九一一年革命起ルヤ共和政體ニ贊セザル滿洲官憲ハ後日滿洲及北支ノ獨裁官トナルニ至リタル張作霖ニ對シ革命軍ノ前進阻止ヲ命ジ以テ內亂ノ騷擾ヨリ此等ノ省ヲ救フニ成功シタリ。共和國建設セラルルヤ滿洲官憲ハ既成事實ヲ受諾シ進ンデ共和國第一大統領ニ選任セラレタル袁世凱ノ統率ニ從ヒタリ。各省ニハ省長及督軍任命セラレタルガ滿洲ニ於テハ支那ノ他ノ部分ト同樣督軍ハ忽チ同僚タル省長ヲ無力ノ者タラシメタリ。

一九一六年、張作霖ノ奉天省督軍任命　一九一六年張作霖奉天省督軍ニ任命セラレ同時ニ省長ノ職ヲ執リタルガ其ノ實力ノ及ブ所ハ遙カニ大ナリキ。對獨宣戰ノ問題起ルヤ彼ハ支那將領ト共ニ之ニ反對セル議會ノ解散ヲ要求セリ。而シテ右要求大統領ニ依リ拒絕セラルルヤ彼ハ奉天省ハ北京中央政府ヨリ獨立セルコトヲ宣言シタルガ後ニ至リ右宣言ヲ取消シ一九一八年其ノ中央政府ニ對スル功績ニ依リ東三省巡撫使ニ任ゼラレタリ。斯クテ滿洲ハ再ビ特別ノ制度ヲ有スル一ノ行政單位トナリタリ。

一九二二年、張ノ北京中央政府ニ對スル忠誓斷絕　張霖霖ハ中央政府ノ與ヘタル顯職ヲ受領シタルモ其ノ態度ハ變轉常ナキ中央政府ノ支配者タル軍閥トノ個人的關係ノ如何ニ依リ變化セリ。彼ハ自己ト政府トノ關係ヲ視ルニ個人的同盟ノ意味ヲ以テシタルモノノ如シ。一九二二年七月其ノ權力ヲ長城以內ニ樹立スルニ失敗シ其ノ政敵北京政府ヲ支配シタル際彼ハ中央政府ニ對スル忠誠ヲ廢棄シ滿洲ニ於テ行動ノ完全ナル獨立ヲ維持シ遂ニハ其ノ權力ヲ長城以南ニ及ボシ北京ノ支配者トナリタリ。彼ハ外國ノ權利ヲ尊重スルノ意アルヲ表明シ支那ノ義務ヲ承認シタルモ外國ニ對シ滿洲ニ關スル一切ノ事項ニ付テハ今後自己ノ政府ト直接交涉セムコトヲ要求セリ。

一九二四年「ソ」聯邦トノ奉天協定　依テ彼ハ一九二四年五月三十一日ノ露支協定ガ支那ニ有利ナルニ拘ラズ之ヲ廢棄シ一九二四年九月「ソ」聯邦ヲ說キ之ト別個ノ協定ヲ締結セルガ右ハ一九二四年五月三十一日ノ中央政府トノ協定ト實質的ニ同一ナリ。右ノ事實ハ張作霖ガ內外政策ニ關シ完全ナル行動ノ自由ヲ固持セルコトヲ明證スルモノナリ。

張作霖元帥吳佩孚將軍ヲ破ル　一九二四年彼ハ再ビ支那ニ侵入シタルガ馮玉祥將軍（現在元帥）ガ其ノ上官吳佩孚

將軍（現在元帥）ヲ戰鬪ノ最モ重要ナル時期ニ裏切リタル爲成功セリ。其ノ結果中央政府ハ忽チ顚覆シ南方上海ニ至ル迄張元帥ノ勢力擴大セリ。

一九二五年張元帥ハ又々武力ニ訴ヘ其ノ舊同盟者タル馮將軍ニ對抗セリ。此ノ戰鬪ニ於テ彼ノ部下將軍ノ一人郭松齡ハ最モ重要ナル時機ニ際シ彼ヲ裏切リ、馮將軍ニ味方セリ。

郭松齡ノ反逆　一九二五年十一月ノ郭松齡ノ反逆ハ「ソ」聯邦及日本ニモ關係シ前者ノ行動ハ間接ニ馮將軍ニ有利ニシテ後者ノ夫レハ張元帥ニ有利ナリシヲ以テ單ニ一時的ノ問題ニ止マラザリキ。郭松齡ハ元帥ノ部下タリシニ拘ラズ社會改革ニ關シ馮將軍ト見解ヲ同クシ上官ノ沒落ガ內亂終熄ニ必要ナリトノ信念ヨリ彼ニ對シ鋒ヲ逆ニセルモノナリ。右反逆ハ元帥ヲ甚シク危機ニ陷レタリ。郭松齡ハ鐵道ノ西方ノ地域ヲ占領シ居リ元帥ハ著シク減少セル兵力ヲ擁シ奉天ニ在リタルガ此ノ時日本ハ南滿洲ニ於ケル自己ノ利益ヨリ南滿洲鐵道ノ兩側ニ各二十支里（七哩）ノ中立地帶ヲ宣言シ軍隊ノ之ヲ通過セルコトヲ禁止シタリ。右ハ郭松齡ノ元帥ニ對シ進軍スルヲ妨ゲ黑龍江ヨリ援軍到着ノ餘裕ヲ與ヘタリ。援軍ハ現金ヲ以テ運賃ヲ支拂ハザル限リ鐵道輸送ノ許可ヲ拒否セル「ソヴィエト」鐵道吏員ノ行動ニ依リ遲延シタルモ他ノ行路ニ依リ進ムコトヲ得タリ。右援軍ノ到着及多少トモ日本ノ與ヘタル公然ノ援助ハ戰鬪ヲ元帥ニ有利ニ導キ郭松齡ハ敗北シ馮將軍ハ後退ヲ餘儀ナクセラレ北京ヲ張元帥ノ爲遺棄シタリ。張元帥ハ右ノ際ニ於ケル東支鐵道吏員ノ行動ヲ憤リ該鐵道ノ權利ヲ絕エズ侵犯シ以テ報復餘ス所ナカリキ。右事件ノ與ヘタル經驗ハ彼ヲシテ滿洲三省ノ首都ヲ連絡スル獨立ノ鐵道網ヲ建設セシメタル重要ナル要因タルノ觀アリ。

滿洲獨立ノ意義　張作霖元帥ガ時ヲ異ニシ宣言セル獨立ナルモノハ彼又ハ滿洲ノ人民ガ支那トノ分離ヲ希望セルコトヲ意味セルモノニハ非ズ。彼ノ軍隊ハ支那ガ恰モ外國ナルカノ如ク之ヲ侵略シタルニ非ズシテ單ニ內亂ニ參加シタルニ過ギス。他省ノ軍閥ト同樣元帥ハ或ハ援助シ或ハ攻擊シ又ハ其ノ領域ヲ中央政府ヨリ獨立セルモノト宣言シタルモ右ハ支那ヲ個々ノ國家ニ分割スルニ至ルカ如キ遣方ニテ爲サレタルニ非ズ。之ニ反シ支那ノ內亂ノ多クハ眞ニ强力ナル政府ノ下ニ同國ヲ統一セムトスル何等カノ大計畫ニ直接又ハ間接關係アルモノナリ。從テ一切ノ戰爭及「獨立」ノ期間ヲ通ジ滿洲ハ終始支那ノ構成部分タリシナリ。

張作霖及國民黨　吳佩孚ニ對スル戰爭ニ於テ張作霖及國民黨ハ同盟セルニ拘ラズ前者自身ハ國民黨ノ主義ヲ承認セ

ザリキ。彼ハ孫博士ノ希望セル如キ憲法ハ支那人民ノ精神ト調和スルモノトハ見受ケラレザリシヲ以テ之ヲ是認セザリキ。

然レ共張ハ支那ノ統一ヲ希望セリ。而シテ滿洲ニ於ケル「ソ」聯邦及日本ノ利益範圍ニ對スル張ノ政策ハ、出來得ベクンバ兩者ヲ一掃セント欲シタルヲ示セリ。「ソ」聯邦ノ範圍ニ關シテハ張ハ右政策ノ實行ニ殆ド成功シ又南滿洲鐵道ヲ同鐵道ノ培養地域ノ或部分ヨリ切斷スル結果ヲ生ズベキ上述ノ鐵道建設政策ニ着手シタリ。張ガ滿洲ニ於ケル日「ソ」兩國ノ利益ニ對シ斯ル態度ニ出デタルハ、一ハ張ガ其ノ日「ソ」兩國トノ關係ニ於ケル自己ノ權威ノ制限ヲ堪ヘ難シトセルト、他ハ張ガ支那ニ於ケル外國人ノ特權的地位ニ關シ各種ノ支那輿論ト共ニ感ジタル憤怨ニ因ルベシ。事實一九二四年十一月張ハ孫博士ヲ改革會議ニ招請シタル處同博士ハ會議議題中ニ生活標準ノ改善、國民會議ノ召集及不平等條約ノ廢棄ヲ包含セシメンコトヲ求メタリ。右會議ハ博士ノ重患ニ陷リタル結果開催ヲ見ズシテ止ミタルガ、右孫博士ノ提議ハ孫ト張元帥トノ間ニ一脈ノ諒解ノ相通ズルモノアリ、且兩者ノ間ニ支那外交政策ニ關シ合意ノ基礎ヲ求メ得ベカリシヲ想ハシム。

張作霖ノ晩年　張作霖元帥ハ其ノ晩年ニ於テハ日本ニ對シ日本ガ各種ノ條約及取極ニ依リ取得セル特權ノ利益ヲ漸次容認セザル意向ヲ示スニ至レリ。日本トノ關係ハ時ニ稍緊張シタリ。支那ニ於ケル黨派的鬪爭ニ關係セズ專ラ力ヲ滿洲ノ開發ニ用フベシトノ日本ノ忠告ニ對シ張ハ憤怨ヲ感ジ之ヲ無視シタルガ、其ノ子學良亦彼ニ倣ヘリ。馮將軍敗北後張作霖ハ大元帥ノ稱號ノ下ニ北方軍閥同盟ノ盟主ト成レリ。

一九二八年張ハ第一章ニ說述セル北伐ニ際シ國民黨軍ノ爲敗ラレ、日本ヨリ早キニ及ンデ其ノ軍隊ヲ滿洲ニ引揚グベキ旨勸告セラレタリ。日本ノ目的ハ當時言明シタル如ク戰捷軍ニ追擊セラレタル敗殘兵ノ遁入ニ依リ滿洲ガ內亂ノ災禍ニ投ゼラルルコトヲ防止セントスルニ在リタリ。

一九二八年六月四日張作霖元帥ノ死　右勸告ニ對シ元帥ハ憤慨シタルモ結局之ニ從フノ外ナカリキ。張ハ一九二八年六月三日北平（元ノ北京）ヨリ奉天ニ向ケ出發シタル處翌日奉天市外卽京奉線ガ南滿洲鐵道線ノ鐵橋下ヲ通過スル地點ニ於テ爆裂ノ爲其ノ搭乘セル列車破壞セラレ死亡セリ。右殺害ノ責任ハ今日迄確定セラレズ。慘事ハ神祕ノ幕ニ蔽ハレ居レルモ當時右事件ニ日本ガ共謀シタルヤノ嫌疑起リ旣ニ緊張シ居タル日支關係ニ一段ノ緊張ヲ加フル原因トナレリ。

後繼者張學良 張作霖ノ死後其ノ子張學良ハ滿洲ノ支配者ト爲レリ。學良ハ新時代ノ國民的要望ヲ多分ニ有シタルヲ以テ内亂ヲ中止シ國民黨ノ統一政策ヲ援助セント欲シタルカ既ニ國民黨ノ政策及傾向ニ付多少ノ經驗ヲ有シタル日本ハ斯カル勢力ガ滿洲ニ侵透セントスル形勢ハ之ヲ歡迎セザリキ。日本ハ若キ元帥ニ對シ右ノ趣旨ヲ勸告スル所アリタルガ彼ハ父ト同ジク斯カル勸告ヲ不快トシ自己ノ判斷ニ從フベク決心セリ。

若キ元帥中央政府ヘノ忠順ヲ宣ス 斯クテ彼ト國民黨及南京トノ關係ハ緊密ヲ加ヘ一九二八年十二月彼ハ易幟ヲ行ヒ中央政府ニ對スル忠順ヲ宣言シ東北邊防軍總司令ニ任ゼラルルト共ニ内蒙古ノ一部約六萬平方哩ノ面積ヲ有スル熱河ヲ加ヘタル滿洲政權ノ長官タルコトヲ確認セラレタリ。

國民黨トノ聯繫ハ實質上ヨリモ名儀上ノモノナリ 滿洲ガ國民黨支那ト合體セル結果滿洲ノ行政組織ハ中央政府ノ夫レニ近似スル樣多少ノ變更ヲ必要トスルニ至リ委員制度採用セラレ國民黨ノ各級支部設立セラレタルガ事實ハ從來ノ通舊制度ノ下ニ舊人物活動セリ。支那ニ於テ不斷ニ行ハレタル如キ國民黨支部ノ地方行政ニ對スル干渉ハ滿洲ニ於テハ容認セラレズ總テノ主要文武官憲ハ國民黨員タルベシトノ規定ハ單ナル形式トシテ取扱ハレ軍事、政務、財政、外交等總テノ問題ニ付中央政府トノ關係ハ滿洲側ノ自發的協力ヲ必要トセリ。無條件服從ヲ要求スルガ如キ命令又ハ訓令ハ容認セラレザリシナルベク滿洲官憲ノ意ニ反シタル任免ノ如キハ想像シ得ラレザリキ。政府及黨ノ問題ニ關スル右ノ如キ行動ノ獨立ハ支那ノ其ノ他ノ各地方ニ於テモ存シタルガ斯ル場合總テノ重要ナル任命ハ地方官憲ニ依テ行ハレ中央政府ハ單ニ之ヲ確認スルニ止レリ。

國民政府トノ合體カ滿洲ニ置ケル外交政策ニ及ホシタル影響 外交政策ノ範圍ニ於テハ地方官憲ハ依然多大ノ行動ノ自由ヲ有シタルニ相違ナキモ然モ滿洲ト國民政府トノ合體ハ相當重要ナル結果ヲ招來セリ。東支鐵道ノ滿洲ニ於ケル地位ニ對スル張作霖元帥ノ執拗ナル攻撃及日本ノ要求セル或ル種ノ權利ニ對スル無視ハ滿洲ニ於テハ既ニ國民黨トノ合體以前ヨリ「進取政策」ノ採用セラレ居タルコトヲ示スモノナルガ國民黨トノ合體後ハ滿洲ハ同黨ノ良ク組織セラレタル且系統的ナル宣傳ニ開放セラレタリ。同黨ハ其ノ公式ノ印刷物ニ於テ又同黨ト關係深キ多數ノ機關紙ニ於テ常ニ喪失主權回復ノ極メテ重要ナルコト、不平等條約ノ廢棄、帝國主義ノ邪惡ヲ强調スルヲ止メザリキ。支那領土上ニ於ケル外國ノ利益、裁判所、警察、警備兵又ハ軍隊ノ實體ガ明白ナル滿洲ニ於テ斯ル宣傳ガ深キ印象ヲ與ヘタルハ

必然ナリ。國民黨ノ宣傳ハ同黨ノ敎科書ニ依リ學校ニ侵入シ又遼寧人民外交協會ノ如キ協會出現シテ國民主義的感情ヲ鼓吹强調スルト共ニ抗日煽動ヲ實行シ又支那人家主及地主ニ對シテハ日本人及朝鮮人タル借人ヘノ賃貸料ノ引上又ハ賃貸契約ノ更新拒絶ヲ强要シタリ。(本報告書附屬ノ特別研究第九號參照)日本人ハ當委員會ニ對シ多數ノ此ノ種事件ヲ訴ヘ來レリ。朝鮮人移民ハ組織的迫害ヲ蒙レリ。諸種ノ抗日的命令及訓令發セラレ軋轢ノ機會ハ重ナリ危險ナル緊張加レリ。一九三一年三月各省首都ニ國民黨省黨部設立セラレ續イテ其ノ他ノ都市及地方ニ支部ノ設立ヲ見タリ。黨ノ宣傳員ニシテ支那ヨリ北上シ來ル者ハ次第ニ其ノ數ヲ加ヘ日本人ハ抗日運動ノ日ニ激化スルヲ嘆キタリ。一九三一年四月奉天ニ於テ人民外交協會後援ノ下ニ五日間ノ會議開催セラレ滿洲各地ヨリノ代表者三百餘名之ニ參加シ滿洲ニ於ケル日本ノ地位一掃ノ可能性ニ付討議セラレタルガ其ノ決議ノ中ニハ南滿洲鐵道回復ノ一項ヲ含メリ。當時「ソ」聯邦及其ノ市民亦右同樣ノ傾向ニ惱マサレタルガ一方白露人ハ何等返還スベキ主權又ハ例外的特權ヲ有セザルニ係ラズ屈辱虐待ヲ蒙レリ。

內政ニ及ボセル影響 內政問題ニ關シテハ滿洲官憲ハ其ノ欲スル權力ヲ悉ク保持シタリ。而シテ其ノ權力ノ根本ニ觸レザル限リ彼等ハ中央政府ノ採用セル行政規則及方法ニ從フニ異議ナカリキ。

東北政務委員會 國民政府トノ合體後間モナク奉天ニ東北政務委員會設立セラレタルガ右ハ中央政府ノ名目的監督ノ下ニアル東北諸省ノ最高行政官憲ナリキ。同委員會ハ十三名ヨリ成リ其ノ中一名ヲ委員長ニ選ベリ。同委員會ハ遼寧、吉林、黑龍江及熱河ノ四省並ニ一九二二年以來東支鐵道ノ行政管轄下ニ歸セル所謂特別區ノ政府ノ活動ヲ指揮監督セル責ニ任ジタリ。同委員ハ特ニ中央政府ニ留保セラレタル以外ノ有ラユル事項ヲ處理シ且中央政府ノ法律規則ニ牴觸セザル如何ナル措置ヲモ執リ得ルノ權限ヲ有シ省及特別區ノ政府ハ右委員會ノ決定ヲ實施スルノ義務アリタリ。

各省ノ行政組織ハ支那ノ其ノ他ノ地方ニ於テ採用セラレタル組織ト根本的ニハ相違スル所ナキモ滿洲ヲ一行政單位トシテ維持センガ爲ニ特權ヲ保持セルコト最モ重要ナル差異ナリ。尤モ右特權無カリセバ滿洲側ノ自發的合體ハ恐ラク行ハレザリシナルベシ。事實滿洲ニ於テハ外部的變更ニ係ラズ舊事態引續キ存在セリ。滿洲當局ハ從來ノ如ク其ノ權力ガ南京ヨリ來ルヨリモ遙ニ多ク彼等ノ軍隊ヨリ來ルモノナルコトヲ認識セリ。

軍隊。全經費ノ八〇%ヲ占ムル軍費 右事實ハ約二十五

萬ニ上ル大常備軍維持セラレ又二億弗（銀）以上ヲ費シタリト傳ヘラルル大兵工廠ノ保持セラレ居ルコトヲ說明スルモノナリ。軍事費ハ全經費ノ八〇％ニ達シタリト推計セラレ其ノ殘額ヲ以テ行政、警察、司法及敎育ノ費用ヲ支辨スルニ足ラズ又國庫ハ官憲ニ對シ、適當ナル俸給ヲ支給スル能ハザリキ。而シテ有ラユル權力ハ少數軍人ノ手ニ歸シタルヲ以テ官職ハ彼等ノ手ヲ通シテノミ得ラレ斯カル事態ノ避ケ難キ結果トシテ親戚、特寵、腐敗、惡政ハ跡ヲ斷タザリキ。當委員會ハ右惡政ニ對スル甚大ノ不平ガ廣ク各地ニ存スルヲ認メタリ。尤モ右事態ハ滿洲ニ特有ノモノニハ非ザリシモノニシテ支那ノ其ノ他ノ地方ニモ同樣乃至更ニ惡化セル事態存在セリ。

　軍隊給養ノ爲ニハ重稅ヲ課スルノ要アリタルガ通常收入ニテハ猶不足セルヲ以テ當局ハ省政府不換紙幣ノ價値ヲ著著下落セシムルコトニ依リ更ニ人民ニ課稅セリ（本報告書附屬ノ特別研究第四號及第五號參照）右政策ハ殊ニ最近ニ於テ既ニ一九三〇年頃ニ殆ド獨占的トナリ居タル「豆類公買」ニ關聯シテ行ハレタリ。滿洲重要物產ノ管理權ヲ取得スルコトニ依リ當局ハ外國ノ豆類買入業者就中日本人ニ對シ高價買入ヲ强ヒ以テ其ノ收入ヲ增大セント欲シタルガ斯ル取引ハ當局ガ如何ナル程度ニ銀行及商業ヲ管理シタルヤヲ示スモノナリ。官吏ハ又同樣ニ有ラユル私的企業ニ自田ニ從事シ其ノ權力ヲ利用シテ自己及其ノ寵愛者ノ爲ニ富ヲ蓄メタリ。

滿洲ニ於ケル支那政權ノ建設的努力　一九三一年九月ノ事件以前ノ滿洲ニ於ル行政ガ不完全ナリシハ事實トスルモ同地方ノ或ル部分ニ於テハ行政改善ノ努力行ハレ殊ニ敎育ノ進步、都市行政及公共事業ノ方面ニ於テ若干ノ效果擧ガリタルコトハ之ヲ認メザルベカラズ。此ノ時代ニ於テ張作霖元帥及張學良元帥ノ行政ノ下ニ滿洲ノ經濟資源ノ開發及組織ニ關シ支那人民及支那ノ利益ガ從來ヨリモ遙カニ大ナル役割ヲ演ズルニ至リタル事實ハ特ニ茲ニ强調スルノ要アリ。（第八章及本報告書附屬ノ特別研究第三號參照）

　既述セル如ク支那移民ノ增加ハ滿洲ト支那ノ其ノ他ノ地方トノ經濟的及社會的關係ノ發展ニ貢獻シタリ。然レ共右殖民以外ニ此ノ時代ニ於テ日本ノ資本ニ關係ナキ支那鐵道殊ニ奉天海龍鐵道、打通鐵道（京奉線支線）「チチハル」克山鐵道、呼倫海倫鐵道建設セラレ又葫蘆島築港計畫、遼河改修事業及諸河川ニ於ケル航行事業ノ開始ヲ見タリ。支那官民ノ多數ハ之等企業ニ參加スルニ至リ鑛山業ニ於テハ本溪湖、穆稜、札賚諾爾及老頭溝炭坑ニ關係ヲ持チ其ノ他諸鑛山ノ開發ニ付單獨責任ヲ有シタルガ之等鑛山ノ多クハ官

立東北鑛業公司ノ指揮ノ下ニ採掘セラレタリ。支那人ハ猶黑龍江省ノ採金事業ニモ利益ヲ有シタリ。森林業ニ關シテハ支那人ハ鴨綠江採木公司ニ於テ日本人ト共同ノ利益ヲ有シ猶黑龍江省及吉林省ニ於テ伐木事業ニ從事セリ。滿洲各地ニ農事試驗場開設セラレ農業組合及灌漑計畫奬勵セラレタリ。最後ニ支那人ノ資本ハ製粉及織物工業、哈爾賓ニ於ケル豆、油及小麥製粉事業、繭綢及柞蠶絹、木綿及羊毛ノ紡績及製織工場ニ投ゼラレタリ。

支那他地方トノ貿易　滿洲ト支那ノ其ノ他ノ各地方トノ間ノ貿易亦增大セリ。（第八章及本報告書附屬ノ特別研究第六號參照）右貿易ハ一部分支那ノ銀行就中滿洲ノ主要都市ニ支店ヲ設ケタル中國銀行ニ依テ金融ヲ受ケタリ。支那汽船及「ジャンク」ハ支那本部ト大連、營口（牛莊）及安東トノ間ヲ往復シタルガ其ノ運送貨物量漸增シ滿洲海運業界ニ於テハ日本ノ噸數ニ次ギ第二位ヲ占メタリ。支那保險業モ漸次增加ノ趨勢ニ在リ又支那海關ガ對滿貿易ニ依リ取得スル收入ハ增加シツツアリタリ。」斯クノ如ク日支衝突以前ニ於テハ滿洲ト支那ノ其ノ他ノ各地方トノ政治的及經濟的聯繫ハ漸次鞏固ヲ加ヘツツアリタリ。右漸增シツツアリタル相互依存關係ハ滿洲及南京ニ於ケル支那人指導者ヲシテ露西亞及日本ノ取得セル權益排除ヲ目的トセル國民主義的政策ヲ益々實行セシムルニ與テ力アリタリ。

三、對露關係

對露關係　一八九四—九五年ノ日清戰爭ハ其ノ後ノ事件ノ立證セル如ク露西亞ヲシテ表面上ハ支那ノ爲ニ而シテ事實上ハ自己ノ利益ノ爲ニ支那ニ對シ干涉ヲ爲スノ機會ヲ與ヘタリ。日本ハ一八九五年下關條約ニ依ツテ日本ニ讓渡セラレタル南滿洲ニ於ケル遼東半島ヲ外交上ノ壓迫ニ依リ支那ニ返還スルノ餘儀ナキニ至リタルガ露西亞ハ日本ガ支那ニ課シタル戰爭償金ノ支拂ニ付支那ヲ援助シタリ。一八九六年露支兩國間ニ防守同盟密約締結セラレ同年露西亞ハ上述ノ對支援助ノ報償トシテ滿洲ヲ横斷シテ「チタ」ヨリ浦潮斯德ニ至ル直通線ヲ西伯利亞横斷鐵道ノ支線トシテ建設スル權利ヲ獲得シタリ。

東支鐵道　同線ハ日本ガ再ビ支那ヲ攻擊シタル場合ニ露西亞軍隊ヲ東部ニ輸送スルノ必要ニ出デタリト稱セラレタルガ露清銀行（後ノ露亞銀行）ハ本計畫ノ官的色彩ヲ多少隱蔽センガ爲ニ設立セラレタリ。同銀行ハ本件鐵道ノ建設及運輸ノ爲ニ東支鐵道會社ヲ設立シタリ。

一八九六年九月八日ノ契約　一八九六年九月八日露清銀行ト支那政府トノ間ニ締結セラレタル契約ノ條項ニ依レバ東支鐵道會社ハ本件鐵道ヲ建設シ八十年間之ヲ運轉スベキ

モノニシテ其ノ期間滿了後ハ無償ニテ支那ノ所有ニ歸スベキモノナルガ支那ハ三十年後ニ於テ協定セラルベキ價格ヲ以テ之ヲ買收スルノ權利ヲ有シタリ。契約期間中ハ鐵道會社ハ其ノ土地ニ對シ絕對的排他的ノ行政權ヲ有スベキモノナリシガ本條項ハ露西亞ニ依テ契約ノ其ノ他ノ諸條項ガ許與セリト認メラルルヨリ遙ニ廣義ニ解釋セラレタリ。支那ハ露西亞ガ契約ノ範圍ヲ常ニ擴大セント試ミツツアルニ對シ抗議シタルモ之ヲ阻止スル能ハザリキ露西亞ハ東支鐵道ノ地域内ニ於テ其ノ鐵道都市ノ急激ナル發達ニ伴ヒ主權ニモ等シキ權利ヲ行使スルニ漸次成功シタリ。猶支那ハ鐵道ノ必要トスル總テノ政府所有地ヲ無償ニテ引渡スニ同意シタルガ私有地ハ時價ヲ以テ買上ゲ得ルコトトシタリ。鐵道會社ハ更ニ同社ニ必要ナル電信線ヲ建設運用スルコトヲモ許與セラレタリ。

一八九八年露西亞ノ遼東半島租借　露西亞ハ一八九八年嘗テ日本ガ一八九五年拋棄ヲ餘儀ナカラシメラレタル遼東半島ノ南部ニ對シ二十五ケ年間ノ租借權ヲ得ルト共ニ東支鐵道ヲ哈爾賓ヨリ租借地内ノ旅順及「ダルニー」(現在ノ大連)ニ聯結スル權利ヲモ取得シタリ。右支線ノ通過地方ニ於テ鐵道會社ハ列車用トシテ伐木採炭ノ權利ヲ認メラレ又一八九六年九月八日ノ契約ノ各條項ハ新支線ニモ適用セラレタリ。露西亞ハ租借地内ニ於テハ自由ニ關税ヲ取極ムルコトヲ許サレ一八九九年「ダルニー」(現在ノ大連)ハ自由港タルベキ旨聲明セラレ外國ノ船舶及貿易ニ開放セラレタリ。右支線ノ通過地域内ニ於テハ如何ナル鐵道特權モ他國臣民ニハ許與セラルルヲ得ズ且租借地北方ノ中立地帶ニ於テハ如何ナル港モ外國貿易ニ開カルルコトナク又露西亞ノ同意ナクシテハ如何ナル特許特權モ許與セラルベカラザリキ。

一九〇〇年露國ノ滿洲占領　一九〇〇年露國ハ團匪ノ峰起ガ露國臣民ヲ危殆ナラシメタルコトヲ理由トシテ滿洲ヲ占領セリ。他ノ諸國ハ之ニ抗議シ且露國軍隊ノ撤退ヲ要求シタルモ、露國ハ右ノ措置ヲ執ルコトヲ遷延セリ。一九〇一年二月露支秘密條約案「セント・ピータースブルグ」ニ於テ討議セラレタルガ、其ノ條項ニ依レバ支那ハ、滿洲ニ於ケル其ノ行政權ヲ回收シ、之ガ代償トシテ、露國ガ一八九六年ノ基礎契約第六條ニ基キ駐屯セル鐵道守備隊ノ維持ヲ承認スルコト及他ノ諸國又ハ其ノ臣民ニ對シ露國ノ同意ナクシテ滿洲、蒙古及新疆ニ於ケル鑛山又ハ他ノ利益ヲ讓渡セザルコトヲ約スルコトトセリ。該條約案ノ右條項及他ノ數條項周知セラルルニ及ビ、支那及他ノ諸國ニ於テ輿論ノ反對ヲ惹起シ、一九〇一年四月三日露國政府ハ右計劃ハ

撤回セラレタル旨ノ回章ヲ發シタリ。

一九〇四年二月十日日本ハ露國ニ對シ開戰セリ　日本ハ右策動ヲ注視シ來リタリ。一九〇二年一月三十日日本ハ日英同盟條約ヲ締約シタルヲ以テ一層自國ノ安固ナルヲ覺エタリ。然レドモ日本ハ依然露國ガ朝鮮及滿洲ニ侵略シ來ルコトアルベキヲ懸念シタリ。從テ日本ハ他ノ諸國ト共ニ滿洲ニ於ケル露國軍隊ノ撤退ヲ要求セリ。露國ハ自國ノモノニ非サル企業ニ對シ事實上滿洲及蒙古ヲ閉鎖スルニ至ルベキ條件ノ下ニ撤退ニ異存ナキコトヲ宣言セリ。露國ノ壓迫ハ朝鮮ニ於テモ亦增大セリ。一九〇二年七月露國軍隊ハ鴨綠江ノ河口ニ現ハレタリ。其ノ他數多ノ行爲ハ日本ヲシテ露國ガ日本ノ生存ニ對スル脅威ニハ非ズトスルモ日本ノ利益ニ對スル脅威タル政策ヲ執ルニ決シタリト信ゼシメタリ。一九〇三年七月日本ハ門戶開放主義ノ維持及支那ノ領土保全ニ關シ露國ト商議ヲ開始シタルガ何等成功ヲ見ザリシヲ以テ一九〇四年二月十日開戰セリ。支那ハ中立ヲ保チタリ。

「ポーツマス」條約　露國ハ敗退セリ。一九〇五年九月三日露國ハ「ポーツマス」條約ヲ締結シ之ニ依リ日本ノ爲ニ南滿洲ニ於ケル其ノ特殊權利ヲ放棄セリ。租借地及租借ニ關係セル一切ノ權利ハ日本ニ讓渡セラレ同時ニ旅順口長春間ノ鐵道及其ノ支線並ニ右鐵道ニ附シ又ハ右鐵道ノ利益ノ爲ニ經營セラルル右地域内ノ一切ノ炭坑モ亦日本ニ讓渡セラレタリ。兩當事國ハ租借地ヲ除キ、各自ノ軍隊ニ於テ占領シ又ハ其ノ監理ノ下ニ在ル滿洲全部ヲ擧ゲテ全然支那專屬ノ行政ニ還附スルコトニ同意セリ。兩國ハ滿洲ニ於ケル各自ノ鐵道線路ヲ保護センガ爲（特定條件ニ基キ）守備兵ヲ維持スルノ權利ヲ留保シ、右守備兵ノ數ハ一「キロメートル」毎ニ十五名ヲ超過スルコトヲ得ズトセリ。

露國ノ勢力北滿ニ制限セラル　露國ハ其ノ勢力範圍ノ半ヲ失ヒ爾來其ノ範圍ハ北滿洲ニ限定セラルルコトトナレリ。露國ハ同地方ニ其ノ地位ヲ保持シ爾後其ノ勢力ヲ增大シタルガ、一九一七年露國革命勃發スルニ及ビ支那ハ右地域ニ於ケル其ノ主權ヲ再ビ主張スル決心ヲナセリ。

西伯利亞出兵　始メ支那ノ行動ハ聯合國ノ干涉（自一九一八年至一九二〇年）參加ニ限定セラレ居タルガ、右干涉ハ露國革命後西伯利亞及北滿洲ニ於テ迅速ニ擴大シツツアリタル混亂狀態ニ關聯シ、浦鹽斯德ニ集積貯藏セラレタル莫大ナル兵器軍需品ノ保護及東部戰線ヨリ西伯利亞ヲ經テ退却中ナリシ「チエツコ・スロヴアキア」軍約五萬ノ撤退援助ノ兩目的ノ爲北米合衆國ニ依リ提議セラレタルモノナリキ。右提議ハ受諾セラレ且各國ハ西伯利亞橫斷鐵道ノ各

自ノ特定部分ヲ擔任スベキ七千名ノ遠征軍ヲ派遣スベク、東支鐵道ハ支那軍ノ單獨ノ責任ニ委スルコトニ協定セラレタリ。聯合國軍隊ト協力シ鐵道ノ運行ヲ確保スル爲一ノ特別ノ聯合國鐵道委員會ハ一九一九年組織セラレ右委員會ノ下ニ技術部及輸送部ヲ配セリ。一九二〇年右干渉終了シ聯合國軍隊ハ日本軍ヲ除キ西伯利亞ヲ撤退シタルガ、日本軍ハ既ニ過激派ト公然敵對狀態ニ入リ居リタリ。右戰鬪ハ殆ド二ケ年ニ亙リ續行セリ。一九二二年「ワシントン」會議後日本軍亦撤退シ同時ニ聯合國委員會ハ其ノ技術部ト共ニ消滅セリ。

一九一七年露國革命勃發後支那ハ一八九六年露國ニ許容セル特權ヲ廢止ス　其ノ間支那ハ、東支鐵道ノ首腦者「ホルヴアト」將軍ガ鐵道地帶ニ一獨立政權ヲ樹立セントスル企圖ニ失敗シタル後、右地帶ニ於ケル秩序維持ノ責任ヲ引受ケタリ（一九二〇年）。同年支那ハ改造後ノ露亞銀行ト一協定ヲ締結シ、且新露西亞政府ト協定ノ締結アル迄暫時鐵道ノ最高支配權ヲ執ルノ意嚮ヲ表明シタリ。支那ハ又一八九六年ノ契約及會社ノ原定款ニ依リ會社ニ許與セラレタル諸便益ヲ回收スルノ意嚮ヲ表明セリ。爾來會社督辦及董事四名並ニ稽察局委員二名ハ支那政府之ヲ指名スルコトトナレリ。露西亞ノ優勢ハ又其後行ハレタル他ノ多クノ措置ニ依リ衰ヘタリ。鐵道地帶ニ於ケル露西亞ノ武裝兵ハ武裝ヲ解除セラレ支那兵之ニ代レリ。露西亞人ノ治外法權ハ廢止セラレタリ。其ノ法廷ハ侵入セラレ且閉鎖セラレタリ。露西亞人ハ支那ノ法律、裁判及課税ニ服セシメラレタリ。露西亞人ハ支那警察ガ大ナル權力ヲ有シ且統制不十分ナリシ爲右警察ニ依リ逮捕セラレ且無期限ニ拘禁セラルベキコトトナレリ。

特別行政區域ノ形成　一九二二年、從來會社ノ行政ニ服シ來リタル鐵道附屬地ハ奉天ニ對シ直接責任ヲ負フ一行政長官ノ支配スル東三省ノ特別區ニ變改セラレタリ。鐵道ニ附屬スル土地ノ行政ニモ亦干渉ヲ受ケタリ。張作霖元帥ハ露西亞新政府ガ承認セラルルニ先チ事實上露西亞ノ勢力範圍ヲ清算シ了リタルガ私人ノ利益ハ右過程中ニ於テ甚シキ侵害ヲ受ケタリ「ソ」聯邦政府ガ其ノ前政府ノ滿洲ニ於ケル遺産ヲ繼承セル時ニハ同鐵道ハ既ニ其ノ特權ノ大半ヲ失ヒ居タリ。

一九一九—一九二〇年ノ「ソ」支協定　一九一九年及一九二〇年「ソ」聯邦政府ガ爲シタル支那ニ關スル政策ノ宣言ハ帝政政府ガ支那ニ於テ獲得シタル特權殊ニ北滿洲ニ於テ獲得シタル特權ノ完全ナル拋棄ヲ包含セリ。

一九二四年ノ協定　右政策ニ從ヒ、「ソ」聯邦政府ハ新協

定ニ依リテ既成事實ノ調整ヲ行フコトニ同意セリ。一九二四年五月三十一日ノ「ソ」支協定ニ依リ東支鐵道ハ共同管理下ノ純商業的企業ト成リ支那モ亦右企業ニ財政上ノ利益ヲ獲得セリ。然レドモ「ソ」聯邦政府ハ廣大ニシテ範圍確定セザル權力ヲ行使スル總支配人ノ任命權ヲ有シ且右協定ニ依リ「ソ」聯邦政府ハ鐵道業務ニ優越セル勢力ヲ振ヒ又北滿洲ニ於ケル其ノ經濟利益ノ重要部分ヲ保持シ得タリ。上述ノ如ク北京ニ於テ支那政府ト締結セラレタル一九二四年五月ノ協定ハ張作霖之ヲ承認セズ、自ラ別個ノ協定ヲ締結スルコトヲ主張シタリ。一九二四年九月調印セラレタル右協定ハ其ノ條項ト同一ナリシモ之ニ依リ鐵道ノ租借ハ八十年ヨリ六十年ニ短縮セラレタリ。

「ソ」聯邦權益ニ對スル張作霖ノ侵略政策　右協定ハ「ソ」聯邦及滿洲ニ於ケル張作霖政府間ノ友好關係ノ一期間ヲ招來セサリキ。

一九二四年ノ二協定ニ於テ未解決ニ殘サレタル多クノ問題ヲ處理スベキ會議ノ開催ハ各種ノ口實ニ依リ延期セラレタリ。一九二五年及一九二六年ニ於テ兩度ニ亙リ東支鐵道總支配人ハ張作霖軍隊ノ鐵道輸送ヲ拒絕セリ。右第二次ノ拒絕事件ニ依リ總支配人逮捕セラレ「ソ」聯邦ハ最後通牒ヲ發スルニ至レリ（一九二六年一月二十三日）而シテ之等ハ孤立セル事件ニハ非ザリキ。然ルニ支那官憲ハ露西亞ノ利益ニ反シ且「ソ」聯邦政府及白系露人ニ依リ均シク遺憾トセラレタル政策ヲ固執セリ。

一九二九年滿洲於ケル「ソ」聯邦勢力ヲ淸算セントスル支那ノ最後ノ努力　滿洲ガ南京政府ニ服屬シタル後、國民主義精神ハ力ヲ增シ、且鐵道ニ對シ優越ナル支配ヲ維持セントスル「ソ」聯邦ノ努力ハ從前ニ比シ一層反感ヲ以テ迎ヘラレタリ。一九二九年五月、露西亞ノ利益範圍ノ殘存セルモノヲ淸算シ終ラントスル企圖行ハレタリ。攻擊ハ各地ニ於ケル支那警察ノ「ソ」聯邦領事館襲擊ニ依リ開始セラレタルガ、支那警察ハ多數ヲ逮捕シ且「ソ」聯邦政府及東支鐵道ノ雇傭者ガ共產主義革命ヲ陰謀シ居タルコトヲ證スル證據ヲ發見シタリト主張セリ。七月鐵道ノ電信電話機關ハ押收セラレ且多數ノ重要ナル「ソ」聯邦機關及企業ハ强制的ニ閉鎖セラレタリ。最後ニ、東支鐵道「ソ」聯邦支配人ハ支那側任命ノ者ニ事務ヲ引繼グベキ旨要請セラレタルモ同人ハ之ヲ拒絕シタル爲其ノ任務遂行ヲ禁止セラレタリ。支那官憲ハ自由ニ「ソ」聯邦幹部ヲ免職シテ自己ノ指名者ヲ以テ之ニ代ヘ、且多數ノ「ソ」聯邦民ヲ逮捕シ其ノ一部ヲ追放セリ。支那側ハ「ソ」聯邦政府ガ支那ノ政治社會制度ニ反對スル宣傳ヲ行ハザル旨ノ誓約ニ背キタリトノ

理由ニ基キ右强力行爲ヲ正當ナリトセリ。「ソ」聯邦政府ハ、其ノ五月三十日附公文ニ於テ右非難ヲ否認セリ。

「ソ」聯邦ノ措置　殘存セル露西亞權益ガ强制ニ依リ情算セラレタル結果「ソ」聯邦政府ハ行動ニ出ヅベク決意シタリ。數度ノ公文交換ヲ行ヒタル後、「ソ」聯邦政府ハ支那ヨリ其ノ外交官及通商代表竝ニ東支鐵道ニ於ケル其ノ職員全部ヲ召還シ且其ノ領土ト支那トノ間ノ一切ノ鐵道交通ヲ斷絶セリ。支那モ亦同樣ニ「ソ」聯邦トノ關係ヲ斷絶シ一切ノ支那外交官ヲ「ソ」聯邦領土ヨリ召還セリ。「ソ」聯邦軍隊ハ滿洲國境ヲ越エテ侵攻ヲ開始シ一九二九年十一月ニハ武力侵入トナルニ至レリ。南京府政ガ紛爭ノ解決ヲ托セル滿洲官憲ハ敗戰シ且甚ダシク威信ヲ失墜シタル後、「ソ」聯邦ノ要求ヲ承認スルノ止ムナキニ至リタリ。

一九二九年十二月二十二日「ハバロウスク」議定書　一九二九年十二月二十二日「ハバロウスク」ニ於テ議定書調印セラレ之ニ依リ原狀回復行ハレタリ。右紛爭中「ソ」聯邦政府ハ不戰條約ノ締約國タル第三國ヨリノ數多ノ覺書ニ對スル回答ニ於テ常ニ「ソ」聯邦ノ措置ハ正當ナル自己防衛ノ發動ニシテ何等右條約違反トシテ解釋シ得ズトノ態度ヲ執リタリ。

一九〇五年以後滿洲ニ關スル日露關係　滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ次章ニ於テ詳說セラルベキモ之ニ先チ今滿洲ニ於ケル露西亞ノ地位ヲ舒述スルニ當リ一九〇五年以後ノ日露兩國關係ニ付略說スルノ必要アリ。

一九〇七年―一七年ノ協調政策　日露戰爭ノ殆ド直後ニ於テ兩國間ニ密接ナル協調政策行ハレタルコトハ興味アル事實ニシテ、媾和成ルニ及ビ兩國ハ北滿洲及南滿洲ニ於ケル各自ノ利益範圍ニ關シ滿足ナル合意ニ到達スルコトヲ得タリ。殘存シタル抗爭ノ痕跡ハ滿洲ノ發展ニ活潑ニ從事セント欲シタル他ノ諸國トノ論爭ニ依リ間モ無ク拭ヒ去ラレタリ。他ノ競爭者ニ對スル憂惧ハ二國融和ノ過程ヲ促進シタリ。一九〇七年、一九一〇年、一九一二年及一九一六年ノ諸條約ハ二國ヲ益々親密ナラシメタリ。

露西亞革命ノ日本ニ及ボセル影響　一九一七年ノ露西亞革命、次テ爲サレタル支那國民ニ對スル政策ニ關スル一九一九年七月二十五日附及一九二〇年十月二十七日附「ソ」聯邦政府宣言竝ニ一九二四年五月三十一日附及一九二四年九月二十日附「ソ」支協定ハ滿洲ニ於ケル日露ノ諒解及協調ノ基礎ヲ粉碎セリ。政策ノ此ノ根本的變更ハ極東ニ於ケル三國ノ關係ヲ全ク變改セリ。更ニ聯合國干涉（一九一八年―二〇年）ハ之ニ伴ヘル西伯利亞ニ於ケル日本及「ソ」聯邦軍隊間ノ隔執ト共ニ日露關係ノ變更ヲ大ナラシメタ

リ。「ソ」聯邦政府ノ態度ハ支那ノ國民主義的翹望ニ强キ刺戟ヲ與ヘタリ。「ソ」聯邦政府及第三「インターナショナル」ハ現行條約ヲ基礎トシテ對支關係ヲ維持セル一切ノ帝國主義諸國ニ反對スル政策ヲ採用シタルヲ以テ右兩者ガ主權回收ノ鬪爭ニ於テ支那ヲ援助スルコトハアリ得ベキコトナリトセラレタリ。此ノ形勢ノ發展ハ日本ガ隣邦露西亞ニ對シ嘗テ抱キタル一切ノ懸念及疑惑ヲ復活セリ。嘗テ日本ト戰爭シタル露國ハ其ノ戰爭後數年ノ間ニ友邦及同盟國ト成リタリ。然ルニ今ヤ右關係ハ變化シ、北滿國境ヲ越エ來ル危險ノ可能性ハ再ビ日本ノ關心事トナレリ。北部ニ於ケル共產主義者ノ教義ト南部ニ於ケル國民黨ノ排日宣傳トノ提携ノ有リ得ベキコトヲ想像シ、日本ハ益々日露兩國ノ間ニ共產主義及排日宣傳ニ染マザル滿洲ヲ介在セシメントスル希望ヲ感ズルニ至レリ。日本ノ疑懼ハ「ソ」聯邦ガ外蒙古ニ於テ獲得セル優越ナル勢力及支那ニ於ケル共產主義ノ發達ニ依リ最近數年間ニ於テ更ニ增大シタリ。

一九二五年一月日本及「ソ」聯邦間ニ締結セラレタル協定ハ正規ノ關係ヲ樹立セルモ革命前ニ於ケル密接ナル協調ヲ復活スルニ至ラザリキ。

第三章　日支兩國間ノ滿洲ニ關スル諸問題

（一九三一年九月十八日以前）

一、支那ニ於ケル日本ノ利益

一九三一年九月ニ至ル四半世紀間ニ於テ滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ結合ハ追々鞏固トナリツツアリ夫レト同時ニ滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ增加シツツアリタリ。滿洲ハ明ニ支那ノ一部タリシモ同地方ニ於テ日本ハ支那ノ主權行使ヲ制限スルガ如キ特殊ノ權利ヲ獲得若ハ主張シ兩國間ノ衝突ハ其ノ當然ノ歸結ナリキ。

一九〇五年ノ條約ニ依ル日本ノ權利　一九〇五年十二月ノ北京條約ニ依リ支那ハ從來露西亞ノ租借シ居タル關東州租借地及露西亞ノ管理シ居タル東支鐵道南部線中長春以南ノ鐵道ノ日本ヘノ讓渡ヲ承認シ尙追加協定ニ依リ支那ハ安東奉天間ノ軍用鐵道ヲ改良シ之ヲ十五箇年間經營スル權利ヲ日本ヘ讓與シタリ。

一九〇六年八月南滿洲鐵道株式會社創立セラル　一九〇

六年八月勅令ニ依リ從前ノ露西亞鐵道ヲ安奉鐵道ト共ニ引受ケ且管理スル爲南滿洲鐵道會社設立セラレタルガ、日本政府ハ鐵道、其ノ附屬財産並ニ撫順及煙臺ノ價値アル炭坑ヲ提供スル代償トシテ同會社ノ株式ノ半額ヲソノ有トシ同會社ヲ統制スル地位ヲ得タリ。同會社ハ鐵道地帶ニ於ケル行政ヲ委任セラレ徵稅ヲ許サレ且鑛業、電氣事業、倉庫業其ノ他ノ諸事業經營ノ權利ヲ與ヘラレタリ。

朝鮮ノ併合 一九一〇年日本ハ朝鮮ヲ併合シタルガ是ニ依リ朝鮮人移住民ハ日本國民トナリ日本官吏ハ之等鮮人ニ對シ法權ヲ行使スルコトトナリタル爲滿洲ニ於ケル日本ノ權利ハ間接ニ增大シタリ。

一九一五年ノ條約及交換公文 一九一五年一般ニ二十一個條要求トシテ知ラルル日本ノ異常ナル要求ノ結果同年五月廿五日日支兩國間ニ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約ノ調印及公文ノ交換行ハレタリ。右協定ニ依リ旅順及大連ヲ含ム關東州ノ元來二十五個年間ノ租借期限、並ニ南滿洲及安奉兩鐵道ニ關スル期限ハ總テ九十九箇年ニ延長セラレ、日本臣民ハ南滿洲ニ於テ旅行及居住シ各種ノ營業ニ從事シ且商業、工業及農業ノ爲メ土地ヲ商租スル權利ヲ得、尙日本ハ南滿洲及東部內蒙古ニ於ケル鐵道及其ノ他或種借款ニ對スル優先權並ニ南滿洲ニ於ケル顧問任命ニ關スル優先權ヲ獲得シタリ。然共一九二一—二二年ノ華盛頓會議ニ於テ日本ハ右諸權利ノ中借款及顧問ニ關スル權利ヲ拋棄シタリ。

上記各條約及其ノ他ノ諸協定ハ滿洲ニ於テ重要ニシテ且特殊ナル地位ヲ日本ニ與ヘタリ。卽チ日本ハ關東州租借地ヲ事實上完全ナル主權ヲ以テ統治シ、南滿洲鐵道會社ヲ通ジテ鐵道附屬地ノ施政ニ當レルガ、右鐵道附屬地ハ數箇ノ都市並ニ奉天及長春ノ如キ人口大ナル都會ノ廣大ナル部分ヲ含ミ、此等地域ニ於テ日本ハ警察、徵稅、教育及公共事業ヲ管理シタリ。又日本ハ租借地ニ關東軍ヲ置キ、鐵道地帶ニ鐵道守備隊ヲ駐屯セシメ、各地方ニ領事館警察官ヲ配ル等滿洲諸地方ニ武裝部隊ヲ存置シ來レリ。

滿洲ニ於ケル日支兩國間ノ政治、經濟及法律關係ノ特殊性 上記滿洲ニ於テ日本ノ有スル數多ノ權利ノ概說ニ依リ滿洲ニ於ケル日支兩國間ノ政治、經濟及法律關係ノ特殊性ハ明瞭ニシテ、此ノ如キ事態ハ恐ラク世界ノ何處ニモ其ノ例ナカルベク、又隣邦人ノ領土內ニ此ノ如キ廣汎ナル經濟上及行政上ノ特權ヲ有スル國ハ他ニ比類ヲ見ザルベシ。若シ此ノ如キ事態ニシテ双方ガ自由ニ希望又ハ受諾シ、且經濟的及政治的領域ニ於ケル緊密ナル協力ニ關スル熟策ノ表現及具體化ナリトセハ、不斷ノ紛爭ヲ釀スコトナク之ヲ持續シ得ベキモ、斯ル條件ヲ缺クニ於テハ右ハ軋轢及ビ衝突

ヲ惹起スルノミ。

二、滿洲ニ於ケル日支兩國間ノ根本的利害關係ノ衝突

滿洲ニ對スル支那ノ態度 支那人ハ滿洲ヲ以テ支那ノ構成部分ト見做シ同地方ヲ支那ノ他ノ部分ヨリ分離セシメントスル一切ノ企ニ對シテ憤激ス。從來東三省ハ常ニ支那及諸列國ガ共ニ支那ノ一部ト認ムル所ニシテ、同地方ニ於ケル支那政府ノ法律上ノ權限ニ付異義ノ稱ヘラレタルコトナシ。右ハ多數ノ日支間諸條約及協定並ニ他ノ諸國際條約ニ依リ明ナル所ニシテ又日本ヲ含ム諸國ノ外務省ヨリ正式ニ公表セラレタル多數「ステートメント」ニ繰返ヘサレ居ル所ナリ。

支那國防ノ第一線トシテノ滿洲 支那人ハ滿洲ヲ以テ其ノ「國防ノ第一線」ト考ヘ居レリ。支那ノ領土トシテ滿洲ハ之ト接壤スル日本及露西亞ノ領域ニ對スル一種ノ緩衝地帶ト見做サレ、日本及露西亞ノ勢力ガ之等ノ地域ヨリ支那ノ他ノ地方ニ侵入スルヲ防グ爲ノ前哨トセラレ居レリ。北京ヲ含ム長城以南ノ支那ヘ滿洲ヨリ侵入スルコトノ容易ナルハ歷史上ノ經驗ニ依リ支那人ノ熟知スル所ナルガ、右東北ヨリノ外國ノ侵略ヲ虞ルル念ハ鐵道ノ發達ニ依リ近年一層增大シ且前年ノ事件中一層激化セラレタリ。

滿洲ニ於ケル支那ノ經濟的利益 支那人ハ又經濟的理由ニヨルモ滿洲ノ彼等ノ爲ニ重要ナルヲ認ムルモノニシテ、數十年來彼等ハ滿洲ヲ「支那ノ穀倉」ト呼ビ更ニ近年ニ至リテハ之ヲ近隣諸省ノ支那農民及勞働者ノ季節的勤勞地ト認ムルニ至レリ。

支那ハ全體トシテ人口過剩ナリト謂ヒ得ベキヤハ疑問ナルモ、或地方又ハ或省例ヘバ山東省ノ如キガ住民ヲ他地方ニ移出スル要アル程度ニ人口過剩ナルコトハ此ノ問題ニ關スル權威者ノ一般ニ認ムル所ナリ。(附屬書第三號ノ特別研究參照) 從ツテ支那人ハ滿洲ヲ以テ現在及將來ニ於ケル支那ノ他地方ノ人口問題ヲ緩和シ得ル邊疆地方ト認メ居レリ。支那人ハ滿洲ノ經濟的開發ガ主トシテ日本人ノ力ニ依ルトノ主張ヲ否定シ、其論駁ノ根據トシテ特ニ一九二五年以降ニ於ケル支那人ノ植民事業、彼等ノ鐵道建設及其ノ他ノ事業ヲ擧ゲ居レリ。

滿洲ニ於ケル日本ノ利益、日露戰爭ヨリ生ゼル感情 滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ諸外國ノ夫レト其ノ性質及程度ニ於テ全ク異ルモノアリ。一九〇四—五年奉天及遼陽南滿洲鐵道沿線、鴨綠江、並ニ遼東半島等滿洲ノ野ニ於テ戰ハレタル日本ノ露西亞ニ對スル大戰爭ノ記憶ハ總テノ日本人ノ腦裡ニ深ク印セラルル所ナリ。日本人ニトリテハ對露戰爭ハ

露西亞ノ侵略ノ脅威ニ對スル自衛ノ爲生死ヲ賭シタル戰トシテ永久ニ記憶セラルベク此ノ一戰ニ十萬ノ將士ヲ失ヒ且二十億圓ノ國帑ヲ消費シタル事實ハ日本人ヲシテ此ノ犧牲ヲ決シテ無益ニ終ラシメザランコトヲ決心セシメタリ。

然レドモ滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ其ノ源泉ヲ日露戰役ヨリ十年以前ニ發ス。一八九四—五年ノ主トシテ朝鮮問題ニ關スル日清戰爭ハ大部分旅順及滿洲ノ野ニ於テ戰ハレタルガ、下關ニ於テ調印セラレタル媾和條約ニ依リ遼東半島ハ完全ニ日本ニ割讓セラレタリ。日本人ニトリテハ露西亞、佛蘭西及獨逸ガ此ノ獲得シタル領土ノ拋棄ヲ强制シタル事實ハ日本ガ戰勝ノ結果滿洲ノ此ノ部分ヲ獲得シ之ニ依リテ日本ハ同地方ニ對スル道德的權利ヲ得、其權利ハ今尙存續スルモノナリトノ確信ニ何等ノ變更ヲ及ボスモノニ非ズ。

滿洲ニ於ケル日本ノ戰略上ノ利益　滿洲ハ屢々日本ノ生命線ナリト稱セラル。滿洲ハ現在日本ノ領土タル朝鮮ニ境ヲ接ス。支那四億ノ民衆ガ一度統一セラレ强力トナリ且日本ニ敵意ヲ有シ滿洲及東部亞細亞ニ蟠踞スルノ日ヲ想像スルコトハ多數日本人ノ平靜ヲ攪亂スルモノナリ。然レドモ彼等ガ國家的生存ノ脅威及自衛ノ必要ヲ語ル時多クノ場合彼等ノ意中ニ存スルハ寧ロ露西亞ニシテ支那ニ非ズ。從ツテ滿洲ニ於ケル日本ノ利益中根本的ナルモノハ同地方ノ**戰略的重要性ナリ。**

日本人中ニハ日本ハ蘇聯邦ヨリノ攻擊ノ場合ニ備フル爲メ滿洲ニ於テ堅キ防禦線ヲ築ク要アリト考ヘ居ルモノアリ。彼等ハ朝鮮人ノ不平分子ガ隣接セル沿海州ノ露西亞共產主義者ト聯携シテ將來北方ヨリノ軍事的侵入ヲ誘致シ、又ハ之ト協力スルコトアルベキヲ常ニ惧レ居レリ。彼等ハ滿洲ヲ以テ蘇聯邦及支那ノ他ノ部分ニ對スル緩衝地帶ト認メ居レリ。殊ニ日本ノ陸軍軍人ハ露西亞及支那トノ協定ニ依リ南滿洲鐵道沿線ニ數千ノ守備兵ヲ駐屯セシムル權利ヲ得タルハ日露戰爭ニ於ケル日本ノ莫大ナル犧牲ニ對スル代償トシテハ尠キニ失シ、同方面ヨリノ攻擊ノ可能性ニ對スル安全保障トシテハ貧弱ニ過グルト考ヘ居レリ。

滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」　愛國心、國防ノ絕對的必要及特殊ナル條約上ノ權利等ノ總テガ合體シテ滿洲ニ於ケル「特殊地位」ノ要求ヲ形成シ居レリ。乍併日本人ノ懷ク特殊地位ノ觀念ハ支那又ハ他ノ諸國トノ間ノ條約及協定中ニ法律的ニ規定セラレ居ル所ニ局限セラレ居ルモノニ非ズ。日露戰役ノ遺產タル感情及歷史的聯想並ニ最近四半世紀間ニ於ケル在滿洲日本企業ノ成果ニ對スル誇ハ、特殊地位」ノ要求ノ現實ナル—捕捉シ難キモ—一部分ヲ爲スモノナリ。從テ特殊地位ナル語ヲ日本政府ガ外交用語トシテ使

用スル時其ノ意味ハ不明瞭ニシテ、他ノ諸國ガ國際文書ニヨリ之ヲ誌ムルコトハ不可能ニ非ズトスルモ困難ナルコト蓋シ當然ナ認リ。

日本政府ハ日露戰爭以來隨時露西亞、佛蘭西、英國及米國ヨリ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」、「特殊勢力及利益」又ハ「最高ノ利益」ノ承認ヲ得ンコトヲ試ミタルガ、其ノ努力ハ單ニ部分的ニ成功シタルニ止リ斯ル要求ガ稍々明確ニ認メラレタル場合ニモ右承認ヲ含ム國際協定又ハ了解ノ多クハ時ノ經過ト共ニ正式ナル廢棄又ハ其他ノ方法ニ依リ消滅スルニ至レリ。舊露西亞帝政政府ト結バレタル一九〇七年、一九一〇年、一九一二年及一九一六年ノ日露祕密協約、日英同盟協約、一九一七年ノ石井、ランシング協定ハ其例ナリ。

華盛頓會議ニ於ケル一九二二年二月六日ノ九國條約ノ調印國ハ（米、白、英、支、佛、伊、日、蘭及葡ノ九ケ國）「支那ニ於テ一切ノ國民ノ商業及工業ニ對スル機會均等」ヲ維持スル爲支那ノ「主權、獨立並ニ其ノ領土的及行政的保全ヲ尊重スルコト」ヲ約定スルコトニ依リ、支那ニ於テ「特別ノ權利又ハ特權ヲ求ムル爲」支那ニ於ケル情勢ヲ利用スルコトヲ差控フルコトニ依リ、又「支那ガ自ラ有力且安固ナル政府ヲ確立維持スル爲最完全ニシテ且最障礙ナキ機會」ヲ之ニ供與スルコトニ依リ、滿洲ヲ含ム支那ノ各地方ニ於ケル調印國ノ「特殊地位」又ハ「特別ノ權利及利益」ノ要求ヲ廣キ範圍ニ於テ非トセリ。

然レドモ九國條約ノ規定及廢棄其ノ他ノ方法ニ依ル前記諸協定ノ失效ハ日本人ノ態度ニ何等ノ變更ヲ生ゼシメザリキ。石井子爵ガ其ノ最近ノ「メモアール」（外交余錄）中ニ左記ノ如ク述べ居ルハ良ク同國人一般ノ意見ヲ表明シ居ルモノト謂フベシ。

『石井「ランシング」協定ハ廢棄セラレタリト雖モ日本ノ特殊利益ハ何等變化ヲ受クルコトナク存在ス、支那ニ於テ日本ノ有スル特殊利益ハ國際協定ニ依リテ生ジタルモノニ非ズ、又廢止ノ目的物ト爲リ得ルモノニモ非ズ』

滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」ノ要求ハ支那ノ主權及政策ニ牴觸ス　上記滿洲ニ關スル日本ノ要求ハ支那ノ主權ニ牴觸シ又國民政府ノ翹望ト兩立シ得ザルモノナリ、蓋シ同政府ハ支那領土ヲ通ジテ今尙諸外國ノ有スル特別ノ權利及ビ特權ヲ減殺シ、且將來之等ノ特別ノ權利及特權ノ擴張ヲ阻止センコトヲ企圖スルモノナルヲ以テナリ。日支兩國ガ夫々滿洲ニ於テ行フ政策ヲ考察セバ此ノ衝突ガ益々擴大スベキコト自ラ明カトナルベシ。

滿洲ニ對スル日本ノ一般的政策　一九三一年九月ノ事件ニ至ル迄一九〇五年以來日本ノ諸內閣ハ滿洲ニ於テ同一ノ

一般的目的ヲ有シタルモノノ如クナルモ其ノ目的ヲ成就スル爲最モ適當ナリトスル方法ニ關シテ見解ヲ異ニシ、又治安維持ニ對シテ日本ノ取ルベキ責任ノ範圍ニ付稍意見ノ相違アリタリ。

滿洲ニ於ケル彼等ノ一般的目的ハ日本ノ既存利益ヲ維持發展シ日本ノ企業ノ擴張ヲ助成シ且日本人ノ生命財産ノ充分ナル保護ヲ得ルニ在リタリ。以上ノ目的ヲ實現スル爲ニ採ラレタル諸政策ノ總テニ共通スル一ノ主要ナル特徴ハ滿洲及東部內蒙古ヲ支那ノ他ノ部分ト明瞭ニ區別セントスル傾向ニシテ、右ハ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊地位」ニ關スル日本人ノ觀念ヨリ生ズル自然ノ結果ナリ。日本ノ諸內閣ノ主張シタル各特別ナル政策、例ヘバ幣原男爵ノ所謂「友好政策」ト故田中男爵ノ所謂「積極政策」トノ間ニ如何ナル相違アリタリトスルモ前記ノ特徵ハ常ニ共通ノモノナリキ。「友好政策」ハ華盛頓會議ノ頃ヨリ始マリ一九二七年四月迄繼續セラレ、「積極政策」之ニ代リ一九二九年七月ニ至リ更ニ「友好政策」ニ戻リ一九三一年九月迄外務省ノ正式ノ政策トシテ繼續セラレタリ。右兩政策ノ原動力タル精神ニハ著シキ相違アリ。「友好政策」ハ幣原男爵ノ言ヲ以テセバ「好意ト善隣ノ誼ヲ基礎トシ」「積極政策」ハ武力ヲ基礎トスルモノトナリ。然レトモ滿洲ニ於テ採ルベキ具體的方策ニ關スル兩政策ノ相違ハ大部分滿洲ニ於ケル治安維持及日本ノ利益保護ノ爲爲スベキ行動ノ程度ノ如何ニ在リタリ。

田中內閣ノ「積極政策」ハ滿洲ヲ支那ノ他ノ部分ヨリ區別スルコトヲ强調シ、其ノ積極的性質ハ「若シ動亂滿洲及蒙古ニ波及シ其ノ結果トシテ治安亂レ、同地方ニ於ケル日本ノ特殊地位及權利利益ノ脅威ヲ受クル場合、其ノ脅威ノ如何ナル方面ヨリ來ルヲ問ハズ日本ハ敢然其ノ權益ヲ擁護スベキ」旨ノ腹藏ナキ宣言ニ依ツテ明ニセラレタリ。田中政策ハ其以前ノ諸政策ガ其ノ目的ヲ滿洲ニ於ケル日本ノ利益ノ擁護ニ限定セルニ反シ滿洲ニ於ケル治安維持ノ責ヲ日本國ガ採ルベキ旨ヲ明ニシタリ。

日本政府ハ滿洲ニ於テ有スル特殊ナル權益ヲ維持發展セシムル爲滿洲ニ於テハ概シテ支那ノ他ノ地方ニ於ケルヨリ一層强硬ナル政策ヲ行ヘリ。或內閣ハ武力ニ依ル威嚇ヲ伴フ干涉政策ニ傾ケリ。右ハ一九一五年支那ニ對スル二十一箇條要求ノ際ニ於テ殊ニ然ルモノアリシガ、二十一箇條要求竝ニ他ノ干涉及武力政策ノ得失ニ關シテハ日本國內ニ常ニ著シキ意見ノ相違アリタリ。

華盛頓會議ノ滿洲ニ於ケル日本及ビ政策ニ對スル影響

華盛頓會議ハ支那ノ他ノ地方ノ事態ニ著シキ影響ヲ及ボシタルモ滿洲ニ於テハ實際殆ンド變化ノ見ルベキモノナカリ

キ。一九二二年二月六日ノ九國條約ハ支那ノ領土保全及門戸開放ニ關スル規定アリ又同條約ノ效力ハ條文上滿洲ニモ及ブベキモノナルニ拘ラズ、滿洲ニ付テハ日本ノ既存利益ノ性質及範圍ニ鑑ミ單ニ其制限的適用アリタルノミ。前述ノ如ク日本ハ一九一五年ノ條約ニ依リ許與セラレタル借款及顧問ニ關スル特別ノ權利ヲ正式ニ抛棄シタルモ、九國條約ハ滿洲ニ於ケル既存利益ニ基ク日本ノ要求ヲ實質上何等縮少スルコトナカリキ。

日本國ノ張作霖トノ關係 華盛頓會議ヨリ一九二八年ノ張作霖將軍ノ死ニ至ル期間、滿洲ニ於ケル日本ノ政策ハ東三省ノ事實上ノ支配者トノ關係ニ關スルモノナリキ。日本ハ彼ニ或ル程度ノ支持ヲ與ヘタルガ、特ニ前章記載ノ郭松齡謀反ノ際ニ於テ然リトス。張作霖將軍ハ日本ノ要求中ノ多數ニ反對シタリト雖モ、右支持ノ報償トシテ、日本ノ希望ニ對シ適度ノ承認ヲ與フルコト必要ナリト感ジタリ。右希望ハ優越セル兵力ニ依リ何時ニテモ强要セラレ得ルモノナリヲ以テナリ。張作霖ハ又時ニ北方ニ於ケル露西亞ノ敵對ニ對シ、日本ヨリ支持ノ得ラレンコトヲ希望セリ。

概言スレバ、日本ノ張作霖將軍トノ關係ハ日本ノ見地ヨリシテ相當ニ滿足ナルモノナリキ。

尤モ彼ノ晩年ニハ、彼ガ日本側主張ノ約束及協定ノ一部ヲ履行セザリシ結果右關係ハ次第ニ不穩ヲ加フルニ至レリ。一九二八年六月ニ於ケル彼ノ敗北及奉天ヘノ最後ノ退却前ノ數箇月ニ於テハ、日本側ノ感情ガ張作霖ニ反對ニ激變セムトスル徴サヘ顯然タルニ至レリ。

日本國ノ滿洲ニ於ケル平和及秩序維持ノ主張 一九二八年春、支那國民軍ガ張作霖軍ヲ驅逐セシガ爲、北京ニ進軍中ナリシ時、田中男爵ヲ首相トセル日本國政府ハ、日本國ノ滿洲ニ於ケル「特殊地位」ニ鑑ミ右地方ニ於ケル平和及秩序ヲ維持スベキ旨ノ聲明ヲ發セリ。國民軍ガ内亂ヲ長城以北ニ及ボサントスル惧アルニ至ルヤ日本國政府ハ五月二十八日指導者タル支那將軍ニ左ノ通告ヲ送レリ。

「滿洲ノ治安維持ハ、日本國政府ノ最モ重視スル所ニシテ苟クモ同地方ノ治安ヲ紊シ、若クハ之ヲ紊スノ原因ヲ爲スガ如キ事態ノ發生ハ、日本國政府ノ極力阻止セムトスル所ナルガ、既ニ戰亂京津地方ニ進展シ其ノ禍亂、滿洲ニ及バントスル場合ニハ日本國ハ滿洲治安維持ノ爲適當ニシテ且有效ナル措置ヲ執ラザルヲ得ザルコトアルベシ。」

右ト同時ニ、田中男爵ハ日本政府ハ「敗退軍又ハ其ノ追擊軍」ガ滿洲ニ入ルヲ防止スベシトノ一層確然タル「ステートメント」ヲ發セリ。

右遠大ナル政策ノ宣明ハ、北京及南京ノ兩政府ヨリノ抗議ヲ招致シタルガ、南京政府ノ「ノート」ハ日本ノ提議スルガ如キ措置ハ、唯ニ「支那國內事項ノ干涉タルニ止マラズ、又領土主權相互尊重ノ原則ノ甚シキ侵犯」ナリト陳述セリ。

日本ニ於テモ、田中內閣ノ右「積極政策」ハ一黨ヨリ强キ支持ヲ受ケタル一方、他ノ一黨特ニ幣原派ニ依リ全滿洲ニ於ケル治安維持ハ日本ノ責任ニ非ズトノ理由ヲ以テ、非議セラレタリ。

日本國及張學良間ノ緊張セル關係 一九二八年亡父ノ後ヲ承ケタル張學良ト日本トノ關係ハ、當初ヨリ次足ニ緊張ヲ加フル所アリキ。日本ハ、滿洲ガ南京ニ新ニ樹立セラレタル國民政府ヨリ分立シ居ラムコトヲ希望シタルガ、張學良將軍ハ南京政府ノ政權ヲ承認センコトニ傾キ居タリ。日本官憲ヨリ張學良ニ與ヘラレタル中央政府ニ忠順ヲ誓フベカラストノ緊急ノ忠言ニ付テハ、既ニ記述スル所アリキ。然レ共奉天政府ガ一九二八年十二月奉天ニ於ケル政府諸官所ニ國民黨旗ヲ揭揚シタルトキ日本政府ハ干涉ヲ試ムルコトナカリキ。

日本ト張學良將軍トノ關係ハ、緊張ヲ繼續シ一九三一年九月直前ノ數箇月ニ於テハ險惡ナル軋轢ノ進展ヲ見タリ。

三、滿洲ニ於ケル日支鐵道問題

滿洲ノ國際的政策ハ主トシテ鐵道政策 四分ノ一世紀間滿洲ニ於ケル國際政戰ハ、主トシテ鐵道政戰ナリキ。純粹ナル經濟上及鐵道運輸上ノ性質ニ付テノ考量ハ國策ノ命ガルカ儘ニ無視セラレ滿洲諸鐵道ハ、同地方ノ經濟的發展ノ爲、其ノ全能力ヲ發揮シタリト云フコト能ハザルノ結果ヲ來セリ。吾人ノ滿洲鐵道問題研究ガ示ス所ニ依レバ滿洲ニ於テハ包括的ニシテ相互ニ有益ナル鐵道計畫ヲ達成セントスル協力ハ支那及日本ノ鐵道建設當事者及官憲間ニハ殆ンド皆無ナリキ。鐵道ノ擴張ガ主トシテ經濟的考量ニ依リ決定セラレタル西部加奈陀及「アルゼンチン」ノ如キ地方ニ於ケル鐵道ノ發達ニ反シ滿洲ニ於ケル鐵道ノ發達ノ歷史ハ主トシテ日支兩國間ノ拮抗問題ニ終始セリ。從來滿洲ニ建設セラレタル重要ナル鐵道ニシテ支那及日本又ハ他ノ利害關係ヲ有スル外國間ノ公文交換ヲ伴ハザルモノナシ。

南滿洲鐵道ハ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊使命」ヲ遂行セリ 滿洲ニ於ケル鐵道ノ建設ハ、露西亞ガ投資及支配下ニ在リタル東支鐵道ヲ以テ始リ、日露戰爭後南部ニ於テハ日本ノ管理スル組織卽チ南滿洲鐵道之ニ代リ斯クシテ支那日本間ノ將來スル對抗ヲ必然ナラシムルニ至レリ。南滿洲鐵道會社ハ名義上ノ營利會社ナリト雖、事實上ニ於テハ日本政府

ノ企業ナリ。其ノ職能ハ、單ナル鐵道ノ經營ノミニ非ズシテ政治的行政ノ特殊權能ヲモ包含ス。會社創立ノ當時ヨリ日本人ハ同鐵道ヲ純ナル經濟的企業トシテ見タル事ナシ。同社ノ初代社長タリシ故後藤子爵ハ、南滿洲鐵道ハ滿洲ニ於ケル日本ノ「特殊使命」ヲ果サザルベカラズトノ基礎的原則ヲ定メタリ。南滿洲鐵道網ハ發達シテ、能率高キ良ク管理セラレタル鐵道企業ト成リ、滿洲ノ經濟的發達ニ大ニ貢獻スルト共ニ、支那人ニ對シ學校、研究所、圖書館及農事試驗所ノ如キ鐵道以外ノ諸施設ニ付キ模範ヲ示ス所アリキ。然レ共會社ハ其ノ政治的性質、日本ニ於ケル政黨政治トノ連繫及何等相應ゼル財政的利得ヲ期待シ得ザル或種ノ大ナル支出ノ爲ニ生ズル制限及積極的障碍ヲ免レザリキ。右鐵道會社ノ組織以來、其ノ政策ハ其ノ鐵道線ニ連絡セラルルガ如キ支那鐵道ノ建設ニ對シテノミ資本ヲ供給シ、斯クシテ直通運輸協定ノ手段ニ依リ、貨物ノ大部分ヲ租借地内大連ニ於ケル海運輸出ノ爲南滿洲鐵道ニ轉向セシメントスルニアリキ。

此ノ種鐵道ノ投資ニ巨額ノ支出アリタルガ、其ノ建設ハ或ル場合ニ於テハ、純粹ノ經濟的根據ニ照シ妥當ナリト爲シ得ベキヤハ疑問ナリ。殊ニ與ヘラレタル大ナル資本ノ前貸及包含セラレタル貸付條件ニ鑑ミ然リトス。

支那國土ノ南滿洲鐵道ノ如キ外國管理ノ施設存在スルコトハ、自然支那官憲ニ依リ嫌惡セラレ、條約及協定ニ依ル權利及特權ニ關スル問題ハ、日露戰爭以來常ニ發生セリ。特ニ一九二四年滿洲ニ於ケル支那官憲ガ、鐵道發達ノ重要ナルヲ認ムルニ至リ、日本ノ資本ヨリ獨立セル自身ノ鐵道ヲ發達セシメンコトヲ企圖シタル後ニ於テハ右問題ハ一層危機ヲ孕ムニ至レリ。本問題ニハ經濟的及軍事的考慮ノ兩者包含セラレタリ。例ヘバ打虎山—通遼線ハ、新地域ヲ開發シ北京—奉天鐵道ノ收入ヲ增加センガ爲計畫セラレタル次第ナルガ、一方一九二五年十二月ノ郭松齡謀反ハ、獨立ニ所有セラレ運用セラルル支那鐵道ノ有スルコトアルベキ軍事的及政治的價値ヲ示ス所アリキ。

滿洲ノ南京ニ對スル忠順宣誓ニ先ツ支那ノ自國鐵道ヲ建設セントスル努力　日本ノ獨占ヲ覆シ其ノ將來ノ發達ヲ妨害セントスル支那ノ試ミハ、南京政府ノ政治的勢力ガ滿洲ニ及ブノ時期以前ヨリ存セシ所ニシテ例ヘバ打虎山—通遼奉天—海龍城及呼蘭—海倫ノ諸鐵道ハ、張作霖將軍ノ時代ニ建設セラレタルモノナリ。中央政府及國民黨ノ助成ニ依リ蔓延セル「利權回復」運動ニ依リ强硬ヲ加ヘタル一九二八年政權獲得後ニ於ケル張學良ノ政策ハ、恰モ當時南滿洲鐵道ヲ中心トシ集中セラレタル日本ノ獨占且ツ膨脹的ノ政

策ト衝突ヲ來セリ。

併行線ニ關スル紛爭 一九三一年九月十八日及其ノ以後滿洲ニ於テ兵力ニ訴ヘタルコトヲ正當ナリトスル日本側ノ主張ニ於テ、日本ハ其ノ「條約上ノ權利」ノ侵害セラレタルコトヲ擧ゲ且一九〇五年十一月—十二月北京ニ於テ開催セラレタル日支會議中支那國政府ノ爲セル左記趣旨ノ約束ヲ支那ガ履行セザリシコトヲ高調セリ。

「清國政府ハ南滿洲鐵道ノ利益ヲ保護スルノ目的ヲ以テ該鐵道ヲ未ダ回收セザル以前ニ於テハ該鐵道附近ニ之ト併行スル幹線又ハ該鐵道ノ利益ヲ害スベキ枝線ヲ建設セザルコトヲ承諾ス。」

滿洲ニ於ケル所謂併行線問題ニ關スル紛爭ハ久シキニ亙ル重要ナルモノナリ。同問題ハ千九百七年—千九百八年日本國政府ガ右權利ヲ主張シ、支那ガ英國商會トノ契約ノ下ニ新民屯—法庫門鐵道ヲ建設セントスルヲ防止シタルトキ始メテ發生セリ。一九二四年滿洲ニ於ケル支那人ガ更新ノ意氣ヲ以テ日本ノ財政的關係ヨリ獨立セル自身ノ鐵道ヲ發達セシメンコトヲ企圖シテヨリ以來日本政府ハ支那側ノ打虎山—通遼及吉林—海龍城鐵道建設ニ抗議シタリ。尤モ右兩鐵道ハ日本側ノ拘議ニモ拘ハラズ完成開通セリ。

「條約上ノ權利」又ハ「祕密會議錄」ノ存在ニ關スル問題 調査委員ノ極東到着以前ニアリテハ日本ノ主張スルガ如キ約束ガ現ニ存在スルヤニ付大ニ疑問アリキ。右紛爭ハ久シキニ亙ル重要ナルモノニ鑑ミ、委員ハ緊要ナル事實ニ關スル情報ヲ得ル爲特別ノ苦心ヲ拂ヘリ。東京、南京及北京ニ於テ一切ノ關係文書ヲ審査セリ。而シテ今ヤ吾人ハ彼ノ所謂「併行線」ニ關スル一九〇五年十一月—十二月ノ北京會議ニ於ケル支那全權ノ約束ナルモノハ何レノ正式條約中ニモ包含セラレアラザルコト、彼ノ問題ノ約束ハ一九〇五年十二月四日ノ北京會議ノ第十一日目ノ會議錄中ニ存スルコトヲ陳述シ得。吾人ハ右北京會議錄中ニ記載アル外彼ノ約束ヲ包含スル文書ハ他ニ存セザルコトニ付、日本國及支那國參與員ヨリノ同意ヲ得タリ。

論點タル眞ノ問題 故ニ論點タル眞ノ問題ハ、支那側ニ依リ滿洲ニ於テ或ル鐵道ガ右ノ如キ約束ニ違反シテ建設セラレタルコトヲ日本ガ主張スルニ足ル「條約上ノ權利」アリヤ否ヤニハ非ズシテ一九〇五年ノ北京會議錄中ノ前記記載辭句ガ「プロトコール」ト稱セラルルト否トヲ問ハズ正式約定ノ效力ヲ有シ、其ノ適用ニ於テ期間又ハ事情ノ制限ナク、支那側ヲ拘束スルノ言質ナリヤ否ヤノ點ニアリ。

北京會議錄中ノ右記載辭句ガ、國際法上ノ見地ヨリシテ拘束力アル約定ナリヤ、若シ然リトスレバ、右ニ與ヘラル

ベキ妥當ナル解釋ハ唯一ナリヤノ問題ノ決定ハ當ニ公正ナル司法的裁判所ニ依リ判定セラルベキ事項ナリキ。

會議錄中ノ右記載辭句ノ支那側及日本側ノ正式譯文ニ依レバ「併行線」ニ關スル右問題ノ辭句ガ支那側全權ノ意圖ノ宣言又ハ聲明ナルコトニ付テハ疑ノ餘地ナシ。

右ノ如キ意圖ノ聲明ヲ爲シタルコトニ付テハ支那側ニ於テモ之ヲ否認セザリキ。然レドモ論爭ヲ通ジ表明セラレタル意圖ノ性質ニ付、兩國間ニ意見ノ相違アリキ。日本ハ右使用セラレタル字句ハ南滿洲鐵道會社ガ同鐵道ト競爭線ナリト認ムル如何ナル鐵道ヲモ、支那ガ之ヲ建設シ又ハ建設スルコトヲ許可スルコトヲ禁止スルモノナリト主張セリ。他方支那側ガ論爭ノ辭句ニ包含セラルル唯一ノ意思表示ハ南滿洲鐵道ノ商業上ノ效用及價値ヲ不當ニ侵害スルノ故意ノ目的ヲ以テ鐵道ヲ建設スルコトナシトノ意圖ノ陳述ナリキト主張ス。新民屯—法庫門鐵道計畫ニ關スル一九〇七年ノ公文ノ交換ニ際シ慶親王ハ支那政府ヲ代表シテ日本公使・林男爵宛一九〇七年四月七日附ノ通告中北京會議ニ於テ日本全權ハ南滿洲鐵道ヨリノ特定哩數ニ依リ「併行線」ナル語ノ定義ヲ定ムルコトニハ同意ヲ拒否シタルモ「日本ハ滿洲ノ開發ノ爲支那國ノ將來執ルコトアルヘキ措置ヲ妨クルモノニ非ス」ト宣言シタルコトヲ述ベタリ。故ニ支那政府ハ日本ガ南滿洲ニ於テ鐵道建設ヲ獨占スル權利アリトスル正當ナル主張權ヲ有シタリトスルコトニ付テハ常ニ之ヲ否認シ來レリト雖モ右期間中事實上南滿洲鐵道ノ利益ヲ明白且不當ニ害スル鐵道ヲ建設スベカラザルノ義務アルコトハ之ヲ承認シタルモノノ如シ。

支那側ニ於テ何ガ併行線ナリヤニ關スル定義ヲ希望シタルモ、右定義ハ未ダ定メラレタルコトナシ。日本政府ガ一九〇六年—一九〇八年新民屯—法庫門鐵道ノ建設ニ反對シタルトキ日本ハ「併行線」トハ南滿洲鐵道ヨリ略三十五哩以內ニ在ル鐵道ナリト思考シタリトノ印象ヲ生ゼシメタルガ一九二六年日本ハ計畫鐵道ト南滿洲鐵道トノ間ノ距離ハ平均七十哩以內ナルコトヲ指摘シ「競爭併行線」トシテ打虎山—通遼鐵道ノ建設ニ抗議シタリ。充分滿足ナル定義ヲ作成スルコトハ困難ナルベシ。

斯クノ如ク廣ク且非專門的ニ表示セラレタル字句ノ解釋ニ於ケル困難　鐵道運用ノ見地ヨリ言ヘバ「併行線」トハ「競爭線」ヲ云フモノニシテ卽チ他ノ鐵道ヨリ其ノ吸集シ得ベカリシ貨物ノ一部ヲ奪フ線ナリト云フコトヲ得ベシ。競爭的運輸ハ、地方的運輸及直通運輸ノ兩者ヲ包含ス。而シテ特ニ後者ヲ考慮スルトキハ、「併行線」ノ建設ニ反對スル規定ハ如何ニ甚ダ廣キ解釋トナリ得ベキヤヲ知ルコト困

難ナラズ。尙又何ガ「幹線」又ハ「枝線」ナリヤニ付テモ支那及日本間ニ何等ノ意見ノ一致ナシ。此等ノ語ハ、鐵道運用ノ見地ヨリスレバ、變化スルモノナリ。打虎山ヨリ北方ニ延長スル北京―奉天鐵道ハ、當初其ノ鐵道當局ニ依リ枝線ト見做サレタリ。然ルニ同線ガ打虎山ヨリ通遼迄完成セラレタル後ニ於テハ、之ヲ幹線ト見ルコトヲ得。

併行線ニ關スル約束ノ解釋ガ、支那及日本間ノ激シキ論爭ニ至ラシメタルハ素ヨリ自然ノ數ナリキ。支那側ハ南滿洲ニ於テ自己ノ鐵道ヲ建設セムコトヲ企テタルガ、殆ンド總テノ場合ニ於テ、日本ヨリノ抗議ヲ惹起セリ。

客年九月ノ事件發生前日支間ノ緊張ヲ加ヘシメタル鐵道問題ノ第二類ハ、滿洲ニ於ケル支那國政府ノ諸鐵道建設ノ爲、日本側ガ資金ヲ貸附ケタル契約ヨリ生ゼルモノナリ。延滯金及利子ヲモ含ミ、一億五千萬圓ノ現在價格ニ達スル日本資本ハ、左記支那鐵道卽チ吉林―長春、吉林―敦化、四平街―洮南及洮南―昂々溪鐵道並ニ或ル狹軌鐵道ノ建設ニ支出セラレタリ。

日本側ハ支那側ガ右債務ノ支拂ヲ爲サントセズ、又債務ニ對シ適當ナル準備ヲ爲サントセズ、尙又日本人鐵道顧問ノ任命ニ關スルガ如キ契約中ノ諸條項ヲ實行セントセザルコトヲ訴ヘタリ。日本側ニ於テハ日本側財團ガ吉林―會寧鐵道ノ建設ニ參與スルコトヲ許サルベシトノ支那政府ニ依リ爲サレタル約束ヲ、支那側ガ履行センコトヲ繰返シ要求シタリ。右計畫線ハ、吉林―敦化鐵道ヲ朝鮮國境迄延長シ、日本ノ爲其ノ海港ヨリ滿洲ノ中心ニ至ル新ナル海陸路ノ利用ヲ可能ナラシメ、他ノ鐵道ト連結シテ內地トノ交通ヲ短縮スベシ。

支那側ノ辯疏　支那側ハ債務仕拂不履行ヲ辯疏シ、右ハ正常ナル貸借行爲ニ非ザルコトヲ指摘セリ。支那側ハ貸附ハ主トシテ南滿洲ニ於ケル鐵道建設ヲ獨占センガ爲、南滿洲鐵道ニ依リ爲サレタルコト、其ノ目的ハ元來軍事的及政治的ナルコト及何ハ兎モアレ新線ハ甚シク過剩ニ資本ヲ投下セラレタルモノナルヲ以テ少クトモ當分ハ建設費及債務ノ償還ニ必要ナル金錢ヲ收得スルコトノ財政上不可能ナルコトヲ主張シタリ。支那側ハ債務不履行ノ何レニ付テモ、公正ナル審査ヲ爲スニ於テハ、其ノ行爲ノ正當ナルコトヲ證スベシト抗辯セリ。

吉會鐵道ニ付テハ日本側ノ主張セル協定ノ道德的又ハ法的效力ヲモ否認セリ。

南滿洲鐵道株式會社ハ支線網設定ヲ要望セリ　借款論爭ヲ自然惹起セシムル此等鐵道協定ニ關聯シ存在セル一定ノ事態アリキ。南滿洲鐵道ハ事實上何等支線ヲ有セズ。而シ

テ貨物及旅客運輸ヲ增加スル爲榮養線網ヲ發達セシムルコトヲ欲セリ。仍テ會社ハ假令借款ガ近キ將來ニ於テ償還セラレ得ルノ望少ナキ場合ト雖モ新線ノ建設ニ出資スルコトヲ辭セザリキ。又初期ノ借款ガ行惱メル場合ニモヨリ以上ノ出資ヲ繼續スルコトヲ辭セザリシナリ。

斯ル狀態ニ於テ、而シテ新規ニ建設セラレタル支那線ガ南滿洲鐵道網ノ榮養線タルノ役目ヲナシ且或程度迄右南滿洲鐵道ノ勢力下ニ運用セラレタル限リ、南滿洲鐵道ハ借款ノ償還ヲ强制スル爲何等ノ特別ノ努力ヲ爲サザリシモノノ如ク、支那線ハ常ニ增大スル借款義務ヲ負ヒテ運用セラレタリ。然レドモ此等鐵道線ノ或ルモノガ新規ノ支那鐵道網ニ連結セラレ且一九三〇年乃至一九三一年ニ南滿洲鐵道ト激烈ナル競爭ヲ起スニ及ンデ借款ノ不償還ハ直ニ苦情ノ目的トナリタリ。

西原借款 此等借款協定ノ或ル場合ニ於ケル他ノ紛議ヲ生ジ易キ要素ハ其ノ政治的性質ナリ。吉長鐵道ガ南滿洲鐵道會社ノ支配下ニ置カレ、同線未濟ノ負債ガ一九四七年ニ滿期トナル長期借款ニ借換ヘラレタルハ所謂「二十一箇條要求」ノ結果ナリ。所謂「滿蒙四鐵道協定」ノ結果トシテ一九一八年ニ出資セラレタル前渡金二千萬圓ハ其ノ使用ノ目的ニ付何等ノ制限ナク「安福派」軍閥政府ニ對シ爲サレタル所謂「西原借款」ノ一ナリ。吉會鐵道建設ヲ目的トスル一九一八年ノ借款豫備契約ニ關聯シテ安福派ニ千萬圓ヲ前渡セルモ西原借款ノ結果ナリ。支那國民ノ感情ハ西原借款ニ關シ其ノ交涉以來激發セルニモ拘ラズ支那政府ハ右借款ヲ拒絕セザリキ。斯カル狀態ニ於テ支那國民ハ借款契約ノ條件ヲ履行スベキ道德的義務ヲ殆ンド感ゼザリキ。

吉會鐵道計畫 日支關係ニ於テ特ニ重要ナルハ吉會鐵道計畫ニ關スル問題ナリ。最初ノ問題ハ一九二八年建設完成セル吉林ヨリ敦化ニ至ル線ノ一部ニ關聯ス。爾來日本側ハ支那側ガ建設ヲ目的トスル日本前渡金ヲ鐵道收益ニ依リ保障セラルル正規ノ借款ニ借換セザルヲ理由トシ不平ヲナラシ又支那側ガ同線ノ爲日本人會計吏ノ任命方ヲ拒絕シ契約ニ違反シタル旨ヲ主張セリ。

一方支那側ハ建設費ガ日本人技師ノ見積高ヨリ遙ニ大ナルノミナラズ憑證提出セラレタル金額ヲモ超ユルコト大ナル旨ヲ主張シ、建設費ノ決濟セラルル迄正式ニ同線ヲ引受クルコトヲ拒絕シ且右決濟ニ至ル迄日本人會計吏ヲ任命スベキ何等ノ義務ヲモ負ハザル旨ヲ抗議セリ。

何等ノ主義又ハ政策ノ問題ヲ包含セザル斯ル特定ノ技術的問題ハ明ニ仲裁又ハ司法的解決ニ付スルヲ適當トスルモ本問題ハ未解決ノ儘殘サレ日支人相互ノ憤怨ヲ助長セシメ

タリ。

敦會線計畫　一層重大且複雜ナルハ敦化ヨリ會寧ニ至ル鐵道ノ建設ニ關スル問題ナリキ。同線ハ長春ヨリ朝鮮國境ニ至ル鐵道ヲ完成スベク右國境ニ於テ附近ノ朝鮮港ニ通ズル日本鐵道ト連絡スベシ。中部滿洲ニ直接開通シ且木材及鑛物資源ノ豐富ナル地方ヲ開拓スベキ本線ハ經濟的價値アルト共ニ日本ニトリ大ナル戰略的重要性ヲ有スベシ。

日本側ハ本線ハ必ズ建設セラルベク且右資金供給ニ與カラザルベカラザル旨ヲ固執シ又支那側ニ於テ既ニ右ノ爲ノ條約上ノ保障ヲ與ヘタル旨ヲ主張セリ。又日本側ハ支那政府ガ一九〇九年九月四日ノ間島協定ニ於テ「日本政府ト商議ノ上」同線ヲ建設スベキコトヲ約セル旨指摘セルガ右約束ハ滿洲ノ間島地方ニ對スル朝鮮從來ノ要求ヲ日本ガ拋棄スル代償トシテ與ヘラレタルモノナリ。後年一九一八年ニ於テ支那政府及日本諸銀行ハ本線建設ノ爲ノ借款ニ對スル豫備的協定ニ署名シ右協定ニ依リ銀行側ハ支那政府ニ千萬圓ノ金額ヲ前渡セルガ右ハ支那側ヨリ見レバ協定ノ效力ヲ阻害スル事實タル西原借款ノ一ナリ。

然レドモ此等契約ハ孰レモ無條件ニ且特定期日前ニ支那側ヲシテ日本資本家ノ右鐵道建設參加ヲ認メシムベキ確定的借款契約協定ニハ非ザリキ。

一九二八年五月ノ契約　本線建設ノ爲ノ正式且確定的締約ハ一九二八年五月北京ニ於テ署名セラレタル旨主張セラレタルモ、其ノ效力ニ關シテハ幾多ノ疑義アリキ。斯ル契約ハ五月十三日乃至十五日ニ非常的狀態ノ下ニ張作霖元帥當時ノ北京政府ノ交通部代表者ニ依リ確カニ調印セラレタリ。然レドモ支那側ハ當時國民軍ニ依リ强硬ニ壓迫セラレ且將ニ北京ヲ撤退セントスル張元帥ハ若シ彼ニシテ本契約ヲ承認セザレバ奉天ヘノ退去ハ危殆ニ瀕スベシトノ日本側ノ威嚇ニ因ル「强迫ノ束縛」ノ下ニ、其ノ代表者ヲシテ署名セシムルコトヲ承諾セルモノナル旨ヲ主張ス。又張作霖元帥自身モ果シテ契約ニ署名セリヤ否ヤハ論爭ノ點ナリキ。張元帥ノ歿後奉天東北政治委員會及張學良元帥ハ共ニ本契約ハ形式ニ缺陷アリ且束縛ノ下ニ締結セラレ北京內閣又ハ東北政治委員會ニ依リ未ダ嘗テ批准セラレタルコトナシトノ理由ニ依リ契約ヲ承認スルコトヲ拒絕セリ。

敦會線建設ニ對スル支那側反對ノ理由ハ日本ノ軍事的及戰略的目的ヲ恐レ且國家ノ權利及利益ハ日本海ヨリ滿洲ヘノ日本ノ新ナル接近ニ依リ威嚇セラルベシト信シタルコトニ在リタリ。

此ノ特殊ノ鐵道問題ハ元來財政的又ハ商業的問題ニ非ズシテ日本及支那ノ國家的政策ノ衝突ヲ包含スルモノナリキ。

運輸連絡ニ關スル紛爭　又支那及日本線間ノ運輸連絡措置、運賃率問題及大連港ト營口(牛莊)ノ如キ支那諸港トノ間ノ競爭ニ關スル問題モアリキ。

一九三一年九月迄ニ支那政府ハ獨力ニテ全長約千基米ノ鐵道ヲ布設シ、所有シ且運用セリ。其ノ最モ主ナルモノハ奉天海龍間、海龍吉林間、齊々哈爾克山間、呼蘭海倫間及打虎山通遼間(京奉網支線)鐵道ニシテ、支那政府ハ京奉鐵道及日本資本ノ投ゼラレタル線即吉長線、吉敦線、四洮線及洮昂線ヲ所有セリ、現在ノ紛爭勃發前二年間支那側ハ此等諸線ヲ一大支那鐵道網トシテ運用セントシ且支那港タル營口(牛莊)可能ノ場合ニハ胡蘆島ニ於テ海口ヲ有スル支那側運用線路ノミヲ使用シテ能フ限リノ一切ノ貨物ヲ運輸スベク努力セリ。其ノ結果支那側ハ其ノ全鐵道網ニ亘リ運輸連絡ノ措置ヲナスト共ニ重要線區ニ於テ支那線ト南滿洲鐵道トノ間ニ同様ナル運輸連絡協定ヲナスコトヲ拒絕セリ。日本側ハ右差別ハ普通尠クトモ滿鐵線ノ一部ヲ通過シ大連ニ出口ヲ求ムベキ北滿ヨリノ多大ノ貨物ヲ南滿洲鐵道ヨリ奪取スルモノナル旨主張セリ。

鐵道運賃競爭　此等運輸連絡紛爭ト幷行シテ激烈ナル運賃率問題日支兩線間ニ勃發セリ。右ハ支那側ガ打通線及吉海線ノ開設後賃率ヲ低減シタル一九二九年乃至一九三〇年ニ始マレリ。支那線ハ當時支那銀貨幣價値ノ暴落シ從テ此等諸線ニ於ル銀貨ニ依ル賃率ガ南滿洲鐵道ニ於ケル金圓ニ依ル賃率ヨリ低廉トナリシ結果自然的利益ヲ得タルモノノ如シ。日本側ガ支那ノ賃率ノ餘リニ低廉ナル爲右ハ不正競爭ヲ構成スルモノナル旨ヲ主張セシモ、之ニ對シ支那側ハ其ノ目的ハ南滿洲鐵道ノ場合ノ如ク元來收益ヲ獲得スルニ非ズシテ國土ヲ發展セシメ地方住民ヲシテ能フ限リ低廉ニ市場ニ到達セシムルニ在ル旨答ヘ居レリ。

國產製造品ノ利益ヲ計ル爲ノ國家的差別ノ主張　將又運賃率引下ゲノ競爭ニ偶然隨伴シテ双方ヨリ夫々他方ハ其國民ノ利益ノ爲賃率ノ差別ヲ又ハ秘密ナル割戻金ノ支拂ヲナス旨主張セリ。日本側ハ支那側ガ支那產品ヲ外國品ヨリ低廉ニ支那線上ヲ運搬セシメ得ルガ如キ鐵道等級ノ區分ヲナシ居ルヲ非難シ且支那管理ノ諸港ニ向ケ支那線ヲ通ジ仕向ケラルル自國產品及貨物ニ對シ普通ヨリモ低廉ナル賃率ヲ與ヘタルヲ難詰セリ。又支那側ニ於テハ之ニ對シ南滿洲鐵道ハ祕密ノ拂戻ヲナスヲ非難シ特ニ日本ノ運送業者ガ其ノ

取扱ニ係ル貨物ニ對シ南滿洲鐵道線ノ正規表定賃率ヨリ低廉ナル運賃率ヲ揭ゲ居ルコトヲ指摘セリ。

此等問題ハ全ク技術的ニシテ複雜ナルモノナリキ。而シテ日支双方ガ夫々相手方ニ對シテ爲セル非難ハ何レガ妥當ナルヤヲ決定スルハ困難ナリキ。本問題ノ如キハ鐵道委員會又ハ司法的決定(本報告書附屬特別研究第一參照)ニ依リ通常解決セラルベキモノナルハ明カナリ。

港灣ニ關スル紛爭　滿洲ニ於ケル支那官憲ノ鐵道政策ハ胡蘆島ニ於ケル新ナル港灣發展ニ集中セラレタリ。牛莊ハ第二次港タルベク唯ダ胡蘆島ノ完成ニ至ル迄主港タルモノナリ。事實滿洲ノ有ラユル部分ニ至ルベキ數多ノ新規ノ鐵道ガ計畫セラレタリ。日本側ハ支那側ニ依リ實施セラレタル運輸連絡ノ施設及低廉ナル賃率ノ爲通常大連ニ向テ運輸セラルベキ多クノ貨物ヲ大連ヨリ奪取シ右狀態ハ一九三〇年ニ特ニ顯著ナリシ旨主張セリ。日本側ハ南滿洲鐵道ニ依リ大連ニ向ケ輸送セラルル輸出貨物ハ一九三〇年ニ於テ百萬米噸以上ノ減少ヲ見タルニ牛莊港ハ現實ニ前年ヨリ增加ヲ示シタル旨指摘セリ。然レドモ支那側ハ大連ニ於ケル貨物ノ減少ハ主トシテ一般不況及普通南滿洲鐵道ニ依リ輸送セラルル貨物ノ大部分ヲ占ムル大豆ノ著シキ暴落ニ基因セルモノナル旨ヲ指摘セリ。支那側ハ又牛莊ニ於ケル貨物ノ增加ハ新規ノ支那鐵道線ニ依リ最近開拓セラレタル地方ヨリノ貨物運送ノ結果ナリト主張セリ。

日本側ハ特ニ支那線及胡蘆島港ノ將來ノ競爭ニ關心シ居ルガ如ク且數多鐵道ノ新設計畫及胡蘆島港ノ開發ニ關スル支那側ノ目的ハ「大連港並ニ南滿洲鐵道自體ヲ無價値ナルモノタラシメントスルモノナリ」ト論難セリ。

是等數多ノ鐵道問題ヲ全般的ニ考察スルニ其ノ問題ノ多クハ其ノ性質技術的ニシテ且ツ通常ノ仲裁又ハ司法手續ニ依リ解決シ得ラルルモノナルコト明白ナレ共、或ルモノハ國家的政策ニ深キ根據ヲ有スル紛爭ヨリ來レル日支兩國間ノ激甚ナル競爭ニ因レルモノナリ。

一九三〇年ノ日支鐵道交涉　事實上一切ノ此等鐵道問題ハ尙一九三一年ノ當初ニ於テ未解決ナリキ。此等懸案タル鐵道問題ニ付政策ヲ調和セシムルヲ目的トスル會議ノ開催方ニ付日支双方ニ依リ爲サレタル最後的且有效的努力ハ一月ヨリ夏迄斷續的ニ繼續セラレタリ。所謂木村、高間ノ商議ハ何等ノ效果ヲ齎サザリキ。交涉ガ一月ニ開始セラレタル際ニハ双方ニ誠意ノ證跡アリタリ。然レ共種々ノ遲延アリ(右ニ對シテ日支双方ニ責任アリ)結局周到ナル準備ヲナ

セル正式會議ハ現今ノ紛爭ノ起レル時ニハ尚ホ行ハレ居ラザリキ。

四、一九一五年ノ日支條約及交換公文並ニ關係問題

二十一箇條要求並ニ一九一五年ノ條約及交換公文　鐵道紛爭ヲ除キ一九三一年九月ニ起レル重大ナル日支問題ハ所謂二十一箇條要求ノ結果タル一九一五年ノ日支條約及交換公文ヨリ勃發セルモノナリ。漢冶萍鑛山(漢口附近)問題ヲ除キ一九一五年ニ締結セラレタル他ノ協定ハ或ハ新ナルモノニ替ヘラレ又ハ日本國ニ依リ自發的ニ拋棄セラレタルモノアルヲ以テ此等論爭ハ主トシテ南滿洲及東部內蒙古ニ關セルモノナリ。滿洲ニ於ケル論爭ハ左記諸規定ニ關スルモノナリキ。

(一)關東州租借地ノ日本所屬期限ヲ九十九年(一九九七年)ニ延長スルコト。

(二)南滿洲鐵道及安奉鐵道ノ日本所屬期限ヲ九十九年（夫々二〇〇二年及二〇〇七年)ニ延長スルコト。

(三)「南滿洲」ノ內部ニ於テ即チ條約ニ依リ或ハ外國人ノ居住及商業ノ爲ニ開放セラレタル地域外ニ土地ヲ賃借スルノ權利ヲ日本臣民ニ許與スルコト。

(四)南滿洲ノ內部ニ於テ旅行シ、居住シ及營業ヲナスノ權利並ニ東部內蒙古ニ於テ日支合辦ニ依リ農業ノ經營ヲナスノ權利ヲ日本臣民ニ許與スルコト。

日本人ノ是等特權及特典享有ノ適法ナル權利ハ全然一九一五年ノ條約及交換公文ノ效力如何ニ懸ルモノニシテ支那政府ハ常ニ此等條約及交換公文ノ支那政府ヲ拘束スルコトヲ否認シ來レリ。如何ニ技術的說明又ハ議論ヲナストモ「二十一箇條要求」ナル語ハ事實一九一五年ノ條約及交換公文ト同意義ナルコト並ニ支那國ノ目的ハ此等ヨリ自由トナルコトニ在リトスル信念ヲ支那國國民、官吏ノ心情ヨリ奪フコトヲ得ズ。一九一九年ノ巴里會議ニ於テ支那ハ是等ノ條約ハ「日本國ノ開戰脅迫ノ最後通牒ノ强迫ニ基キ」締結セラレタルモノナリトノ理由ニ依リ其ノ廢棄ヲ要求セリ。一九二一年乃至二二年ノ華盛會議ニ於テハ支那代表ハ「此等諸協定ノ公平及公正ニ付及從テ其ノ根本的效力ニ付」問題ヲ提示セリ。而シテ支那ガ一八九八年露西亞ニ許與セル關東州ノ二十五年租借期限ノ滿了ニ先ダツ少シ以年即チ一九二三年三月ニ支那政府ハ日本ニ對シ一九一五年ノ諸條項ノ廢棄要求ノ通告ヲ爲シ且「一九一五年ノ條約及交換公文ハ支那ニ於ケル輿論ニヨリ頑强ニ非難セラレ來レル旨」ヲ述ベ

タリ。支那ハ一九一五年ノ條約ハ「根本的效力」ヲ缺如セル旨ヲ主張セルニ依リ情勢ニ依リ實行スルヲ便宜ナリトセル場合ヲ除キ滿洲ニ關スル諸條項ノ實施ヲ怠レリ。

日本ハ痛烈ニ支那ニ依ル屢次ノ條約上ノ權利侵害ヲ非難セリ。日本ハ一九一五年ノ條約及交換公文ハ正當ニ署名セラレ完全ナル效力ヲ有スルモノナル旨ヲ主張セリ。確カニ日本國ニ於ケル輿論ノ相當部分ハ當初ヨリ「二十一箇條要求」ニ同意セザリキ。次デ日本ノ言論界ハ本政策ヲ非難スルコト普通トナレリ。然レ共日本政府及國民ハ滿洲ニ關スル此等條項ノ有效ナルコトヲ固執スルニ一致シ居ルモノノ如クナリキ。

關東州租借期限及南滿洲及安奉鐵道特權ノ延長　一九一五年ノ條約及交換公文ノ二大重要規定ハ關東州租借期限ヲ二十五年ヨリ九十九年ニ並ニ南滿洲及安奉鐵道ノ特許ヲ同ジク九十九年ノ期限ニ延長セルノ規定ナリ。此等延長ハ一九一五年ノ條約ノ結果ナルコト並ニ以前ノ政府ノ租貸セル地域ノ回復ハ支那ニ於ケル外國ノ利益ニ反對セル國民黨ノ「國權回復」運動中ニ含マレ居ルコトノ二ツノ理由ニ依リ關東州租借地及南滿洲鐵道ハ屢〻煽動ノ目的トナリ又時ニハ支那外交部ノ抗議ノ目的トナレリ。

斯カル問題ハ實際政策ノ背後ニ隱レ居リタルモ、中央政府ニ對スル滿洲ノ忠順ヲ宣言シ滿洲ニ國民黨ノ勢力ノ傳播ヲ許容シタル張學良將軍ノ政策ニ依リ此等問題ハ一九二八年以後深刻性ヲ加ヘ來レリ。

又一九一五年ノ條約及交換公文ニ關聯シテ南滿洲鐵道ノ回收或ハ之ヲ純粹ナル經濟的企業ト爲ス爲ニ其ノ組織ヨリ政治的性質ヲ剝奪セントスル運動アリタリ。之ガ資本金及利子ヲ拂戻シタル上此ノ鐵道ヲ回收シ得ベク定メラレタル最モ早キ時期ハ一九三九年ナリシヲ以テ、單ニ一九一五年ノ諸條約ヲ廢棄スルコトニ依リテハ支那ハ南滿洲鐵道ヲ回收スルコト能ハザリシナルベシ。何レニセヨ、支那ガ此ノ目的ノ爲ニ必要ナル資金ヲ調達シ得ベカリシヤ否ヤハ極メテ疑問トスヘキ所ナリ。支那國民黨「スポークスマン」等ガ折ニ觸レ南滿洲鐵道ノ回收ヲ唱ヘタルコトハ、日本人ニトリテハ一ノ刺激トナリ彼等ノ合法的權益ハ之ニ依リテ脅威ヲ感ゼシメラレタリ。

元來南滿洲鐵道ノ妥當ナル機能ノ範圍如何ニ關スル日支間ノ紛議ハ、一九〇六年同鐵道會社組織當時ヨリ存續シ居レリ。勿論技術的ニハ同鐵道會社ハ日本法律ノ下ニ株式組織ノ民間企業トシテ成立シ居ルモノニシテ、實際上全然支那ノ管轄權圏外ニ在リ。特ニ一九二七年以來、在滿支那人諸團體ノ間ニハ南滿洲鐵道ヨリ其ノ政治的行政的機能ヲ剝

奪シテ之ヲ「純粋ナル商業的企業」タラシメントスル運動アリタルガ、此ノ目的貫徹ノ爲ノ具體案ハ何等支那ニ依リテ提議セラレザリシモノノ如シ。

事實上該鐵道會社ハ一ノ政治的企業タリキ、日本政府ハ其ノ株ノ過半數ヲ掌握シ居リ該會社ハ同政府ノ代理者タリ卽其ノ業務上ノ方針ハ密接ニ同政府ニ依リテ左右セラレタルガ故ニ、日本ニ於テ新内閣成立ノ際ハ該會社ノ高級社員ハ殆ンド常ニ交迭セラレタリ。更ニ又、該會社ハ常ニ、日本ノ法律ノ下ニ警察、徴税及教育ヲ含ム廣汎ナル政治的行政權能ヲ賦與セラレ居レリ。從テ該會社ヨリ此等ノ權能ヲ剝奪スルコトハ、當初考案セラレ其後擴大セシメラレタル南滿洲鐵道ノ「特別使命」全部ヲ抛棄セシムルコトヲ意味シタリシナラム。

鐵道附屬地　南滿洲鐵道附屬地内ニ於ケル日本ノ行政權ニ關シ、特ニ土地ノ取得、徴税、鐵道守備隊ノ駐屯ニ關シテハ無數ノ問題ヲ生ジタリ。

鐵道附屬地ハ鐵道線路ノ兩側數碼以外ニ、大連ヨリ長春竝ニ安東ヨリ奉天ニ至ル南滿洲鐵道全系統ノ沿線ニ於ケル日本ノ「鐵道市街」ト稱セラルル十五市邑ヲ含ム。右鐵道市街ノ中、奉天、長春及安東市街ノ如キハ人口稠密ナル支那人町ノ大地域ヲ包含シ居レリ。

鐵道附屬地内ニ於テ南滿洲鐵道ガ實際上完全ナル市政ヲ施行スル權利ヲ有スル法律的根據ハ、一八九六年露清鐵道原約、當該鐵道會社ニ對シ「其ノ土地ニ對スル絶對的且排他的行政權」ヲ賦與セル一條項ニ存ス。露國政府ハ一九二四年ノ蘇支協定ニ到ル迄、又南滿洲鐵道ニ關スル限リ東支鐵道ノ本來ノ權利ヲ繼承スル日本政府ハ其ノ後ニ於テモ共ニ此ノ規定ヲ以テ鐵道附屬地ノ政治的支配權ヲ許與スルモノト解釋セリ。然シ乍ラ支那側ニ於テハ、一八九六年ノ原約中ノ他ノ條項ハ該規定ガ警察、徴税、教育及公共事業ノ管理等ノ如キ廣汎ナル行政權ヲ許與スルコトヲ意味シタルモノニ非ザルコトヲ明瞭ニシ居ル旨ヲ主張シテ前記解釋ヲ絶ヘズ否定シ來レリ。

土地ニ關スル紛爭　又鐵道會社ノ土地取得ニ關スル紛爭ハ屢繰返サレタル所ナリ。一八九六年ノ原約中ノ一條項ニ基キ、鐵道會社ハ「鐵道線路ノ建設、經營及之カ保護ノ爲實際上必要ナル」私有地ヲ買入又ハ賃租スル權利ヲ有セリ。然レドモ支那側ニ於テハ日本側ハヨリ多クノ土地ヲ獲得センガ爲ニ此ノ權利ヲ濫用セントシタル旨主張セリ。其ノ結果、南滿洲鐵道會社ト支那地方官憲トノ間ニハ殆ンド紛爭ノ絶ユルコトナカリキ。

鐵道附屬地内ニ於ケル課税權ニ關スル紛爭　鐵道附屬地

内ニ於ケル課税權ニ關スル主張ノ相違ハ屢紛議ヲ釀シタリ。日本側ハ元來鐵道會社ガ「其ノ土地ニ對スル絕對的且排他的行政權」ヲ許與セラル居ル事ニ其ノ主張ノ根據ヲ置ケルニ反シ支那側ハ主權國ノ權利ヲ以テ其ノ論據トセリ。

要スルニ實際ノ事態トシテハ該鐵道會社ハ其ノ鐵道附屬地ニ居住スル日支人及外國人ニ對シ租税ヲ賦課徵收セルモ支那官憲ハ斯ル權力ヲ行使セズ單ニ法律上徵税權ヲ有スルコトヲ主張セルニ止マレリ。累次發生セル紛議ノ好例トシテハ日本側鐵道ニ依リテ大連ニ輸送スル爲南滿洲鐵道市街迄荷車ニテ運搬セラルル大豆ノ如キ產物ニ對シテ支那側ガ課税セントシタル場合ニ起レルモノヲ擧ゲ得ベシ。支那側ノ主張ハ、該課税ヲナサザルニ於テハ南滿洲鐵道ニ依リテ輸送セラルル產物ニ特惠ヲ與フルコトトナルベキガ故ニ、右ハ日本「鐵道市街」ノ境界ニ於テ當然統税トシテ徵收スベシト云フニ在リ。

日本ノ南滿洲鐵道沿線ニ鐵道守備隊駐屯權ニ關スル問題

日本ノ鐵道守備兵ニ關スル問題ハ、間斷ナク紛爭ヲ惹起セリ。此等ノ問題ハ、既ニ言及セル滿洲ニ於ケル國是ノ根本的衝突ヲ示スモノニシテ、夥シキ人命ヲ犧牲ニシタル數多ノ事變ノ原因ヲ成セリ。日本ガ此等守備隊駐屯權ヲ有ストスル法律的根據ハ、既ニ屢引用セル如ク一八九六年ノ原約中ニ存スル東支鐵道ニ對シ「其ノ土地ニ對スル絕對的且排他的行政權」ヲ許與セル條項ニ在リ。露國ハ、右條項ニ依リ露國軍隊ノ該鐵道ヲ守備スル權利ガ認メラレタルモノト主張シ支那ハ之ヲ否定セリ。一九〇五年ノ「ポーツマス」條約中ニ、日露兩國ハ該兩國間ニ於テ一粁每ニ十五人ヲ超過セザル鐵道守備隊ヲ保有スル權利ヲ留保セリ。然ルニ其後同年中日支間ニ締結セラレタル北京條約ニ於テハ、支那政府ハ日露間ニ協定セラレタル右ノ特別條項ニ同意ヲ與ヘザリキ。然レドモ日支兩國ハ、一九〇五年十二月二十二日ノ北京條約附屬協定第二條中ニ左ノ如ク規定セリ。

「淸國政府ハ滿洲ニ於ケル日露兩國軍隊並ニ鐵道守備兵ノ成ルヘク速ニ撤退セラレムコトヲ切望スル旨ヲ言明シタルニ因リ日本國政府ハ淸國政府ノ希望ニ應セムコトヲ欲シ若シ露國ニ於テ其ノ鐵道守備兵ノ撤退ヲ承諾スルカ或ハ淸露兩國間ニ別ニ適當ノ方法ヲ協定シタル時ハ日本國政府モ同樣ニ照辦スヘキコトヲ承諾ス若シ滿洲地方平靖ニ歸シ外國人ノ生命財產ヲ淸國自ラ完全ニ保護シタルニ至リタル時ハ日本國モ亦露國ト同時ニ鐵道守備兵ヲ撤退スヘシ」

日本側ノ主張 本條ハ日本ノ條約上ノ權利ノ根據ヲナスモノナリ。然レドモ露國ハ一九二四年ノ蘇支協定ニ依リ夙

ニ其ノ守備兵ヲ撤去シ右駐兵權ヲ抛棄セリ。然ルニ日本ハ未ダ滿洲ニハ平靜確立セズ且支那ハ外國人ヲ完全ニ保護スル能力ヲ有セザルヲ以テ尙鐵道守備隊ヲ駐屯セシムベキ有效ナル條約上ノ權利ヲ有スル旨ヲ主張セリ。

日本ハ右鐵道守備隊ノ使用ヲ辯護スルニ當リ、條約上ノ權利ヲ根據トスルヨリモ寧ロ「滿洲ノ現存事態ノ下ニ於ケル絕對的必要」ヲ根據トシテ論ズルコトニ漸次傾キ來レリ。

支那側ノ主張　支那政府ハ日本ノ主張ヲ絕エズ論駁シ、日本鐵道守備隊ノ滿洲駐屯ハ法律上ニ於テモ事實上ニ於テモ正當ナラズ、支那ノ領土及行政的保全ヲ害スルモノナル旨ヲ主張セリ。前揭北京條約ノ規定ニ關シテハ支那政府ハ右ハ單ニ一時的性質ナル事實上ノ事態ヲ聲明シタルモノニシテ、一ツ權利殊ニ永續的性質ヲ有スル權利ヲ附與シタルモノト言フ能ハザル旨ヲ主張セリ。更ニ、露國ハ既ニ其ノ守備兵ヲ撤去シ滿洲ノ平靜ハ回復セラレ、且支那官憲ニ於テ日本ノ守備隊ノ防害ナキ限リ他ノ在滿諸鐵道ニ對シテ爲シツツアルガ如ク南滿洲鐵道ニ對シテモ適當ノ保護ヲ與へ得ベキガ故ニ、日本ハ其ノ守備隊ヲ撤退セシムル法律上ノ義務ヲ負フモノナル旨主張セリ。

日本ノ鐵道守備隊ノ鐵道附屬地外ニ於ケル活動　日本ノ鐵道守備隊ニ關シ發生シタル紛爭ハ鐵道附屬地內ニ於ケル駐屯及活動ニ限ラレタモノニ非ズ。右守備隊ハ日本ノ正規兵ニシテ、彼等ハ屢其ノ警察職權ヲ地續地域ニ及ボシ又或ハ支那官憲ヨリ許可ヲ得或ハ許可ヲ得ズ或ハ之ニ通告シ或ハ通告ヲナスコトナク、鐵道附屬地外ニ於テ演習ヲ擧行セルコト屢ナリキ。

此等ノ行動ハ、官邊、民間ヲ問ハズ支那人一般ニ特ニ嫌惡セラレ、不法ナルノミナラズ不幸ナル事變ヲ挑發スルモノト見做サレタリ。右演習ハ屢次誤解ヲ生ゼシメ且支那人ノ農作物ニ夥シキ損害ヲ與ヘ之ニ對シ物質的賠償ヲ爲スモ其ノ釀サレタル反感ヲ緩和シ得ザリシナリ。

日本領事館警察　日本ノ鐵道守備隊問題ニ密接ニ關聯シタルモノニ日本領事館警察ノ問題アリ。右警察ハ單ニ南滿洲鐵道沿線ノミナラズ哈賓爾、齊々哈爾及滿洲里ノ如キ都市竝ニ多數ノ在滿鮮人ノ居住スル地域タル所謂間島地方等在滿各日本領事館管轄地域ニ存スル日本領事館及同分館ニ所屬セリ。

領事館警察ノ滿洲駐在ニ對スル日本側ノ主張　日本側ハ領事館警察存置ノ權利ハ治外法權ニ當然附隨スルモノナリ即此等警察官ハ日本臣民ヲ保護シ懲罰スル上ニ必要ナルヲ以テ右ハ領事裁判所ノ司法的權能ノ延長ニ過ギズト主張セリ。事實日本ノ領事館警察官ハ、其ノ數ハ滿洲ニ於ケルヨ

リモ少キモ、滿洲以外ノ支那諸地方ニ在ル同國領事館ニモ所屬シ居ルモノニシテ右ハ治外法權條約ヲ有スル他ノ諸國ノ一般ニ實行シ居ラザル所ナリ。

實際問題トシテ日本政府ハ同地方ノ現狀ニ於テ特ニ日本ノ重大ナル利益存在シ多數日鮮人ノ居住シ居ル點ヲ顧慮セバ、滿洲ニ於ケル領事館警察ノ存置ハ必要事ナリト信ジ居ルモノノ如シ。

日本ノ主張ニ對スル支那側ノ否定　然レドモ支那政府ハ日本ガ滿洲ニ於ケル領事館警察存置ノ理由トシテ提示セル右論旨ヲ常ニ反駁シ、屢本問題ニ關シ日本ニ抗議シ滿洲ノ如何ナル地方ニモ日本ノ警察官ヲ駐在セシムル必要ナキコト、警察官問題ハ治外法權ト關聯セシメ得ザルコト、竝ニ斯ル警察官ノ存在ハ何等條約上ノ根據ヲ有セズ支那主權ノ侵害ナルコトヲ主張セリ。事ノ當否ハ姑ラク措キ、領事館警察ノ存在ハ多クノ場合ニ於テ右警察官ト支那地方官憲トノ間ニ重大ナル紛爭ヲ誘發セリ。

日本人ノ南滿洲內地ニ於ケル往來、居住及營業ノ權利

一九一五年ノ日支條約ハ「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ自由ニ居住往來シ各種ノ商工業其ノ他ノ業務ニ從事スルコトヲ得」ト規定セリ。右ハ一ノ重要ナル權利ナルガ、支那ノ他ノ地方ニ於テハ外國人ハ一律開市場ヲ除ク外居住及營業ヲ許害セラレ居ラザルニ付、右規定ハ支那側ニトリテハ好マシカラザルモノナリキ。支那政府ハ治外法權撤廢セラレ外國人ガ支那ノ法律及司法權ニ服スルニ至ル迄ハ右特權ヲ許サルルコトヲ以テ其ノ政策ト爲シ居レリ。

尤モ南滿洲ニ於テハ右權利ニハ一定ノ制限ヲ附セラレタリ。卽日本人ハ南滿洲ノ內地ヲ旅行中旅券ヲ携帶シ且支那ノ法規ヲ遵守スルコトヲ要セリ。然レドモ日本ニ適用セラルベキ支那ノ法規ハ先ヅ支那官憲ニ於テ「日本領事館ト協議ノ上」ニ非ザレバ施行シ得ザルモノトセリ。

而シテ多數ノ場合ニ於テ支那官憲ノ行動ハ該條約ノ規定ニ合致セザリキ。尤モ右條約ノ有效性ニ關シテハ支那側ハ常ニ爭ヒ來レリ。南滿洲ノ內地ニ於ケル日本國臣民ノ居住往來及營業ニ對シテ制限ノ存シタル事實竝ニ日本人又ハ他ノ外國人ノ開市場外居住或ハ建物賃借契約ノ更新ヲ禁止シタル命令及規則ガ諸種ノ支那人官吏ニ依リテ發セラレタル事實ニ關シテハ、支那參與員ガ本調査委員會ニ提出シタル公文書中ニ何等論及セラレ居ラズ。然レドモ日本人ヲ南滿洲及東部內蒙古ノ多數ノ市邑ヨリ退去セシムル爲又ハ支那側家主ガ日本人ニ家屋ヲ貸付クコトヲ阻止スル爲屢々苛酷ナル警察手段ニ依リ支持セラレタル官憲ノ壓迫ガ加ヘラレタルハ事實ナリ。又日本側ノ聲明シタル所ニ依レバ、支那

官憲ハ日本人ニ旅券ヲ發給スルコトヲ拒ミ不當課稅ニ依リ彼等ヲ惱マシ又一九三一年九月以前數年間ハ日本人ヲ拘束スベキ規則ハ先ヅ日本領事ニ提出スベキコトヲ約セル前記條約中ノ規定ヲ遵守セザリシ趣ナリ。

支那側ノ辯解及說明　支那側ノ目的ハ滿洲ニ於ケル日本人ノ例外的特權ヲ制限シ以テ東三省ニ對スル支那ノ支配ヲ强固ナラシメントスル其ノ國策ノ實行ニ在リタリ。彼等ハ一九一五年ノ條約ヲ以テ「根本的效力」ナキモノト看做シ其ノ理由ノ下ニ彼等ノ行動ヲ正當ナリトナシ、更ニ條約ノ規定ニハ南滿洲ト局限シアルニ拘ラズ日本人ハ滿洲全地域ニ亙リ居住營業ヲ爲サント試ミルモノナルコトヲ指摘セリ。

右論爭ハ一九三一年九月ノ事件ニ至ル迄絕エズ兩國ヲ刺激セリ　日支兩國ノ相反スル國家的政策及目的ニ鑑ミレバ右條約規定ニ關シ絕エズ痛烈ナル論爭ノ生ズルハ殆ンド避ケ得ザリシ所ナリ。兩國ハ共ニ斯ル形勢ガ一九三一年九月ノ事件ニ至ル迄ノ彼等ノ相互關係ニ漸次刺激ヲ加重シ來レルコトヲ認容スルモノナリ。

商租權問題　南滿洲內地ニ於ケル居住竝ニ營業ノ權利ト商租權トハ密接ナル關係ヲ有ス。右商租權ハ一九一五年日支條約ニ基キ日本人ニ許與セラレタルモノニシテ關係條文左ノ如シ。

「日本國臣民ハ南滿洲ニ於テ各種商工業上ノ建物ヲ建設スル爲又ハ農業ヲ經營スル爲必要ナル土地ヲ商租スルコトヲ得」

右條約締結ノ際ノ兩國政府間ニ於ケル公文交換ハ「商租」トハ支那文ニ依ル「三十箇年ヨリ長カラサル期限附ニテ且無條件ニシテ更新スルノ可能性アル租借」（不過三十年之長期及無條件而得續租）ヲ含ムモノナリト定義セリ。

日本文ハ單ニ「三十箇年迄ノ長キ期限附ニテ且無條件ニテ更新シ得ヘキ租借」トナリ居レリ。其結果日本側商租ハ日本側ノ選擇ニ依リ「無條件ニ更新セラルルモノナリヤ否ヤ」ノ問題ニ關シ爭論發生セルハ蓋シ自然ナリ。

支那人側ハ日本人ガ滿洲ニ於テ土地ヲ獲得セムトスル願望ハ其ノ租借ニ依ルト、買入ニ依ルト將又抵當權ニヨルノ如何ヲ問ハズ、之ヲ以テ「滿洲ヲ買收セムトスル」日本ノ國策ノ證左ナリト解釋セリ。從ッテ支那官憲ハ擧ッテ右目的ヲ達セムトスル日本人ノ努力ヲ妨害セント試ミタリ。而モ右ハ一九三一年九月直前三、四年間、支那ノ「國權恢復運動」ガ最モ猖獗ヲ極メタル時、其ノ勢益々旺ントナレリ。

支那官憲ガ日本人ノ土地買收、其ノ完全ナル所有權ニ依ル保有、又ハ抵當ニ依ル之ガ留置權ノ獲得ニ對シ峻嚴ナル

規則ヲ制定セルハ元來前記條約ガ單ニ商租權ヲ許與セルニ過ギザリシコトニ鑑ミ、其ノ正當ナル權利ニ基キタルモノト見ルヲ得ベシ。然レドモ日本人側ハ土地ニ對スル抵當權ノ設定ヲ禁止スルハ條約ノ精神ニ悖ル旨苦情ヲ述ベタリ。

然ルニ支那官吏ハ條約ノ效力ヲ認メズ、日本人ガ土地ヲ租借セムトスルニ當リテハ省令又ハ地方廳ノ命令ヲ以テ極力之ヲ妨害シ、日本人ニ土地ヲ租借セシムル時ハ之ヲ刑法ヲ以テ罰スベシトナシ、或ハ其ノ租借ニ當リ事前ニ特別手數料及稅ヲ課シ或ハ地方官吏ニ訓令シ日本人ヘノ土地讓渡ノ許可ヲ禁止セシガ爲刑罰ノ脅威ヲ以テセリ。

北滿洲竝ニ南滿洲ニ於ケル日本人ノ土地租借抵當權設定及買收　前記ノ如キ各種ノ障害アリシニモ拘ラズ、事實日本人ハ廣大ナル地域ニ亙ル土地ヲ單ニ租借セルノミナラズ賣買又ハ一層普通ニ行ハレ居ル抵當ノ方法ニ依リ實際其ノ所有權ヲ取得セリ。但シ之等地劵ガ支那ノ法廷ニ於テ其ノ效力ヲ認メラレシヤ否ヤハ別ナリ。

之等土地ニ對スル抵當權ハ日本ノ金融業者、殊ニ大規模ナル金融會社ニシテ其ノ中ノ或ルモノノ如キハ特ニ土地ノ取得ヲ目的トシテ組織セラレタルモノノ手ニ落チタリ。今日本ノ官廳ヨリノ資料ニヨレバ、全滿洲竝ニ熱河ニ於ケル日本人租借地ノ全面積ハ一九二二――一九二五年ニ於ケル約八〇、〇〇〇「エーカー」ヨリ一九三一年ニ於ケル五〇〇、〇〇〇「エーカー」以上ニ增加セリ。右ノ內日本人ガ支那法又ハ國際條約ノ何レニヨルモ商租權ヲ有セザル北滿洲ニ於テ所有スル部分ハ僅少ナリ。

土地商租問題ニ關スル日支交涉　右商租權問題ノ重要性ニ鑑ミ、一九三一年ニ至ル十年間ニ於テ、少クトモ三回ニ亙リ日支直接交涉ニヨリ何等カノ協定ニ到達セントノ企圖行ハレタリ。而シテ商租權ト治外法權撤廢ノ兩問題ヲ共ニ取上ゲ、卽チ滿洲ニ於テ日本人ハ治外法權ヲ抛棄シ、支那人ハ日本人ニ土地ノ自由ナル租借ヲ許スノ建前ニヨル解決案ガ、兩者ニ於テ考究セラレツツアリシモノト信ズベキ理由アルモ、右商議ハ遂ニ不成立ニ終レリ。

右日本人ノ土地商租權ニ關スル日支間ノ長期ニ亙ル紛爭ハ既述ノ他ノ諸問題ト等シク、其ノ依テ來ル源ハ相反スル兩國ノ政策ニ於ケル根本的ノ不一致ニアリテ、國際協定ノ侵犯呼ハリ又ハ之ガ反駁ノ如キハ右兩國政策ノ根本的目的ニ比スレバ左マデ重要ナルモノニ非ズ。

五、滿洲ニ於ケル朝鮮人問題

日本ノ法律ニ依リ日本ノ國籍ヲ有スル八十萬朝鮮人ノ滿洲內居住ハ日支間ノ政策ノ衝突ノ尖銳化ヲ促進セリ。右事態ノ結果諸種ノ紛爭惹起セラレ爲ニ朝鮮人自身犧牲者トナ

リ災厄ト惨禍トヲ蒙リタリ。

(本報告附屬書第九參照)

朝鮮人ガ賣買又ハ租借ニ依リ滿洲ニ於テ土地ヲ取得スルニ對シ支那側ノ反對アル處、日本側ハ朝鮮人モ等シク日本臣民トシテ一九一五年ノ條約竝交換公文ニヨリテ獲得セル商租權ニ均霑スベキモノナリト主張シテ之ニ反對セリ。而シテ日本人ハ朝鮮人ガ歸化ニヨリテ支那臣民タルコトヲ否認セルガ爲茲ニ亦二重國籍ノ問題發生セリ。朝鮮人ノ監視及保護ノ爲ノ日本領事館警察ノ使用ハ支那側ノ憤懣ヲ招キ屢日支警察ノ衝突ヲ惹起セリ。殊ニ朝鮮ノ北境ニ接スル間島地方ノ如ク朝鮮人ノ居住者四〇〇、〇〇〇人ニ及ビ同地支那人口ニ對スル比率三對一ノ多數ヲ算スル所ニ於テハ特殊ノ問題發生セリ。之等問題ハ支那人ヲシテ一九二七年ニ至ルニ及ビ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ自由居住ヲ禁止スルノ政策ヲ採ルニ至ラシメタリ。右政策ハ日本人側ヨリ許スベカラザル彈壓ノ一例トシテ目セラレタリ。

滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ地位ニ關スル日支協定　滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ地位及權利ハ主トシテ日支間ニ於ケル左記三協定ニ依リテ決定セラル。即チ一九〇九年九月四日ノ間島協約、一九一五年五月二十五日ノ南滿洲及東部內蒙古ニ關スル條約及交換公文竝一九二五年七月八日ノ所謂「三矢協定」之ナリ。而シテ朝鮮人ノ場合ニ起リ來ル二重國籍ニ關スル機微ナル問題ニ關シテハ日支間ニ何等ノ協定ナシ。

一九二七年ニ至ルニ及ビ支那官憲ハ一般ニ事實朝鮮人ハ滿洲ニ對スル「日本ノ侵略竝ニ併合ノ前衛」ナリト信ズルニ至レリ。斯ル見解ヨリスレバ日本ガ朝鮮人ノ歸化シテ支那臣民タルコトヲ認メズ殊ニ日本ノ領事館警察ガ常ニ朝鮮人ニ對スル監視ヲ怠ラザル以上、朝鮮人ノ土地獲得ハ其ノ賣買ニヨルト租借ニヨルトヲ問ハズ「滿洲ニ於ケル支那人ノ生存ヲ脅ス」經濟的及政治的脅威タルベキナリ。

支那側ノ點　支那人間ニ廣マレル見解ニ從ヘバ、朝鮮人ハ日本ヨリノ移住民ヲシテ朝鮮人ニ代ラシメ又ハ政治的ニ經濟的ニ殊ニ所有土地ノ處分ヲ餘儀ナクセシムルコトニヨリ朝鮮人ノ生活ヲ窮乏化シ自然滿洲ヘノ移住ヲ招來セントスル日本政府ノ深謀ヨリ出タル政策ノ結果其母國ヲ追ハレタルモノナリトス。即チ支那側ノ見解ニヨレバ、朝鮮人ハ其ノ母國ニ於テ外國人ノ政府ニヨリテ統治セラルル一切ノ重要ナル官職ヲ日本人ニ專有セラルル「被壓迫民族」タルヲ以テ彼等ハ政治的自由及經濟的生活ノ途ヲ求メンガ爲、滿洲ニ移住スルノ止ムナキニ至レルナリト云フ。朝鮮移民ノ九割ハ農民ニシテ、其ノ殆ド全部ハ米ノ耕作ニ從事ス。然シテ彼等ハ當初支那人ニヨリ經濟的ニ有用ナルモノトシ

テ歡迎セラレ、且其ノ所謂壓迫ニ對シ自然ニ流露セル同情ヨリシテ大イニ好意ヲ寄セラレタリ。支那側ヲシテ言ハシムレバ若シ日本ニシテ朝鮮人ガ歸化シテ支那臣民タルコトヲ拒マズ、且彼等ニ必要ナル警察ノ保護ヲ與フト稱スル口實ノ下ニ、彼等ヲ滿洲内ニ追躡スルコトナカリセバ、朝鮮人ノ滿洲植民ハ重大ナル政治的乃至經濟的問題ヲ惹起スルニ至ラザリシナルベシト謂フ。支那側ニ於テハ特ニ一九二七年以後滿洲ノ支那官吏ガ單ナル小作人若ハ勞役者以外ノ朝鮮人ノ滿洲定住ヲ制限セント努メタルコトヲ以テ直チニ「虐待」ノ例證ト看做サルルコトヲ拒絶セリ。

支那側ノ批議ニ對スル日本側ノ否認　日本側ニ於テハ支那側ノ右ノ如キ猜疑心ガ支那側ノ鮮人「虐待」ノ主タル原因ナルベキヲ認ムルモ、朝鮮人ノ滿洲移住ヲ奬勵スル爲ニ確定的政策ヲ採リツツアリトノ非難ハ力強ク之ヲ否定シ、「日本トシテハ之ニ對シ特ニ奬勵シ又ハ制限ヲ加ヘ居ラス朝鮮人ノ滿洲移住ハ自然ノ大勢ノ然ラシムル所ニシテ何等政治的乃至外交的動機ニ基カサル一現象ト見ル外ナシ」ト述ベタリ。從テ彼等ハ「日本ハ朝鮮移民ヲ利用シテ之等ニ地方ヲ併合セムト企畫シツツアリトノ支那側ノ危惧ハ全然其ノ根據ナシ」ト聲明セリ。

朝鮮人問題ニヨル日支關係激化並ニ朝鮮人ノ犧牲　之等ノ相互ニ妥協シ難キ兩者ノ見解ハ商租權、法權及日本ノ領事館警察ニ關スル諸問題ヲ尖鋭化スルノ結果ヲ招來シ之等ハ朝鮮人ニトリ最モ不幸ナル狀勢ヲ齎シ、日支關係ヲシテ益々惡化セシメタリ。

（報告附屬書第九參照）

朝鮮人ト商租權問題　現在日支兩國間ニハ特ニ朝鮮人ニ對シ開港場以外ノ地ニ於テ定住、居住又ハ營業ヲ爲スノ權利、又ハ所謂間島地方以外ノ滿洲各地ニ於テ租借又ハ其ノ他ノ方法ニ依リ土地ヲ取得スルノ權利ヲ許與又ハ拒否セル何等ノ協定存セズ。然リト雖モ間島以外ノ滿洲各地ニ居住スル朝鮮人ノ數モ恐ラク四〇〇、〇〇〇人ヲ超過スベク而シテ彼等ハ各處ニ廣ク分布シ特ニ滿洲ノ東半部ニ擴レリ。彼等ハ吉林省中朝鮮ノ北境ニ近キ地方ニ多ク居住シ、又東支鐵道ノ東部線地方、松花江下流地方及朝鮮ノ東北部ヨリ烏蘇里、黑龍兩江ノ流域地方ニ及ブ露支國境方面ニ迄浸潤シ、彼等ノ移住並ニ定住ハ隣接蘇聯邦ノ領域内迄溢レ出タリ。加之其ノ祖先ガ數代以前ニ移住シテ滿洲民族トナリ終セル朝鮮人ノ群夥多アル一方、朝鮮人中ニハ日本ノ羈絆ヲ脫シ歸化支那臣民トナレルモノアルガ爲、朝鮮人中事實間島以外ノ滿洲各地ニ於テ所有權又ハ租借權ニヨリ農地ヲ取得セルモノ多數ニ上レリ。然レドモ彼等ノ大部分ハ支那人

地主トノ間ニ收穫分配ノ基礎ノ上ニ結バレタル租借契約ニヨリ、單ナル小作人トシテ米作ニ從事スルニ過ギズ。而シテ其ノ契約ハ概ネ一年乃至三年ノ期限ニ限ラレ、且其ノ更新モ地主ノ自由ニ委セラルルヲ常トス。

朝鮮人ノ商租權ニ關スル日支協定ニ付テノ紛爭 支那側ハ朝鮮人ガ間島地方以外ノ滿洲各地ニ於テ土地ヲ買收シ又ハ租借スル權利ヲ否認ス。何トナレバ本件ニ關スル日支間ノ唯一ノ協定ハ一九〇九年ノ間島協約アルノミニシテ、右ハ其ノ適用ヲ此ノ地方ニ局限シ居レバナリ。故ニ唯支那臣民タル朝鮮人ノミガ滿洲內地ニ於テ土地ヲ賣買シ又ハ居住竝ニ土地租借ノ權利ヲ有ス。支那政府ハ朝鮮人ノ滿洲ニ於ケル土地ノ自由租借ノ權利ニ關スル要求ヲ否認シ間島地方ニ限リ朝鮮人ニ對シ土地取得ノ特殊ナル權利ヲ伴フ居住權ヲ與ヘ之等朝鮮人ガ支那ノ法權ニ服スベキ旨ヲ取極メタル一九〇九年ノ間島協約ハ、夫自身「當時日支間ニ於テ懸案トナリ居タル地方的諸問題ヲ互讓ニヨリテ解決セントセル」獨立セル取極ナリシナリト稱セリ。卽チ間島協約ハ支那ガ朝鮮人ニ農地ヲ所有スベキ特殊權利ヲ與フル代償トシテ、日本ガ之等朝鮮人ニ對スル法權ヲ拋棄スベキ筋合ノモノタリシナリト謂フ。

支那側ノ主張 斯テ日支兩國ハ一九一〇年日本ガ朝鮮ヲ併合シタル後モ、同協約ヲ遵守シ來リシ處、支那側ニ於テハ一九一五年ノ條約竝ニ交換公文ハ右間島協約ノ規定ニ變更ヲ加フルコト能ハズ、何トナレバ特ニ新條約ハ其ノ一條項中ニ於テ「滿洲ニ關スル日支現行各條約ハ本條約ニ別ニ規定スルモノヲ除クノ外一切從前ノ通實行スヘシ」ト規定スレバナリト謂フ。而シテ間島協約ニ關シ何等ノ例外規定ハ設ケラレザリキ。尙支那政府ハ一九一五年ノ條約竝ニ交換公文ハ間島地方ニハ適用セラレズ、何トナレバ右地方ハ地理的ニ云ヘバ南滿洲——由來本語ハ地理的竝ニ政治的ニ誤用セラレタリ——一部ニハ屬セザレバナリト謂フ。

日本側ノ主張 右支那側ノ見解ニ對シテハ一九一五年以來日本ハ絕エズ論爭シ來レリ。彼等ハ曰ク一九一〇年朝鮮併合ニ依リ朝鮮人ハ日本臣民トナリタルヲ以テ日本臣民ニ對シ南滿洲ニ於ケル居住權及商租權竝ニ東部內蒙古ニ於ケル合辦農業企業參加ヲ許與シタル南滿洲竝ニ東部內蒙古ニ關スル一九一五年ノ條約竝交換公文ノ規定ハ等シク朝鮮人ニ對シテモ適用セラルベキモノナリト。卽チ日本政府ノ主張ニ依レバ、間島協約ノ條項中一九一五年ノ協約ノ條項ト矛盾スルモノハ後者ニヨリテ廢棄セラルベク（間島ニ於テ朝鮮人ノ獲得セル權利ハ實ニ日本ガ右地方ヲ支那ノ一地方ナリト承認セル結果ニ基クモノナルヲ以テ）支那側ガ間島

協約ヲ目シテ全然獨立ナル取極ナリト主張スルハ全然誤レルモノト謂フベシ。日本側ニ於テハ若シ滿洲ニ於ケル朝鮮人ニ對シ他ノ日本臣民ニ許與セラレタルト同樣ノ權利及特權ヲ要求セザランカ、右ハ朝鮮人ニ對シ差別ヲ設クルコトトナルベシト主張ス。

日本側ガ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ土地獲得ヲ奬勵スル理由ノ一ハ日本ノ爲ニ米穀ノ輸出ヲ得ントスル願望ニ依ル處右願望ハ今迄ノ處一部分達成セラレタルノミナリ。何トナレバ恐ラク一九三〇年產出ノ七百萬「ブッシエル」以上ノ米ノ中約半分ガ地方的ニ消費セラレ、殘部ノ輸出ハ制限セラレタレバナリ。日本側ハ朝鮮人小作人ハ支那人地主ノ爲ニ荒蕪地ヲ開墾シテ利益アルモノト爲シタル後不法ニ追放セラレタリト主張ス。

兩國主張ノ相異ノ朝鮮人ノ地位ニ及ボス影響 一方支那側ハ可耕低地ガ米ヲ產出スルコトヲ等シク希望スルモ彼等ハ土地其ノモノガ日本人ノ手ニ入ルコトヲ防ガンガ爲ニ概ネ朝鮮人ヲ小作人又ハ勞働者トシテ雇傭セリ。茲ニ於テ多數ノ朝鮮人ハ土地ヲ所有センガ爲ニ、歸化支那臣民ト爲リタルガ、其ノ中ノ或者ハ地劵ヲ獲得スルト共ニ、之ヲ日本人ノ土地抵當會社ニ讓渡セリ。右ハ卽チ日本人自身ノ內ニ於テモ日本政府ガ朝鮮人ノ歸化シテ、支那臣民タルヲ認ムベキヤ否ヤニ關シ議論ノ分レタル一理由ヲ暗示シ居ルモノト云フベシ。

滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ二重國籍問題 一九一四年制定ノ支那國籍法ニヨレバ外國人ニシテ支那ニ歸化シ得ベキモノハ其ノ本國法ニヨリテ他國ニ歸化スルコトヲ認メラレ居ル者ニ限レリ。然ルニ一九二九年二月五日ノ修正支那國籍法ハ支那ノ國籍ヲ取得スルガ爲ニハ、外國人ガ其ノ原國籍ヲ喪失スルコトヲ要スル旨ノ規定ヲ包含セズ。從テ朝鮮人ハ日本ノ法律ノ下ニ於テハ其ノ歸化ヲ認メザル旨ノ日本側主張ニ關係ナク支那ニ歸化セリ。日本ノ國籍法ハ未ダ嘗テ朝鮮人ガ其ノ日本國籍ヲ喪失スルコトヲ認メズ。而シテ一九二四年ノ改正國籍法ハ「自己ノ志望ニ依リテ外國ノ國籍ヲ取得シタル者ハ日本ノ國籍ヲ失フ」トノ趣旨ノ條項ヲ有スレドモ未ダ右一般的法律ヲ朝鮮ニ適用スベキ旨ノ勅令ノ發布ヲ見ズ。然ルニモ拘ラズ滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ多數ハ支那ニ歸化シ、或地方殊ニ比較的日本ノ領事官憲ノ手ノ及バザル地ニ在リテハ其ノ數全朝鮮人人口ノ五「パーセント」乃至二十「パーセント」ニ達セリ。又偶々滿洲ノ國境ヲ越エ蘇聯邦ノ領域ニ移住シタルモノニシテ同國ノ市民ト成リタルモノモアリ。

朝鮮人ノ二重國籍問題カ支那ノ政策ニ及ボセル影響 右

朝鮮人ノ二重國籍問題ハ支那ノ國民政府及滿洲ノ地方官憲ヲシテ擧ゲテ朝鮮人ノ無差別的歸化ヲ喜バズ彼等ガ假ニ支那國籍ヲ取得シタル後將來農地獲得ニ關スル日本ノ政策ノ手先トナルベキヲ恐レシムルニ至レリ。一九三〇年九月吉林省政府ノ公布セル同省内ノ土地賣買ニ關スル規則中ニハ「歸化朝鮮人ガ土地ヲ買收セントスルトキハ右朝鮮人ハ永久ニ歸化市民トシテ居住スル手段トシテ右土地ヲ買收セント欲スルモノナリヤ將又日本人ノ爲ニ買收セント欲スルモノナリヤヲ審査スルヲ要ス」トノ規定アリ。然レドモ地方官吏ハ時ニ上級官廳ノ命令ヲ勵行スルコトアルモ屢省政府及南京内政部ノ認可ヲ要スル正式證明書ノ代リニ、假歸化證ヲ發給スル等其ノ態度一貫セザルモノアリ。之等地方官吏中特ニ日本領事館ヨリ遠隔ノ地ニアル者ハ朝鮮人ヨリノ出願アリシ場合ハ、直チニ斯ノ種證明書ノ發給ヲ承諾セルコト屢ナリ。而シテ彼等ハ時ニ實際朝鮮人ニ歸化ヲ強制シ或ハ之ヲ國外ニ追放セルガ、右ハ日本側ノ政策及歸化手數料ヨリ得ル收入ノ影響ヲ受ケタルモノナリ。更ニ支那人側ノ主張スル所ニヨレバ日本人中ニハ之ヲ傀儡地主トシテ使用シ又ハ之等歸化朝鮮人ヨリノ讓渡ニヨリ土地ヲ獲得センガ爲ニ屢自ラ通謀シテ朝鮮人歸化ノ企ミヲ爲スモノアル由ナリ。然レドモ概括的ニ言ヘバ、日本官憲ハ朝鮮人ノ歸化ヲ排シ出來得ル限リ其ノ法權ヲ彼等ニ及シタリ。

朝鮮人ニ關係スル警察權ノ主張ノ衝突問題　日本ガ治外法權ヲ有スル結果トシテノ滿洲ニ於ケル領事館警察維持ノ權利ノ主張ハ之ニ朝鮮人ノ關聯スル場合絶エザル紛爭ノ原因ヲ形成セリ。朝鮮人ガ彼等ノ爲ニスル表立チタル日本ノ干涉ヲ欲スルト否トニ拘ラズ日本ノ領事館警察ハ特ニ間島地方ニ於テハ啻ニ保護的任務ニ當リタルノミナラズ、朝鮮人居宅ノ搜索及差押ヲ行フノ權利ヲ恣ニシ、右ハ獨立運動者又ハ共產若ハ反日運動ニ關係アリトノ嫌疑アル朝鮮人ニ對シ特ニ甚シカリキ。又支那警察ハ支那ノ國法ヲ實施シ治安ヲ維持シ又ハ「不逞」鮮人ノ活動ヲ抑壓セント努ムルニ當リ、屢日本警察ト衝突セリ。東部奉天省ニ於テ支那側ガ「不逞鮮人國」ヲ彈壓シ、且日本側ノ要求ニ應ジ「不逞鮮人」ヲ引渡スベキコトヲ協定セル一九二五年所謂「三矢協定」ニ規定セル如ク、日支兩國ノ警察ハ幾多ノ場合ニ於テ協力ノ實ヲ擧ゲタルモ、實情ハ寔ニ不斷ノ紛爭軋轢ニ外ナラズ、斯ノ如キ形勢ガ紛擾ヲ惹起スベキハ當然ノコトナリキ。

間島ノ特殊問題　朝鮮人問題竝ニ之ニ基ク間島地方ニ關スル日支關係ハ特ニ複雜且重大ナル性質ヲ帶ブルニ至レリ。間島（日本語ニテハ「カントウ」朝鮮語ニテハ「カン

ドウ」ト呼バル）ハ遼寧（奉天）省ノ延吉、和龍、汪淸ノ三縣ヨリ成リ、且慣習上ハ日本政府ノ態度ニヨリ明カナルガ如ク、琿春縣ヲモ包含シ、之等四縣ハ圖們江ヲ隔テテ朝鮮ノ東北隅ニ隣接ス。

日本ノ間島ニ對スル態度　日本側ハ間島地方ニ對スル鮮人ノ傳統的態度ヲ叙說シ、一九〇九年ノ間島協約ニヨリ該地方ガ支那又ハ朝鮮ノ孰レニ歸屬スベキヤノ問題ガ、永久ニ終結ヲ告ゲタリト認ムルコトヲ欲セズ。蓋シ右ハ、同地方ニ於ケル朝鮮人住民數ハ壓倒的多數ヲ占メ、耕作地ノ過半ハ朝鮮人ノ耕作スル所ニ係リ、「同地方ハ事實上一鮮人地域ト看做シ得ル程度ニ朝鮮人ハ牢乎タル地歩ヲ樹立シタリ」ト云フニ在リ。日本政府ハ間島ニ於テ他ノ滿洲各地ニ比シ一層朝鮮人ニ對シ法權竝ニ監視ヲ勵行センコトヲ主張シ四百名以上ノ領事館警察官ヲ多年同地ニ配置シタリ。又日本領事館ハ朝鮮總督府ノ任命セル日本人官吏ト協力シ同地方ニ於テ行政的性質ヲ有スル廣汎ナル權力ヲ行使シ、其ノ職能ハ日本人學校、病院政府ノ補助スル朝鮮人ニ對スル金融機關ノ維持ヲ包含セリ。該地方ハ米田ヲ耕作スル朝鮮移民ノ自然的捌口ト看做サルル一方、永ク朝鮮獨立主義者、共產團體及其ノ他不逞反日徒輩避難ノ地ナルヲ以テ、政治上ニ於テモ特殊ノ重要性ヲ有ス。而シテ又間島ハ一九二〇年琿春ニ於ケル鮮人ノ反日暴動ニヨリ明カニセラレタル如ク朝鮮ニ於ケル獨立運動勃發後日本ガ朝鮮統治ノ全般的問題ト密接ナル政治的諸問題ヲ有シタル地方ナリ。

此ノ地域ノ軍事的重要性ハ即圖們江ノ下流ガ日本、支那及「ソヴィエト」領土ノ境界ヲ爲スモノナルニヨリ明白ナリ。

間島協約ニ關スル日支解釋ノ牴觸　間島協約ハ「從來ノ通圖們江北ノ農耕地ニ於ケル朝鮮人ノ居住ハ支那國ヨリ許容セラルヘキ旨、右地域ニ居住スル朝鮮人ハ以後支那國地方官憲ノ管轄裁判ニ服スヘキ」旨、右朝鮮民ハ支那人ト同等ノ待遇ヲ許與セラルベキ旨、及右朝鮮人ニ關スル民事及刑事一切ノ事件ハ「支那國官憲ニ依リ審問及判決セラル」ベシト雖モ一名ノ日本國領事官ハ法廷ニ出席スルヲ許サルベク特ニ人命ニ關スル、重要事件ニ於テ然リ、而シテ特別ノ支那司法手續ノ下ニ「支那國官憲ニ對シ再審ヲ要求スル」ノ權利ヲ有スベキ旨ヲ規定セリ。

然レ共日本側ハ司法問題ニ關スル限リ一九一五年ノ日支條約及覺書ハ間島協約ヲ超エテ適用アルモノニシテ一九一五年以後ハ朝鮮人ハ日本國臣民トシテ日支諸條約ノ下ニ治外法權ニ關スル一切ノ權利及特權ヲ認メラルベキモノトナス立場ヲ取來レリ。此ノ議論ハ支那國政府ニ依リ認メラレ

タルコトナク、支那側ハ若シ朝鮮人ノ農耕地居住權ニ關シ間島協約ノ適用アルモノトセバ、朝鮮人ハ支那ノ管轄裁判ニ服スベシト規定スル同協約ノ諸條項モ亦適用アルモノナル旨ヲ固執セリ。日本側ハ朝鮮人ノ農耕地居住ヲ認ムル條項ハ間島ニ於テ右土地ヲ購入及商租スルノ權利ヲ意味スルモノト解シ、支那側ハ右解釋ニ反對シテ、同條項ハ字句通リニ解セラルベキモノニシテ只歸化ニ依リ支那國臣民ト爲レル朝鮮人ノミ同地ニ於テ土地購入權ヲ有スト爲ス立場ヲ執リ居レリ。

朝鮮人ノ土地所有ノ現狀ハ變態ナリ 故ニ現狀ハ變態ヲ呈ス、何トナレバ間島ニハ支那ニ歸化セザル朝鮮人ニシテ支那國地方官憲ノ默認ニヨリ土地所有權ヲ獲得セル者アリ。尤モ朝鮮人自身ハ通例間島ニ於テ土地購入權ヲ得ル爲ニハ支那國籍ヲ取得スルコト必要條件ナリト認メ居レリ。日本側當局ノ統計ニ依レバ間島（琿春ヲ含ム）ノ可耕地ノ半以上ハ朝鮮人ノ「所有」ト爲リ居ル處、同時ニ同統計ハ同地ノ朝鮮人ノ一五「パーセント」强力歸化シテ支那國臣民トナリ居レルコトヲ認メ居レリ。右土地「所有」者ガ之等歸化朝鮮人ナリヤ否ヤハ玆ニ確言スルコトヲ得ズ。斯カル狀態ハ自然幾多ノ不規則及不斷ノ紛爭ヲ惹起シ、日支警察官憲間ノ公然タル衝突トナリタルコト一再ナラズ。

支那ノ朝鮮人壓迫ニ對スル日本ノ主張 日本側ハ一九二七年末頃ヨリ一般的排日運動ニ伴ヒ、支那國官憲ノ煽動ニヨリ滿洲ニ於テ朝鮮人迫害運動起レルコトヲ主張シ又此ノ壓迫ハ滿洲諸省ガ南京國民政府ニ忠誠ヲ宣言セル後更ニ熾烈ヲ加ヘタルコトヲ陳ベ居レリ。或ハ朝鮮人ヲ强制シテ支那ニ歸化セシメ、或ハ米田ヨリ彼等ヲ驅逐シ、或ハ彼等ニ移住ヲ强制シ、或ハ彼等ニ不當ノ納金及法外ナル租税ヲ課シ、或ハ彼等ヲシテ家屋及土地ノ商租又ハ賃借契約ヲ結ブコトヲ禁ジ、或ハ彼等ニ幾多ノ暴力ヲ加フル等、朝鮮人ニ對スル支那ノ徹底的壓迫政策ノ證據トシテ滿洲ニ於ケル中央及地方ノ支那官憲ノ發シタル多數ノ命令ノ飜譯委員會ニ提供セラレタリ。日本ノ主張ニ依レバ右慘虐ナル運動ハ特ニ「親日」朝鮮人ニ對シテ行ハレ、日本政府ヨリ補助金ヲ受クル朝鮮人居留民會ハ迫害ノ的トナリ、朝鮮人ニヨリ又ハ朝鮮人ノ爲ニ設立セラレタル支那學校ニ非ザル學校ハ閉鎖セラレ「不逞鮮人」ハ朝鮮人農民ヨリ脅迫ニヨリ金錢ヲ徴收シ又之ニ暴行加害ヲ爲スコトヲ許サレ、又朝鮮人ハ支那服ヲ着用スルコトヲ强制セラルルト共ニ其ノ悲慘ナル狀態ニ對シ日本ノ保護又ハ補助ニ依賴スル一切ノ權利ヲ抛棄スルノ已ム無カリシ趣ナリ。

滿洲官憲ガ歸化セザル朝鮮人ニ對シ差別的命令ヲ發セル

事實ハ支那側之ヲ否定スルコトナシ。此種命令ノ數及性質特ニ一九二七年以後ノモノヲ見ルニ滿洲ノ支那官憲ハ一般ニ日本ノ司法管轄ヲ伴フ限リ朝鮮人ノ侵入ハ一ノ脅威ニシテ反對スベキモノト認メタルコト明白ナリ。

朝鮮人問題ニ對シ委員會ノ拂ヒタル特別ノ注意　日本ノ主張ノ重大ナルニ鑑ミ又滿洲ニ於ケル朝鮮人ノ哀レムベキ狀態ニ鑑ミ、委員會ハ本問題ニ對シ特別ノ注意ヲ拂ヘリ。而シテ本委員會ハ必ズシモ右非難ノ全部ガ事實ヲ適當ニ敍述セルモノトハ認メズ、又朝鮮人ニ適用セラレタル右抑壓手段ノ或モノガ全然不正ナリシモノト斷ズルコトナシト雖モ、只滿洲ノ或地方ニ於ケル朝鮮人ニ對スル支那ノ行動ニ關スル右一般的記述ヲ確認スルモノナリ。委員會ハ其ノ滿洲滯在中朝鮮人團體ノ陳情委員ト稱スル多數ノ代表者ヲ引見セリ。

滿洲ニ於ケル此ノ大ナル少數民族タル朝鮮人ノ存在ガ土地商租、司法管轄及警察、並ニ一九三一年九月事件ノ序幕ヲ爲セル經濟的抗爭ニ關スル日支紛爭ヲ複雜ナラシメタルコトハ明白ナリ。大部分ノ朝鮮人ノ欲スル所ハ只自由ニ其ノ生計ヲ稼ガントスルニ在ルモ、其ノ中ニハ支那人又ハ日本人ヨリ又ハ其ノ兩者ヨリ「不逞鮮人」ト呼バルル團體アリテ、右ハ日本ノ統治ヨリ朝鮮ヲ獨立セシメント主張スル者及其ノ同志、共產主義者、職業的犯罪人、密輸入者及賣藥業者ヲ含ム職業的犯罪人、並ニ支那人匪賊ト結託シテ其ノ同胞ヨリ脅喝取財ヲ行ヒ又ハ金錢ヲ强制スル者ヲ包含シ居レリ。朝鮮人農民自身モ其ノ無智、不用心ニ依リ又彼等ヨリ更ニ狡猾ナル家主又ハ地主ヨリ借財セル爲、屢自ラ壓迫ヲ招來セリ。

朝鮮人待遇ニ關スル支那側說明　朝鮮人ガ支那側見解ヨリスレバ日本ノ滿洲ニ對スル一般政策ノ不可避的結果タル爭論ノ渦中ニ不識々々捲キ込マルルコトハ別トシ、支那側ハ所謂朝鮮人「壓迫」ナルモノノ多クハ之ヲ壓迫ト稱スルコト正當ナラズ、又朝鮮人ニ對シ支那ノ執レル方法ノ或モノハ日本國官憲ヨリ現ニ是認セラレ又ハ默過セラレタリト述ベ居レリ。支那側ハ朝鮮人ノ大部分ハ極メテ反日的ナルコト、日本ガ彼等ノ故國ヲ併合セルコトニ終始反對ナルコト及朝鮮人移民ハ決シテ其ノ故國ヲ去ルヲ欲セルモノニ非ズ、政治的及經濟的困難ニ基ク苦痛ノ爲メニ故國ヲ去レルニ外ナラズシテ一般ニ滿洲ニ於テ日本ノ監視ヨリ免ルルヲ欲スル者ナルコトヲ忘ルベカラズト主張シ居レリ。

所謂一九二五年「三矢協定」　支那側ハ朝鮮人ニ對シ或程度ノ同情ヲ示スモ、一九二五年六月—七月ノ「三矢協定」ノ存在ニ付注意ヲ喚起シ、之ヲ以テ日本國民ガ「不良分子」

ト目シ又朝鮮ニ於ケル日本ノ地位ニ對スル脅威ト目スル朝鮮人ノ行動ハ支那側官憲ニ於テモ進ンデ之ヲ抑壓シタルコトノ證據トナシ、又日本側ニ於テ支那側ノ朝鮮人「壓迫」ノ實例トシテ擧ゲントスルガ如キ右記行爲ノ或モノニ對シ日本自身公式ノ承認ヲ與ヘタル證據ナリト爲ス。外間ニハ未ダ廣ク知悉セラルルニ至ラザル本協定ハ朝鮮總督府警務局長ト支那奉天省警察長官トノ間ニ商議セラレタルモノナリ。同協定ハ東部奉天省ニ於ケル「朝鮮人結社」(反日的ノモノト推定セラル)ノ禁遏ニ關スル日支警察官ノ協力ヲ目的トスルモノニシテ「支那官憲ハ朝鮮官憲ノ指名セル朝鮮人結社ノ首領ヲ直ニ逮捕シ之ヲ引渡スベキ」コト、及「不良分子」タル朝鮮人ハ支那警察官之ヲ逮捕シ裁判及處罰ノ爲メ日本警察官ニ引渡スベキコトヲ規定ス。故ニ支那側ハ「朝鮮人ノ待遇ニ關シ或種ノ禁遏的手段ヲ執レルハ主トシテ此ノ協定ニ實際的效果ヲ與フルヲ目的トス。若シ右手段ガ支那國官憲ノ朝鮮人壓迫ヲ示ス證據トシテ考ヘラルルニ於テハ斯カル壓迫手段ハ假令事實ナリトスルモ是レ主トシテ日本國ノ利益ノ爲メニ行ハレタルモノナリ」ト主張ス。

更ニ支那側ハ「自國農民トノ激烈ナル經濟的競爭ニ鑑ミ支那官憲ガ其ノ同胞ノ利益ヲ保護スル手段ヲ講ズル固有ノ權利ヲ執行スベキハ實ニ當然ナリ」ト主張ス。

六、萬寶山事件及朝鮮ニ於ケル反支暴動

萬寶山事件ノ一九三一年九月事件ニ對スル關係　萬寶山事件ハ中村大尉事件ト共ニ滿洲ニ於ケル日支間ノ危機ヲ齎セル直接原因トシテ廣ク認メラル。然レ共前者ノ眞重要性ハ大ニ誇張セラレタリ。何等死傷者ヲ出サザリシ萬寶山事件ノ誇大ナル報道ハ日支兩國民間ニ強キ反感ヲ起サシメ朝鮮ニ於テハ朝鮮人ノ支那在留民襲擊ノ大事ヲ惹起シタリ。此ノ反支暴動ハ次デ支那ニ於ケル排日「ボイコット」ヲ復活セシメタリ。事件其者トシテハ萬寶山事件ハ過去數年間滿洲ニ發生セル日支兩國軍又ハ警察隊ノ衝突ヲ誘發セル他ノ數事件ヨリモ重大ナリシモノニハ非ズ。

支那人地主及支那人仲介人間ノ水田商租契約ハ支那國官憲ノ正式承認ヲ要セリ　萬寶山ハ長春ノ南約十八哩（三十基米）ニ位スル一小村ニシテ伊通河ニ沿フ低濕地ナリ。此ノ地ニ於テ支那人仲介業者郝永德ナル者一九三一年四月十六日附契約ヲ以テ長農水田公司ノ爲メ支那人地主ヨリ廣大ナル一劃ノ地ヲ商租セリ。契約中ニハ縣長其ノ條項ノ承認ヲ肯ゼザル場合ニハ契約ハ無效ナルベキ旨規定セラレタリ。

此ノ土地ハ支那人仲介人ヨリ朝鮮人小作人ニ對シ再商租セラレタリ　此後暫時ニシテ右商租者ハ此ノ土地全部ヲ朝

鮮人ノ一國ニ再商租セリ。此ノ第二契約ハ其ノ實施ニ付官憲ノ承認ヲ必要トスル規定ヲ含マズ、又朝鮮人ガ灌漑用水溝及附屬ノ小溝ヲ構築スルコトヲ當然ノコトト看做シ居タリ。赫永德ハ先ヅ支那人地主トノ原商租契約ニ對スル支那側ノ正式承認ヲ取付クルコトナクシテ朝鮮人農民ニ對シ此ノ土地ヲ再商租セル次第ナリ。

朝鮮人カ支那人所有土地ヲ横切リテ灌漑水道ヲ開鑿シタルコト同地方ノ支那側反對ヲ惹起シタル主因ナリ　第二契約締結直後朝鮮人ハ數哩ニ亘リ灌漑溝又ハ水道ノ開鑿ヲ開始シ、伊通河ノ水ヲ引キテ此ノ低濕地ニ之ヲ分チ此ノ土地ヲ水田耕作ニ適セシメントセリ。然ルニ何レノ商租契約ノ當事者ニモ非ザル支那人ノ大面積ノ耕地伊通河ト朝鮮人ノ右商租地トノ間ニ介在シタルヲ以テ、右水道ハ該耕地ヲ横斷セリ。朝鮮人ハ灌漑溝ニ依リ其ノ土地ニ充分ノ水ヲ引キ來ル爲メ伊通河ニ堰ヲ築カントセリ。

支那農民ハ灌漑溝工事ノ停止及朝鮮人ノ退去ヲ要求セリ　既ニ相當ノ長サノ灌漑溝完成セル後水道ニ依リ其ノ土地ヲ横切ラレタル支那農民ハ群ヲ爲シテ蜂起シ萬寶山當局ニ抗議シ彼等ノ爲メ干渉センコトヲ請願セリ。其ノ結果支那地方官憲ハ現場ニ警察官ヲ派シ朝鮮人ニ對シ卽時開鑿工事ヲ停止シ同地ヨリ退去センコトヲ命ジタリ。之ト同時ニ在長春日本領事ハ朝鮮人保護ノ爲メ領事館警察官ヲ派遣セリ。日支代表間ノ地方的交渉ハ問題ノ解決ニ成功セザリキ。其後暫時ニシテ兩國側共增援警察官ヲ派シテ互ニ抗議反駁スルト共ニ交渉ヲ試ミタリ。

長春ニ於ケル支那及日本官憲ハ共同調査ヲ行フコトニ意見一致セリ　六月八日兩國側ハ其ノ警察隊ヲ撤去シ萬寶山ニ於ケル事情ノ共同調査ヲ行フコトニ意見一致セリ。此ノ共同調査ノ結果、原商租契約ハ若シ支那縣長ノ承認ナキトキハ全契約「無效」トナルベキ旨ノ規定ヲ有シタルコト並ニ縣長ノ承認ハ未ダ與ヘラレタルコトナキコト明ラカトナレリ。

要領ヲ得ザル調査　然ルニ共同調査員ハ其ノ調査ノ結果ニ付何等意見ノ一致ヲ見ルヲ得ザリキ。卽チ支那側ニ於テハ灌漑溝ノ開鑿ハ之ニ依リ其ノ土地ヲ横切ラレタル支那農民ノ權利ヲ侵害セルコト明白ナリト主張シ、日本側ニ於テハ朝鮮人ハ其ノ商租手續ノ誤謬ニ付何等責任無カリシニモ不拘、右誤謬ノ故ニ排斥セラルルコトハ公正ナラズ故ニ其ノ工事繼續ヲ許容セラルベキナリト主張セリ。其後幾何モナク朝鮮人ハ日本領事館警察官ノ援助ヲ得テ水道開鑿ヲ續行セリ。

七月一日事件　七月一日ノ事件ハ斯カル事態ヨリ惹起セ

ラレタリ。同日灌漑溝ニ依リ其ノ土地ヲ切斷セラレタル四百名ノ支那農民ノ一隊ハ農具及矛槍ヲ携ヘテ朝鮮人ヲ驅逐シ灌漑溝ノ大部分ヲ埋立テタリ。茲ニ於テ日本領事館警察官ハ右暴徒ヲ散逸セシメ朝鮮人ヲ保護スル爲メ發砲シタルモ何等被害ハナカリキ。支那農民ハ撤退シ日本警察官ハ朝鮮人ガ水溝及伊通河ノ堰ヲ完成スル迄現場ニ屯留セリ。

七月一日事件以後支那地方官憲ハ在長春日本領事ニ對シ日本領事館警察官及朝鮮人ノ行動ニ付抗議ヲ繼續セリ。

朝鮮ニ於ケル反支暴動　萬寶山事件ヨリモ遙カニ重大ナリシハ朝鮮ニ於ケル本事件ニ對スル反動ナリキ。日本語及朝鮮語新聞ニ記載セラレタル萬寶山ニ於ケル事態殊ニ七月一日事件ノ誇大ナル報道ノ結果ハ朝鮮全道ニ亘リ激烈ナル反支暴動ノ續發ヲ見タリ。右暴動ハ七月三日仁川ニ始マリ急速ニ他市ニ傳播セリ。

支那居留民ノ受ケタル生命財産ノ重大ナル損害　支那側ハ其ノ公報ニ基キ、支那人百二十七名虐殺セラレ、三百九十三名負傷シ、二百五十萬圓ニ達スル支那人財産ハ破壞セラレタリト稱ス。

朝鮮ニ於ケル日本官憲ノ所謂責任　尙支那側ハ日本官憲ガ暴動阻止ニ付適當ノ手段ヲ講ゼズ且之ヲ鎭壓セズ遂ニ支那人ノ生命財産ニ多大ノ損失ヲ與ヘタリトノ理由ノ下ニ在鮮日本官憲ハ右暴動ノ結果ニ對シ多大ノ責任アリト主張ス。日本及朝鮮ノ新聞ハ七月一日ノ萬寶山事件ニ付支那在留民ニ對スル朝鮮民衆ノ憎惡ノ念ヲ起サシムルガ如キ性質ノ煽動的且不正確ナル記事ノ掲載禁止ヲ受ケザリキ。

朝鮮ニ於ケル暴動ハ支那ニ於ケル排日「ボイコット」ヲ激成セリ、日本政府ハ排支的暴動ニ對シ遺憾ノ意ヲ表シ且ツ死者ノ家族ニ對スル賠償金ヲ提供セリ　然ルニ日本側ハ右暴動ハ民族的感情ノ自然的爆發ニ依ルモノニシテ日本官憲ハ右暴動ヲ出來得ル限リ速ニ鎭壓セリト主張ス。

此ノ重要ナル一結果トモ云フ可キハ朝鮮ニ於ケル右暴動ガ直チニ支那全國ヲ通ジ排日「ボイコット」ヲ復活セシムルニ至レルコトナリ。朝鮮ニ於ケル排支暴動直後萬寶山事件ノ未ダ解決セラレザルニ先チ支那政府ハ日本ニ對シ暴動ノ廉ニ依リ抗議ヲ爲シ暴動鎭壓失敗ニ對スル全責任ヲ負ハシメタリ。日本政府ハ七月十五日回答ヲ發シ右暴動ノ發生ニ對シ遺憾ノ意ヲ表シ且ツ死者ノ家族ニ對シ賠償金ヲ提供セリ。

萬寶山事件ニ關スル支那側抗議ノ根據　七月二十二日ヨリ九月十五日ニ至ル迄日支地方及中央官憲ノ間ニ萬寶山事件ニ關スル交渉及覺書ノ交換アリタリ。支那側ハ一九〇九年九月四日ノ間島協約ニ依レバ朝鮮人ノ居住及借地ノ特權

ハ間島地方以外ニ及バザルヲ以テ萬寶山ニ於ケル紛議ハ朝鮮人ガ斯ル居住ノ權利無キ場所ニ居住セシ事實ニ基クコトヲ主張ス。

支那政府ハ日本領事館警察ノ支那ニ駐在スルコトヲ抗議シ且萬寶山ニ多數ノ警察官ヲ派遣セルコトハ七月一日事件ノ誘因ヲ爲セル旨主張セリ。

日本側ノ主張 他方日本側ハ朝鮮人ノ居住及借地ノ特權ハ間島協約ニ依リ限定セラレズシテ南滿洲ヲ通ジ一般日本臣民ニ許與セラレタル居住及商租ニ關スル權利ニ包含セラルルガ故ニ朝鮮人ハ萬寶山ニ於テ居住及商租ニ關スル條約上ノ權利アリト主張セリ。尙其ノ主張ニ據レバ朝鮮人ノ地位ハ他ノ日本臣民ノ地位ト同一ナリ。又日本側ハ朝鮮人ハ善意ヲ以テ米ノ耕作計畫ヲ爲セルノミナラズ日本官憲ハ租借契約ヲ取扱ヒタル支那人仲介人ノ不仕末ニ對シ責任ヲ負フコトヲ得ズト主張セリ。日本政府ハ萬寶山ヨリ領事館警察官撤退ニ同意セルガ朝鮮人小作人ハ依然同地ニ留マリ其ノ米作地ノ耕作ヲ繼續セリ。

一九三一年九月迄ニハ萬寶山事件ノ完全ナル解決ヲ見ザリキ。

七、中村大尉事件

中村事件ノ重要性 中村大尉事件ハ日本側ノ見解ニ依レバ滿洲ニ於ケル日本ノ權益ニ對シ支那側ガ全然之ヲ無視セル幾多ノ事件ガ遂ニ其ノ極點ニ達セルモノナリ。中村大尉ハ一九三一年盛夏ノ候滿洲ノ僻遠ナル一地方ニ於テ支那兵ニ殺害セラレタリ。

中村大尉ハ滿洲奥地ニ於テ軍事的使命ヲ有セリ 中村震太郎大尉ハ日本現役陸軍將校ニシテ日本政府ノ認メタルガ如ク日本陸軍ノ命令ニ依ル使命ヲ有シタリ。哈爾賓通過ノ際支那官憲ハ同大尉ノ護照ヲ檢査セルガ同大尉ハ農業技師ト自稱セリ。其ノ際同大尉ハ其ノ旅行地域ハ匪賊横行地域ナル旨警告セラレ右事實ハ同大尉ノ護照ニ記載セラレタリ。同大尉ハ武器ヲ携帶シ且賣藥ヲ所持シ居タルガ支那側ニ據レバ賣藥中ニハ藥用ニ非ザル痲藥アリタリ。

中村大尉及從者支那兵ニ殺害セラル 六月九日中村大尉ハ三名ノ通譯者及助手ヲ伴ヒ東支鐵道西部ノ伊勒克特驛ヲ出發セリ。同大尉ガ洮南ノ方向ニ於テ奥地ヘ相當ノ距離ニ在ル一地點ニ到達セル際一行ハ屯墾軍第三團長關玉衡ノ指揮スル支那兵ニ監禁セラレタリ。數日後六月二十七日頃同大尉及一行ハ支那兵ノ爲ニ射殺セラレ死體ハ右行爲ノ證跡湮滅ノ爲燒棄セラレタリ。

日本側ノ主張 日本側ハ中村大尉及其ノ一行ノ殺害ハ不正ニシテ日本軍隊及國民ニ對スル侮辱ナリト主張シ又在滿

官憲ハ事件ノ公式調査ヲ遷延シ事件ノ責任ヲ回避シ且支那官憲ハ事件ノ眞相ヲ確ムル爲有ラユル努力ヲ爲シツツアリト稱スルモ何等誠意ナカリシト主張セリ。

支那側ノ主張　支那側ハ當初中村大尉及一行ハ慣習上内地旅行ノ際外國人ガ所持スベキ許可證ヲ檢査スル期間中監禁セラレタルコト、同大尉一行ハ好遇セラレタルコト及中村大尉ハ逃走ヲ企テツツアル際一歩哨ニ射殺セラレタルコトヲ主張セリ。支那側ニ據レバ中村大尉ハ身邊ニ日本軍事地圖一葉及日記帳二冊ヲ含ム書類ヲ携帶セルコトヲ發見セラレタルガ右ハ同大尉ガ軍事探偵若ハ特別ノ軍事的使命ヲ帶ビタル將校ナリシコトヲ證スルモノナリト云フナリ。

調査　七月十七日中村大尉死去ノ報ガ在齊々哈爾日本總領事ノ許ニ到達セルガ同月末在奉天日本官憲ハ支那地方官憲ニ對シ中村大尉ガ支那兵ニ依リ殺害セラレタル確實ナル證據ヲ有スル旨ヲ通告セリ。八月十七日在奉天日本軍當局ハ中村大尉死去ノ最初ノ報道ヲ公表セリ（一九三一年八月十七日「マンチュリア・デーリー・ニュース」參照）。同日林總領事及事件調査ノ爲東京日本陸軍參謀本部ヨリ滿洲ヘ派遣セラレタル森陸軍少佐ハ遼寧省主席臧式毅ト會見セルガ臧主席ハ即時同事件ヲ調査ス可キコトヲ約セリ。

臧式毅主席ハ其ノ後直チニ北平ノ一病院ニ病臥中ナル張學良元帥及在南京外交部長ニ之ヲ通告シ又二名ノ支那人調査員ヲ任命シ直チニ所謂殺害ノ現場ヘ赴キタリ。右二名ノ調査員ハ九月三日、又日本陸軍參謀本部ノ爲獨立ニ調査ヲ爲シツツアリシ森少佐ハ九月四日奉天ニ歸還セリ。同日林總領事ハ支那參謀長榮臻將軍ヲ訪問シ同將軍ヨリ支那調査員ノ判定ハ不確實且不滿足ナリシヲ以テ再度調査ノ必要アル可キ旨ノ通告ニ接セリ。榮臻將軍ハ滿洲事態ノ新ナル進展ニ關シ張學良元帥ト商議ノ爲九月四日北平ニ赴キ九月七日奉天ニ歸還セリ。

解決ノ爲ノ支那側ノ努力　張學良元帥ハ滿洲ニ於ケル事態ノ重大ナルヲ知リ臧式毅主席及榮臻將軍ニ對シ遲滯ナク中村事件ノ現地再調査ヲ訓令セリ。張學良元帥ハ本事件ニ對シ日本陸軍ガ多大ナル關心ヲ有スルコトヲ其ノ日本人軍事顧問ヨリ知リタルヲ以テ事件ヲ有效的ニ解決セント欲スル意思ヲ明カナラシムル爲柴山少佐ヲ東京ニ派遣セリ。柴山少佐ハ九月十二日東京ニ到着シタルガ其ノ後ノ新聞報道ニ據レバ張學良元帥ハ中村事件ノ速急且ツ公平ナル結末ヲ得ンコトヲ切望シ居ル旨述ベタリ。其ノ間張元帥ハ滿洲ニ關スル諸種ノ日支係爭問題解決ノ爲兩國ニ取リ何等共通點アリヤヲ確メシムル目的ヲ以テ高級官吏湯爾和ヲ外務大臣幣原男爵ト商議セシムル爲特別ノ使命ノ下ニ東京ニ派遣セ

リ。湯爾和氏ハ幣原男爵、南大將及他ノ陸軍高級武官ト會談セリ。九月十六日張學良元帥ハ新聞記者ト會見セルガ新聞ハ張學良元帥ガ中村事件ハ日本側ノ希望ニ基キ臧式毅主席及滿洲官憲ニ依リ處理セラレ南京政府ハ與カラザル可キ旨述ベタリト報道セリ。

第二回支那調査團ハ中村大尉殺害ノ現場ヲ視察セル後九月十六日朝歸奉セリ。十八日午後日本領事ハ榮臻將軍ヲ訪問セルガ其ノ際同將軍ハ關玉衡團長ハ九月十六日中村大尉殺害ノ責ニ依リ奉天ニ召喚セラレ即時軍法會議ニ於テ裁判セラル可キ旨述ベタリ。日本側ハ奉天占領後關團長ガ支那側ニ依リ陸軍監獄ニ監禁セラレ居ル旨發表セリ。在奉天林總領事ハ九月十二日及十三日日本外務省ニ對シ「調査員ノ奉天歸還後恐ラク友好的解決ヲ見ル可キコト」殊ニ榮臻將軍ハ遂ニ支那兵ガ中村大尉殺害ニ對シ責任アルコトヲ認メタル事ヲ報告セル旨報道セラレタリ。日本電報通信社奉天通信員ハ「支那屯墾軍團ノ兵隊ニ依ル日本陸軍參謀本部中村震太郎大尉ノ所謂殺害事件ノ有效的解決ハ近キニアリ」ト九月十二日電報セリ。然レドモ幾多ノ日本陸軍將校殊ニ土肥原大佐ハ中村大尉ノ死去ニ對シ責任アリト稱サルル關團長ハ奉天ニ於テ監禁セラレ其ノ軍法會議ノ日取ガ一週間以内ナル可キモノトシテ發表セラレタル事實ニ鑑ミ中村事件ノ滿足ナル解決ヲ計ラムトスル支那側努力ノ誠意如何ニ付引續キ疑惑ヲ表明セリ。支那官憲ハ九月十八日午後開催セラレタル正式會議ニ於テ在奉天日本領事官憲ニ對シ支那兵ハ中村大尉ノ死ニ對シ責仕アルコトヲ認メ又速カニ事件ガ外交的ニ解決セラル可キ希望ヲ表示セルニ依リ中村事件解決ノ爲ノ外交交渉ハ九月十八日夜迄ハ好都合ニ進展シツツアリシガ如シ。

中村事件ノ結果　中村事件ハ他ノ如何ナル事件ヨリモ一層日本人ヲ憤慨セシメ遂ニハ滿洲ニ關スル日支懸案解決ノ爲實力行使ヲ可トスルノ激論ヲ聞クニ至レリ。本事件自體ノ重大性ハ當事萬寶山事件、朝鮮ニ於ケル排支暴動、日本陸軍ノ滿鮮國境圖們江渡河演習竝ニ青島ニ於ケル日本愛國團體ノ活動ニ對シ行ハレタル支那人ノ暴行等ニ依リ日支關係ガ緊張シ居タル際ナルヲ以テ一層增大セラレタリ。

中村大尉ハ現役陸軍將校ナリシガ此ノ事實ハ強硬迅速ナル軍事行動ノ理由トシテ日本側ニ依リ指摘セラレ斯ル軍事行動ニ好都合ナル國民的感情ヲ純化スル爲滿洲及日本國ニ於テ國民大會行ハレタリ。九月最初ノ二週間中日本新聞ハ陸軍ニ於テ問題解決ノ爲他ニ方法無キヲ以テ武力ニ訴フベキコトニ決定セリト繰返シ述ベタリ。

支那側ハ事件ノ重大性ハ甚ダシク誇張サレ居ル旨並ニ右

ハ滿洲ノ軍事占領ニ對スル口實トセラレタル旨主張シ支那側ニ於テ事件處理上不誠意又ハ遲延アリタリトノ日本側主張ヲ否認セリ。

斯クテ一九三一年八月末頃迄ニ滿洲ニ關スル日支關係ハ本章ニ記述セルガ如キ幾多ノ紛議及事件ノ結果著シク緊張シ來レリ。兩國間ニ三百ノ懸案アリ且此等事件ヲ處理スベキ平和的手段ガ當事國ノ一方ニ依リ利用シ盡サレタリトノ主張ニ付テハ充分ナル實證アリ得ズ。此等所謂「懸案」ハ根本的ニ調和シ得ザル政策ニ基ク一層廣汎ナル問題ヨリ派生セル事態ナリキ。兩國ハ各他方ガ日支協定ノ規定ヲ侵害シ一方的ニ解釋シ又ハ無視セリト責ムルモ兩者何レモ他方ニ對シ正當ナル言分ヲ有シタリ。

兩國間ノ此等紛爭解決ノ爲一方又ハ他方ニ依リ爲サレタル努力ニ付與ヘラレタル說明ニ依レバ外交交涉及平和的手段ノ正當ナル手續ニ依リ處理スル爲多少ノ努力ガ爲サレタルコトヲ立證セラレ居ルモ而モ右手續ハ未ダ十分用ヒ盡サレザリキ。然ルニ長期ニ亘ル支那側ノ調査遲延ハ日本側ヲシテ之ヲ隱忍シ得ザル事態ニ立至ラシメタリ。特ニ軍部ハ中村事件ノ即時解決ヲ主張シ十分ナル賠償金ヲ要求セリ。就中帝國在郷軍人會ハ輿論喚起ニ與テ力アリタリ。

九月中支那問題ニ關スル一般的感情ハ中村事件ヲ焦點トシテ頗ル强大トナリ滿洲ニ於テ幾多問題ヲ未解決ノ儘放置スルノ政策ハ支那官憲ヲシテ日本ヲ輕視セシムルニ至ラシメタリトノ意見屢々表示セラレタリ。有ラユル係爭問題ノ解決ガ實力ニ依ルヲ必要トスル場合ニハ實力ニ訴フ可シトノ決議ハ民衆ノ標語トナレリ。右目的ヲ以テスル計畫討議ノ爲ノ陸軍省、參謀本部及他ノ官憲間ノ會議、必要ノ場合ニ右計畫ヲ實行セシム可キ關東軍司令官ニ對スル確定的訓令及九月上旬東京ニ招致サレ且ツ必要ナル場合ニハ實力ニ依リ成ル可ク速カニ有ラユル懸案ヲ解決ス可シトスル主張者トシテ新聞ニ引用セラレタル奉天駐在武官土肥原陸軍大佐等ニ關スル記事ガ新聞紙上ニ遠慮ナク掲ゲラレタリ。此等及他ノ團體ニ依リ述ベラレタル所感ニ付テノ新聞報道ハ漸增シツツアリシ時局ノ危險ナル緊張ヲ支持セリ。

第四章　一九三一年九月十八日當日及其後ニ於ケル滿洲ニ於テ發生セル事件ノ概要

事件突發直前ノ事態

前章ニ於テ滿洲ニ於ケル日支兩國利益ノ關係漸次緊張シ來レルヲ述べ之ガ兩國軍部ノ態度ニ及ボス影響ヲ述べ置キタリ。既ニ相當期間或種ノ內部的、經濟的及政治的要因ガ日本國民ヲシテ滿洲ニ於テ再ビ「積極政策」ニ轉ゼシムルノ準備ヲ爲シツツアリシコトハ疑ヒナキ所ナリ。軍部ノ不滿、次ニ政府ノ財政策、次ニ全テ政黨ニ對シテ不滿ノ意ヲ表明シ、西洋文明ノ妥協的方法ヲ蔑視シテ古代日本ノ道德ニ依存スルコトヲ主張シ又財界及政界ノ利己的方法ヲモ非トスル軍部、農村落及國家主義的青年ノ間ヨリ釀成セラレタル新政治勢力ノ出現次ニ物價下落ガ原始生產者ヲシテ其ノ境遇ヲ緩和センガ爲ニ冒險的外交政策ニ望ヲ嘱スルノ傾アラシムルニ至レルコト次ニ事業界ノ不況ガ工業及商業界ヲシテ一層强硬ナル外交政策ニヨリ取引改善スベシト信ゼシムルニ至レル」、——之等ノ要因ハ何レモ何等實績ヲ擧ゲ得ザリシ對支幣原「妥協政策」放棄ヘノ道ヲ開キツツアリタルモノナリ。而シテ日本國內ニ於ケルカカル焦燥ノ念ハ在滿日本人ノ間ニアリテ一層甚シク夏期ヲ通ジ同地方ノ不安漸次加ハリタリ。九月ニ入ルニ及ビ右不安ノ遠カラズシテ破裂點ニ達スベキコトハ愼重ナル觀察者ノ均シク認メ得ル點ニ達シタリ。而シテ兩國ノ新聞ハ輿論ヲ沈靜セシムルヨリハ寧ロ之ヲ煽動スルニ傾ケリ。東京ニ於テ陸軍大臣ガ在滿陸軍ニ直接行動ニ出デンコトヲ勸告シテ激越ナル演說ヲ爲セル旨報道セラレタリ。就中支那當局ガ中村大尉殺害事件ニツキ滿足ナル調査及救濟ヲナスヲ遷延セルハ在滿日本軍少壯將校ヲ激昂セシメ彼等ハ同樣無責任ナル支那將校ガ道路、料理店其ノ他相接觸セル場所ニ於テ無責任ナル言辭及讒謗ヲ弄スルニ對シテ明ニ敏感トナリ居タリ。斯クシテ次デ來ルベキ事件ノ舞臺ノ準備整ヒタル次第ナリ。

九月十八日夜—十九日　九月十九日土曜日朝、奉天市民ノ醒ムルヤ同市日本軍ノ手中ニ歸シタルヲ發見セリ。夜中砲聲ヲ聞キタルモ之ハ別ニ異トスルニ足ラズ、日本軍ハ小銃及機關銃ノ猛射ヲ含ム夜間演習ヲナシ來レルコトトテ右ノ如キコトハ其週間連夜ノコトナリキ。九月十八日當夜ハ大砲ノ轟キ及砲彈ノ音ノ爲メ之ヲ識別シ得タル少數ノモノガ恐慌ヲ感ジタルハ事實ナルモ市民ノ大部分ハ砲聲ヲ以テ單ニ日本軍演習ノ再開ニ過ギズトシ、恐ラク平常ヨリヤヤ騷々シ位ニ考ヘタリ。

後述ノ如ク殆ド全滿洲ノ軍事的占領ニ導キタル運動ノ第一步トシテ本事件ノ頗ル重大ナルヲ認メ調査團ハ同夜ノ事件ニ付廣汎ナル調査ヲ遂ゲタリ。日支兩軍關係指揮官公式陳述ノ頗ル重要且興味アルハ勿論ナリ。日本側ハ本事件ヲ

最初ニ目撃セル河本中尉、北大營攻撃ニ當レル大隊ノ指揮官島本中佐及城内ヲ占領セル平田大佐ニヨリ説明セラレタリ。吾等ハ又關東軍司令官本庄中將及若干參謀將校ノ證言ヲ聽取セリ。支那側主張ハ北大營支那軍指揮官王以哲之ヲ説明シ之ガ補足トシテ彼ノ參謀長並軍事行動中現場ニアリタル其ノ他ノ將校ノ個人的談話アリタリ。吾等ハ又張學良元帥並其ノ參謀長榮臻將軍ノ證言ヲ聽取セリ。

日本側ノ説明　日本側説明ニヨレバ河本中尉ハ兵卒六名ヲ率ヰ九月十八日夜警戒任務ヲ受ケ奉天北方ノ南滿洲鐵道線路ニ沿ヒテ防禦演習ヲ行ヒツツアリタリ。彼等ハ奉天ノ方向ニ南進シツツアリタルガ同夜ハ天晴レタルモ暗夜ニシテ視野廣カラズ。彼等ガ小道ガ線路ヲ横斷セル地點ニ達セル時ヤヤ後方ニ當リテ爆發ノ大音響ヲ耳ニセルヲ以テ方向ヲ轉ジテ走リ還リタル處約二百碼行キタル地點ニテ下リ線軌道片方側ノ一部分ガ爆破サレ居ルヲ發見セリ。右爆發ハ二軌道接合點ニ起レルモノニシテ兩軌道ノ尖端ハ全ク引キ離サレ之ガ爲メ線路ニ三十一吋ノ間隙ヲ生ジタリ。爆發點ニ達スルヤ歩哨隊ハ線路東側ノ畠地ヨリ砲撃サレタルヲ以テ河本中尉ハ直ニ部下ニ對シ展開應戰スベキヲ命ジタリ。此處ニ於テ約五、六名ト覺ボシキ攻撃隊ハ射撃ヲ止メ北方ニ退却セリ。日本歩哨隊ハ直ニ追撃ヲ開始シタルガ約二百碼前進セル處ニテ約三四百名ニ達スル一層有力ナル部隊ノ爲メ再ビ射撃セラレタリ。河本中尉ハ此ノ有勢ナル部隊ニ包圍セラルルノ危險アルヲ認メ部下ノ一名ヲシテ約千五百碼北方ニ於テ同樣夜間演習中ノ第三中隊長ニ報告セシメ同時ニ他ノ一名ヲシテ（現場附近ニアル電話筒ニヨリ）在奉天大隊本部ニ救援ヲ求メシメタリ。

此ノ時長春發南下列車ノ接近シツツアルヲ聞キタルガ列車ガ破損線路ニ到達シテ破壞スベキヲ恐レ日本歩哨隊ハ交戰ヲ停止シ列車ニ警告ヲ與ヘンガ爲メ線路上ニ音響信號ヲ設置セリ。而ルニ列車ハ全速力ニテ進行シ來リ爆破地點ニ達スルヤ動搖シ一方ニ傾クヲ認メタルモ回復シ停車セズシテ通過シ去リタリ。列車ハ十時半奉天着ノ筈ニテ定刻通リ到着セルヨリ見レバ河本中尉ノ初メテ爆發ヲ聞キタルハ十時頃ナルベシト同中尉ハ語リタリ。

次デ戰鬪再開セラレタルガ第三中隊ヲ揮ユル川島大尉ハ既ニ爆音ヲ聞キテ南下ノ途中河本中尉ノ使者ト遭遇シ之ガ案内ニテ現場ニ向ヒ約十時五十分頃到着セリ。一方大隊長島本中佐ハ電話ニ接スルヤ直ニ奉天ニアリタル第一及第四中隊ニ現場ニ向フベキヲ命ジ又一時間半ノ距離ニアル撫順駐在ノ第二中隊ニ對シ出來得ル限リ速ニ之ニ加ハルベキヲ命ジタリ。右ノ二中隊ハ奉天ヨリ汽車ニテ柳條溝ニ至リ次

デ徒歩ニテ現場ニ向ヒ夜半過到着セリ。

川島中隊ノ援助ヲ受ケタル河本歩哨隊ガ繁茂セル高粱ノ葉蔭ニ潛ム支那軍ノ射撃ヲ受ケツツアル際右ノ二中隊奉天ヨリ到達セリ。

島本中佐ハ其兵力五百ニ過ギズ而シテ北大營支那軍一萬ニ及ブト信ジタルニ拘ハラズ彼ノ吾人ニ語リタルトコロニヨレバ彼ハ「攻撃ハ最良ノ防禦ナリ」ト信ジ直ニ營舍ノ攻撃ヲ命ジタリ。線路、營舍間約二百五十碼ノ地面ハ水溜リノ爲メ衆園ニテ横斷スルコト困難ナリシガ支那軍ガ右地面ヲ越エ擊退サレツツアル際野田中尉ハ第三中隊ノ一個小隊ヲ以テ彼等ノ退路ヲ斷ツ爲メニ鐵道ニ沿ヒテ進出スルコトヲ命ゼラレタリ。日本軍ガ煌々ト點燈シツツアリタリト傳ヘラルル北大營舍ニ到達スルヤ第三中隊ハ攻撃ヲ行ヒ左翼隅占領ニ成功セリ。右攻撃ニ對シ營内支那軍ハ頑强ニ抵抗シ激戰數時間ニ亘レリ。第一中隊ハ右翼ヲ第四中隊ハ中央部ヲ攻撃ス。午前五時、營舍南門ハ其ノ直前ニアル附屬家屋内ニ支那軍ノ放置セル大砲ヨリノ二彈ニ依リテ破壞セラレ、同六時全兵舍占領セラレタルガ日本側兵卒死者二名、傷者二十二名ヲ出セリ。兵舍建物中ニハ交戰中火災ヲ發シタルモノアリタルガ殘餘ハ十九日朝日本軍ニヨリ燒キ拂ハレタリ。日本側ニテハ支那兵三百二十名ヲ埋葬セルガ負傷者ハ二十名ヲ發見セルニ過ギズト陳述セリ。

一方他ノ地點ニ於テモ同樣ニ迅速且徹底的ニ軍事行動實施セラレタリ。平田大佐ハ午後十時四十分頃島本中佐ヨリ南滿洲鐵道線路支那軍ノ爲メ破壞サレタルヲ以テ將ニ敵軍攻撃ニ向ハントスル旨ノ電話ヲ受ケタルガ同大佐ハ島本中佐ノ行動ヲ是認シ自ラ城内攻撃ニ當ルベキヲ決意シ午後十一時三十分迄ニ軍隊ノ集合ヲ完了シ攻撃ヲ開始セリ。而シテ何等ノ抵抗ヲモ受ケズ時々市街上ニ戰鬪アリタルモ主トシテ支那警察隊トノ間ニ行ハレタルモノニテ之ガ爲メ支那側巡警ノ間ニ死者七十五名ヲ生ジタリ。午前二時十五分市ノ城壁ヲ乘越シ三時四十分迄之ヲ占領セリ。午前四時五十分彼ハ第二師團本部及第十六聯隊一部午前三時三十分遼陽ヲ出發セル旨ノ情報ニ接シタルガ右軍隊ハ午前五時直後到着セリ。而シテ午前六時東部城壁ノ占領ヲ完了シ兵工廠及飛行場ハ七時半占領セラレ、次デ東大營ヲ攻撃シ午後一時戰鬪ヲ見ズシテ之ヲ占領セリ。之等ノ行動ニヨル總死傷數ハ日本側傷者七名支那側死者三十名ナリ。

當日宛モ檢閲ヨリ歸來セル本庄中將ハ午後十一時頃新聞記者ヨリノ電話ニテ初メテ奉天ニ起リツツアル事件ノ報道ヲ接受セリ。參謀長ハ奉天特務機關ヨリ午後十一時四十六分電話ニテ攻撃ノ狀況ニツキ仔細ノ報告ヲ受ケ次デ遼陽、

營口、鳳城ニアル軍隊ニ對シ直ニ奉天出動ヲ命令セリ。艦隊ハ旅順ヲ出發シテ營口ニ赴クコトヲ命ゼラレ在朝鮮日本軍司令官ハ援軍派遣ヲ求メラレタリ。本庄中將ハ午前三時半旅順ヲ出發シ正午奉天ニ到着セリ。

支那側ノ說明 支那側ノ說明ニヨレバ日本軍北大營攻擊ハ何等挑發ニヨルモノニ非ズシテ全然奇襲ニ出デタルモノナリ。九月十八日夜第七旅全軍約一萬北大營ニアリタリ。九月六日張學良元帥ヨリ當時ノ緊張セル狀態ニ於テ日本軍トノ衝突ハ一切之ヲ避ケンガ爲メ特別ノ注意ヲ爲スベキ旨ノ訓令（北平ニ於テ調査團ニ示サレタル電文下ノ如シ。「日本トノ關係頗ル機微ナルモノアルヲ以テ彼等ニ接スル際ニハ特ニ愼重ナルヲ要ス、如何ニ彼等ニ於テ挑戰スルモ吾人ハ特ニ隱忍シ斷ジテ武力ニ訴フルコトナク以テ一切ノ紛爭ヲ避クヘシ。貴官ハ秘密且即時全將校ニ命令ヲ發シ右ノ點ニ付彼等ノ注意ヲ喚起スヘシ」ヲ接受セルヲ以テ兵營城門ノ衞兵ハ木小銃ヲ携帶シタルノミニテ任務ニ服シタリ。而シテ同樣ノ理由ニ依リ兵營周圍土壁內ノ鐵道線路ニ導ク西門ハ閉鎖セラレ居タリ。九月十四、十五、十六、十七日夜日本軍ハ兵營附近ニ於テ夜間演習ヲ行ヒ十八日夜午後七時ニハ文官屯ナル一村落ニテ演習シツツアリタリ。午後九時將校劉某ハ通常ノ型ノ機關車ヲ有セサル三、四輛ノ客車ヨリナル列車ガ同地ニ停車セル旨ヲ報告セルガ午後十時爆發ノ大音響アリ、之ニ引續キテ銃聲ヲ聞キタリ。依テ直ニ電話ニヨリ參謀長ヨリ之ヲ兵營南方六七哩鐵道線路近クノ私宅ニアリタル司令官王以哲ニ報告セルガ參謀長ガ尚電話中日本軍ノ兵營ヲ攻擊シツツアル旨並衞兵二名負傷セル旨ノ報道アリ。十一時頃ヨリ兵營南西隅ニ對スル總攻擊開始セラレ十一時半日本軍ハ城壁ノ隙ヨリ侵入シ來レリ。攻擊開始セラルルヤ參謀長ハ消燈ヲ命ジ再度王以哲ニ電話ニテ報告セル處王ハ抵抗スベカラザル旨ヲ答ヘタリ。十一時半南西及北西方向遠方ヨリノ大砲ノ音ヲ聞キタルガ夜半ニ至リ兵營內ニ砲彈落下シ始メタリ。退却中ノ第六百二十一團軍南門ニ達スルヤ日本軍ガ同門ヲ攻擊シ居リ守備兵撤退中ナリシヲ以テ同軍ハ日本軍ノ內部ニ侵入スル迄塹壕土壕內ニ逃避シ、然ル後南門ヲ經テ逃ルルコトヲ得午前二時頃營舍東方ノ二台子村落ニ到着セリ。他軍ハ東門及東門外直近ノ空舍ヲ經テ逃レ遂ニ三時ヨリ四時迄ノ間ニ同村落ニ達スルヲ得タリ。

唯一ノ抵抗ハ北東隅建物及夫ノ南方第二位建物內ニアリタル第六百二十團ノ試ミタルモノナリ。同團長ハ日本軍ガ午前七時南門ヨリ侵入シ來ルヤ支那軍ハ建物ヨリ建物ヘト逃レ日本軍ヲシテ空虛ナル建物ヲ攻擊セシメタル旨述ベ居レリ。支那軍主力撤退後日本軍ハ東方ニ向ヒ東方出口ヲ占

領セリ。カクシテ第六百二十團ハ連絡ヲ絶タレタルヲ以テ自ラ戰ヒテ活路ヲ開クノ外ナキニ至レリ。彼等ハ午前五時ニ至リ突破ヲ始メタルガ全然脫出シ得タルハ午前七時ナリキ。之營舍內ニ起レル唯一ノ實戰ニシテ死傷ノ大部分モ之ガ爲メナリ本團ハ最後ニ二台子村落ニ到着セル部隊ナリ。

支那軍ハ全部集合スルヤ十九日早朝直ニ同村落出發東陵ニ向ヒ次デ同地ヨリ吉林近傍ノ一村落ニ至リテ冬衣ノ支給ヲ受ケ又王大佐ヲ派シ熙洽將軍ヨリ軍隊ノ吉林入市許可ヲ求メタリ。在吉林日本在留民ハ支那兵ノ接近ニ恐レヲ抱キタルヲ以テ即刻長春四平街及奉天ヨリ吉林ニ援軍派遣セラレタルガ之ガ爲メ支那軍ハ再ビ奉天方面ニ向フコトトナレリ。彼等ハ奉天外十三哩ノ地點ニ下車シ九隊ニ分レ・夜間奉天ヲ迂廻行軍セリ。日本軍ノ發見ヲ免レンガ爲メ王以哲自ラ農民ニ假裝シ市中ヲ乘馬ニテ通過セリ。朝ニ至リ日本軍ハ彼等存在ノ報ニ接シ飛行機ヲ發シテ之ヲ爆擊セルヲ以テ彼等ハ晝間隱遁スルノ已ムナカリシモ夜間ハ進軍ヲ續行シ遂ニ京奉線ノ一驛ニ達シ此處ニテ七列車ヲ命ジ之ニヨリ十月四日山海關ニ達シタリ。

調査團ノ意見　以上ハ所謂九月十八日事件ニツキ兩國當事者ノ調査團ニ語レルトコロナリ。二者異リ矛盾シヲルハ明ナルガ之レ其ノ事情ニ鑑ミ別ニ異トスルニ足ラザルトコロナリ。

事件直前ノ緊張狀態並興奮ヲ考ヘ又利害關係者ノ特ニ夜間ニ起レル事件ニ關スル陳述ニハ必ズヤ相違スルトコロアルベキヲ認メ吾等ハ極東滯在中事件發生當時又ハ其直後奉天ニアリタル代表的外國人ニ出來得ル限リ多數會見セルガ其ノ內ニハ事件直後現地ヲ視察シ又先ヅ日本側ノ正式說明ヲ與ヘラレタル新聞通信員其他ノ人々アリ。利害關係者ノ陳述ト共ニ斯カル意見ヲ充分ニ考慮シ多數ノ文書資料ヲ熟讀シ又接受若クハ收蒐セル幾多ノ證蹟ヲ愼重研究セル結果調査團ハ左ノ結論ニ達シタリ。

日支兩軍ノ間ニ緊張氣分ノ存在シタルヿニ付テハ疑フノ餘地ナシ、調査團ニ明白ニ說明セラレタルガ如ク日本軍ガ支那軍トノ間ニ於ケル敵對行爲起リ得ベキヿヲ豫想シテ愼重準備セラレタル計畫ヲ有シ居タルガ九月十八日―十九日夜本計畫ハ迅速且正確ニ實施セラレタリ。支那軍ハ一八七頁（文原）ニ言及セル訓令ニ基キ日本軍ニ攻擊ヲ加ヘ又ハ特ニ右ノ時及場所ニ於テ日本人ノ生命或ハ財産ヲ危險ナラシムルガ如キ計畫ヲ有シタルモノニ非ズ。彼等ハ日本軍ニ對シ聯繫アル又ハ命令ヲ受ケタル攻擊ヲ行ヒタルモノニ非ズシテ日本軍ノ攻擊及其ノ後ノ行動ニ狼狽セルモノナリ。九月十八日午後十時ヨリ十時半ノ間ニ鐵道線路上若クハ其附

近ニ於テ爆發アリシハ疑ナキモ鐵道ニ對スル損傷ハ若シアリトスルモ事實長春ヨリノ南行列車ノ定刻到着ヲ妨ゲザリシモノニテ其ノミニテハ軍事行動ヲ正當トスルモノニ非ズ。同夜ニ於ケル叙上日本軍ノ軍事行動ハ正當ナル自衞手段ト認ムルコトヲ得ズ。尤モ之ニヨリ調査團ハ現地ニ在リタル日本將校ガ自衞ノ爲メ行動シツツアリト信ジツツアリタルナルベシトノ假說ヲ排除セントスルモノニハ非ズ。尙爾後ノ事件ニツキ述ベザル可カラズ。

日本軍隊ノ移動　九月十八日夜在滿日本軍ハ左ノ如ク分布セラレ居タリ。上述ノ如ク北大營ノ攻擊ニ參加セル鐵道守備大隊四中隊及奉天城市ヲ占領セル平田大佐部下ノ第二師團第二十九聯隊ノ外、第二師團殘部ハ各地ニ分布サレ居リ第四聯隊本部ハ長春、第十六聯隊本部ハ遼陽、第三十聯隊本部ハ旅順ニアリ。而シテ之等各聯隊ニ屬スル他部隊ハ安東、營口、南滿洲鐵道ノ長春―奉天線及奉天―安東線沿線幾多小都市ニ駐屯セリ。又鐵道守備隊一個大隊ハ長春ニアリ又鐵道守備隊及憲兵隊ハ上記各小都市ニ第二師團ト共ニ分布サレ居レリ。最後ニ朝鮮警備軍アリタリ。

在滿全軍及朝鮮軍幾分ハ九月十八日夜長春ヨリ旅順ニ至ル南滿洲鐵道全域ニ亘リ殆ド同時ニ行動ヲ開始セリ。其全勢力左ノ如シ。

第二師團　五千四百　野砲十六門
鐵道守備隊　約五千
憲　兵　約五百

安東、營口、遼陽其他ノ小都市ニアル支那軍ハ爲ス所ヲ知ラズ無抵抗ニ武裝ヲ解除セラレタリ。鐵道守備隊及憲兵ハ之等ノ場所ニ留マリ第二師團部隊ハ直ニ奉天ニ集結シテヨリ重要ナル行動ニ加ハレリ。第十六及三十聯隊ハ早ク到着シテ平田大佐ニ合シテ東大營ノ占領ヲ援助セリ。第二十師團、所屬第三十九混成旅團（兵四千及砲兵）ハ十六日午前十時朝鮮國境新義州ニ集結二十一日鴨綠江ヲ越エ夜半奉天ニ到着シ同地ヨリ分遣隊ハ鄭家屯及新民ニ派遣セラレ二十二日之ヲ占領セリ。

九月十八日―十九日長春占領九月二十一日吉林占領　兵約一萬、大砲四十門ヲ有スル長春ニ於ケル寬城子及南嶺支那兵營ハ九月十八日夜同地駐屯ノ第二師團第四聯隊及第一鐵道守備大隊（長谷部少將指揮下ニアリ）ニヨリ攻擊セラレタルガ同地ニテハ多少支那軍ノ抵抗アリタリ。夜半戰闘開始サレ南嶺兵營ハ十九日午前十一時寬城子兵營ハ同日午後三時占領サル。之ニヨル日本側全死傷ハ死者將校三名兵卒六十四名傷者將校三名兵卒八十五名ナリ。奉天ノ戰闘終了ト共ニ第二師團ノ各聯隊ハ長春ニ集結セラレ、多門中將

及參謀部、第三十聯隊及砲兵一大隊ハ二十日又天野少將指揮下ノ第十五旅團ハ二十二日到着セリ。吉林ハ二十一日發砲ヲ見ズシテ占領サレ支那軍ハ約八哩外ニ移サレタリ。

當時日本ノ半官出版物タリシ「ヘラルド・オヴ・エシア」ハ軍事行動ハ之ニテ完了セルモノト思考セラレ之レ以上軍隊ヲ移動スルコトハ豫期セラレ居ラザル旨述べ居レリ。爾後ニ於ケル軍事行動ハ支那ノ挑發ニヨルモノトセラレ二十日間島ニ於ケル反日游行、龍井村ニ於ケル停車場破壞及九月二十三日哈爾賓ニ於テ數個ノ爆彈破裂シタルモ日本側建物ニハ損傷ナカリシ事件等ガ斯カル挑發ノ例トシテ擧ゲラレ居レリ。且又馬賊ノ漸次跳梁シツツアルコト及敗殘兵ノ活動等ニツキテモ抗議セラレ居レリ。而シテ之等ノ事情ニヨリ日本軍ハ其ノ意ニ反シテ新ナル軍事行動ヲ起スニ至レルモノナリト主張セラレ居レリ。

錦州爆發　之等行動ノ第一ハ十月八日ノ錦州爆擊ナルガ同地ハ九月末張學良ガ遼寧省政府ヲ移轉セル處ナリ。日本側ノ云フトコロニヨレバ爆擊ハ主トシテ政廳事務所ノ設置サレタル兵營及交通大學ヲ目標トセル由ナルガ兵力ニヨリ政廳ヲ爆擊スルハ正當トスルコトヲ得ズ且又爆擊區域ガ事實日本側主張ノ如ク制限サレタリヤ否ヤ疑問ノ餘地アリ。支那政府ノ名譽顧問米國人「ルウィス」氏ハ十月十二日錦州ニ到着シ其見聞セルトコロヲ顧博士ニ申送リ顧博士ハ後ニ參與員ノ資格ニ於テ其情報ヲ調査團ニ傳達セルガ「ルウィス」氏ノ云フトコロニヨレバ兵營ニハ全然異狀ナク夥多ノ爆彈ハ市内至ルトコロニ落下シ病院及大學建物ニモ落下セル由ナリ。爆擊機指揮官ハ其ノ直後新聞記者ニ對シ長春ヨリノ四機ハ八日午前八時三十分奉天ニ向フ旨命令サレタル由ヲ告ゲタルガ同地ニテ右四機ハ他機ト合シ偵察機六臺爆擊機五臺ノ一隊ハ爆彈及燃料ヲ滿載シテ直ニ錦州ニ派遣セラレ午後一時到着十分乃至十五分内ニ爆彈八十個ヲ投ジ直ニ奉天ニ歸還セリ。「ルウィス」氏ノ談ニヨレバ支那軍ハ應戰セザリシ由ナリ。

嫩江橋頭戰鬪　次ノ行動ハ嫩江橋頭ニ於テ行ハレタルモノニシテ十月中旬開始セラレ十一月十九日日本軍ノ齊々哈爾占領ニ了レルモノナリ。之ニ對シ日本側ノ理由トシテ擧グルトコロハ馬占山ニヨリ破壞セラレタル橋梁ノ修理中日本軍ガ攻擊セラレタリト云フニアリ。然レドモ之レ以上ニ遡リテ陳述シ橋梁破壞ニツキ說明スルノ要アリ。

十月始嘗テ馬占山、萬福麟ト同地位ヲ保有シ彼等ニ代テ黒龍江首席タラントセシコトアル洮南守備隊長張海鵬ハ明ニ強力ニヨリ省政府ヲ奪取スルノ目的ヲ以テ洮南—昂々溪鐵道ニ沿ヒ進出ヲ開始セリ。支那側參與員提出文書第三號

ニハ進出ガ日本側ノ煽動ニヨルモノトナシ居レルガ中立ノ方面ヨリ得タル情報モ之ノ見解ヲ支持シ居レリ。張海鵬軍ノ進出ヲ防止センガ爲馬占山ハ嫩江橋梁ノ破壞ヲ命ジ兩軍ハ廣大且沼澤地タル同河流域ヲ隔テ相對峙セリ。

洮昂線ハ南滿洲鐵道提供ノ資本ニヨリ建設セラレ右線路ハ借款ノ擔保トサレ居ルヲ以テ南滿洲鐵道當局ハ北滿ヨリノ豐產物運搬ノ特ニ必要ナル時ニ當リ同線ノ運輸妨害ヲ續クルコトハ許ス可カラズト感ジタリ。在齊々哈爾日本總領事ハ政府ノ訓令ニヨリ十月二十日齊々哈爾ニ到着セル馬占山ニ對シ成ルベク早ク橋梁ノ修理ヲナスベキヲ求メタルガ右請求ニハ期間ハ付セザリキ。日本當局ハ交通杜絕ニヨリ張海鵬軍ヲ一定距離外ニ止メ得ベキヲ以テ馬占山トシテハ出來得ル限リ橋梁ノ修理ヲ遷延スルモノト信ジ居リタリ。十月二十日洮昂線及南滿洲鐵道使用人ノ一隊ハ軍ノ護衞ニヨラズ橋梁破損ノ視察ヲナサントシタルトコロ豫メ黑龍江省軍將校ニ說明シ置キタルニ係ラズ射擊セラレタリ。之レガ爲メ事態惡化シタルニヨリ十月二十八日在齊々哈爾本庄中將代表者林少佐ハ十一月三日迄ニ橋梁修理ノ完成ヲ要求シ若シ同日迄ニ實行サレザルニ於テハ南滿洲鐵道修理員ガ日本軍保護ノ下ニ之ニ當ルベキ旨ヲ述ベタリ。支那當局ハ期限ノ延長ヲ求メタルモ右要求ニハ何等ノ回答ナク、右修理事業遂行保護ノ目的ヲ以テ日本軍四平街ヨリ派遣セラレタリ。

十一月二日迄交涉ハ進捗セズ何等ノ決定ヲ見ザリキ。其ノ日林少佐ハ馬占山將軍及ビ張海鵬將軍ニ對シテ兩軍何レモ鐵道ヲ作戰上ノ目的ニ使用スベカラザルコト及ビ各自ノ軍隊ヲ河ノ兩岸ヨリ十粁ノ地點ニ撤退セシムベキ旨ノ最後通牒ヲ手交セリ。

右通牒ハ若シ右兩將軍ノ何レカガ南滿洲鐵道會社ノ技術員ノ鐵橋修理ヲ妨害スルトキハ日本軍ハ之ヲ敵軍ト見做スベキ旨ヲ表明シ十一月三日ヨリ效力ヲ發生スルコトトナリ居リタリ。而シテ日本救援隊ハ其ノ峽谷ノ北側ナル大興ニ十一月四日迄ニ到達スベキ命令ヲ受ケ居リタリ。中國參與員(第三號文書)在齊々哈爾日本總領事及第二師團ノ將校ハ何レモ馬占山將軍ハ中央政府ノ訓令有ル迄彼ノ獨斷ヲ以テ假ニ日本軍ノ要求ニ應ズベキ旨回答致セリトノ意見ニ一致セリ。然レドモ一方日本側ノ證人ハ馬將軍ガ破壞サレタル橋梁ヲ迅速ニ又ハ有效ニ修理スルコトヲ許ス意無キコト明白ナリシヲ以テ其ノ誠意ヲ信ゼザリキト附言シタリ。十一月四日ニ於テ日本總領事館代表者林少佐中國將校及ビ官吏ヲ含ム共同委員會ハ二度モ敵對行爲ノ開始ヲ防止スル爲メ橋梁ニ赴キ且中國側代表者ハ日本軍ノ前進ヲ延期方依賴セリ。右要求ハ容レラレズ步兵第十六聯隊長濱本大佐ハ彼ノ

命令通リ其ノ聯隊中ノ一個大隊、野砲兵二個中隊及一個中隊ノ技術員ヲ率キ日本軍ノ最後通牒條項ニ從ヒ修理作業開始ノ爲メ橋梁ニ前進セリ。技術員ハ花井大尉ノ指揮ノ下ニ十一月四日ノ朝作業ヲ開始シ歩兵一個小隊ハ同日正午迄ニ二箇ノ日本國旗ヲ押シ立テテ大興驛ニ向ヒ前進ヲ開始セリ。

戰鬪ハ實際ニ於テハ前記共同委員ガ再度努力ヲ爲シ居リタル最中卽チ十一月四日ノ晝過ギ中國軍ヲ撤退セシムベク最終ノ努力ヲ試ミタルタメ再度現場ニ赴キタル際開始セラレタリ。發砲ノ開始セラルルヤ濱本大佐ハ彼ノ部下ノ頗ル苦戰ノ狀況ニ在ルヲ慮リ其ノ用フベキ全兵力ヲ率キテ之ガ救援ニ赴ケリ。彼ハ直チニ前面ハ沼地ナル爲メ正面攻擊ハ不可能ニシテ此ノ苦境ヲ脫スルニハ敵ノ左翼ヲ包圍攻擊スルヨリ他ニ方法ナシト信ジタリ。仍テ彼ハ其ノ補充中隊ヲ分派シテ敵ノ左翼ノ占據セル丘陵ヲ攻擊セシメタルモ兵力ノ寡少ナルト砲ヲ有效射擊距離迄充分接近セシムルコトヲ得ザリシタメ黃昏迄ニハ右地點ヲ占領スルヲ得ザリキ。丘陵ハ午後八時三十分ニ占領セラレタルモ同日ハ夫レ以上ノ前進不可能ナリキ。

關東軍司令部ハ情況ノ報告ヲ受クルヤ直チニ强力ナル增援部隊ヲ派遣シ歩兵一箇大隊ハ其ノ夜ノ裡ニ到着シタルヲ以テ同大佐ハ十一月五日未明攻擊ヲ再開スルヲ得タリ。數時間後支那軍ノ第一線ニ達セル時ニ於テモ依然トシテ約七十餘挺ノ自働機關銃及機關銃ヲ以テ防禦セル塹壕ニ據ル頑强ナル敵兵ニ遭遇セルコトハ同大佐自身ノ委員會ニ對シテ陳述セル所ナリ。彼ノ攻擊ハ阻止サレ中國軍ノ歩兵、騎兵ノ包圍逆襲ニ遇ヒ彼ノ部隊ハ多大ノ損害ヲ蒙リタリ。日本軍ハ已ムナク退却シ夜ニ入ル迄其ノ陣地ヲ支フル外無カリキ。十一月五日ヨリ六日ニ亙ル夜間ニ於テ新ニ二箇大隊到着セルヲ以テ日本軍ハ苦境ヲ脫スルヲ得、六日中國軍ノ全線ニ亙リ攻擊ヲ再ビ開始シ同日正午迄ニ大興停車場ハ日本軍ノ掌中ニ歸シタリ。濱本大佐ノ使命ハ橋梁修理援護ノ爲大興驛ヲ占領スルニ在リタルヲ以テ退却スル中國軍ヲ追擊セザリシモ日本軍ハ停車場附近ニ留マレリ。中國參與員ハ前記第三號文書中ニ林少佐ハ十一月六日黑龍江省政府ニ對シテ新ニ(1)馬占山將軍ハ張海鵬將軍ノ爲メニ省主席ヲ辭職スルコト(2)治安維持委員會ヲ組織スベキコトヲ要求セル旨ヲ主張シ居レリ。林少佐ノ是等要求ヲ含メル書翰ノ寫眞ハ聯盟調査委員ニ呈示セラレタリ。尙右文書ハ十一月七日日本軍ハ黑龍江省ノ回答ヲ待タズシテ當時大興ノ北方約二十哩ノ三軒房ニ駐屯セル同省軍ニ對シテ新ニ攻擊ヲ開始セルコト及十一月八日林少佐ハ再應書翰ヲ送リ馬占山ハ張海鵬ニ代ルタメ黑龍江省政府主席ヲ辭職スベク之ニ對シテハ同

日夜半迄ニ回答スベキ旨ノ要求ヲ繰返シタルコトヲ述べ居レリ。更ニ中國側ノ報告ニ依レバ十一月十一日本庄將軍自ラ電報ヲ以テ馬占山將軍ハ辭職ノ上齊々哈爾ヲ撤退スベキコト、日本軍ノ昂々溪前進ノ權利有ルコトヲ要求シ、之ニ對スル回答モ同樣同日夜迄ニ回答スベキ旨ヲ要求シタリ。十一月十三日林少佐ハ第三回要求中ニ日本軍ハ昂々溪ノミナラズ、齊々哈爾停車場ヲモ占領スベシトノ一項ヲ增加セリ。馬占山將軍ハ其ノ回答中ニ齊々哈爾停車場ハ洮昂鐵道ト何等無關係ナル旨ヲ指摘セリ。

十一月十四日及ビ十五日日本混成部隊ハ飛行機四臺ノ援護ノ下ニ攻擊ヲ再開セリ。十一月十六日本庄將軍ハ馬占山將軍ハ齊々哈爾ノ北方ニ退却スルコト、中國軍隊ハ東支鐵道以北ニ撤退スルコト、如何ナル方法ニ依ルヲ問ハズ洮昂鐵道ノ交通運轉ヲ阻害セザルコトヲ保證スルコト、是等ノ要求ハ同月十五日ヨリ十日間ニ實行セラルベキコト、右ニ對スル回答ハ在哈爾賓日本特務機關ニ送附スベキコトヲ要求セリ。馬占山將軍ガ右要求ヲ容ルルヲ拒ムヤ多門將軍ハ十一月十八日新ニ總攻擊ヲ開始セリ。馬占山將軍ハ最初齊々哈爾ニ退却セルガ同地ハ十一月十九日日本軍ニ奪ハレ次デ海倫ニ退キ同地ニ省政府行政官署ヲ移轉セリ。

現場ニ於テ指揮セル日本軍諸將ノ證言ニ據レバ、右新軍事行動ハ十一月十二日以前ニ於テハ開始セラレタルコト無シトノ趣ナリ。當時馬占山將軍ハ既ニ麾下軍隊二萬ヲ三軒房ノ西方ニ集中シ黑龍江省屯墾軍及丁超將軍ノ軍隊迄モ集メタリ。益々威嚇的態度ヲ示セル之等大部隊ニ對シテ日本軍ハ天野、長谷部兩將麾下ノ二旅團ヨリ成ル近々漸ク集中セル多門師團ノミヲ以テ對抗シ得ルノミナリキ。此ノ緊張セル事態ヲ救フ爲十一月十二日本庄將軍ハ全黑龍江省軍ハ齊々哈爾ノ北方ヘ撤退シ日本軍ヲシテ北進シ洮昂鐵道ヲ守備スルヲ得セシムベキ旨ヲ要求セリ。十一月十七日支那軍ガ其ノ騎兵部隊ヲシテ日本軍ノ右側ヲ包圍攻擊セシムル迄日本軍ハ前進ヲ開始セザリキ。多門將軍ハ委員會ニ對シ彼ノ部隊ハ步兵三千、野砲二十四門ヨリ成ル小部隊ニ過ギザリシモ敢テ支那軍ヲ攻擊シ十一月十八日完全ニ之ヲ擊滅シタル結果同十九日朝齊々哈爾ヲ占領セリト述べタリ。一週間後第二師團ハ馬占山軍ニ對抗シ齊々哈爾ヲ防守セシムル爲天野將軍ヲ步兵一個聯隊、砲兵一個大隊ト共ニ同地ニ殘シ原駐地ニ歸還セリ。此ノ小部隊ハ後ニ新ニ編成セラレタル「滿洲國」軍隊ノ增援ヲ得タルモ吾人ガ一九三二年五月齊々哈爾ヲ訪問セル當時ハ未ダ馬占山將軍ノ軍隊ニ對抗シ得ト認ムルヲ得ザリキ。

附屬軍事狀況地圖第二號ハ、聯盟理事會第一回決議當時

ニ於ケル双方ノ正規軍ノ配置ヲ示ス。當時特ニ、遼河東西及ビ間島地方ニ出沒セル武裝解除兵及匪賊ニ關シ叙述セラレ居ラズ、双方互ニ匪賊ヲ使嗾セル旨ヲ非難シ合ヒ居レリ。即チ、日本側ハ、支那側ニ於テ滿洲ノ失地ノ秩序ヲ攪亂セントスル動機ヨリ之ヲ使嗾スト言ヒ、支那側ハ、日本側ガ支那ノ國土ヲ占領シ、益々其ノ軍事行動ヲ擴大スベキ口實ヲ發見セン爲メ之ヲ使嗾セリト言フ。是等無賴ノ徒ノ勢力及ビ其ノ軍事的價値ハ頗ル漠然且不定ナルヲ以テ右軍事狀況圖解中ニ其ノ重要性ノ正確ナル評價ヲ記入スルコトハ不可能ナルベシ。同地圖ハ東北軍ノ指揮官ガ遼寧省ノ南西地方ニ於テ著シク强力ナル部隊ヲ組織シタルヲ示シ居レリ。此ノ部隊ハ日本軍ノ最前線ニ間近キ大凌河ノ右岸ニ强力ナル塹壕陣地ヲ建設スルヲ得タリ。斯ル形勢ガ日本軍當局ヲシテ右部隊ノ正規軍ノ全兵力ハ三萬五千人或ハ當時日本ガ滿洲ニ於テ有スト認メラレタル兵力ノ約二倍ナリト評價シ相當ノ不安ヲ感ゼシメタルハ無理カラザルコトナラン。

天津事變　叙上ノ情勢ハ十一月中天津ニ於テ惹起セル或事件ノ結果執ラレタル行動ニ依リ甦リ來レリ。天津ニ於ケル紛爭ノ發端ニ關スル報告ハ非常ニ相異ス。

十一月八日ノ擾亂、日本側ノ所見　十一月八日及同二十六日ノ再度ノ擾亂アリタルガ事件全體ガ極メテ曖昧ナリ。「ヘラルド・オブ・エシヤ」所載ノ日本側ノ説明ニ據レバ天津ノ支那住民ガ張學良元帥ノ支持者及ビ其ノ反對者ニ分レ後者ガ十一月八日支那街ニ於テ武裝團體ヲ組織シ公安保持當局ヲ攻撃シ政治的示威運動ヲ爲シタリトノ趣ナリ。右支那人兩派間ノ紛爭ニ於テハ日本軍司令官ハ最初ヨリ嚴密ニ中立ヲ守リタルモ日本租界附近ノ支那警衞隊ガ日本租界ニ向テ矢鱈ニ發砲スルニ至ルヤ已ムナク日本側モ砲火ヲ開始セリ。同司令官ハ交戰中ノ支那軍ニ對シ日本租界ノ境界ヨリ三百「ヤード」外ニ離ルベキ旨要求セルガ事態ハ緩和セズ極度ニ緊張シタルヲ以テ十一月十一日又ハ十二日一切ノ外國軍隊警備ヲ整フニ至レリ。

支那側ノ見解　天津市政府ノ陳述ハ右ト頗ル異レリ。彼等ハ日本側ガ支那人無賴漢及ビ便衣隊ヲ傭ヒタルモノニシテ是等ハ支那街ニ於テ事件ヲ惹起セシムルタメ日本租界内ニ於テ軍事行動ヲ爲ス暴力團ニ編成セラレタリト主張シ居リ幸ニシテ警察當局ガ其ノ諜報者ヨリ此ノ形勢ノ報告ヲ受ケタルヲ以テ右無秩序ナル暴徒ガ日本租界ヨリ闖入スルヲ撃退セルガ右暴徒中逮捕サレタルモノノ自白ニヨリ暴徒ハ日本租界ニ於テ編成セラレ日本製ノ銃器及彈藥ヲ以テ武裝セルコトヲ證明スルヲ得ト述ベ居レリ。彼等ハ九日朝日本軍司令官ガ部下數名流彈ニ依リ負傷セルニ對シ抗議シ三百

「ヤード」外ニ撤退スベキ旨要求セルコトハ認メタルモ支那側ニ於テ右諸條件ヲ受諾セルニモ拘ラズ日本正規軍隊ハ支那街ヲ裝甲自動車ヲ以テ攻撃シ且砲撃ヲ加ヘタリト主張シ居レリ。天津市政府側ハ十一月十七日三百「ヤード」外ニ撤退スルコトニ關スル詳細ナル協定成立セル旨ヲ述ベ日本側ハ協定ニ依ル義務ヲ履行セザリシタメ事態ハ益々惡化セリト主張シ居レリ。

十一月二十六日凄マジキ爆破聲ニ次デ直チニ大砲機關銃及ビ小銃ノ發射起リタリ。日本租界ノ電燈ハ消サレ同租界ヨリ便衣隊現ハレ附近ノ公安局ヲ襲撃セリ。

十一月二十六日ノ事件ノ發端、相異セル報告 其ノ後起リタル右第二回目ノ擾亂ニ關スル「ヘラルド・オブ・エシヤ」所載ノ日本側ノ報告ニ依レバ二十六日事態頗ル好轉セルヲ以テ日本義勇隊ヲ解散シタル處同日夕刻支那側ハ日本兵營ニ向テ發砲ヲ開始シ抗議セルニモ拘ラズ二十七日正午ニ至ルモ發砲ヲ中止セザリシガ故ニ挑戰ニ應ジ支那軍ト戰フヨリ外無カリキトアリ。戰鬪ハ二十七日ノ午後和平交渉開催迄繼續セリ。其ノ際日本側ハ戰鬪ノ即時停止及支那軍隊並ニ警衞隊ヲシテ外國軍隊ノ駐屯スル凡テノ地點ヨリ二十華里外ニ撤退スベキコトヲ要求セリ。支那側ハ其ノ軍隊ノ撤退ニ同意スルモ同地方ノ外國人ノ安全ニ對スル唯一ノ責任者タル警察隊ノ撤退ニハ肯ゼザリキ。日本側ノ言ニ依レバ十一月廿九日支那軍側ヨリ日本租界附近ヨリ警察隊ヲ撤退スベキ旨申越シタルヲ以テ之ヲ容レタルガ、支那武裝巡警ハ廿九日朝撤退シ三十日防禦工事ヲ除去セル由ナリ。

天津事件ノ滿洲ノ事態ニ及ボセル影響 廿六日ノ天津ニ於ケル緊張セル狀態ハ關東軍參謀ヲシテ司令官ニ對シ危險ニ瀕スル天津ノ小部隊ニ對シテ錦州及山海關ヲ經テ直チニ增援隊ヲ派遣スベシト提議セシムルニ至レリ。單ニ輸送上ノ問題トシテハ增援隊ヲ大連ヲ經テ海路派遣スル方一層容易且迅速ナリシナラン。然レドモ戰略上ヨリ考慮センニ右系路ニ依レバ前進部隊ヲシテ途中錦州附近ニ集中セル邪魔ニナル支那軍隊ヲ片付クルヲ得セシムル利益アリタリ。此ノ系路ヲ執ルモ支那軍ノ抵抗ハ皆無又ハ殆ド無シト想像シ得ルヲ以テ左程延着ストハ思ハザリキ。右提議ハ容レラレ、十一月二十七日一裝甲列車、一軍隊輸送列車、二臺ノ飛行機遼河ヲ越エ支那國軍ノ前線ヲ攻撃セルノミニテ塹壕ニ據レル支那軍ノ撤退ヲ開始セシムルニ充分ナリキ。裝甲自動車隊モ亦陣地ヲ變更セリ。然レドモ僅カノ抵抗アリシ爲日本軍ハ更ニ裝甲列車、歩兵列車及ビ砲兵列車ノ數ヲ增シ兵力增加ヲ爲スニ至レリ。又日本軍ハ屢々錦州ニ爆彈ヲ投下セルモ天津事態好轉セル報道達スルヤ直チニ出動軍ハ本來

ノ目的ヲ失ヒ十一月二十九日日本軍隊ハ新民屯ヘ撤退シ支那軍ヲシテ大ニ驚異セシメタリ。

第一回ノ天津事件ノ他ノ結果ハ日本租界ニ居住シ居リシ前清皇帝ガ土肥原大佐ト會談ノ後十一月十三日旅順ニ安全ナル避難所ヲ求メラレタルコトナリ。

錦州占據　日本軍ノ撤退セル地方ハ支那軍ニ依リ再ビ占領セラレ此ノ事實ハ廣ク宣傳セラレタリ。支那軍ノ士氣稍々昂リ、不正規兵及匪賊活動增大セリ。彼等ハ冬期ヲ利用シ氷結セル遼河ノ諸所ヲ渡リ奉天附近地方ヲ襲ヒタリ。日本軍當局ハ現在ノ位置ヲ維持スルニサヘモ增援軍必要ナルコトヲ悟リ是等援軍ヲ以テ錦州ニ支那軍ノ集合スル危險ヲ除カンコトヲ希望スルニ至レリ。

十二月十日ノ理事會決議承認ニ際スル日本ノ留保　其ノ間滿洲ニ於ケル事態ハ「ジュネーヴ」ニ於テ猶モ論爭ノ議題ナリキ。十二月十日ノ決議ヲ承認シタルトキ日本代表ハ「本項（第二）ハ日本軍ガ日本臣民ノ生命財產ヲ滿洲各地ニ於テ跳梁シ居レル匪賊及無法ナル徒輩ノ活動ニ對シテ直接保護ヲ爲スニ必要ナル行動ヲ執ルコトヲ妨ル意圖ニ出テタルニ非ズトノ了解ニ基キ受諾スルモノニシテ斯カル行動ハ明ラカニ「滿洲ニ於テ頻發シ居レル特殊ノ事態ノタメ必要ナル例外的手段」ニシテ同地方ガ常態ニ復ス時ハ不必要トナルナラン」ト聲明セリ。之ニ對シ支那代表ハ「紛爭當事國ニ對シテ事態ヲ擴大スベカラズトノ命令ハ滿洲ニ於ケル現狀ニ依リ惹起セル無秩序狀態ノ存在ヲ口實トシテ違反スベカラズ」ト應答シ、右討論ニ列席シ居リタル數名ノ理事ハ

「日本臣民ノ生命財產ニ危險ヲ及ボスガ如キ事態發生スルコト有リ得ベク斯カル緊急ノ場合ニハ其ノ附近ノ日本軍ガ行動スルハ已ムヲ得ザルベキコト」ヲ容認シタリ。日本將校ガ本問題ニ關シテ委員ニ對シ證言ヲ提供シタル際該將校ハ常ニ十二月十日ノ決議ハ「日本ニ對シ」滿洲ニ於テ「其ノ軍隊ヲ維持スルノ權利ヲ賦與シ」若ハ日本軍ヲシテ同地方ニ於ケル馬賊討伐ノ責ニ任ゼシメタリト主張セリ。爾後ノ軍事行動ヲ說述スルニ當リ日本將校等ハ遼河附近ニ於テ土匪軍ニ對シ叙上權利ヲ行使スルニ際シ同時ニ錦州附近ニ殘留セル支那軍隊ト衝突シ其ノ結果支那軍隊ハ關內ニ撤退セラレタリト主張ス。卽チ「ジュネーヴ」ニ於テ留保ヲ爲シタル後日本ガ其ノ計畫ニ據リ引續キ滿洲ノ形勢ヲ處理セントシタルハ事實ナリ。

援軍ノ到着　齊々哈爾守備隊ヲ除キ第二師團ハ奉天西方ニ集中サレタリ。援軍ハ相次デ速カニ來着シ、第八師團ノ第四旅團ハ（玆ニ記載セル日本軍ノ部隊ノ番號及兵力ハ總テ日本側ノ公報ニ依ル）十二月十日ヨリ十五日ノ間ニ到着

セリ。更ラニ十二月二十七日朝鮮ヨリ第二十師團司令部並ニ一箇旅團派遣ノ御裁可ヲ得タリ。又長春並ニ吉林ハ差當リ獨立鐵道守備隊ニ依リテノミ保護セラレタリ。

支那軍隊撤退ニ關スル交渉ノ失敗 錦州ニ對スル日本軍進擊ガ切迫セル爲メ支那外交部長ハ、三乃至四箇國ガ錦州北方及南方ニ中立地帶維持ヲ保障スルノ意アルニ於テハ支那軍隊ノ關內撤退ヲ提議シ以テ戰爭ノ進展ヲ阻止センコトヲ企圖シタルモ、此ノ提議ハ何等效果ヲ收メザリキ。一方北平ニ於テ張學良ト日本代理公使トノ間ニ交渉行ハレタルモ之亦諸般ノ理由ニ依リ失敗ニ終レリ。支那側ハ其ノ調書第三號附屬書「ホ」中ニ十二月七日、二十五日、及二十九ニ於ケル訪問ノ度每ニ日本代理公使ハ支那軍隊ノ退却ニ關スル其ノ要求ヲ增大シ且ツ日本軍ノ抑制ニ關スル其ノ約束ハ益々曖昧トナレリト主張シ居レルニ對シ他方日本ハ支那ノ撤退ニ關スル約束ハ決シテ眞摯ナルモノニ非リシト論難ス

錦州攻擊 日本軍ノ集團的攻擊ハ十二月二十三日ヲ以テ開始セラレ而シテ支那第十九旅ハ其ノ陣地ヲ拋棄スルノ已ムナキニ至レリ。支那軍司令官ハ總退却ノ命令ヲ發シタルニ依リ、其ノ日ヨリ日本軍ノ進擊ハ整然トシテ行ハレ殆ンド何等抵抗ヲ受ケザリキ。斯クテ錦州ハ一月三日朝占領セラレ、日本軍ハ山海關即チ長城直下ニ至ルマデ進擊ヲ續ケ同地ニ於ケル日本守備隊ト恒久的接觸ヲ遂ゲタリ。

張學良軍ノ完全ナル滿洲撤退殊ニ相手ニ對シ殆ンド一擊ヲモ加ヘズシテ撤退セルハ長城以南ノ內部的情態ト關係ナカリシモノニ非ズ。相拮抗スル諸將領間ニ蟠マレル確執ニ就キテハ前章ニ記述セル所ナルガ此ノ確執ガ當時終熄セザリシコトヲ記憶スルヲ要ス。

哈爾賓占領 山海關ニ至ル進擊ガ比較的容易ニ遂行セラレタルコトハ日本ヲシテ其ノ軍隊ヲ原駐地ヨリ移動シ之ヲ他方面ノ進擊ニ使用スルヲ得セシメタリ。乃チ從來殆ンド戰鬪ノ全局ヲ擔當セル第二師團ノ主力ハ休養ノ爲メ遼陽、奉天並ニ長春ノ駐屯地ニ復歸シタリ。一方隨所ニ於テ受クル虞アル馬賊ノ襲擊ニ對シ保護ヲ加フベキ鐵道線路ノ延長ハ多數ノ軍隊使用ヲ必要トセルガ、該軍隊ハ斯ノ如キ廣汎ナル地域ニ分駐セシムル爲其ノ戰鬪力ハ殺減セラレタリ。第二十師團司令部ノ隷下ニ在ル二箇旅團ハコノ目的ニ對シ新占領地帶ニ殘留セシメラレ、而シテ第八師團ノ第四旅團ヘ更ラニ北方ニ於テ兩旅團ト連結シタリ。日本軍憲ハ此等ノ守備完全ナル地域內ニ於テハ安寧秩序ハ速カニ確立セラレ而シテ爾後數週間ニ馬賊ハ遼河ノ兩岸ニ於テ殆ンド其ノ影ヲ潛ムルニ至レリト確言セリ。此ノ聲明ハ六月ニ余等ニ對シ爲サレタルガ而カモ本報告書ヲ記述シツツアル際ニ當

リ余等ハ義勇軍ガ營口並ニ海城ヲ盛ニ侵攻シ奉天及錦州ヲサヘ襲撃セント威嚇シツツアル報道ニ接シタリ。

本年初頭ニ於テ最モ紛亂ヲ來セルハ哈爾賓ノ北方並ニ東方地方ニシテ該地方ニハ豫テ舊吉林及黑龍江政府當局ノ殘黨ガ移動シタリ。該北方地域ニ於ケル支那將領等ハ北平ノ本據ト若干ノ接觸ヲ保持シ居タリシモノノ如ク、北平ヨリ隨時或ル支援ヲ受ケタリ。曩ニ齊々哈爾ニ對シ行ハレタル如ク、哈爾賓ニ進撃ハ支那兩軍間ノ遭遇戰ヲ以テ開始セラレタリ。一月初旬煕洽將軍ハ哈爾賓占領ヲ目的トシ北方ニ遠征軍派遣ノ準備ヲ爲セリ。當時吉林ト哈爾賓間ニハ反吉林軍ト稱セラレタル軍隊ヲ率ユル丁超、李杜兩將軍蟠居シタリ。我々ノ假報告書ガ討議ニ附セラレツツアリシ際日本參與員ヨリ北平當局ノ聲援ダニ莫カリセバ兩當事者間ノ交渉ニ依リ滿足ナル條件ヲ協定シ得ベシトノ情報ヲ與ヘラレタリ。事實交渉ハ開始サレ而シテ交渉進行中煕洽將軍ハ麾下ノ軍隊ヲ率キテ双城子ニ進撃シ一月二十五日同市ヲ占領セルモ翌朝同市南方隣接郊外ニ於テ激戰ヲ交フルニ及ンデ右進撃ハ忽チ阻止セラレタリ。斯クシテ發生セル形勢ハ在哈爾賓多數日本居留民並ニ鮮人ニ取リ大ニ危險ナルモノト日本人ヲシテ思惟セシメタリ。蓋シ同市隣接地域ニ於ケル多少トモ不正規ナル二個ノ支那軍隊ノ間ノ戰鬪ハ敗退セル軍隊ガ同市ニ向ケ退却スルノ結果トナリシナラン。而シテ其ノ結果幾多ノ慘事ヲ惹起シタルベキハ支那近世史上多クノ實例ヲ見ルナリ。故ニ至急救援ノ要請ハ關東軍ニ向ケ發セラレ日本人ノ確言スル所ニ據レバ支那商人等スラ其ノ財產ノ劫掠セラルベキヲ恐レ此ノ要請ニ贊同シタリト言フ。

此ノ危急時ニ當リ日本特務機關事務局管理引繼ノ爲メ二十六日哈爾賓ニ派遣セラレタル土肥原大佐(現時少將)ハ委員會ニ對シ同市附近ニ於ケル支那兩軍ノ戰鬪ハ約十日間繼續シ、而シテ脅威セラレタル地區ニ主トシテ居住セル四千ノ日本居留民及哈市郊外普家甸ノ支那街ニアリテ虐殺ノ危險ニ曝露セラレ居リタル一千六百ノ鮮人ニ付多大ノ脅威存シタリト述ベタリ。尤モ反吉林軍ハ戰爭ノ續行セラレタル十日間同市ヲ保持セルモ日鮮居留民ノ死傷數ハ比較的僅少ナリキ。其ノ際日本居留民ハ義勇隊ヲ組織シ同胞ノ郊外支那街ヨリ脫出シ來ルコトヲ助ケタリ。同所ヲ脫出セントスルニ當リ日本人一名鮮人三名ガ虐殺サレタリト云フ。加之此ノ危急ナル形勢偵察ノ爲メ派遣セラレタル日本軍飛行機中ノ一臺ハ機關ノ故障ノ爲メ着陸ヲ餘儀ナクセラレ而シテ搭乘者ハ丁超軍ノ爲メニ虐殺セラレタリト云フ。叙上二個ノ事件ハ日本軍憲ヲシテ戰鬪ニ干渉スルノ決意ヲ爲サシメルニ至リ第二師團ハ再ビ危險ニ瀕セル同胞救助ノ任務ヲ帶

ブルコトトナレリ。然ルニ其ノ際長春以北ノ鐵道ガ露支合併タル關係上如何ニシテ軍隊ヲ輸送スベキカ、戰鬪ヨリモ重要ナル問題ナリシナリ。東支鐵道ノ南部線ニ於ケル車輛ハ大ニ減少シ居タルヲ以テ第二師團司令官ハ第一着手トシテ僅カニ長谷部將軍ノ率ユル步兵二箇大隊ヲ派遣スルニ決シ鐵道當局ト交渉ヲ開始セルモ該交渉遷延スベシト見ルヤ日本將校ハ軍隊輸送ヲ强行スルニ決シタリ。鐵道當局ハ之ニ對シ抗議シ列車ノ運轉ヲ拒絶シタルモ、其ノ反對ニ拘ラズ一月二十八日夜日本軍憲ハ三箇ノ軍用列車ノ仕立ニ成功セリ。右列車ハ松花江ノ第二鐵橋迄北上シ、同所ニ於テ同鐵橋ガ支那軍ニヨリ破壞セラレタルヲ發見シタリ。其ノ修理ハ翌二十九日ニ行ハレタルヲ以テ日本軍ハ三十日双城子ニ達シタリ。翌拂曉、天未ダ明ケザル時此ノ少數ノ日本軍隊ハ闇ニ乘ジテ來襲セル丁超軍ノ攻擊スル所トナリ、激戰ノ結果支那軍隊ハ擊退セラレタルモ、其ノ日ハ前進スルコト能ハザリキ。此ノ間露支鐵道當局ハ日本軍隊ガ單ニ在哈爾賓日本居留民保護ノ目的ヲ以テ前進シツツアリトノ諒解ノ下ニ東支鐵道ニ依ル日本軍隊輸送ヲ許可スルニ同意シタリ。是ニ於テ其ノ乘車賃ハ現金ヲ以テ支拂ハレ、二月一日日本軍隊ハ續々到着シ第二師團ノ主力ハ二月三日朝双城子附近ニ集結サレタリ。更ニ援軍ハ既說ノ如ク十一月十九日以來第二師團ノ一部ガ屯駐セル齊々哈爾ヨリモ亦召致セラレタリ。而カモ哈爾賓齊々哈爾間ノ鐵道ハ支那軍ノ爲メニ破壞セラレタルガ故ニ猶幾多ノ困難ヲ克服スルヲ要セリ。支那軍ハ又同時ニ各處ニ於テ東支鐵道南部線沿線ノ獨立鐵道守備隊ヲ攻擊シタリ。是レヨリ先キ二月三日今ヤ砲十六門ヲ有シ、其ノ總兵力約一萬三千乃至一萬四千ト算セラレタル反吉林軍ハ同市南方境界ニ沿ヒテ塹壕陣地ヲ構築シタリ。同日第二師團ハ此ノ陣地ニ對シ前進ヲ開始シ三日夜ヨリ四日ニ至ル間ニ双城子ノ北方約二十哩ノ南城子河ニ達シ、翌朝戰鬪ハ開始セラレタリ。四日夕支那軍陣地ノ一部ハ日本軍ノ占領スル所トナリ越エテ五日正午迄ニ最後ノ結末ヲ告ゲタリ。哈爾賓ハ同日午後占領サレ、支那軍ハ三姓ニ向ケ退却シタリ。

一九三二年八月末迄ノ日本軍事行動ノ進展　第二師團ノ攻擊成功ニ依リ哈爾賓市ハ日本軍憲ノ手ニ歸シタルモ右攻擊ニ次グニ直チニ敗退支那軍ノ追擊ヲ以テセザリシ爲メ全局的ニハ北支ノ形勢ニハ何等ノ變化ヲ齎サザリキ。哈爾賓北方及東方ノ鐵道並ニ松花江ノ重要ナル水路ハ依然反吉林軍及ビ馬占山軍ノ支配ニ委セラレタリ。故ニ占領地域ガ北ニ於テハ海倫、東ニ於テハ方正、海林地方ニ擴大セラルル迄援軍ノ增派、東方並ニ北方ニ向ケテノ遠征軍ノ反覆的派遣及六箇月ニ亙ル戰鬪ハ行ハレタリ。日本側ノ公表ニ依レ

バ馬占山軍ト合セル反吉林軍ハ全ク撃破セラレタリト傳ヘラルルモ、支那側ノ公報ニ依レバ同軍ハ今猶ホ存在スト云フ。其ノ戰鬪力ハ減殺セラレタリト雖モ反吉林軍ハ絕エズ日本軍ノ行動ヲ妨ゲ同時ニ戰場ニ於ル實際的會戰ヲ囘避シツツアリ。新聞報道ニ據レバ東支鐵道東部、西部兩支線ハ依然哈爾賓海林間ノ各所ニ於テ襲撃ヲ受ケ破壞セラルルノ現狀ナリ。

二月初頭以來ノ日本軍ノ行動ハ次ノ如ク略說スルヲ得ベシ。

三月末頃第二師團ノ主力ハ丁超及李杜ノ反吉林軍討伐ノ爲メ方正方面ニ向ケ哈爾賓ヲ出發セリ。同師團ハ三姓地方迄前進シタル後四月初旬哈爾賓ニ歸還セリ。此ノ部隊ハ約一箇月間其ノ主力ヲ以テ三姓附近ニ於テ又其ノ小枝隊ヲ以テ海林方面ニ於テ東支鐵道東部線ニ沿ヒ反吉林軍ト不斷ノ戰鬪ニ從ヒタリ。

五月初旬北滿ノ日本軍ハ更ラニ第十四師團ノ增援ヲ受ケタリ。同師團ノ一枝隊ハ反吉林軍トノ戰鬪ニ參加シ三姓ノ南方牡丹江溪谷ニ進出シ敵對軍ヲシテ吉林省ノ最北方隅ニ退却スルノ餘儀ナキニ至ラシメタリ。而カモ五月下旬ニ開始サレタル第十四師團ノ主要行動ハ哈爾賓ノ東方地方ニ行ハレ馬占山軍攻撃ヲ目的トシタリ。同師團ハ呼蘭―海林鐵道ニ沿ヒテ哈爾賓ノ北方マデ主要ナル攻撃ヲ遂行シ又小部隊ヲ以テ齊々哈爾―克山鐵道ノ終點タルベキ克山ヨリ東方ニ向ヒテ攻撃ヲナセリ。日本側ハ八月初旬馬占山軍ハ再ビ有效ニ撃破セラレ且ツ馬占山ガ死亡セル確證ヲ有スト主張スルモ、支那側ハ馬占山ハ今猶ホ生存セリト確言ス。此ノ戰鬪ニ於テハ日本ヨリ新タニ到着セル騎兵部隊モ亦參加シタリ。

八月中數回ノ小規模ナル戰鬪ハ奉天熱河兩省ノ境界主トシテ鐵道ニヨリ熱河ニ至ル唯一ノ途タル(京奉鐵道ノ)錦州―北票支線附近ニ於テ行ハレタリ。支那ニ於テハ此等ノ戰鬪ハ單ニ日本軍ノ熱河占領ヲ目的トスル一層大規模ナル軍事行動ノ序幕ニ過ギズトノ危惧廣ク行ハル。今モ猶ホ支那本部ト滿洲ニ於ケル支那軍トノ間ニ存スル主要交通路ハ熱河ヲ貫通スルヲ以テ旣ニ滿洲國領土ノ一部ト主張セラルル熱河省ニ對スル日本軍攻撃ノ危惧ハ强チ無稽ノ事ニ非ズ。右攻撃ノ切迫セルハ日本新聞ノ公然論議スル所ナリ。

最近ノ事件ニ關シ日本參與員ガ委員會ニ提出シタル日本側說明ハ左ノ如シ。

石本ト呼ブ關東軍附官吏ハ七月十七日支那「義勇軍」ノ爲メ熱河省內ニ於テ北票錦州間ニ運轉セラルル一列車ヨリ拉致セラレタリ。輕砲ヲ有スル日本軍ノ步兵小部隊ハ直チ

ニ同氏救出ヲ企テタルモ其ノ目的ヲ達スル能ハズ、其ノ結果日本軍ハ熱河省境ノ一村落ヲ占領セリ。

七月下旬並ニ八月中日本軍ノ飛行機ハ熱河ノ同地方上空ヲ數回飛翔シ數個ノ爆彈ヲ投下シタルモ而カモ愼重ニ「諸村落外ノ無住地域」ヲバ選ビタリ、次イデ八月十九日日本軍參謀將校一名石本氏釋放方交渉ノ爲メ北票ト省境間ニ位スル小都邑南嶺ニ派遣サレタルガ少數ノ步兵部隊ヲ隨ヘテ歸還ノ途中將校ハ射撃サレタルヲ以テ自衞上應戰シ他ノ步兵部隊ノ到着ト共ニ南嶺ヲ占領セルガ翌日同地ヲ撤退セリ。支那參與員ハ熱河省長湯玉麟ノ報告中ヨリ摘錄セルモノヲ委員會ニ提出セルガ右報告ハ敍上戰鬪ハ遙カニ大規模ニ行ハレ而シテ鐵道守備隊ノ支那兵一箇大隊ハ二裝甲列車ニ支持セラレタル優勢ノ日本軍步兵部隊ト交戰シタルコト並ニ日本側ノ謂フ所ノ爆撃ハ同地方大都邑ノ一タル朝陽ヲ目標トセルコト並ニ其ノ結果軍隊及住民間ニ三十名ノ死傷ヲ出セルコトヲ主張ス。八月十九日日本軍ノ攻撃ハ一裝甲列車ノ南嶺攻撃ト共ニ再ビ開始サレタリ。

日本參與員ノ提供セル情報ノ末尾ニ於テ熱河ニ於ケル秩序ノ維持ハ「滿洲國國內政策ノ一事項タリト雖モ日本ハ滿蒙ニ於ケル平和ト秩序ノ維持ニ關シ其ノ重要ナル責務ヲ有スルニ鑑ミ同地方ノ形勢ニ無關心ナル能ハズ、且ツ熱河ニ於ケル如何ナル紛亂モ直チニ滿蒙全體ニ重大ナル反響ヲ惹起スベキ」コトヲ說敍ス。

一方湯玉麟將軍ハ其ノ報告ノ末尾ニ於テ日本軍ノ攻撃再開セラルル場合ハ有效ナル抵抗ヲ爲スベク、有ラユル可能的方法ヲ採用シツツアリト述ブ。

此等ノ報告ニ顧ミレバ此ノ地方ニ於ケル戰鬪地域ノ擴大ハ正ニ考慮セザルベカラザル事項ナリ。

支那側ノ抵抗ノ性質　支那軍ノ主要部隊ハ一九三一年末關內ニ撤退セラレタルモ日本軍ハ滿洲各地ニハテ絕エズ不規則的ナル抵抗ニ遭遇セリ。曾テ嫩江ニ於テ行ハレシガ如キ戰鬪ハ最早起ラザリシモ戰鬪ハ不斷ニシテ且廣汎ナル地方ニ亙リテ諸所ニ之ヲ見タリ。日本人ハ現今自己ニ反抗スル有ラユル部隊ヲバ無差別ニ「匪賊」ト稱スルヲ常トセリ。事實ニ於テハ匪賊ノ外日本軍隊若クハ「滿洲國」軍隊ニ對スル組織アル抵抗ヲ爲スモノニ截然タル二種別アリ。卽チ支那正規軍隊並不正規軍隊是ナリ。

右兩軍隊ノ兵數ヲ概算スルハ至難ニシテ、委員一行ハ依然戰鬪ニ從事シツツアル何レノ支那將領トモ會見スルヲ得ザリシヲ以テ下記情報ノ確實性ニ就キ留保ヲ爲スノ必要アリ。支那當局ハ滿洲ニ於テ今猶ホ日本軍ニ對スル抵抗ヲ持續シツツアル軍隊ニ關スル正確ナル情報ヲ與フルヲ欲セザ

ルハ當然ナリ。他方日本當局ハ自己ニ抵抗ヲ續ケツツアル軍隊ノ戰鬪價値ヲ最小限度ニ局量セントスル傾向アリ。

舊東北軍ノ殘黨　舊東北軍ノ殘黨ハ全ク吉林黑龍江兩省ニ於テノミ之ヲ看ル。一九三一年末錦州ヲ繞リテ行ナハレシ軍隊ノ改編ハ是等ノ全テノ部隊ガ其ノ後關內ニ撤退セラレタルヲ以テ永續セザリキ。而モ一九三一年九月以前松花江地方並ニ東支鐵道沿線ニ駐屯セラレタル支那正規軍隊ハ未ダ曾テ日本軍ト激戰ヲ交ヘタルコトナク、從來日本軍隊並ニ「滿洲國」軍隊ニ對シ多大ノ困惑ヲ與ヘ且ツ今猶ホ與ヘツツアル奇襲戰ヲ繼續ス。馬占山、丁超、李杜ノ三將領ハ此等軍隊ノ指揮者トシテ支那全土ヲ通ジテ盛名ヲ博シタリ。右三將領ハ曩ニ北滿ニ於ケル護路軍若ハ駐屯軍ノ司令タリシ旅長ナリ。恐ラク其ノ麾下ニ在リシ軍隊ノ大半ハ各其ノ指揮者及張學良政府破壞後ノ支那ノ主張ニ忠誠ヲ盡シタルナラン。馬占山軍ノ勢力ハ同將軍カ其ノ忠誠ヲ變改セルヲ以テ容易ニ測定スルヲ得ズ、黑龍江省長トシテ馬占山ハ省軍隊全部ヲ統率シタルガ余等ニ提示セラレタル兵數ハ合計七箇旅ヲ算セリ。四月以降彼ハ日本並ニ「滿洲國」ニ對シ明ラカニ反對ノ立場ヲ執レリ。呼蘭河、海倫、大平河間ニ在リテ馬占山ノ有セシ兵力ハ日本當局ノ概算ニ依レバ六箇聯隊卽チ七千乃至八千ナリ。丁超並ニ李杜ハ舊張學良軍ノ六箇旅ヲ支配シ且ツ爾來同地方ニ於テ更ニ三箇旅ヲ徵募シ、假報告作製當時日本當局ハ其ノ總勢力ヲ約三萬ト概算シタリ。然レドモ馬占山軍及丁超、李杜軍ハ四月以來著シク其ノ兵數ヲ減ジ現今敍上概算數以下ニ在リト看ルハ恐ラク妥當ナラン。

下段ニ記スル如ク此等兩軍ハ哈爾賓占領以來日本正規軍ノ集中攻擊ニ依リ大損害ヲ被ムレリ。現在兩軍ハ日本軍ノ如何ナル行動ヲモ阻ム能ハズシテ努メテ公然日本軍ト會戰スルヲ回避ス。日本軍ノ飛行機ヲ使用スルニ反シ支那軍ガ全然此ノ武器ヲ缺如セルコトハ從來支那軍ノ被ムリタル損害ノ大半ノ原因ヲナスモノナリ。

不正規軍ヲ考慮スルニ當リテハ丁超李杜軍ト協力シタル吉林省各種義勇軍ヲ區別スルコト必要ナリ。一九三二年四月二十九日ノ調査團假報告ニ於テハ調査團ハ第五頁ニ義勇軍ナル題下ニ三種義勇軍及七種ノ小集團ヲ揭ゲタルガ後者ノ一ハ敦化及萬寶山間ニアリテ丁超李杜軍隊ト連絡ヲ保チツツアルモノナリ。右集團ハ之等域地ニ於ケル鐵道及其他交通機關ノ缺如ニ依リ今尙其地位ヲ保持シツツアリ。其ノ長タル王德林ハ各種反滿洲國軍ヲ集メ之ヲ堅ク其ノ支配下ニ置キ居レリ。本集團ハ日本軍（日本軍ハ敦化以東ニ於テハ何等活動ヲ示シ居ラザルガ）ニ比シ其ノ重要サ僅少ナル

ヤモ知レザルモ滿洲國軍ニハ對抗シ得ルガ如ク見エ、吉林省ノ廣キ地域ニ於テ其ノ地位ヲ維持シ居レリ。

王德林ト連絡ヲ有シ間島地方ニ於テ相當妨害ヲナセル大刀會ノ現在ノ活動ニ付テハ何等確證得ラレズ。他方日本軍ハ大刀會ニ對シ何等重要ナル軍事行動ヲ執ラザリキ。

多數ノ所謂路軍及他ノ支那軍ヲ掲記セル日本側ノ一公式文書調査國ニ提出セラレタリ。右路軍及支那軍ハ各々二百乃至四百名ヨリ成リ、右ハ義勇軍ノ小單位ヲナスモノナリ。之等支那軍ノ活動區域ハ奉天及安奉線附近ノ地區、錦州、奉天、熱河省境、東支鐵西部線及新民屯奉天間ノ地方ニ及ブ。斯ノ如ク義勇軍及反吉林軍聯合ノ占據シ居ル地域ハ滿洲ノ大部分ヲ含ム。

八月中旬奉天近郊、南滿洲鐵道ノ南部各地殊ニ海城及營ロニ於テ交戰行ハレタリ。數度日本軍ハ苦戰セルガ義勇軍ハ何レノ地ニ於テモ何等重要ナル勝利ヲ得ル能ハザリキ。滿洲ノ一般狀態ガ近キ將來ニ於テ何等カ變更ヲ見ルコト豫想セラルベキヤ否ヤ疑ハシキガ如キモ本報告完成ノ際ニハ交戰ハ廣汎ナル地域ニ亙リ繼續セラレ居レリ。

匪賊　支那ニ於ケルト同樣滿洲ニ於テモ匪賊ハ常ニ存在シタリキ。職業的匪賊ハ政府ノ强弱ニ應ジ其數或ハ大トナリ或ハ小トナリテ東三省ノ凡ユル地域ニ存シ、政治的目的ノ爲メ各黨派ニ依リ用キラレタリ。支那政府ハ調査國ニ對シ最近二十年又ハ三十年ノ間ニ日本側ノ手先ガ其ノ政治的目的ヲ遂グル爲メ非常ニ匪賊ヲ使嗾セル旨述ベタル書類ヲ提出セリ。右書類ニハ南滿洲鐵道出版ノ「一九三〇年ニ於ケル滿洲開發ニ關スル第二回報告」ノ一節引用セラレアルガ右ニ依レバ附屬地内ニ於テスラ匪賊ノ數ハ一九〇六年ノ九件ヨリ一九二九年ノ三百六十八件ニ增加シタル由ナリ。上述支那側書類ニ依レバ匪賊ハ大連及關東州ヨリノ大規模ノ武器密輸入ニ依リ奬勵セラレタル由。例ヘバ有名ナル馬賊頭目凌印情ハ昨年十一月所謂獨立自衞軍組織ノ爲武器彈藥其他供給セラレタル旨述ベラレアリ。右自衞軍ハ三人ノ日本側手先ノ助力ニ依リ組織セラレ且錦州攻擊ヲ目的トセルモノナリ。右企ガ失敗セル後他ノ匪賊頭目ガ同樣ノ目的ノ爲日本側助力ヲ得タルガ日本製ノ材料ト共ニ支那軍ノ手ニ捕ハレタリ。

勿論日本官憲ハ滿洲匪賊ニ關シ別種ノ見方ヲナシ居レリ。日本官憲ニ依レバ匪賊ノ存在ハ全然支那政府ノ無能ニ基クモノナリ。日本官憲ハ又張作霖ハ或程度迄其領土内ニ匪賊ノ存スルヲ支持シタリト稱ス。何トナレバ作霖ハ非常時ニハ匪賊ハ容易ニ兵卒ニ改編セラレ得ベシト思考シタレバナリ。日本官憲ハ張學良政府及其ノ軍ノ完全ナル打倒ガ

大ニ滿洲匪賊數ヲ增加セシメタル事實ヲ肯定スル一方日本軍ガ滿洲ニ在ル結果二、三年間ニ主要匪賊團ハ掃蕩セラレ得ベキ旨主張ス。日本官憲ハ滿洲國警察及各部落ニ於ケル自衛團ノ組織ガ匪賊ヲ消滅セシムルニ役立ツベキコトヲ望ミ居レリ。現在ノ匪賊ノ多クハ元來良民ニシテ其ノ財產ヲ凡テ失ヒタル爲メ現在ノ職業ニ投ズルニ至レルモノト信ゼラレ居レリ。農工ノ業ヲ再ビ營ム機會アラバ之等匪賊ハ從前ノ平和的生活ニ復歸スベキコト望マレ居レリ。

第五章　上海

上海事件　一月末上海ニ於テ戰鬪發生セリ。二月二十日迄ノ本事件ノ經過概要ハ聯盟ノ任命セル領事團委員會ニ依リ既ニ報告セラレタリ。領事團ガ二月二十九日東京ニ到着セル時戰鬪ハ猶ホ進行中ニシテ、上海ニ於ケル日本政府ノ武力干渉ノ起因、動機、及結果ニ關シ調査團ハ同政府當局者ト數度討議ヲ行ヒタリ。調査團ガ三月十四日上海ニ到着セル時ハ戰鬪ハ終了シ居タルモ停戰交渉ハ難關ニ在リタル次第ニテ恰モ此ノ時ニ當リ調査團カ到着シタルコトハ機ヲ得タルモノニシテ良好ナル空氣ヲ助成セシヤモ知レズ。調査團ハ最近ノ敵對行爲ニ基ク緊張セル感情ヲ諒解シ且又本紛議ニ關聯スル困難及問題ノ双方ニ付直接且明確ナル印象ヲ得タリ。調査團ハ領事團委員會ノ事業ヲ引繼ギ又ハ上海ニ發生セル最近ノ出來事ニ付特ニ研究スベキ旨ノ訓令ヲ受ケタルコトナク却テ調査團ハ支那政府ニ於テハ調査團ガ上海ニ於ケル事態調査ノ爲其ノ滿洲ニ赴クコトヲ延引スベシトノ如何ナル案ニモ反對ノ意向ヲ表示シタル旨聯盟事務總長ヨリ通報ニ接シ居タリ。

調査團ハ上海事件ニ關スル日支兩國政府ノ意見ヲ聽取シ又本問題ニ關スル多數ノ文獻ヲ日支双方ヨリ接受セリ。尙調査團ハ戰禍ヲ蒙レル地域ヲ視察シ日本陸海軍將校ヨリ最近ノ軍事行動ニ關スル陳述ヲ聽取シタリ。又個人ノ資格ニ於テ調査團ハ上海在住ノ何人ノ記憶ニモ新ラシキ事實ニ關シ各種ノ意見ヲ代表スル人士ト會談セリ。然レドモ調査團トシテハ正式ニ上海事件ヲ調査スルコトナク從テ之ニ關聯スル爭點ニ關シ何等意見ヲ表示セザリキ。然レドモ調査團ハ記錄ノ爲二月二十日以降日本軍ノ最後ノ撤收ニ至ル迄ノ軍事行動ノ敍述ヲ完成スベシ。

二月二十日以降上海事件ノ記述　領事團委員會ノ最終報

告ハ二月二十日日本側ガ江灣及吳淞地方ニ於テ新タナル攻擊ヲ開始シタル旨ノ記述ニテ筆ヲ止メタリ。右攻擊ハ其ノ後引續キ行ハレタルニ拘ラズ日本軍ニトリテ何等顯著ナル成功ヲ齎ラサザリシガ日本軍ハ其ノ結果所謂支那警衛師卽第八十七師及第八十八師ノ一部ガ今ヤ第十九路軍ト同樣日本軍ト戰ヒツツアルヲ知ルヲ得タリ。此事實及地勢ニ基ク困難アリシ爲日本側ハ二個師團卽第十一師團及第十四師團ヲ增派スルコトヲ決定セリ。

二月二十八日日本軍ハ支那側ノ撤去セル江灣西部ヲ占領セリ。同日吳淞要塞及楊子江上ノ諸砲壘ハ再ビ空中及海上ヨリ爆擊セラレ爆擊機ハ虹橋飛行場及滬寧鐵道ヲ含ム全戰線ニ亙リ活動セリ。日本軍司令官ニ任命セラレタル白川大將ハ二月二十九日上海ニ到着セリ。同日以後日本軍司令部ハ着々ト前進ノ旨報ゼリ。江灣地方ニテハ日本軍ハ徐々ニ前進セルガ海軍司令部ハ連日砲擊ノ結果閘北ニ於ケル支那軍ハ退却ノ兆アル旨報ゼリ。同日上海ヨリ百哩隔タレル杭州飛行場ニ對スル空中爆擊行ハレタリ。

三月一日前線ノ攻擊ノ進捗遲々タリシヲ以テ日本軍司令官ハ七了口附近ノ楊子江右岸ニ第十一師團主力ヲ上陸セシメ支那軍左翼ヲ奇襲セムガ爲廣汎ナル包圍運動ヲ開始セリ。本軍事行動ハ成功シ支那軍ハ日本軍司令官ノ二月二十日附最後通牒中ニ要求セル二十粁線外ニ直ニ退却スルノ已ムナキニ至レリ。三月三日日本軍カ空中及海上ヨリノ爆擊後吳淞要塞ニ入リタルトキハ支那軍ハ旣ニ撤去シ居タリ。其ノ前日滬寧鐵道ノ崑山停車場ノ東七粁ノ地點迄爆擊行ハレタルガ右ハ支那軍前線ヘノ援軍輸送阻止ノ爲メナトリト稱セラル。

三月三日午後日本軍司令官ハ停戰命令ヲ下シタリ。支那軍司令官ハ三月四日同樣ノ命令ヲ發セリ。支那側ハ日本軍第十四師團ガ戰鬪行爲停止後三月七日ヨリ三月十四日ノ間ニ上陸シ約一ケ月後在滿日本軍救援ノ爲滿洲ニ輸送セラレタルコトヲ强硬ニ抗議セリ。其間友好國及聯盟ノ斡旋ニ依リ停戰確保ニ對スル試續ケラレ居タリ。二月二十八日英國提督「サー・ホワード・ケリイ」ハ旗艦ニ日支代表ヲ接受シ、相互且同時撤退ノ基礎トスル暫行的協定提議セラレタルガ右會議ハ交涉ノ基礎ニ關スル意見相違ノ爲ニ成功ヲ見ルニ至ラザリキ。

二月二十九日聯盟理事會議長ハ特ニ「地方的取極ヲ爲スコトヲ條件トシ戰鬪ノ終極的終了及決定的停戰ノ爲他ノ關係國參加ノ下ニ共同會議開催方ヲ勸告セリ。兩當事國ハ之ヲ受諾セルモ日本代表ガ（一）支那側ガ最初ニ撤退スベク（二）其撤退實行ヲ確メタル後日本側ハ撤退スベシ但シ右ハ

以前モ述ベラレ居タルガ如ク共同租界及擴張道路ヘノ撤收ニアラズシテ、上海ヨリ呉淞ニ及ブ地域ヘノ撤收ナリトノ條件ヲ出セル爲交渉ハ成功ヲ見ルコト能ハザリキ。三月四日聯盟總會ハ理事會ノ提案ニ言及シ（一）日支兩國政府ニ戰鬪行爲停止ヲ確實ナラシメンコトヲ求メ（二）關係國ニ對シ前項ノ實行ニ關シ情報提出方ヲ求メ（三）戰鬪行爲停止ヲ確實ナラシメ且日本軍ノ撤收ヲ定ムル取極締結ノ爲メ列國援助ノ下ニ交渉ヲ開始セムコトヲ勸告スルト共ニ右交渉ノ進行ニ付列國ヨリ情報ヲ受ケンコトヲ希望セリ。

三月九日日本側ハ英國公使ヲ通ジ聯盟總會ノ定メタル基礎ニ依リ商議スル用意アル旨述ベタル覺書ヲ支那側ニ送付セリ。

三月十日支那側ハ同樣英國公使ヲ通ジ右基礎ニ依リ交渉スルノ用意アルモ會議ガ戰鬪行爲ノ決定的停止及日本軍ノ完全且無條件ノ撤退ニ關スル事項ニ限ラルルコトヲ條件トスル旨回答セリ。三月十三日一日本側ハ支那側ノ留保ハ聯盟ノ諸決議ヲ變更シ又ハ如何ナル意味ニ於テモ日本側ヲ拘束スルモノト認メザル旨ヲ通報セリ。日本側ハ日支双方ハ聯盟決議ノ基礎ノ上ニ會合スベキモノナリト思考セリ。

ノ撤收ハ現實ニ開始セラレタリ。三月八日海軍及航空部隊ハ上海ヲ去リ其結果殘留日本兵力ハ「常數ヲ超過スルコト遠カラサルモノ」トナレリ。日本軍司令部ハ三月二十七日更ニ撤收ヲ行フニ際シ右撤收ハ上述會議又ハ聯盟トハ何等關係ナク、單ニ上海ニ最早必要ナラザル部隊ヲ歸還セシメムトスル日本陸軍司令部ノ獨自ノ決定ニ過キザル旨聲明セリ。

三月三十日停戰會議ハ前日戰鬪行爲ノ決定的停止ニ關スル協定成立セル旨發表セルモ更ニ難問題發生シ五月五日ニ至リ漸ク完全ナル停戰協定ヲ調印シ得ルノ運ビヲ見ルニ至レリ右協定ハ戰鬪行爲ノ決定的停止ヲ定メ、正常狀態恢復シタル後更ニ取極アルマデ上海ノ西方ニ支那軍ノ進出ヲ一時制限スベキ線ヲ劃定シ又一月二十八日ノ事件以前ニ於ケルガ如ク共同租界及租界外擴張道路上ヘ日本軍ノ撤收ヲ定メタリ。但シ日本軍ノ數ハ共同租界內ニノミ駐屯セシムルニハ多キニ過ギタルヲ以テ共同租界外ノ若干地域ハ當分ノ間包含セラルベキモノトナリタルガ其後日本軍撤去セルヲ以テ此等ノ地域ニ付テハ記述ノ要ナシ。米英佛伊ノ友好國並ニ兩當事國ノ參加セル共同委員會ヲ設置シ双方ノ撤退ヲ確ムルコトトシ本委員會ハ亦日本軍ヨリ支那警察ヘノ引繼

支那側ハ停戰協定ニ二個ノ留保ヲ附加セリ。第一ノ留保ハ協定中ノ如何ナル規定モ支那領土内ニ於ケル支那軍ノ行動ヲ永久的ニ制限スルコトヲ意味セザル旨ノ聲明ニシテ第二ノ留保ハ日本軍駐屯ノ爲暫時設ケラレタル地域ニ於テモ警察ヲ含ム一切ノ地方行政ハ支那官憲ノ手ニ存スベキ旨ノ聲明ナリ。

停戰協定ノ條項ハ大體主要部分ニ於テ履行セラレタリ。撤退地域ハ五月九日及同月三十日ノ間ニ支那特別警察ニ引渡サレタリ。但シ之等四地域ノ引繼ハ多少延引ヲ見タリ。家屋及工場ヲ所有スル支那人、鐵道會社ノ役員及其他ノ者ガ撤退地域ニ復歸シ始メタルトキ掠奪、故意ノ破壞及財產喪失ニ關シ多數ノ苦情ガ日本當局ニ提起セラレタルハ蓋シ自然ノコトナリ。支那側ニ於テハ賠償ニ關スル全問題ハ將來商議セラルベキモノナリトシ死傷及行方不明ノ將卒及人民ノ數二萬二千四百、物質的損害全額ハ略々十五億墨弗ニ達スト推定シ居レリ。租界外擴張道路地域ニ關スル協定草案ハ上海工部局及支那大上海市政府代表ニ依リ著名セラレタリ。然レドモ本案ハ未ダ上海工部局又ハ市政府ノ何レヨリモ承認ヲ得ズ、工部局ハ領事團ノ意見ヲ求ムル爲首席領事ニ本案ヲ移牒セリ。

上海ニ於ケル支那側抵抗ノ滿洲ノ事態ニ及ボセル影響

上海事件ハ疑モナク滿洲ニ於ケル事態ニ著シキ影響ヲ及ボセリ。日本側ガ容易ニ滿洲ノ大部分ヲ占領シ得タルコト及支那軍ヨリ何等抵抗ヲ受ケザリシコトハ單ニ日本陸海軍側ヲシテ支那軍ノ戰鬪力ガ無視シ得ベキ程ノモノナリト信ズルニ至ラシメタルノミナラズ全支那ヲシテ大ニ意氣沮喪セシメタリ。然ルニ第十九路軍ガ最初ヨリ第八十七師及第八十八師ノ援助ノ下ニ試ミタル强硬ナル抵抗ハ全支那ニ於テ熱狂的歡呼ヲ受ケタルガ當初ハ三千ノ日本陸戰隊ニ三個師團及一混成旅團ノ應援加ハリ六週間ノ戰鬪ノ後漸ク支那軍敗退驅逐セラレタルノ事實ハ支那側士氣ニ多大ノ印象ヲ與ヘ支那ハ其自身ノ努力ニ依リテ救ハレザルベカラズトノ感情擴マレリ。日支紛爭ハ支那全民ノ念頭ニ入リ支那各地何レニ於テモ支那人ノ意見强硬トナリ抵抗心增加シテ從前ノ消極主義ハ消去リ誇張セル樂觀主義行ハルルニ至レリ。滿洲ニ於テハ上海ヨリノ報道ハ當時尙ホ日本軍ト戰ヒツツアリシ各地支那軍ニ新ナル勇氣ヲ與ヘタリ。右報道ハ馬占山其後ノ抵抗ヲ强ムルコトトナリ又世界各地ニ在ル支那人ノ愛國心ヲ刺戟セリ。義勇軍ノ抵抗モ增大セルガ爲之等支那軍討伐ハ捗シキ成功ヲ收メズ、或地方ニ於テハ日本軍ハ鐵道沿線ニ陣地ヲ占メ守勢ヲ執リ居リタルガ右鐵道モ屢支那側ノ攻擊ヲ受ケタリ。

一九三二年二月一日ノ南京事件　上海ニ於ケル交戰ニ件ヒ數個ノ事件發生セルガ其ノ一ハ南京砲擊ナリ。本事件ハ支那以外ニ於テモ多大ノ昂奮ト驚愕トヲ生ゼシメタルガ右ハ二月一日ノ深更發生セルモ一時間以上ハ繼續セザリキ。本件ハ多分誤解ニ基クモノナランガ、支那政府ノ南京ヨリ洛陽ヘノ臨時遷都ナル重大ナル結果ヲ招來セリ。

南京事件ノ原因及事實ニ關スル日支双方ノ解釋ニハ非常ナル懸隔アリ。日本側ヨリ調査國ニ提出セル主張二アリシガ、第一ハ上海ノ戰鬪發生後支那側ハ獅子山砲臺ヲ擴張シ塹壕ヲ築キ、江畔ノ城門及江ノ反對側ニ砲兵陣地ヲ設ケ江ニ軍艦ヲ碇泊セシメ居タル日本側ニ心配ヲ生ゼシムルニ足ルガ如キ規模ノ軍事施設ヲナセリト云フニ在リ。第二ハ支那新聞ハ上海支那軍ノ勝利ノ虛報ヲ擴メ南京支那人ヲ大ニ昂奮セシメ其ノ結果日本側ノ云フ所ニ依レバ日本人雇傭ノ支那人ハ其職ヲ去ル樣脅迫セラレ支那商人ハ領事館員及軍艦乘組員外日本在留民ニ食料品供給ヲ拒絕スルニ至レリト云フニアリ。

支那側ハ之等ノ主張ニ對シ何等批評ヲ加ヘズ。支那側ハ當時一般ノ不安及緊張セル空氣ハ日本側ガ上海事件發生後碇泊軍艦數ヲ二隻ヨリ五隻ニ增加シ次テ七隻（日本側當局ヘ右數ヲ六隻ナリトシ三砲艦及三驅逐艦ナリトス）ニ増加シタルニ基クモノナル旨又日本海軍司令官ハ水兵若干ヲ上陸セシメ之ヲ日本領事館員及全日本居留民ガ「ハルク」ニ避難セル日清汽船埠頭ノ前ニ步哨トシテ配置セルガ上海事件ノ記憶尙ホ新タナル際斯カル措置ハ既ニ南京ノ昂奮セル人民ヲシテ同樣事件發生セザルヤトノ恐怖ノ念ヲ生ゼシメタルナラント稱ス。

調査國ハ南京警察署長ガ外交部長ニ提出セル報告ニ依リ南京ノ支那住民及外國人ノ保護ニ全責任ヲ有スル南京當局ガ日本水兵ノ上陸ニ對シ忿懣ヲ抱キ居タル旨ヲ知レリ。南京當局ハ日本副領事ニ對シ數度抗議ヲナセルガ同副領事ハ右上陸ニ關シ何等ノ處置ヲ執リ得ザル旨答ヘタリ當時軍艦碇泊シ居リ上記埠頭ノ存スル下關ノ地方警察署ニ對シ出來得ルナラバ同方面ニ於ケル日支接觸殊ニ夜間ニ於ケル如何ナル接觸ヲモ阻止スル樣特別ノ訓令發セラレタリ。日本側公報ニ依レバ日本人避難民ハ二月二十九日以後日淸汽船會社ノ一汽船內ニ收容セラレ其ノ多數ハ上海ニ送ラレタル由ナリ。日本側ハ二月一日深更三發ノ砲彈突如發セラレタルガ右ハ獅子山砲臺ヨリナサレタルモノト認メラルル旨述ベ居レリ。右ト同時ニ支那軍正規兵ハ河畔ニアリシ日本海軍步哨ニ向ヒ發砲シ二名ヲ負傷セシメタルガ其ノ中一名ハ死亡セリ。右攻擊ニ對シ反擊加ヘラレタルガ右ハ步哨上陸地

點直近ノ箇所ニノミ向ケラレ岸ヨリ發砲止ムヤ直ニ停止セラレタリ。

以上ハ日本側ノ述ブル所ナルガ支那側ハ之ニ對シ發砲ノ事實ヲ否定スルト共ニ日本側ヨリ砲臺、下關停車場及其他ノ場所ニ合計八發ノ砲彈發セラレ且機關銃及小銃射擊行ハレタル旨並ニ右ノ間「サーチライト」ガ岸ニ向ケラレタル

第六章　滿洲國

第一節　「新國家」建ノ段階

日本軍ノ奉天占領ノ結果招來セル混亂狀態　前章ニ於テ說述セル如ク一九三一年九月十八日事件ノ結果奉天市ノ市行政及ビ奉天省ノ省行政ハ完全ニ破壞セラレ延イテ其他ノ二省ノ省行政ニ至ル迄程度ハ少キモ影響ヲ蒙リタリ。奉天ニ對スル攻擊餘リニ急速ナリシ爲メ全滿洲ノ政治的中心ナルノミナラズ大連ニ次イデ南滿洲ノ最モ重要ナル商業的中心タル同市ハ支那人民ノ間ニ恐慌ヲ惹起スルニ至レリ。著名ノ官公吏竝ニ敎育界及ビ商業界ノ主要人物ノ大多數ハ直チニ家族ト共ニ逃亡セリ。九月十九日後ノ數日間ニ亙リ十一萬人以上ノ支那人住民ハ京奉鐵道ニ依リ奉天ヲ去リタルガ逃走シ得ザルルモノハ多ク潛匿セリ。

旨主張ス。右ハ住民ニ多大ノ恐慌ヲ生ゼシメ住民ハ南京市內部ニ急遽引移レルガ死傷者ハナク物質的損害モ大ナラザリキ。

南京事件ガ昂奮セル支那人民ガ上海支那軍勝利ノ虛報ヲ祝ヒテ鳴ラシタル爆竹ニ端ヲ發シタリト云フコトモ亦有リ得ベキコトナリ。

奉天市ノ秩序及ビ市政ノ復活　警官及ビ監獄看守人ニ至ル迄失踪セリ。奉天市、奉天縣及ビ奉天省ノ行政ハ完全ニ崩壞シ電燈、水等供給ノ公共事業會社、乘合自動車、市街電車竝ニ電話及ビ電信業務ハ一切停止スルニ至レリ。銀行及ビ商會ハ閉鎖セリ。至急ヲ要スルハ市政府ノ組織及ビ市ノ正常生活ノ復活ニアリタルガ之ハ日本人ニ依リ着手セラレ迅速且ツ有效ニ取リ運バレタリ。土肥原大佐ハ奉天市長ニ就任シ三日以內ニ正常市政ハ復活セラレタリ。數百ノ警官及ビ監獄看守人ノ大部分ハ臧式毅將軍（省長）ノ援助ニ依リ復歸セシメラレ公共事業業務ハ回復セリ。非常時委員會ノ大部分ハ日本人ヨリ成レルガ土肥原大佐ヲ援助シ同大佐ハ一箇月間其ノ職ニ留マレリ。十月二十日市政府ノ施政

ハ趙欣伯博士（十一年間日本ニ留學シ東京帝國大學ノ法學博士ノ稱號ヲ有スル法律家）ヲ市長トスル一定ノ資格アル支那人國體ニ復歸セラレタリ。

省政府ノ再組織（一）奉天省　次ノ問題ハ三省ノ各省政ヲ再建スルニ在リタリ。右事業中奉天省ハ他ノ二省ニ比シ一層困難ナリキ。何トナレバ奉天ハ同省行政ノ中心ニシテ有力者ノ多クハ逃亡シ、暫時支那人ニ依ル省行政ハ錦州ニ於テ依然トシテ繼續セラレタレバナリ。故ニ省政ノ再組織ガ完全ニ成就セルハ三箇月後ナリキ。

臧式毅將軍ノ獨立、省政府組織ノ拒絕　遼寧省省長タリシ臧式毅中將ハ最初九月二十日支那中央政府ヨリ獨立セル省政府組織ニ關シ交涉ヲ受ケ勸誘セラレタルガ之ヲ拒絕セリ次デ同中將ハ逮捕セラレ十二月十五日釋放セラレタリ。

九月二十五日袁金凱ヲ委員長トスル「治安維持委員會」ノ設置　臧式毅將軍ガ獨立政府樹立ニ關スル援助ヲ拒絕シタル後支那人有力者ノ一人タル袁金凱氏ガ交涉ヲ受ケタルガ同氏ハ元ノ省長ニシテ東北政治委員會ノ副委員長ナリキ。日本軍事當局ハ袁金凱氏及ビ其他八人ノ支那人住民ヲシテ治安維持委員會ヲ組織セシメンコトヲ勸誘セリ。同委員會ハ九月二十四日組織セラレタル旨聲明セラレタリ。日本側新聞ハ直チニ之ヲ以テ分離運動ニ對スル第一歩トシテ稱讚

セルガ十月五日袁金凱氏ハ斯カル意思無キコトヲ公然聲明セリ。袁氏曰ク同委員會ハ「舊施政崩壞後平和及ビ秩序保持ノ爲メ實現セラレタルモノニシテ逃亡者救出及ビ金融市場回復ヲ援助シ且ツ其他ノ事務ヲ當レルガ右ハ全ク單ニ不必要ナル困難ヲ避ケシメンガ爲メナリキ。然レドモ同委員會ハ省政府ヲ組織シ又ハ獨立宣言ノ意思ハ無カリキ」云々。

十月十九日財政部ノ開設　十月十九日治安維持委員會ハ財政部ヲ開設シ支那人官吏ヲ輔佐スル爲メ日本人顧問任命セラレタリ。財政部長ハ同部ノ決定ニ對シ效力ヲ發セシムルニ先チ軍事當局ノ承認ヲ得ルヲ要シタリ。各縣內ニ於ケル收稅吏ハ日本人憲兵隊又ハ其他ノ代理人ニ依リ支配セラレタリ。場所ニ依リテハ右收稅吏ハ每日憲兵隊ノ檢閱ニ供スル爲メ帳簿ヲ提出スルヲ要シ、憲兵隊ノ承認ハ警官、裁判、教育等公共ノ目的ニ要スル一切ノ費用ノ支出ニ對シ必要ナリキ。錦州ニ於ケル「敵對者」ニ向ッテノ稅金送達ハ直チニ日本當局ニ報告セラレタリ。之ト同時ニ財政整理委員會組織セラレ其ノ主要事務ハ租稅制度ヲ建直スニ在リタリ。日本人代表者及ビ支那人組合代表者ハ稅制ニ關スル論議ニ參加スルヲ許サレタリ。長春ニ於ケル「外交部」ヨリ調査委員ニ對シ送附セラレタル一九三二年五月三十日附「滿州國獨立史」中ニ於ケル聲明ニ據レバ前述稅制審議ノ結

果一九三一年十一月十六日附ヲ以テ六税ノ廢止、其他四税ノ半減、尙其他八税ノ地方政府ヘノ移讓竝ニ法律的根據無キ一切ノ課税ヲ禁止スルコトヲ決定セリ。

十月二十一日實業部ノ設立　十月二十一日治安維持委員會（「遼寧省自治委員會」ト改名セラル）ニ依リ實業部開設セラレタリ。日本軍事當局ノ承認ヲ求メ且右承認ヲ得タリ而シテ多數ノ日本人顧問任命セラレタリ。凡テ命令ヲ發スルニ先チ同部長ハ日本軍事當局ノ承認ヲ得ルヲ要求セラレタリ。

東北交通委員會　最後ニ遼寧自治委員會ハ新タニ東北交通委員會ヲ組織シタルガ同委員會ハ漸次遼寧省ノミナラズ吉林及ビ黑龍江兩省ニ於ケル許多ノ鐵道ニ關スル管理ヲ掌握スルニ至レリ。同委員會ハ十一月一日遼寧自治委員會ヨリ分離セリ。

十一月七日ノ聲明及ビ十一月十日省政府ノ樹立　十一月七日遼寧省自治委員會ハ臨時遼寧省政府ナル形體ニ轉化シ聲明書ヲ發表シテ舊東北政府及ビ南京中央政府ヨリ分離セリ。臨時遼寧省政府ハ同省内ノ各地方政府ニ對シ其ノ發布セル命令ヲ遵守スベキコトヲ要求シ、爾後省政府トシテノ權限ヲ行使スベキ旨發表セリ。十一月十日公開式擧行セラレタリ。

最高諮議委員會ノ任命　自治委員會ガ臨時遼寧省政府ニ改造サルルト同時ニ最高諮議委員會ナルモノ于沖漢氏ノ委員長ノ下ニ創設セラレタリ。于沖漢氏ハ從來治安維持委員會ノ副議長ナリシナリ。于沖漢氏ハ最高諮議委員會ノ目的ヲ左ノ如ク發表セリ。卽チ秩序ノ維持、惡税ノ廢止ニ依ル施政改善、租税輕減竝ニ生產及ビ販賣組合ノ改善是レナリ。同委員會ハ更ニ臨時省政府ヲ指揮監督シ各地ノ傳統及ビ近代的要求ニ準據シ省自治政府ノ發展ヲ助成スルニ在リキ。同委員會ハ總務課、調査課、儀禮課、指導課、監査課及ビ自治指導部ノ各課ヨリ成ル。主要吏員ノ多クハ日本人ナリ。

十一月二十日奉天省ノ改名及ビ十二月十五日臧式毅ノ省長就任（二）吉林省　十一月二十日省名ハ奉天省ト改正セラレタルガ右ハ千九百二十八年國民黨支配下ノ支那トノ合同以前ノ名稱ナリ。又十二月十五日袁金凱氏ハ臧式毅將軍ニ依リ代ラレタリ。彼ハ監禁ヨリ釋放セラレ奉天省長ニ就任セルナリ。

吉林省ニ省政府ヲ樹立スル事業ハ遙カニ容易ナリキ。二十三日第二師團長多門少將ハ張作相將軍ノ不在中省長代理タル熈治中將ト會見シ省長タランコトヲ勸誘セリ。右會見後九月二十五日熈治將軍ハ許多ノ政府當局者及公共團體ヲ召集會合セシメタルガ多數ノ日本人士官モ亦參加セリ。新

省政府樹立ノ思案ニ對シ何等反對ノ表明ナク九月三十日右趣旨ノ布告書發表セラレタリ。次イデ吉林省政府ニ關スル組織法公布セラレタリ。政府ノ委員制度廢止セラレ熈治省長ハ省政府ノ行爲ニ對シ全責任ヲ負ヘリ。數日後熈治氏ニ依リ新政府ノ主要官吏任命セラレ其後若干ノ日本人吏員追加セラレタリ。總務長官ハ日本人ナリキ。縣政ニ於テモ亦行政改革セラレ且ツ人員ノ變動アリタリ。四十三縣ノ中十五縣ハ改革セラレタルガ其中支那人縣吏ノ解任モ含メリ。其他十縣ニ於ケル縣吏ハ熈治將軍ニ忠誠ヲ宣明シタル後其儘就職ヲ持續セリ。其他ハ依然トシテ舊政權ニ忠實ナル支那人軍閥ノ下ニ留マルカ又ハ鬪爭各派ニ對シ中立ヲ保テリ。

（三）東支鐵道ノ特別區　特別區行政官張景惠將軍ハ日本人ニ對シ友好關係ニ在リキ。舊政權ハ特別區内ニ於ケル鐵道守備隊及吉林、黑龍江兩省ニ於ケル相當多數ノ軍隊ヲ尙ホ有シ得タルニ對シ張景惠氏ハ何等軍隊ノ背景ヲ有セザリキ。九月二十七日張景惠ハ「ハルピン」ニ於ケル事務所ニ於テ會合ヲ催シ特別區ノ非常時委員會ノ組織ヲ論議セリ。同委員會ハ張將軍ヲ委員長トシ其他八人ノ委員ヨリ成リ其中王瑞花將軍及ビ一九三二年一月熈治將軍ニ敵對セル「反吉林」軍ノ指揮官トナレル丁超將軍ヲ含メリ。十一月五日張作相ノ將官ノ指揮ニ依ル反吉林軍ハ「ハルピン」ニ於テ新タニ吉林省政府ヲ樹立セリ。一九三二年一月一日張景惠將軍黑龍江省長ニ任命セラルルヤ省長ノ資格ニ於テ一月七日同省ノ獨立ヲ宣言セリ。一月二十九日丁超將軍行政長官ノ官廳ヲ占領スルヤ張將軍ヲ其屋内ニ幽閉セリ。張將軍ハ日本軍ガ北上シ丁超將軍擊退後二月五日「ハルピン」ヲ占領スルヤ再ビ自由トナレリ。爾來日本ノ勢力ハ特別區内ニ益々擴大スルニ至レリ。

（四）黑龍江省　黑龍江省ニ於テハ前章ニ於テ說述セル如ク張海鵬及ビ馬占山兩將軍ノ抗爭ニ因リ一層複雜セル形勢ヲ生ゼリ。十一月十九日日本軍ノ「チチハル」占領後當例ノ形式ノ自治協會ナルモノ設立セラレタルガ人民ノ意思ヲ代表スト稱セラルル該協會ハ特別區ノ張景惠將軍ニ對シ黑龍江省長ヲ兼任セムコトヲ勸誘セリ。然レ共「ハルピン」附近ノ形勢尙依然トシテ不安定ニシテ馬占山將軍トノ間ニ確定協定成立セザリシニ因リ右勸誘ハ千九百三十二年一月ニ至ル迄受諾セラレザリキ。一月ニ至リテサヘモ馬占山將軍ノ態度ハ暫ク曖昧ナリキ。馬占山將軍ハ二月丁超將軍ガ敗北スル迄之ト相提携シ然ル後日本軍ト和睦シ張將軍ノ掌中ヨリ黑龍江省長ノ職ヲ受取リタルガ次イデ他ノ省長ト共ニ新「國家」ノ建設ニ協力セリ。一月二十五日「チチハル」ニ於テ自治指導委員會設置セラレ他ノ省ト同一形式ノ省政

府ノ形態漸次成立スルニ至レリ。

（五）熱河省　熱河省ハ從來滿洲ニ於ケル政治的變動ニ對シ中立ヲ維持シ來レリ。熱河省ハ內蒙古ノ一部分ナリ。目下三百萬以上ノ支那人移民同省內ニ住居シ漸次遊牧蒙古人ヲ北方ニ追放シツツアルガ蒙古人ハ依然トシテ傳統的部族又ハ旗組織ノ下ニ生活ス。約百萬ヲ數フル斯種蒙古人ハ奉天省ノ西部ニ居住スル蒙古旗人ト若干程度ノ關係ヲ保持シ來レリ。

奉天省及熱河省ノ蒙古人ハ「盟」ヲ組織シタルガ其ノ中最モ有力ナルモノヲ「チェリム」盟ト爲ス。「チェリム」盟ハ獨立運動ニ參加セルガ從來屢支那ノ支配ヨリ免レント試ミ來レル「バルガ」地方卽チ黑龍江省西部ノ「コロンバイル」ノ蒙古人モ亦同運動ニ參加セリ。蒙古人ハ容易ニ支那人ト同化セズ。彼等ハ自尊心强キ人種ニシテ皆「ヂンギス」汗ノ偉業及蒙古武人ノ支那征服ヲ記憶シ居レリ。彼等ハ支那人ノ支配ヲ受クルコトヲ惡ミ殊ニ支那移民ノ來往ヲ好マズ。蓋シ右移住ニ因リ蒙古人ハ漸次自己ノ領土ヨリ驅逐セラレ居レバナリ。熱河省ノ「チヤオタ」及「チヨサツ」ノ兩盟ハ奉天省ノ各旗ト聯絡ヲ取リ居レルガ後者ハ今ヤ委員會ニ依リ支配セラレ居レリ。熱河省ノ首席湯玉麟ハ九月二十九日同省ニ對スル全責任ヲ執リ滿洲ニ於ケル同僚ト聯絡ヲ取リ來リタル由ナリ。三月九日ノ「滿洲國」建國ニ當リ熱河省ハ新「國家」ニ包容セラレタルガ、實際ニ於テハ同省政府ハ何等決定的措置ヲ執ルコトナカリキ。同省ニ於ケル最近ノ出來事ニ付テハ前章ノ末尾ニ於テ言及スルトコロアリタリ。

「獨立國家」ノ創立　以上ノ如クニシテ各省ニ設立セラレタル地方自治政治機關ハ次デ分離獨立セル「國家」トシテ相結合セラレタリ。新國家ガ容易ニ成立シタルコト及新國家成立ノ後支那人ガ之ニ對シテ與ヘタル支持ニ關シテ提出セラレタル多クノ證據ヲ理解スルガ爲ニハ、或場合ニハ强味トナリ他ノ場合ニハ弱點ト成ル支那社會生活ノ一特徵ヲ考慮スルコト必要ナリ。既ニ第一章ニ於テ述ベタルガ如ク、支那人ノ認ムル共同生活上ノ義務ハ國家ニ對スルヨリハ寧ロ家族、地方又ハ個人ニ對スルモノナリ。西洋ニ所謂愛國心ハ支那ニテハ今日漸ク感得セラレ始メタルニ過キズ、職業組合、協會、盟及軍隊等皆或個人的指導者ニ從フヲ例トス。斯ルガ故ニ說得又ハ强制ニ依リテ或特定ノ指揮者ノ支持ヲ得ルトキハ右指揮者ノ全勢力範圍內ノ追從者ノ支持モ亦自ラ得ルコトトナルナリ。前揭ノ如キ事件ノ記述ハ支那人ノ斯ル特徵ガ各省政府ノ組織ニ如何ニ巧ニ利用セラレタルカヲ示スモノニシテ、同一ノ之等小數ノ有力者ノ働キハ

最終ノ階梯ヲ完成スル爲ニ用ヒラレタリ。

自治指導部　獨立ヲ達成スル主要ナル手段トナリシハ奉天ニ中央事務所ヲ有シタル自治指導部ナリ。信憑スヘキ證人ガ委員會ニ對シテ陳述シタル所ニ依レハ右自治指導部ハ日本人ニ依リ組織セラレ且首長ハ支那人ナルモ大部分ノ職員ハ日本人ニ依リ充タサレ關東軍司令部第四部ノ機關トシテ活動シタル趣ナリ。而シテ同部ノ主タル目的ハ獨立運動ヲ作興スルニ在リタリ。右中央部ノ指揮監督ノ下ニ奉天省各縣ニ地方自治執行委員會組織セラレタリ。之等各縣ニ對シ中央部ハ其ノ有スル監督員、指導者及講師ヨリ成ル多數且經驗ニ富メル人員中ヨリ必要ニ應ジ部員ヲ派シタルガ其ノ多クハ日本人ナリキ。尙中央部ハ其ノ編輯發行セル新聞ヲ利用シタリ。

一月七日ノ在奉天自治指導部ノ布告　右中央部ニヨリ發セラレタル訓令ノ性質ハ同部ガ一月一日附ヲ以テ同月七日發布シタル布告ヲ見レバ明ナリ。同布告ハ東北ハ今ヤ滿洲及蒙古ニ於テ新獨立國家ノ建設ノ爲一大民衆運動ヲ遲滯ナク起スノ必要ニ直面セリト告ゲ居レリ。同布告ハ尙奉天省各縣ニ於ケル其ノ事業ノ發展ノ狀ヲ敍シ且奉天省ノ爾餘ノ各縣、更ニ進ンデハ奉天以外ノ各省ニ對シ其ノ活動ヲ擴張スル爲ノ計劃ヲ概說シタリ。而シテ更ニ布告ハ東北民衆ニ對シ張學良ヲ打倒シ、自治協會ニ加入シ、淸廉ナル政府ヲ設立シ人民ノ生活狀態ヲ改善スルガ爲ニ協力スベシト訴ヘ次ノ語ヲ以テ結ベリ「北部及東部ノ組織ヲ團結セヨ。新國家ヘ。獨立ヘ。」右布告ハ五萬枚頒布セラレタリ。

一月中ニ於ケル部長ノ計案　尙一月中ニハ早クモ自治指導部部長于沖漢ハ省長臧式毅ト共ニ新「國家」ニ對スル計案ヲ作リツツアリタルガ右新「國家」ハ二月十日樹立セラルベキ旨報ゼラレタリ。然ルニ一月二十九日哈爾賓ニ於テ兵變勃發シタルコト及丁超トノ戰鬪中ノ馬將軍ノ態度不明ナリシコトハ當時右準備ノ進行ヲ一時延期セル主ナル理由ナリシガ如シ。

二月十六日—十七日ノ奉天會議　其ノ後丁超敗退後張景惠中將ト馬將軍トノ間ノ商議ノ結果二月十四日協定成リ之ニ依リ馬將軍ハ黑龍江省省長ニ執任スルコトトナレリ。新國家ノ基礎ヲ協定スベキ會議ハ二月十六日及十七日奉天ニ於テ開カレタリ。東三省又ハ省長及特別區長官並ニ從來一切ノ準備事業ニ於テ重要ナル役割ヲ演ジ來レル趙欣伯博士自ラ出席セリ。

右五人ノ會ニ於テ新國家ヲ建設スベキコト、一時東三省及特別區ニ對スル最高權力ヲ行使スベキ東北行政委員會組織スベキコト、及最後ニ右最高委員會ハ遲滯無ク新「國家」

ノ建設ノ爲必要ナル一切ノ準備ヲ爲スベキコト決議セラレタリ。會議ノ第二日ニハ二人ノ蒙古王族出席シタルガ其ノ一ハ黑龍江省西部ノ「バルガ」地方（「コロンバイル」）ヲ代表シ、他卽チ「チェリム」盟ノ「チワン」親王ハ同親王ヲ他ノ如何ナル指導者ヨリモ尊敬シ居ル殆ンド凡テノ旗ヲ代表シタリ。

二月十七日ノ最高行政委員會　同日最高行政委員會組織セラレタリ。其ノ委員ハ委員長張景惠中將、奉天、吉林、黑龍江及熱河ノ四省省長並ニ蒙古地方代表「チワン」親王及「リン・シェン」親王ナリ。同委員會最初ノ諸決議ハ次ノ如シ、卽チ、新「國家」ニ共和制ヲ採用スルコト、構成各省ノ自治ヲ尊重スルコト、執政ニ「攝政」ノ稱號ヲ與フルコト、四省及特別區長官、全旗代表「チワン」親王及黑龍江省「コロンバイル」代表「クエイフ」ノ署名スベキ獨立宣言ヲ發スルコト。關東軍司令官ハ同夜「新國家ノ幹部」ノ爲公式ノ晩餐會ヲ催シタルガ、同司令官ハ右幹部ニ對シ其ノ成功ヲ祝スルト共ニ必要ノ際ニハ援助ヲ與フベキ旨確言スルトコロアリタリ。

二月十八日ノ獨立宣言　獨立ノ宣言ハ二月十八日發布セラレタリ。右宣言ハ永遠ノ平和ヲ享受セントスル人民ノ熱烈ナル願望及人民ニ依リ選定セラレタリト稱セラルル各施政者ガ右人民ノ願望ヲ充タスベキ義務ニ言及セリ。宣言ハ新國家樹立ノ必要ニ言及シ且東北行政委員會ハ此ノ目的ノ爲設置セラレタル旨述ベタリ。今ヤ國民黨及南京政府トノ關係破棄セラレタルヲ以テ、人民ハ善政ヲ享受スベシト約束シタリ。同宣言ハ通電ヲ以テ滿洲各地ニ發送セラレタリ。馬省長及熙洽省長ハ夫々其ノ省首都ニ歸還セルガ、代表ヲ任命シテ臧式毅省長、張景惠長官及趙欣伯市長ト會合シ以テ細目ヲ決定セシメタリ。

「新國家」ニ對スル計案　此ノ國體ニ依リテ次デ開カレタル二月十九日ノ會合ニ於テ共和國ヲ建立スルコト、憲法中ニ於テ權力分立主義ヲ規定スルコト、及前宣統皇帝ニ執政タランコトヲ請フベキコトヲ決議セリ。次ノ數日中ニ於テ首都ハ長春トスルコト、年號ハ「大同」（大調和ヲ意味ス）トスルコトヲ決議シ尙國旗ノ圖案モ決定セラレタリ。二月二十五日右諸決議ハ熱河省ヲ含ム各省政府並ニ「コロンバイル」及「チェリム」「チヤオタ」「チョサツ」諸盟ノ蒙古行政諸官署ニ通告セラレタリ。右ノ中最後ニ揭ゲタル三盟ハ熱河省ニ設立セラレタルモノニシテ、從テ既述ノ如ク熱河省省長ノ意ニ反スル何等ノ措置ヲ執ルコト能ハザリキ。

國家建立促進運動　獨立宣言及新國家建設諸計畫發表

後、自治指導部ハ民衆ヲ組織シテ之ニ對スル支持ヲ表明セシムル上ニ於テ指導的役割ヲ演ジタリ。同部ハ「新國家建設促進」ノ爲ノ諸協會設立ニ與リテ力アリタリ。同部ハ其ノ奉天省各縣ニ於ケル支部、卽チ自治執行委員會ニ訓令シテ一切ノ手段ヲ盡シテ獨立運動ヲ强化促進セシメタリ。此ノ結果、新ナル「促進」協會ハ自治執行委員會ヲ中心トシテ續々設立セラレタリ。二月二十日以後此等ノ新ニ組織セラレタル「促進協會」ハ活動ヲ開始セリ。「ポスター」ハ準備セラレ、「スローガン」ハ印刷セラレ、書籍及「パンフレット」ハ發行セラレ「東北文化半月刊」ハ發行セラレ赤聯配布セラレタリ。「リーフレット」ハ郵便ニ依リテ多數ノ名士ニ發送セラレ宣傳事業ニ對スル助力ヲ求メタリ。

奉天ニ於テハ支那商業會議所ハ聯ヲ配布シテ戶口ニ貼付セシメタリ。

獨立ニ對スル民衆ノ贊意ノ組織化　同時ニ各縣ノ自治執行委員會ハ地方紳士竝ニ商業、農業、工業及敎育團體ノ會長又ハ著名會員等ノ如キ人民代表ノ會議ヲ召集セリ。加フルニ民衆大會ハ組織セラレ行列又ハ游行ハ縣首都ノ主要街路ニ行ハレタリ。一般人民又ハ特殊ノ團體ノ希望ヲ表明セル決議ハ地方有力者會議又ハ幾千人ノ出席者アリタリト稱セラルル民衆大會ニ於テ通過シタリ。此等決議ハ勿論在奉天自治指導部ニ送達セラレタリ。

新國家ニ贊成スル二月二十八日奉天決議　促進協會及自治執行委員會ガ奉天省ノ各縣ニ於テ活動ヲ續ケタル後、新國家建設ニ對スル民衆ノ一般的希望ヲ具體的ニ表示スル爲奉天ニ於テ省大會組織セラレタリ。斯クテ二月二十八日、會合ハ開催セラレタルガ、右會合ニハ同省ノ各縣官吏及殆ド一切ノ階級及團體ノ代表者ヲ網羅セル約六百人ノ出席者アリタリ。同會合ハ一宣言書ヲ發シテ舊歷制軍閥ノ沒落及新時代ノ黎明ニ對スル奉天省一千六百萬住民ノ喜悅ノ情ヲ表明セリ。奉天省ニ關スル限リニ於テハ右運動ハ斯クシテ終結ヲ告ゲタリ。

吉林省ニ於ケル獨立運動　吉林省ニ於ケル新國家贊助運動モ亦組織セラレ且指導セラレタルモノナリキ。奉天ニ於ケル二月十六日ノ會議ニ出席中、熙洽省長ハ同省各縣官吏ニ對シ通電ヲ發シテ新國家ガ行フベキ政策ニ付テノ輿論ニ關シ情報ヲ與ヘラレンコトヲ求メタリ。之等各縣官吏ハ各自ノ縣ニ於ケル諸職業組合及協會ニ對シ十分ノ指導ヲ與フベキ旨命ゼラレタリ。右通電ニ對スル直接ノ反響トシテ獨立運動ハ各地ニ擡頭セリ。二月二十日吉林省政府ハ國家創立委員會ヲ組織シタルガ其ノ目的ハ各種團體ノ獨立運動ヲ指導スルニ在リタリ。二月二十四日在長春人民協會ハ民衆

大會ヲ開催セルガ、約四千名ノ出席者有リタル旨報ゼラレタリ。彼等ハ新「國家」建立ノ促進ヲ要求セリ。同樣ナル會議ハ其ノ他ノ地方及哈爾賓ニ於テモ亦開催セラレタリ。二月二十五日全省民衆大會吉林市ニ於テ開催セラレタリ。約一萬人ノ出席者アリタル旨報ゼラレタリ。二月二十八日奉天ニ於テ通過セラレタルト同樣ノ宣言然ルベク發セラレタリ。

黑龍江省ニ於テ　黑龍江省ニ於テハ奉天自治指導部ガ重要ナル役割ヲ演ジタリ。一月七日張景惠將軍ハ黑龍江省長ノ職責ヲ引キ受クルヤ同省ノ獨立ヲ宣言セリ。

前記奉天自治指導部ハ黑龍江省ニ於ケル右加速度的運動ヲ指導援助セリ。四名ノ將校（内二名ハ日本將校）奉天ヨリ齊々哈爾ニ急行シタリ。此等將校ガ齊々哈爾到着後二日ヲ經テ卽チ二月廿二日省政府廳舍内ノ大廣間ニ會合ヲ催シタルガ右會合ニハ各團體ヨリ多數ノ參會者アリタリ。右會合ハ全黑龍江省大會ニシテ建國準備ノ方法ヲ決定セムガ爲メノモノナルガ右大會ハ二月廿四日大示威運動ヲナスベキ旨ノ決議ヲ可決シタリ。

齊々哈爾ニ於ケル右示威運動ニハ數千ノ群衆參加シ行列ハ「ポスター」、卷旗、幟旗ヲ以テ覆ハレ此事件ヲ祝賀シタリ。日本ノ砲兵隊ハ當日ヲ祝福シテ百一發ノ禮砲ヲ發シ、日本飛行機上空ヲ旋回シ印刷物ヲ投下シタリ。直チニ宣言發セラレタルガ此ニ依リ責任内閣制トシ且ツ元首ニ大總統ヲ推戴スル共和政體建設セラレタリ。總テノ權力ハ中央政府ニ集中セラレ省政府ハ之ヲ廢止スルコトトシ縣及市町村ハ地方行政ノ單位トシテ存置シタリ。

二月末ニ至ル迄ニ奉天、吉林、黑龍江及特別區ハ既ニ夫夫宣言ヲ發シ、蒙古旗族モ亦特別自治區ヲ形成シ他方蒙古族ノ權利ヲ保障シ得ルコト或ハ可能ナラムコト判明シタルヲ以テ其ノ忠誠ヲ新國家ニ對シ誓フニ至レリ。回教徒ハ奉天ニ於ケル二月十五日ノ會合ニ於テ既ニ彼等ノ忠誠ヲ誓ヒタリ。其他末ダ歸屬セザル少數ノ滿洲人ノ大部分ハ新國家ノ執政トシテ多分前皇帝ガ推擧セラルベシトノコトヲ知ルヤ新「國家」ヲ歡迎シタリ。

二月廿九日奉天ニ於ケル全滿大會　各省區ガ新國家建設計畫ニ對シ正式ノ參同ヲ與ヘタル後自治指導部ハ二月廿九日奉天ニ全滿大會ヲ召集シタリ。右大會ニハ各省並奉天省及蒙古地方ノ各郡等ヨリノ正式代表其他多數參列シ又吉林及特別區ノ朝鮮人並滿洲及蒙古ノ青年同盟支部等諸種ノ團體ノ代表者會合シ其ノ總數七百名以上ニ達シタリ。

諸種ノ演說爲サレ、滿場一致ヲ以テ宣言及決議可決セラレタルガ前者ハ舊制度ヲ攻擊シ後者ハ新「國家」ヲ歡迎シ

タリ。又新國家ノ臨時的元首トシテ前皇帝ノ宣統帝（帝ハ「ヘンリー」溥儀氏トシテ知ラル）ヲ推擧スルノ第二ノ決議モ採擇セラレタリ。

前皇帝「ヘンリー」溥儀氏「滿洲國」元首ヲ承諾ス 東北行政執行委員會ハ直チニ緊急會議ヲ開キ六名ノ代表者ヲ選ビ之ヲ旅順ニ派遣シ昨年十一月天津出發以來同地ニ滯在中ノ前皇帝ヲ招ゼシメタリ。溥儀氏ハ最初之ヲ拒絕シタルモ三月四日第二回目ノ廿九名ヨリ成ル代表者ハ遂ニ僅カ一年ヲ期限トシテ氏ノ承諾ヲ取リ付ケ得タリ。於此前記執行委員會ハ陸軍中將張景惠ヲ委員長トシ他ニ九名ノ委員ヲ選出シテ歡迎委員會ヲ組織シタルガ右委員ハ三月五日旅順ニ赴キ謁見ヲ賜リタリ。前皇帝ハ委員ノ懇請ヲ容レテ三月六日旅順ヲ出發シ湯崗子ニ至リタルガ二日ノ後即チ三月八日ニハ既ニ「滿洲國」ノ執政トシテノ禮遇ヲ受ケタリ。

三月九日長春ニ於ケル就任式 三月九日新都長春ニ於テ就任式行ハレタリ。溥儀氏ハ執政トシテ新國家ノ政策ハ「道義、仁慈、愛撫」ヲ基礎トスベキコトヲ約スル旨ノ宣言ヲ發シタリ。十日ニハ新政府ノ幹部即チ內閣ノ閣僚、立法院長、監察院長、參議院總裁及副總裁、各省長及特別區長、各省防備司令其他ノ高官ノ任命ヲ見タリ。「滿洲國」建設ニ關スル通告ハ三月十二日諸外國ニ發セラレタルガ、右通告ノ目的ハ諸外國ニ對シ「滿洲國」建設ノ根本目的、對外政策ノ主義ヲ通告シ新國家トシテノ承認ヲ要求スルニアリトセラレタリ。

執政ノ到着前既ニ相當數ノ法規ハ制定セラレ公布セラルル迄ニナリ居リタルガ（右法規ノ制定ニハ趙欣伯博士モ時々參與シ來リタリ）此等法規ハ三月九日新政府組織法ト同時ニ實施セラレ、其レ迄有效ナリシ諸法規ハ新法規又ハ新國家ノ根本方針ト牴觸セザル限リ同日附ノ特別命令ニ依リ暫定的ニ採用セラレタリ。

情報ノ出所 「滿洲國」創設ニ至ル經過ニ關スル此ノ記述ハ有ラユル出所ヨリ得タル情報ニ依リ編輯セラレタルモノナリ。諸種ノ事件ハ其ノ都度詳細ニ日本ノ新聞ニ報ゼラレタルガ日本人ノ編輯スル「マンチェリア・デーリー・ニュース」ニハ多分最モ豐富ニ報ゼラレタリ。五月三十日長春ニ於テ現政府ニ依リ準備セラレタル「滿洲國獨立史＝滿洲國外交部編」「滿洲國概觀＝滿洲國外交部編」ノ二册及支那參與員ニ依リ準備セラレタル「東北三省ニ於ケル所謂獨立運動ニ關スル覺書」ハ夫々注意深ク研究セラレタリ。加之能フ限リ第三者ヨリ得タル情報利用セラレタリ。

九月十八日以來ノ民事行政 九月十八日ヨリ「滿洲國政府」建設ニ至ル迄ノ間ニ於ケル日本軍憲ノ民事行政、特ニ

銀行ノ監督、公共事業ノ經營及鐵道ノ運用ニ關スル措置ハ軍事行動開始ノ時以來、一時的軍事占據ノ必要以上ノ永續的ナル諸種ノ目的ガ遂行セラレタルコトヲ示シタリ。九月十九日奉天占據ノ直後支那銀行、鐵道事務所、公共事業事務所、鑛山監理事務所等ノ內部又ハ門前ニ護衞ヲ置キ然ル後此等事業ノ財政的又ハ一般的情況ノ調査行ハレタリ。此等ノ事務所再開セラルルニ及ビ日本人ハ顧問、專門家又ハ祕書ニ任命セラレ執行權限ヲ有シタリ。多クノ企業ハ前東三省政府又ハ各省政府ノ所有シタルモノナルガ此等ノ政府ハ戰時ニ於テハ敵國政府ト看做サルルヲ以テ何レノ銀行モ鑛山モ、農工施設モ、鐵道事務所モ公益營造物モ實際此等政府ガ嘗テ公的ニ又ハ私的ニ利害關係ヲ有シタル收入ノ唯一ノ源ト雖モ管理ヲ受ケザルモノナカリキ。

鐵道　鐵道ニ關シ軍事占領ノ當初以來日本官憲ニ依リ執ラレタル措置ハ日支間ノ鐵道ニ付永年紛爭中ナル諸問題中ノ或ルモノ（本問題ニ關シテハ第三章ニ記述セラル）ニ關シ日本ノ爲メニ有利ニ決定スルコトニアリタリ。卽チ急速ニ左ノ如キ措置執ラレタリ。

(1)　長城以北ノ總テノ支那所有鐵道及在滿洲諸銀行ニ在ル此等鐵道關係預金ハ沒收セラレタリ。

(2)　滿鐵ト協調セシムル爲メ奉天ノ內外ニ於テ線路ノ變更ヲ爲シタリ。卽チ滿鐵橋下ニ於テ京奉線ヲ切斷シ遼寧中央停車場、奉天東驛、奉天北門驛ヲ閉鎖シ且吉林行支那政府鐵道（後ニ復舊セラル）トノ連絡ヲ斷チタリ。

(3)　吉林ニ於テハ海倫吉林線、吉林敦化線及吉林長春線ノ間ニ有機的連絡ヲ設定シタリ。

(4)　日本ノ技術的顧問ハ各鐵道局ニ配置セラレタリ。

(5)　支那官憲ニ依リ採用セラレタル「特別運賃率」ハ廢止セラレ舊運賃率採用セラレタリ。卽チ滿鐵ノ運賃率ト一致スル運賃率ノ採用ヲ見タリ。

九月十八日卽チ東北交通委員會ガ機能ヲ停止シテ以來、「滿洲國交通部」ノ開設ニ至ル迄ハ日本官憲ガ諸鐵道ノ管理ニ付全責任ヲ負ヒタリ。

其他ノ公共事業　在留民ノ生命及財產ノ保護ノ爲メ必要ナル程度ヲ超エテ行ハレタル此種ノ措置ハ奉天及安東ニ於ケル電氣供給ノ場合ニ於テモ日本官憲ニ依リテ行ハレタリ又九月十八日ヨリ滿洲國建設迄ノ期間日本官憲ハ支那政府ノ電話電信及無電ノ管理及運用ニ關シ變更ヲ加ヘタルガ右ハ滿洲ニ於ケル日本ノ電話及電信事業ト協同シ得ベシ。

結論　一九三一年九月十八日以來日本官憲ノ軍事上及民政上ノ活動ハ本質的ニ政治的考慮ニ依リテ爲サレタリ。東三省ノ前進的軍事占據ハ支那官憲ノ手ヨリ順次齊々哈爾、

錦州及哈爾賓ヲ奪ヒ遂ニハ滿洲ニ於ケル總テノ重要ナル都市ニ及ビタリ。而シテ軍事占領ノ後ニハ常ニ民政ガ恢復セラレタリ。一九三一年九月以前ニ於テ聞カレザリシ獨立運動ガ日本軍ノ入滿ニ依リ可能トナリタルコトハ明ラカナリ。

日本ニ於ケル新政治運動ニ密接ナル接觸ヲ保チ居リタル(第四章參照)日本ノ文官及將校ノ一團ハ其ノ現職ニアルト否トヲ問ハズ九月十八日ノ事件後ニ於ケル滿洲ノ事態ノ解決策トシテ此ノ獨立運動ヲ計畫シ、組織シ且ツ遂行シタリ。

彼等ハ右目的ヲ以テ或ル支那人ノ姓名及行動ヲ利用シテ前政權ニ對シ不平ヲ抱ク住民中ノ少數ノモノヲ利用シタリ

日本ノ參謀本部ガ當初ヨリ又ハ少クトモ暫時ヲ經テ斯クノ如キ自治運動ヲ利用スルコトヲ覺リタルコト亦明ラカナリ。其結果彼等ハ此運動ノ組織者ニ對シ援助及指導ヲ與ヘタリ。

各方面ヨリ得タル證據ニ依リ本委員會ハ「滿洲國」ノ創設ニ寄與シタル要素ハ多々アルモ相俟ッテ最モ有效ニシテ然モ吾人ノ見ル所ヲ以テセバ其レナキニ於テハ新國家ハ形成セラレザリシナルベシト思考セラルル二ノ要素アリ、其ハ日本軍隊ノ存在ト日本ノ文武官憲ノ活動ナリト確信スルモノナリ。

右ノ理由ニ依リ現在ノ政權ハ純粹且ツ自發的ナル獨立運動ニ依リテ出現シタルモノト思考スルコトヲ得ズ。

第二節　「滿洲國」ノ現政府

政府組織法　滿洲國ハ組織法及人權保障法ニ依リテ統治セラル、政府組織法ハ政府諸機關ノ根本的組織ヲ規定シタルモノニテ大同元年（一九三二年）三月九日附教令第一號ニ依リテ公布セラレタリ。

執政ハ國家ノ元首ニシテ總テノ行政權ハ執政ニ屬シ執政ハ又立法院ヲ統制スルノ權能アリ。執政ハ重要國務ニ關シ助言ヲ與フル參議府ニ依リ補佐セラル。

政府組織法ノ特質ハ政府ノ權力ヲ國務、立法司法及監察ノ四院ニ分ツ點ニアリ。

國務院　國務院ノ任務ハ執政統御ノ下ニ總理及各總長ニ依リテ遂行セラレ總理及此等總長ハ相合シ國務院卽チ內閣ヲ組織スルモノトス。總理ハ各總長ノ事務ヲ監督シ強力ナル總務長ヲ通ジテ機密事項、人事、主計、支給ノ事務ヲ直裁ス。國務院ニ附屬シテ諸種ノ事務局アリ、就中資政院及法制局ハ重要ナリ。行政權ハ斯ノ如ク主トシテ執政及總理ノ手ニ集中セラレ居レリ。

立法院　立法權ハ立法院ニアリ總テノ法律及豫算ハ立法院ノ翼贊ヲ經ルヲ要ス。然レドモ立法院ガ或法案ヲ否決シ

タル場合ニハ執政ハ立法院ニ其ノ再議ヲ要求スルコトヲ得。而シテ尚再ビ其ノ法案ガ否決セラレタル場合ニハ執政ハ參議府ニ諮リテ其ノ可否ヲ裁決スルコトヲ得。然レドモ現在ニ於テハ立法院ノ組織ニ關スル法律ハ制定セラレ居ラズ。從テ諸法律ハ國務院ニ依リ起草セラレ參議府ニ諮問セラレ且執政ノ承認アラバ效力ヲ發生ス。從テ立法院ガ組織セラレザル限リ總理ノ地位ハ最モ有力ナリ。

司法院　司法院ハ數多ノ法院ヲ包含シ此等ノ法院ハ最高法院、高等法院及地方法院ノ三階級ニ分タル。

監察院　監察院ハ官吏ノ行績ヲ監察シ會計ヲ檢査ス。監察院ノ職員ハ犯罪行爲又ハ懲戒處分ニ依ルノ外免職セラルルコトナク且ツ其ノ意思ニ反シテ停職、轉任、又ハ減俸セラルルコトナカルベシ。

省及特別區　地方行政ノ爲「滿洲國」ハ五省及二特別區ニ分タル。省ハ奉天、吉林、黑龍江、熱河及興安ナリ。最後ニ揭ゲタル興安省ハ蒙古地方ヲ包含シ舊來ノ旗制度及諸旗盟ノ連合ニ適合スル如ク三地方卽チ縣ニ分タル特別區ハ、舊東支鐵道卽チ哈爾賓地方及新ニ制定セラレタル間島卽チ鮮人地方ナリ。此ノ行政的區劃ニ依リ主要少數民族ナル蒙古人朝鮮人及露西亞人ハ彼等ノ需要ニ適合スル特別ノ行政ヲ出來得ル限リ保障セラルベキモノトス。委員會ハ「滿洲國」ニ包含セラルルコトヲ要求セラルル地方ノ地圖ヲ示サレンコトヲ屢々要求シタレドモ、右地圖ハ與ヘラレズシテ「滿洲國」ノ境界ヲ左ノ如ク示ス一ノ書翰ヲ受領シタリ。

「新國家ハ南ハ長城ニ依リ界セラレ同國ニ於ケル蒙古諸盟及諸旗ハ「コロンバイル」並ニ哲里木、昭烏達、卓索圖ノ諸旗盟ヲ包含ス。」

各省ノ長官ニハ省長アリ。然レドモ行政權ヲ中央政府ニ集中セントセルニ依リ省長ハ軍隊又ハ財政ノ何レニ對シテモ何等ノ權限モ與ヘラルルヲ得ズ。省ニ於テモ中央政府ニ於テモ總務部ガ支配的地位ヲ保持ス。總務部ハ機密事項、人事、會計、文書及他ノ管轄ニ屬セザル事項ヲ管理ス。

縣及市町村　省ハ縣ニ分タル。縣ハ一般ニ縣自治機關ニ依リ治メラレ右機關ハ其ノ指揮下ニ、各部特ニ總務部ヲ有ス。市政府ハ奉天、哈爾賓及長春ニ存ス。尤モ哈爾賓ニ於テハ露西亞市街及支那市街ノ双方ヲ包含スベキ大哈爾賓ヲ建設セントスル計畫アリ。鐵道特區ハ廢止セラルベシ。同區ノ一部ハ大哈爾賓ニ包含セラルベク、又、東支鐵道沿線ノ殘部ハ黑龍江省及吉林省ニ加ヘラルベシ。

「滿洲國政府」ハ省ヲ目シテ行政區劃ト爲シ、縣及市町村ヲ目シテ財政上ノ單位ト爲ス。同政府ハ省、縣及市町村ノ租稅ノ額ヲ決定シ豫算ヲ裁決ス。一切ノ地方的收入ハ中央

ノ國庫ニ拂込マルベク、國庫ハ然ル後適當ナル支出ヲ管理ス。此等ノ收入ハ舊制度ノ下ニ於テ普通行ハレタル如ク地方官憲ニ依リ全部又ハ一部保留セラルルコトヲ得ズ。自然本制度ハ未ダ滿足ナル運用ヲ見ルニ至ラズ。

日本人官吏及顧問　「滿洲國政府」ニ於テハ日本人官吏ハ樞要ノ地位ヲ占メ且日本人顧問ハ總テノ重要ナル部局ニ附屬ス。國務總理及其ノ大臣ハ總テ支那人ナリト雖モ新國家ノ組織ニ於テ最大ノ實權ヲ行使スル各總務部ノ長ハ日本人ナリ。最初日本人ハ顧問トシテ任命セラレタレドモ最近ニ至リ最モ重要ナル地位ヲ占ムル日本人ハ支那人ト同一ノ地位ニ於テ完全ナル官吏ト爲サレタリ。地方政府若ハ軍政部及軍隊又ハ政府ノ企業ニ於ケル者ヲ除キ中央政府ノミニ於テ約二百名ノ日本人ハ「滿洲國」官吏ナリ。

日本人ハ總務廳竝ニ法制局及諮問局（右ハ實際上國務總理ノ官房ヲ構成ス）、各院及省政府ニ於ケル總務部及縣ニ於ケル自治指導委員會竝ニ奉天、吉林及黑龍江各省ニ於ケル警察部ヲ管理ス。加之大多數ノ局課ニハ日本人ノ顧問、書記官及事務官アリ。

尙鐵道事務所及中央銀行ニモ多數ノ日本人アリ。監察院ニ於テ日本人ハ總務部長、管理部長及審計部長ノ地位ヲ占ム。立法院ニ於テ書記長ハ日本人ナリ。最後ニ執政ノ最モ重要ナル官吏ハ宮務局長及執政護衞隊司令官ヲ含ミ日本人ナリ。（註）

（註）　重要ナル任命ハ「滿洲國政府公報」ニ發表セラレタリ。

政府ノ目的　政府ノ目的ハ二月十八日ノ東北行政委員會ノ宣言及三月一日ノ「滿洲國政府」ノ宣言ニ表明セラレタルガ如ク「王道」ノ根本原則ニ從ヒテ統治スルニ在リ。此ノ語ニ對スル英語ノ正確ナル同意語ヲ發見スルハ困難ナリ。「滿洲國」當局ニ依リ提供セラレタル通譯者ハ之ヲ「愛」ト譯シタレドモ、學者ハ數多ノ意味合ヒヲ有シ得ベキ「王者ノ道」（「キングリー・ウェー」）ナル意義ヲ之ニ與フ。而テ右ハ支那ノ傳統ニ依レバ往時ヨリ誠心誠意民ノ安泰ヲ念トシタル善政ノ基礎タリシモノナリ。傳統的ニ支那人ハ「王道」ナル表現ヲ「霸道」ニ正反對ナルモノトシテ使用シタリ。右「霸道」ナル表現ハ孫逸仙博士ニ依リ其ノ著「三民主義」中ニ論ゼラレタル如ク強力ト強制トニ依賴スルコトヲ意味ス。孫逸仙ハ依テ「王道」ハ「力是正義」ノ正反對ナリト說明シタリ。

新政府創設ノ主タル立役者タル自治指導部ノ政策ハ、該部ニ代リタル諮問局ニ依リ繼續セラレタリ。軍事官憲ハ行政事項ニ干與スルコトヲ許サレザリキ。官職勤務ノ資格ヲ

規律スル規則ハ制定セラルベク且任命ハ候補者ノ能力ヲ基礎トシテ爲サルベキモノトセラル。

課稅　課稅ハ之ヲ輕減シ且法律的基礎ノ上ニ置カルベク又經濟及行政ノ健全ナル原則ニ從ヒ改革セラルベシ。直接稅ハ縣及市町村ノ政府ニ移讓セラルベク、中央政府ハ間接稅ヨリ得ラルル收入ヲ確保スベシ。長春當局ヨリ供セラレタル書類ハ若干ノ租稅ガ既ニ廢止セラレ同時ニ他ノ租稅ガ輕減セラレタル旨ヲ述ベ居レリ。政府ノ企業及政府ノ所有スル財源ノ調整ガ收入ヲ增加センコト及ビ將來ニ於ケル軍隊ノ縮小ガ支出ヲ減少センコトヲ希望スル旨表明セラレタリ。然レドモ目下ノ所新國家ノ財政的地位ハ不滿足ノモノナリ。不正規兵トノ戰爭ハ軍費ヲ大ナラシメ他方同時ニ政府ハ正規ノ諸財源ヨリ收入ヲ受領シ居ラズ。第一年度ノ支出ハ現在大約六千五百萬弗ノ收入ニ對シ八千五百萬弗ノ支出ト見積ラレ二千萬弗ノ不足ヲ示セリ。而テ右不足ハ後ニ說明スルガ如ク（註）新ニ設置セラレタル中央銀行ヨリノ借入金ヲ以テ補充セラルル豫定ナリ。

（註）　本報告書附屬ノ特別研究第四號參照。

政府ハ財政的狀態ノ改善スルニ從ヒ其ノ收入ノ出來得ル限リ多額ヲ敎育、公安及國ノ發展（荒蕪地ノ開墾、鑛物及森林資源ノ開發竝ニ交通制度ノ擴張ヲ含ム）ニ使用スベキ旨ノ意嚮ヲ表明シタリ。政府ハ國ノ發展ニ付外國ノ財政的援助ヲ歡迎スベキコト竝ニ機會均等及門戶開放ノ主義ヲ固守スベキコトヲ述ヘタリ。

敎育　政府ハ既ニ初等學校及中等學校ヲ再開シタリ。而テ政府ハ新國家ノ精神及政策ヲ完全ニ了解スベキ極メテ多數ノ敎員ヲ訓練スルノ意嚮ヲ有ス。新課程ハ採用セラルベク、新敎科書ハ編纂セラルベク、而テ一切ノ排外敎育ハ廢止セラルベシ。新敎育制度ハ初等學校敎員ノ訓練及衞生的生活ニ關スル健全ナル思想ノ敎授ヲ强調スルコトヲ目的ト爲スベシ。英語及日本語ノ敎授ハ中等學校ニ於テ義務的タルベク、又、日本語ノ敎授ハ初等學校ニ於テ隨意タルベシ。

司法及警察　「滿洲國」當局ハ司法ニ對シ行政官憲ノ干涉ノ許容セラレザルベキコトヲ決定シタリ。司法官ノ地位ハ法律ニ依テ保障セラレ且其ノ俸給ハ充分ナルモノタルベシ。司法官ノ地位ニ對スル資格ハ高メラルベシ。治外法權ハ當分ノ間尊重セラルベキモ政府ハ現制度ニ對スル適當ナル改革ノ遂行セラレタルトキ治外法權ノ撤廢ノ爲直ニ諸外國ト交涉ヲ開始スルノ意嚮ナリ。警察官ハ適當ニ選擇、訓練、給與セラレ、且完全ニ軍隊（軍隊ハ警察職務ヲ簒奪スルコトヲ許サレザルベシ）ヨリ分離セシメラルヘキモノト

ス。

軍隊　軍隊ノ改編ハ計畫セラレ居ルモ現在ノトコロ軍隊ハ大多數舊滿洲軍ヨリ成ルヲ以テ增大スル不滿ト謀叛トヲ避クル爲警戒ヲ怠ラザルコト必要ナリト感ゼラレ居レリ。

「滿洲國」中央銀行ハ千九百三十二年七月一日長春ニ其ノ本店ヲ及他ノ多クノ滿洲都市ニ支店ヲ開キタリ　「滿洲國」中央銀行ハ六月十四日設置セラレ七月一日正式ニ營業ヲ開始セリ。同銀行ハ「滿洲國」ノ首都長春ニ其本店ヲ竝ニ滿洲ノ都市ノ大部分ニ百七十ノ數ニ達スル支店及出張所ヲ有ス。同銀行ハ三十年間有效ノ特許狀ヲ有スル株式會社トシテ組織セラレタリ。其ノ最初ノ行員ハ支那人及日本人タル銀行家及財政家ナリキ。同銀行ハ「內國通貨ノ流通ヲ規律シ、其ノ安定ヲ保持シ及金融ヲ管理スル」ノ權限ヲ附與セラレタリ。同銀行ノ資本ハ三千萬弗(銀)トシテ許可セラレ且少クトモ三十「パーセント」ノ正貨準備ヲ條件トシテ紙幣ヲ發行スルノ許可ヲ與ヘラレタリ。

中央銀行ハ一切ノ舊省銀行(邊業銀行ヲ含ム)ヲ併呑シタリ　舊省銀行(邊業銀行ヲ含ム)ハ新中央銀行ト合併セラレ其ノ全業務(傍系事業ヲ含ム)ハ新中央銀行ニ引渡サレタリ。尙舊省銀行ノ滿洲以外ノ支店ヲ清算スル爲ニ措置ヲ講ズル所アリタリ。

中央銀行ハ其ノ建設資金トシテ舊銀行ヨリ救出シ得ベキモノニ加フルニ二千萬圓(註一)ト報ゼラルル日本ノ貸付金及其ノ資本ニ對スル「滿洲國」政府ノ七百五十萬弗(銀)ノ應募トヲ有ス。(註二)　同銀行ハ一切ノ滿洲通貨ヲ一九三二年七月一日公式ニ定メラレタル率ヲ以テ新紙幣ニ代ヘテ買戾スコトニ依リ之ヲ統一セント計畫シタリ。

新通貨ハ銀弗ヲ基礎トスルモ兌換シ得ルヤ否ヤハ不明ナリ　此等ノ紙幣ハ銀弗ヲ基礎トシ且少クトモ三十「パーセント」迄銀、金、外國通貨又ハ預金ヲ以テ保證セラルルヲ要ス。新通貨ガ要求ニ應ジ且無制限ニ硬貨ニ代ヘラルベキヤ否ヤハ公式ノ發表ニハ明ニセラレ居ラズ。舊紙幣ハ兌換法ノ通過ヨリ二年間流通スルコトヲ許サルベキモ夫レ以後ハ有效ナラザルベシ。

(註一)之ガ「元」ノ意味ナルコトアリ得ヘシ。

(註二)千九百三十二年五月五日「滿洲國」財政部長ヨリ委員會ニ與ヘラレタル假豫算ニ依ル。

現滿洲通貨ハ實質的ニ千九百三十一年九月前ニ在リシモノト同ジ　新中央銀行紙幣ノ註文ハ日本國政府ニ發セラレタルモ今日迄ノトコロ右紙幣モ新硬貨モ未ダ流通シ居ラズ滿洲ノ現通貨ハ紙幣ガ各銀行ヲ通過スルトキ榮厚(新中央銀行總裁)ノ署名ヲ追加セラレ居ル外依然千九百三十一年

九月十八日前ニ存シタルモノナリ。

硬質ノ不充分ナル供給ニ基礎ヲ置ク「滿洲國ノ統一政策」

新「滿洲國」銀行ガ如何ニシテ其ノ自由ニ處分シ得ル制限セラレタル資本額ヲ以テ一切ノ滿洲通貨ヲ統一シ、安定セントスル熱心ナル計畫ノ完成ヲ所期シ得ルヤハ明ナラズ。舊省諸金融施設ヨリ受ケ繼ギタル財源ハ日本ノ諸銀行ヨリノ借入金及其ノ資本ニ對スル「滿洲國」政府ノ應募ト共ニ右目的ノ爲全然不充分ト思考セラル。加之如何ナル基礎ニ於テ同銀行ト「滿洲國政府」トノ關係ガ設定セラルベキヤ明ナラズ。財政部長ヨリ委員會ニ與ヘラレタル「滿洲國」假豫算ニ依レバ「滿洲國」ハ其ノ成立ノ第一年度中ニ二千萬元（註）ノ不足ニ直面センコトヲ豫期ス。部長ノ意見ニ依レバ右ハ中央銀行（當時ハ存在セザリキ）ヨリノ借入金ニ依リ補充セラルベキモノナリキ。其ノ銀行ニ七千五百萬元應募シ、然ル後右銀行ヨリ其ノ豫算均衡ヲ保ツ爲二千萬元以上ヲ借入レントスル政府ハ其ノ中央銀行又ハ其ノ豫算ヲ健全ナル財政的基礎ノ上ニ建ツルモノニ非ズ。

（註）豫算中本事項及之ニ續ク諸項ハ「滿洲國」財政部長ノ一委員トノ會見ニ於テ「圓」トシテ與ヘラレタルモ「滿洲國外交部」ヨリ提出セラレタル「滿洲國概觀」ノ英譯ニ於テハ右ハ「元」ナル用語ヲ以テ表示セラル。從テ委員會ハ本項及之ニ續ク豫算項目ニ言及スルニ際シ「圓」ヨリモ寧ロ「元」ヲ使用スルコトトス。

「元」ニ對スル支那人ノ記號ハ日本人ガ「圓」ニ對シ使用スル記號ト同一ナル爲、支那側及日本側双方ヨリ委員會ニ提供セラレタル英譯及佛譯ヲ取扱フニ當リ絶エザル困難アリタリ。

中央銀行ハ通貨ヲ兌換可能ナラシムルヨリ寧ロ之ヲ統一セントスルガ如シ　中央銀行ハ現ニ有スト認メラルル以上ニ多額ノ現實ノ硬貨ヲ獲得シ得ルニ非ザレバ、一切ノ滿洲通貨ヲ兌換可能ノ銀弗ヲ基礎トシテ統一スルコトヲ殆ド庶幾シ得ザルベシ。假令同銀行ガ通貨ノ統一（兌換可能ナラズトスルモ）ヲ創成スルニ成功スルニ於テハ同銀行ハ何等カ成就シタリト云フベケンモ、統一的通貨ニシテ其ノ安定性カ兌換ニ依テ保證セラレザルニ於テハ健全ナル貨幣制度ノ要件ヲ充タシタルモノニ非ザルナリ。

日本人ノ支配ハ公共事業ニ及ブ　各種ノ公共營造物及鐵道ニ關シ支那側系統ト日本側系統トヲ連結センコトヲ目的トシタル諸取極作成セラレタリ。奉天事變勃發前日本側ハ之カ實現ヲ熱望シタリシモ、支那側ハ絶エズ同意ヲ與フルコトヲ拒絶シタリ。尤モ九月十八日ト「滿洲國」ノ成立ト

ノ間ニ於テ既ニ本章第一節中ニ說述シタル如ク日本側ノ希望ヲ實現スベキ措置直チニ執ラレタリ。「新國家」ノ成立以來「滿洲國交通部」ノ政策ハ其ノ權力下ニ在ル主要鐵道線路ノ少クトモ若干ノ開發ニ付キ南滿洲鐵道會社ト協定ヲ爲サントスルモノノ如シ。

支那電話、電信及「ラヂオ」制度　滿洲ニ於ケル支那電話電信及「ラヂオ」制度ハ全然官有ナルヲ以テ政府自身ノ經營者ヲ有シ、東北電話、電信及「ラヂオ」政廳ノ統一的管理下ニ置カル。九月十八日以來右制度ノ三者何レモ全滿洲ニ於ケル日本側制度ト更ニ密接ナル協同作業ヲ爲シタリ。加之滿洲ニ於ケル各地ヨリ來リ又ハ各地ニ至ル中繼電報竝ニ關東州租借地、日本、朝鮮、臺灣及南洋諸島ニ於ケル各地ニ至リ又ハ各地ヨリ來ル中繼電報ニ付キ日本電信官廳ト東北電信政廳トノ間ニ取極作成セラレタリ。北滿洲ニ於ケル主要中心地ト大連、奉天及長春ニ於ケル日本郵便局トノ間ニ通信ノ迅速ナル傳達ヲ確保スル爲直通線建設セラレタリ。

日本語假名（日本語音字）ノ通信ハ殊ニ低率トセラレタリ。日本語假名ノ取扱ヲ學ブ爲支那人ノ書記ニ對シ特別ナル訓練ヲ與ヘ、又日本人ノ書記ヲシテ主要中心地ニ於テ漸次支那人電務從業員ニ加ハラシムル樣計畫セラレ居レリ。

斯クシテ滿洲及全日本帝國間ノ電信交通ヲ便利ナラシムル爲有ラユル便宜ヲ供與セラレタリ。之ニ依テ自然兩國間ノ通商關係著シク鞏固トナレリ。

鹽稅、日本軍憲ハ一九三一年九月鹽稅收入ヲ管理セリ　九月十八、九日事件ノ後日本官憲ハ鹽稅收入ヲ保留シ居ル官衙及銀行ニ對シ日本官憲ノ同意無クシテ此等ノ保管金ヨリ何等ノ支出ヲ爲スベカラザル旨ノ命令ヲ發シタリ。

右鹽稅ノ監理ハ此ノ財源ヨリスル收入ノ大部分ガ名義上ハ國家ノモノナリト雖事實張學良元帥ノ政府ニ保留セラレ居リタル事實ヲ根據トシテ主張セラレタルモノナリ。

此ノ財源ヨリノ收入ハ一九三〇年ニ於テハ約銀二千五百萬弗ニ上リ右ノ中二千四百萬弗ハ滿洲ニ於テ保留セラレ單ニ百萬弗ガ在上海鹽務稽核總辦ニ送金セラレタリ。

張學良元帥ハ一九二八年滿洲分擔額ノ支拂ニ同意セリ　張學良元帥ハ一九二八年十二月國民政府ニ參加後鹽稅ヲ擔保トシタル借入金ニ對シ滿洲ヨリ支拂フベキ定額卽チ銀八萬六千六百弗ノ月割分擔額ノ支拂ニ同意セリ。其ノ後一九三〇年四月改正發表セラレ之ニ依リ滿洲ノ月割分擔額ハ銀二十一萬七千八百弗ニ增額セラレタリ。然レドモ滿洲財政ノ地方的逼迫ノ爲ニ、張元帥ハ新割當ノ支拂延期ヲ要求セリ。奉天事件ノ際ニ於ケル彼ノ滯納額ハ五十七萬六千二百

弗ニ上レリ。新率ニ依ル二十一萬七千八百弗ノ最初ノ送金ハ日本陸軍將校ノ同意ヲ得テ一九三一年九月二十九日ニ實行セラレタリ。滿洲ニ樹立セラレタル新政權ハ右以後一九三二年三月迄ニ（三月ヲ含ム）中央政府ニ對シ啻ニ之等ノ月割分擔額ヲ送金シタルノミナラズ張學良元帥ガ未拂ノ儘殘シタル滯納額ヲモ送金セリ。然レドモ彼等ハ鹽稅剩餘金ヲ以テ國家ノ收入ト認メズ之ヲ滿洲ノ收入ト認メ從テ之ヲ地方的目的ノ爲ニ保留スルコトヲ正當ト思考シタリ。

一九三一年十月及十一月牛莊ニ於ケル鹽稅ノ差押 奉天治安維持委員會ガ省政府ニ合流セシ後同政府ハ財政廳ノ支拂ニ充ツル爲在牛莊鹽務稽核署ニ對シ其ノ總テノ保管金ヲ省銀行ニ移管スベキ旨命ジタリ。支那ノ公報ニ依レバ在牛莊中國銀行モ又原預金者ノ承諾無クシテ十月三十日銀六十七萬二千七百九弗五十六仙ニ上ル鹽稅收入保管金ノ提供ヲ強要セラレ遼寧省財政廳ノ名ニ於テ同廳日本人顧問ノミガ署名シタル一葉ノ領收證ヲ交付セラレタリ。

新吉林省政府亦鹽稅收入ヲ差押ヘタリ 新吉林省政府ハ吉林及黑龍江ノ鹽運署ニ關シ同樣ノ措置ヲ採レリ。支那ノ公報ニ依レバ新吉林省政府ハ鹽稅收入ヲ省金庫ニ移管スベキ旨要求シタリ。署長ガ之ヲ拒絕スルヤ彼ハ數日間拘留セラレ且熙治省長ハ署長ヲ更迭シ後任者ヲ任命シタルガ同後任者ハ十一月二十二日同署ヲ強制占領シ又監查署ハ熙治省長ノ命令ニ依リ閉鎖セラレタリ。此ノ場合ニ於テモ亦中國銀行及交通銀行ニ保管セラレ居リタル鹽稅收入ハ新吉林官憲ニ依リ要求セラレ十一月六日省銀行ニ移管セラレタリ。爾來月割分擔額ハ規則正シク上海ニ送金セラレタリト雖モ鹽稅收入ハ地方官憲ニ依リ隨時引出シ費消セラレタリ。一九三一年十月三十日ヨリ一九三二年八月二十五日迄ノ期間ニ對シテハ支那政府ノ計數ヲ入手シ得ラルル處右期間ニ於テ銀千四百萬弗ニ上ル鹽稅收入ハ滿洲ニ於テ保留セラレタリ。

全滿洲ニ於ケル鹽務行政ハ既述ノ如キ制限及監督ノ下ニ在リト雖モ、尙三月二十八日迄ハ引續キ行ハレタルガ同日「滿洲國政府」ノ財政總長ハ稽核署ニ屬スル預金、勘定、書類其他ノ財產ヲ「滿洲國」鹽稅務司ニ翌日引繼グベク又元來中國銀行ノ扱ヒタル鹽稅ノ徵收ハ東三省銀行ニ移管スベキ旨ノ命令ヲ發シタリ。財政總長ハ引續キ「滿洲國」ノ鹽務行政ニ勤務ヲ希望スル官吏ハ鹽稅務司事務所ニ其ノ氏名ヲ申出ヅベキ旨ヲ聲明スルト共ニ彼等ガ先ヅ支那共和國政府ニ對スル忠順ヲ拋棄スルニ於テハ其ノ出願ヲ十分考慮スベキ旨ヲ約セリ。

滿洲國政府鹽稅行政ヲ押收ス 四月十五日牛莊稽核署ハ

強力ヲ以テ解散セラレ署長及副署長ハ署ヨリ免職セラレ構內ハ占領セラレ金庫、書類及印章ハ押收セラレタリ。其ノ他ノ官吏ハ引續キ勤務方要求セラレタルガ彼等ハ何レモ之ヲ拒絶シタリト報ゼラレ居レリ。多數ノ署員ハ署長ニ隨ヒ天津ニ赴キ上海ヨリノ訓令ヲ待チタリ。斯クテ東三省ニ於ケル舊鹽務稽核署ノ職務ハ滿洲國ノ新鹽稅務司事務所ニ依リ完全ニ引繼ガレタリ。尤モ新「政府」ハ鹽稅ヲ擔保トスル外債ノ爲ニ必要ナル金額ノ衡平ナル分擔額ヲ引續キ支拂フノ用意アル旨ヲ聲明セリ。

稅關　滿洲ニ於テ徵收セラレタル關稅收入ハ常時中央政府ニ送金セラレ居タルヲ以テ日本軍憲ハ關稅行政又ハ上海ヘノ送金ニ干涉スル所無カリキ。此ノ收入ニ對スル干涉ハ先ヅ「滿洲國政府」ニ依リ彼等ノ「國」ハ獨立國ナリトノ理由ヲ以テ行ハレタリ。

滿洲ニ於ケル關稅收入　滿洲國ノ省政府トシテ二月十七日設立セラレタル東北行政委員會ガ最初ニ爲シタル行動ノ一ハ在滿開市場ニ於ケル稅關監督ニ對シ關稅收入ハ當然ノ權利トシテ「滿洲國」ニ屬スベキモノニシテ將來該委員會ノ監理ノ下ニ置カルベキモノナルガ當分稅關監督及稅務司ハ平常通リ職務ヲ執行スベキ旨ヲ訓令スルニ在リタリ。彼等ハ一般稅關行政ヲ監督スル爲滿洲各港ニ夫々一名ノ日本人稅關顧問ガ任命セラレタル旨通報ヲ受ケタリ。右ト關係アルハ龍井村、安東、牛莊及哈爾賓竝其ノ支署ニシテ右各港ニ於テ一九三一年ニ徵收セラレタル收入ハ夫々五十七萬四千海關兩、三百六十八萬二千海關兩、三百七十九萬二千海關兩及五百二十七萬二千海關兩ナリ。現在尙「滿洲國政府」ノ統治外ニ在ル愛琿港ハ支那關稅行政ノ下ニ活動シツツアリ。關東洲租借地ニ在ル大連港ハ特殊ノ地位ヲ有シ居レリ。大連ヲ含ム滿洲諸港ニ於テ徵收セラルル關稅收入ハ全支那ノ總關稅收入ニ對シ一九三〇年ニ於テハ其ノ一四・七「パーセント」ニ上リ又一九三一年ニ於テハ其ノ一三・五「パーセント」ニ上ルノ事實ハ支那關稅行政上ニ於ケル滿洲ノ重要サヲ示スモノナリ。

滿洲國官憲ガ滿洲ニ於ケル全關稅行政ヲ押收シタル手續ハ安東ニ於ケル措置ニ依リ良ク例證セラル。右手續ハ總稅務司ニ依リ次ノ如ク記述セラレタリ。

滿洲國政府ハ一九三二年三月ヨリ六月迄ニ關稅行政及收入ヲ押收セリ　三月任命セラレタル安東稅關日本人顧問ハ六月中旬迄ハ何等積極的行動ヲ執ル所無カリシガ同月彼ハ中國銀行ニ對シ關稅收入ハ爾今上海ニ送金スベカラザル旨ノ「滿洲國」財政部ノ確定的命令ヲ送達セリ。六月十六日四名ノ「滿洲國」武裝警官ハ一名ノ日本人警部ニ伴ハレ中

國銀行ニ赴キ同銀行支配人ニ對シ彼等ハ關稅收入ヲ警備スル爲來レル旨ヲ告ゲタリ。六月十九日中國銀行ハ東三省銀行ニ對シ七十八萬三千兩ヲ交付スルト共ニ稅務司ニ對シ右措置ハ不可抗力ノ結果トシテ執ラレタルモノナル旨ヲ通報シタリ。

六月二十六日及二十七日「滿洲國政府」ノ一日本人顧問ハ在安東稅關ヲ彼ニ引渡スベキコトヲ要求シタルニ對シ稅務司ガ之ヲ拒絕シタル處「滿洲國」警官（總テ日本人）ノ爲同稅務司ハ稅關ヨリ退去セシメラレタリ。然ルニ稅務司ハ安東關稅收入ノ八〇「パーセント」ハ鐵道附屬地ニ於テ徵收セラルルモノナルヲ以テ日本官憲ガ此ノ地帶內ニ於ケル干涉ヲ許サザルベキコトヲ希望シ、其ノ官舍ニ於テ尙稅關ノ事務ヲ執ラントシタル處「滿洲國」警官ハ鐵道附屬地ニ入リ、多數ノ稅關吏員ヲ逮捕シ殘餘ノ吏員ヲ脅威シ稅務司ヲシテ支那ノ稅關行政ヲ停止スルノ餘儀ナキニ至ラシメタリ。

大連稅關ノ地位　六月七日迄ハ大連ノ關稅收入ハ三日又ハ四日置キニ上海ニ送金セラレタルガ「滿洲國」政府ハ六月九日附ヲ以テ爾今此等ノ送金ヲ爲スベカラザル旨ノ通牒ヲ發シタリ。上海ニ收入ノ送金途絕エタルニ及ビ總稅務司ハ在大連日本人稅務司ニ對シ本件ニ對シ電報スル所アリタルガ右ニ對シ稅務司ハ日本租借地政府ノ外事課長ヨリ關稅收入ノ送金ヲ續クルコトハ日本ノ利益ニ影響スル所大ナルベキ旨勸告アリタルノ理由ヲ以テ關稅收入ノ送金繼續ヲ拒絕シタリ。依テ總稅務司ハ六月二十四日大連稅務司ヲ命令不服從ノ廉ヲ以テ罷免シタリ。

「滿洲國政府」ハ六月二十七日右罷免稅務司及職員ヲ「滿洲國」ノ官吏ニ任命シ、從前ノ職務ニ從事セシメタリ。滿洲國政府ハ若シ日本官憲ガ同政府ヲシテ大連稅關ノ監理ヲ爲サシメザルニ於テハ租借地境瓦房店ニ新稅關ヲ設置スベシト威嚇的態度ヲ示セリ。租借地ノ日本官憲ハ關稅行政ガ新任「滿洲國」官吏ノ手ニ移ルコトニ反對セズ。本問題ハ日本ニ關係無ク單ニ滿洲國ヲ一方トシ支那政府及大連稅務司ヲ他方トスル兩者間ニ於ケル係爭問題ナリト主張シタリ。

關稅ニ關スル「滿洲國」政府ノ見解　「滿洲國政府」ハ、「滿洲國」ハ獨立國ナルヲ以テ權利トシテ其ノ領域內ニ於ケル關稅行政ニ對シ完全ナル管轄權ヲ行使スト主張ス。然レドモ同政府ハ各種外債及賠償金ハ支那ノ關稅收入ヲ基礎ト爲シ居ルノ事實ニ鑑ミ此等債務ヲ果ス爲必要ナル年額ノ衡平ナル分擔額ヲ支拂フノ用意アル旨ヲ聲明シタリ。同政府ハ右分擔額ヲ橫濱正金銀行ニ預金シタル後地方的用途ニ流用シ得ル關稅剩餘金ハ一九三二年ヨリ一九五五年迄ニ於

テハ約銀千九百萬弗アルベキコトヲ期待シ居レリ。

滿洲ニ於ケル郵務行政　九月十八日後在滿日本軍憲ハ新聞及封書ニ對シ檢閱ヲ爲ス以外ハ郵便局ニ對シ甚ダシキ干涉ヲ加ヘザリキ。「滿洲國」ノ建國後同國「政府」ハ其ノ領域內ノ郵務行政ヲ押收セントコトヲ欲シ四月十四日郵務行政ノ移管ヲ實行スル爲特別ノ官吏ヲ任命セリ。四月二十日同國政府ハ未ダ加盟ノ資格ヲ有セザリシ萬國郵便聯合ニ之ガ加盟許可方ヲ申込メリ。郵務司ガ郵便局ノ引渡ヲ拒絕シタル爲暫次現狀維持セラレタルモ管理手段ヲ行使スル爲或ル事務所ニハ「滿洲國」ノ監督官配置セラレタリ。尤モ「滿洲國政府」ハ遂ニ同國ノ印紙ヲ發行シ支那ノ印紙使用ヲ停止スルコトニ決定シタリ。七月九日附ノ交通部令ヲ以テ同國政府ハ新印紙及新葉書ヲ八月一日ヨリ發賣スベキ旨ヲ布告セリ。茲ニ於テ支那政府ハ郵務司ニ對シ在滿郵便局ノ閉鎖ヲ命ズルト共ニ職員ニ對シ三ケ月分ノ給與ヲ受クルカ又ハ他ノ地ニ於テ勤務スル爲支那ニ於ケル指定地ニ歸還スルカノ選擇ヲ許シタリ。「滿洲國」官憲ハ殘留ヲ希望スル全郵務使用人ニ對シ順次就職ヲ勸誘シ且支那行政ノ下ニ於テ彼等ノ獲得シタル財政上其ノ他ノ權利ヲ保證スルコトヲ約シタリ。七月二十六日「滿洲國政府」ハ全滿洲ヲ通ジ完全ニ郵務行政ヲ押收セリ。

私有財產ノ取扱　「滿洲國政府」ハ私有財產並ニ支那ノ中央政府又ハ滿洲舊政權ノ何レカニ依リ與ヘラレタル總テノ免許ニシテ、右免許ガ從前施行中ノ法令及規則ニ從ヒ合法的ニ與ヘラレタルモノナル限リ之ヲ尊重スベキ旨ヲ聲明セリ。同政府ハ亦舊政權ガ負ヘル適法ノ負債及債務ヲ支拂フコトヲ約シ且負債ニ對スル請求ヲ裁決スル爲ニ委員ヲ任命セリ。張學良元帥其ノ他前政權ノ要人ニ屬スル財產ニ對シ如何ナル措置ガ採ラルベキヤヲ記述スルコトハ未ダ尙早ナリ。支那ノ公報ニ依レバ張學良元帥、萬福麟將軍、鮑毓麟將軍、其他若干ノ者ノ私有財產ハ沒收セラレタリ。尤モ「滿洲國」官憲ハ舊政府ノ官吏ハ其ノ權力ヲ行使シテ彼等自身ノ爲ニ蓄財シタルモノナルヲ以テ斯クノ如キ方法ニ依リ得ラレタル財產ハ之ヲ以テ當然「私有財產」トシテ承認スルノ用意ナシトノ見解ヲ持シ居レリ。舊官吏ノ所有物ニ關シテハ愼重ナル調査行ハレツツアリ。但シ銀行預金ノ關スル限リ右調査ハ既ニ終了シタリト報ゼラル。

批判　吾人ハ斯クテ「滿洲國政府」ノ組織、其ノ政綱及同政府ガ支那ヨリノ獨立ヲ確認スル爲執リタル手段ノ若干ヲ敍述シタルヲ以テ、次ニ該政府ノ行動及其ノ主タル特質ニ關スル吾人ノ結論ヲ述ベザル可カラズ。此ノ「政府」ノ政綱ハ數多ノ自由主義的改革案ヲ包含シ、此等ノ實施ハ單

ニ滿洲ニ於テノミナラズ支那ノ他ノ部分ニ於テモ亦望マシキモノナルベシ。事實此等改革案ノ多數ハ支那ノ政綱中ニモ亦顯ハレ居レリ。本委員會トノ會見ノ際右「政府」ノ代表者ハ、日本人ノ援助ニ依リ彼等ハ相當期間中ニ平和ト秩序ヲ確立スルコトヲ得ベク、而シテ軈テハ其レヲ永遠ニ維持スルコトヲ得ベシト主張セリ。彼等ハ、人民ニ對シ公正ニシテ且效果的ナル行政、匪賊ノ掠奪ニ對スル保障、軍費削減ノ結果タル租税ノ輕減、通貨ノ改革、改善セラレタル交通機關及一般人民ノ政治參與權等ヲ與フルコトニ依リ、人民ノ援助ヲ獲得スルヲ得ベシトノ信念ヲ述ベタリ。

然レドモ現在迄「滿洲國政府」ガ其ノ政策ヲ遂行スル爲費シタル時日ノ短キコトヲ充分酌量シ、且既ニ講ゼラレタル手段ニ對シ篤ト斟酌ヲ加フルモ猶此ノ「政府」ガ事實上其ノ改革案ノ多數ヲ遂行シ得ベキコトヲ示ス何等ノ徵候存セズ。單ニ一例ヲ擧ゲンニ（報告書附屬書特殊調査第四及第五參照）彼等ノ豫算制度及貨幣制度ノ改革案實現ノ前途ニハ幾多重大ナル障碍存スルガ如シ。諸改革、秩序アル狀態及經濟的繁榮等ニ關スル根本的政綱ハ千九百三十二年ニ於テ存在シタル不安及攪亂ノ狀態ノ下ニ於テハ到底實現セラルルヲ得ザルベシ。

「政府」及公共事務ニ關シテハ、假令各省ノ名義上ノ長ハ滿洲ニ於ケル支那人タル在住民ナリト雖モ、主タル政治的及行政的權力ハ日本人ノ役人及顧問ノ掌中ニ在リ。「政府」ノ政治的及行政的組織ハ、此等役人及顧問ニ對シ單ニ技術的意見ノ提供ノミナラズ、事實上行政ヲ支配シ指揮スルヲ得シムルガ如キ仕組ナリ。彼等ガ東京政府ノ指揮ノ下ニ在ラザルコトハ疑問ノ餘地ナク且彼等ノ政策ハ常ニ必ズシモ日本政府又ハ關東軍司令部ノ公ノ政策ト合致セザリシコトアリ。然レドモ有ラユル重大問題ノ場合ニハ此等ノ役人及顧問ハ新組織ノ初期ニ於テハ若干ノ者ハ多少獨自ノ見解ニ依リ行動スルコトヲ得タルモ、爾後漸次益々日本ノ公ノ權力ノ指揮ニ從フヲ要スルニ至レリ。實際ニ於テ此ノ權力ハ、其ノ軍隊ニ依ル同地方占據ノ理由ニ依リ、「滿洲國政府」ガ内的ニモ外的ニモ其ノ權力ノ維持ノ爲日本ノ軍隊ニ依存スルコトニ依リ、且「滿洲國政府」ノ管轄下ニ在ル諸鐵道ノ管理ニ關シ南滿洲鐵道會社ニ益々重要トナレル任務ガ委託セラレタル結果トシテ、更ニ最モ重要ナル地方的諸中心地ニ於テ聯絡機關トシテ日本領事ノ存在スルコトニ依リ如何ナル緊急ノ場合ニ於テモ抵抗スベカラザル壓迫ヲ加フル手段ヲ有スルナリ。

「滿洲國政府」ト日本ノ公ノ權力トノ間ノ聯絡ハ最近ノ特派使節ノ任命ニ依リ、更ニ一層緊密トナリタリ。右特派大

使ハ親任狀ノ交附ニ依リ公式ニ派遣セラレタルモノニ非ズシテ滿洲ノ首都ニ駐在シ、關東長官ノ資格ニ於テ南滿洲鐵道會社ニ對スル支配權ヲ行使シ且同官職ニ外交代表者、領事事務ノ首長及占據軍ノ總指揮官タル權能ヲ集中ス。

「滿洲國」ト日本國トノ關係ハ從來之ヲ明カニスルコト若干困難ナリキ。然レドモ本委員會ノ有スル最近ノ情報ニ依レバ日本政府ニ於テ近ク此ノ關係ヲ明ニスル意思アリトノコトナリ。一九三二年八月二十七日附本委員會宛日本參與員ノ書翰ニ、特派使節武藤大將ハ「八月二十日滿洲ニ向ケ東京ヲ出發セリ。到着後同大將ハ日本ト滿洲トノ間ノ友好關係ノ樹立ニ關スル基本條約締結ノ爲交渉ヲ開始スヘシ。日本國政府ハ右條約ノ締結ヲ以テ滿洲國ノ正式承認ト看做スヘシ」トノ趣旨ヲ記載シアリタリ。

第三節　滿洲居住民ノ意見

滿洲居住民ノ態度　滿洲國居住民ノ新「國家」ニ對スル態度ヲ確カムルコトハ本委員會ノ目的ノ一ナリキ。然レドモ調査ヲ行ヒタル現地ノ狀況ニ依リ證據ヲ蒐集スルコトニ付若干ノ困難ニ遭遇セリ。匪賊、朝鮮人共産主義者及支那側參與員ノ新政權批評ノ爲同人ノ同伴ヲ憤慨スベキ新「政府」ノ擁護者等ヨリノ本委員會ニ對スル實際ノ又ハ豫想セラレタル危險ハ、委員會保護ノ爲ノ例外的手段ヲ執ルコトトナリタル一理由ト成レリ。同地方ノ動搖セル狀態ニ於テハ確カニ實際ノ危險ガ屢々存セリ、而シテ吾人ノ旅行中與ヘラレタル效果的ナル保護ニ對シ感謝スルモノナリ。然レドモ斯クテ執ラレタル警察的手段ノ結果ハ證人ヲ近ヅカシメザリシコトナリ。而シテ多數ノ支那人ハ吾人ノ部員ト會見スルコトスラ卒直ニ恐怖シタリ。吾人ハ或場所ニ於テ、何人ト雖モ官ノ許可ナクシテ本委員會ト會見スルヲ許サレザル旨吾人ノ到着前ニ通達サレタルコトヲ聞キタリ。依テ會見ハ常ニ甚シキ困難ト且祕密裡ニ準備セラレタリ。然モ斯ル方法ニ依テスラ吾人ト會見スルコトハ彼等ニトリ餘リニ危險ナリシ旨ヲ吾人ニ知ラセタル人多カリキ。

斯ル困難ニモ拘ラズ吾人ハ「滿洲國」ノ役人及日本國ノ領事官及陸軍將校トノ公ノ會見ノ外實業家、銀行家、教育家、醫師、警察官、商人及其ノ他トノ私的會見ヲ行フコトヲ得タリ。吾人ハ又千五百通以上ノ書面ヲ接受シタルガ其ノ中若干ハ手交セラレ大多數ハ各宛先ニ郵送セラレタリ。斯クシテ得タル情報ハ之ヲ中立的方面ニ依リ出來得ル限リ眞僞ヲ照合セリ。

代表團及用意セラレタル陳述書　公ノ團體又ハ協會ヲ代表スル多數ノ代表團ヲ接受セルガ彼等ハ通例吾人ニ陳述書ヲ提出セリ。代表團ノ多クハ日本國又ハ「滿洲國」ノ官憲

ニ依リ紹介セラレタリ。而シテ吾人ハ彼等ガ吾人ニ手交セル陳述書ガ豫メ日本側ノ同意ヲ得タルモノナリト信ズベキ強キ理由ヲ有セリ。實際若干ノ場合ニ於テハ陳述書ヲ手交シタル人々ガ後ニ至リ右陳述書ハ日本人ニ依リ書カレ又ハ甚ダシク修正セラレタルモノニシテ彼等ノ眞ノ感情ヲ表ハセルモノト看做サレザルベキモノナルコトヲ吾人ニ告ゲタリ。此等ノ陳述書ノ顯著ナル特質ハ「満洲國」政權ノ樹立又ハ維持ニ對スル日本ノ參加ニ對シテハ有利ニモ反對ニモ批評スルコトヲ故意ニ避ケタル點ナリ。大體ニ於テ此等ノ陳述書ハ從前ノ支那政權ニ對スル不平ノ敍述ニ關スルモノニシテ且新「國家」ノ將來ニ對スル希望ト信頼ヲ表明セル文句ヲ包含セリ。

信書　接受シタル信書ハ農民、小商人、都市勞働者及學生ヨリ發セラレタルモノニテ、筆者ノ感情及體驗ヲ述べ居レリ。本委員會ガ六月北平ニ歸還セル後、此ノ手紙ノ山ハ特ニ其ノ爲ニ選任シタル専門委員ヲシテ飜譯、分析及配列ヲ爲サシメタリ。此等千五百五十通ノ手紙ハ二通ヲ除キ他ハ凡テ新「満洲國政府」及日本人ニ對シ痛烈ニ敵意ヲ示セリ。此等ハ眞摯且自發的ニ意見ヲ表明シタルモノノ如ク思ハレタリ。

「満洲國」官吏　「満洲國政府」ノ支那人ノ高級官吏ハ種々ノ理由ノ爲ニ其ノ地位ニ在ルナリ。彼等ノ多數ハ曾テ舊政權ノ官吏タリシガ誘惑又ハ種々ノ脅迫ニ依リ引留メラレタルモノナリ。彼等ノ或者ハ脅迫ニ依リ其ノ地位ニ留マルコトヲ強制セラレタルコト、一切ノ權力ハ日本人ノ手中ニ在ルコト、彼等ハ支那ニ忠誠ナルコト及彼等ガ日本人立會ノ下ニ行ハレタル本委員會トノ會見ニ於テ述べタルコトハ必ラズシモ信ヲ置クベキモノニ非ザルコト等ノ趣旨ノ通報ヲ吾人ニ爲シタリ。若干ノ官吏ハ彼等ノ財産ノ沒收ヲ禦グ爲其ノ地位ニ留マリタリ。而シテ斯ル沒收ハ支那本部ニ遁入セル官吏中ノ若干人ノ場合ニ事實トシテ起リタリ。他ノ評判良キ人々ハ、彼等ガ行政ヲ改善スル權力ヲ有スルニ至ルベシトノ希望ト、彼等ガ自由行動權ヲ有スベシトノ日本人ノ約束トノ下ニ參加シタリ。若干ノ満洲人ハ満人種ニ屬スル人々ノ爲ニ利益ヲ得ルノ希望ノ下ニ參加シタリ。彼等ノ或者ハ失望シ且眞ノ權力ガ彼等ニ與ヘラレザルコトヲ訴ヘタリ。尙少數ノ者ハ舊政權ニ對シ個人的不平ヲ有セシ爲或ハ利得センガ爲其ノ地位ニ在ルナリ。

下級及地方官吏　下級及地方ノ官吏ハ大體ニ於テ一部分生計ヲ得テ彼等ノ家族ヲ扶養センガ爲又一部分ハ若シ彼等ガ去ラバヨリ惡シキ人間ガ彼等ノ地位ニ代ルベシトノ理由ニ依リ彼等ノ地位ヲ維持シタリ。地方縣知事ノ多數モ亦一

部ハ彼等ノ責任下ニ在ル人民ニ對スル義務觀念ヨリ、又一部ハ壓迫ノ下ニ其ノ地位ニ止レリ。高級ノ地位ヲ評判良キ支那人ヲ以テ充タスコトハ困難ナリシモ、下級ノ地位及地方官廳ニ入ルベキ支那人ヲ得ルコトハ容易ナリキ、尤モ斯ル事情ノ下ニ爲サレタル執務ノ忠實性ハ尠クトモ疑問ナリ。

警察　「滿洲國」警察ハ一部分ハ舊支那警察ノ部員ニ依リ又一部ハ新募集者ニ依リ構成セラル。大都市ニ於テハ警察中ニ實際日本將校アリ、又他ノ多クノ場所ニ於テハ日本人ノ顧問アリ。吾人ト談話セル若干ノ個々ノ警察官ハ新政府ニ對スル彼等ノ反感ヲ表明シ唯彼等ハ生計ヲ營ム爲引續キ奉職セザルベカラズト云ヘリ。

軍隊　「滿洲國軍隊」ナルモノモ亦主トシテ日本側ノ監督ノ下ニ改編セラレタル舊滿洲軍ノ軍人ヨル成ル。斯ル軍隊ハ最初彼等ハ單ニ地方ノ秩序ヲ維持スルノミニテ足ルコトヲ條件トシテ新政府ノ下ニ勤務スルコトニ甘ンジタリ。然レドモ爾來彼等ハ屢々支那軍ニ對スル眞劍ナル戰爭ニ從事シ且日本側ノ指揮ノ下ニ日本軍隊ト相並ンデ戰フコトヲ要求セラレテ以來「滿洲國軍隊」ハ益々信頼シ得ザルモノトナリツツアリ。日本側ヨリ出デタル情報ハ「滿洲國」軍隊ノ頻發スル支那側ヘノ內應ヲ報ズルニ對シ、支那側ハ彼等ノ最モ信頼ニ足ル且效果大ナル軍需品ノ源泉ノ一ハ「滿洲國軍隊」ナリト主張ス。

實業家及銀行家　吾人ト會見シタル支那實業家及銀行家ハ「滿洲國」ニ對シ敵意ヲ抱ケリ。彼等ハ日本人ヲ嫌惡セリ、彼等ハ彼等ノ生命及財產ニ對シ恐怖ヲ有シ且屢々次ノ如ク述ベタリ。「吾人ハ朝鮮人ノ如ク成ルコトヲ欲セズ」ト。九月十八日以後實業家ノ支那ヘ脫出スルモノ多數アリタリ。然レドモ比較的富裕ナラザル若干ノ者ハ今ヤ歸還シツツアリ。一般的ニ言ヘバ、比較的小ナル商人ハ日本人ノ競爭ニ苦シムコト舊政權ノ役人トノ間ニ有利ナル關係ヲ有シタル大商人及製造業者ノ場合ニ比シ、ヨリ少ナカルベシト期待ス。多數ノ商店ハ吾人ノ到著ノ時ニ於テ倘閉店シ居リタリ。匪賊ノ增加ハ邊境地方ニ於ケル商賣ニ不利ナル影響ヲ與ヘ、信用機構ハ大イニ破壞セラレタリ。滿洲ヲ經濟的ニ開發スベシトノ日本側ノ意思ノ發表及過去二、三ケ月ニ於テ日本經濟使節ノ夥シキ滿洲訪問ハ、此等使節ノ多クガ失望シテ日本ニ歸ヘレリト報ゼラルル事實ニ拘ハラズ支那實業家ノ間ニ不安ノ念ヲ惹起シツツアリ。

自由職業階級卽醫師、教師、學生　自由職業階級タル教師及醫師ハ「滿洲國」ニ對シ敵意ヲ有ス。彼等ハ其行動ヲ探偵セラレ、脅迫ヲ受ケタリト主張ス。教育ニ對スル干涉、

大學其他ノ學校ノ閉鎖及教科書ノ改訂等ハ愛國的理由ニ基キ燃エ上リツツアリシ彼等ノ敵愾心ニ油ヲ注ギタル觀アリ。新聞、郵便及言論ノ檢閱並ニ支那ニ於テ發行セラルル新聞紙ノ「滿洲國」ヘノ搬入禁止ニ對シテハ反感ヲ抱キ居レリ。勿論日本ニ於テ教育ヲ受ケタル支那人ニシテ前記ノ一般的敍述ノ例外ヲ成スモノアリ。「滿洲國」ニ反對スル學生及青年ヨリ多クノ書面ヲ接受セリ。

農夫及都會勞働者 農夫及都會勞働者ノ態度ニ關スル證據ハ多種多樣ニシテ勿論之ヲ蒐ルコト困難ナリ。外國人及教育アル支那人間ノ意見ヲ徵スルニ彼等ハ「滿洲國」ニ敵意アルガ然ラザレバ無關心ナリ。農夫及勞働者ハ政治的ニ教育セラレ居ラズ、一般ニ文盲ニシテ普通政治ニ興味ヲ有スル事少ナシ。農民ガ「滿洲國」ニ敵意ヲ抱クベキコトニ對シ次ノ理由ヲ述ベタルモノアルガ右ハ其ノ後此ノ階級ニ屬スル者ヨリ受ケタル手紙ノ內或モノニヨリテ確認セラレタリ。農夫ハ新制度ガ朝鮮人ノ及恐ラク日本人ノ移民ヲ增加セシムルニ至ルベシト信ズルノ理由ヲ充分有ス。朝鮮人ノ移民ハ支那人ト同化セズ而シテ支那人ノ農夫ハ主トシテ豆、高粱及小麥ヲ栽培スルモ朝鮮人ノ農夫ハ米ノ耕作ニ從事シ兩者ハ農業方法ヲ異ニセリ。水田ノ耕作ハ溝渠ヲ掘リ田野ヲ灌漑スル事ヲ伴ヒ若シ豪雨アレバ朝鮮人ニ依リ造ラレタル溝渠ハ溢レ附近ノ支那人ノ土地ニ氾濫シ其ノ收穫ヲ皆無ナラシムルガ如キコトモアリ得ベク又彼等ハ過去ニ於テ土地所有權及地代等ノ問題ニ付キ朝鮮人ト絕エズ爭ヒ來レリ。「滿洲國」ノ建設以來支那人ハ朝鮮人ガ屢々地代ヲ支拂フ事ヲ停止セルコト、彼等ガ支那人ヨリ土地ヲ押收セルコト及日本人ガ支那人ヲ强制シテ其ノ土地ヲ低廉ナル値ニテ賣ラシメタル事ヲ主張ス。鐵道及都市ノ附近ノ農夫ハ鐵道線路及都市ヨリ五百米以內ニ高粱——高サ十呎ニ成長シ匪賊ノ作動ヲ助クル穀物——ノ栽培ヲ行フ事ヲ禁ズル命令ニ依リ苦シミツツアリ。支那本土ヨリ來ル勞働者ノ季節的移住ハ經濟的不況ヲ主トシ政治的擾亂ヲ從トスル原因ニ依リ減少シツツアルガ右ノ傾向ハ尙繼續ノ勢ニ在リ。支那ヨリ來ル移民ニ取リ比較的容易ナル條件ニテ常ニ利用シ得タル公有地ハ今ヤ「滿洲國」ニ移管セラレタリ。一九三一年九月十八日以來農村ニハ從來ニ其例ヲ見ザル匪賊及不逞ノ徒ノ跳梁ヲ見タルガ是レ一部分敗殘兵ニ依ルモノガ一部分ハ匪賊ニ依リ零落セシメラレタル末生活ノ爲却テ自ラ匪賊ニ投ジタル農夫ニ依ルモノナリ。支那ノ他ノ部分ト比較シ滿洲ハ多年組織的戰鬪ノ爲メ苦メラルルコト稀ナリシニ今ヤ日本軍及「滿洲國」軍ト支那ニ尙忠誠ナル散軍トノ間ニ東三省ノ各部分ニ亙リ此ノ如キ戰鬪行ハレツツアリ、

此ノ如キ戰鬪ハ自然農夫ニ大ナル困難ヲ蒙ラシムルモノニシテ殊ニ日本飛行機ハ反「滿洲國」軍庇護ノ疑アル村落ヲ爆破セシコトアルニ於テハ特ニ然リトス。其結果廣大ナル地面ニ作付セザリシ事例アルガ此ノ如キ農夫ハ次年度ニ於テ地代ヲ支拂フニ困難ヲ感ズルニ至ルベシ。支那ヨリ最近來リタル移民ノ大多數ハ事變ノ勃發以來長城內ニ逃ゲ歸ヘレリ。是等ノ實際的理由ハ日本人ニ對スル或根底深キ憎惡心ト結合スル時ハ多クノ證人ヲシテ吾人ニ對シテ滿洲在住民ノ壓倒的多數ヲ形成スル支那人農夫ハ新制度ノ爲苦シミ且之ヲ嫌惡シ彼等ノ態度ハ受動的敵意ノソレナルコトヲ吾人ニ告ゲシムルニ至レリ。

都會住民ニ付テハ、彼等ハ所ニ依リテハ日本ノ兵士、憲兵及警察官ノ態度ノ爲メ苦ミタリ。一般的ニ謂ヘバ日本兵ノ行狀ハ善良ニテ個人的蠻行ヲ訴ヘタル投書ニ接シ居ルモ一般的掠奪又ハ虐殺ノ事例ナシ。他方ニ於テ日本人ハ敵意アリト信ジタルモノニ對シテハ強硬ナル手段ヲ執リ來レリ支那人ハ多クノ處刑ガ行ハレタル事及捕虜ガ日本憲兵部ニ於テ脅迫及拷問セラレタル事ヲ主張ス。

「滿洲國」ノ建國式ニ際シ民衆ヲ刺戟シテ之ニ對スル熱心ヲ現ハサシムルコト不可能ナリシト聞ケリ。一般的ニ謂

少數民族　吾人ハ支那人ノ大多數ガ「滿洲國」ニ對シ敵意アルカ然ラサレバ無關心ナルコトヲ發見スルト同時ニ新「政府」ハ滿洲ニ於ケル少數民族團體――蒙古人、朝鮮人、白系露人及滿洲人ノ如キ――ヨリ或支援ヲ受ケ居レリ。彼等ハ程度ハ異レルモ孰レモ舊政權ノ爲壓迫ヲ受ケ又ハ過去數十年間ニ於ケル多數ノ支那移民ノ爲經濟的不利益ヲ蒙リタリ而シテ何レノ部族モ新政權ニ全ク傾倒セルモノト云ヒ能ハザルモ新政權ヨリ從來ニ優レル待遇ヲ受クベキコトヲ豫期シ新政權亦之等少數民族ヲ支援ス。

蒙古人　蒙古人ハ漢人ヨリ別個ナル人種トシテ殘存セリ而シテ既ニ述ベシ如ク強キ民族意識竝ニ其ノ部族制度、貴族政治、言語、服裝、特別ノ生活樣式、習慣及宗教ヲ保存セリ。彼等ハ尙主トシテ牧畜ノ民ナリト雖モ漸次農作ニ從事シ又荷車及動物ニ依ル農產物ノ運搬ニ從事ス。滿洲ニ接壤スル蒙古人ハ彼等ノ土地ヲ獲得シ耕作シ彼等ヲ漸次追出シツツアル漢人移民ノ爲益々苦シミ來タリ爲ニ慢性的不可避ノ反感ヲ有スルニ至レリ。吾人ノ接シタル蒙古代表ハ又過去ニ於テ支那官吏及收稅吏ノ貪慾ヨリ苦シミタル事ヲ訴ヘタリ。內蒙古人ハ外蒙古ガ「ソ」聯邦ノ勢力ノ下ニ歸スルヲ見タルガ彼等ハ「ソ」聯邦ノ內蒙古ヘノ進出シ來ルコ

「ソ」聯邦ガ侵略シ來ルニ對抗シテ別個ノ國家的存在ヲ維持セント欲ス。彼等ハ從來敍上ノ如キ不安定ナル地位ニ置カレタルヲ以テ新制度ノ下ニ於テモ其ノ別個ノ存在ヲ維持セントスルノ大ナル希望ヲ繫ギ居レリ。加之、王族ハ其ノ富ノ維持ノ爲メ主トシテ不動產及其ノ特權ニ依倚スルモノナルヲ以テ自然彼等ハ事實上ノ權威者ニ對シ從順タルノ傾向アル事ヲ注目スルヲ要ス。然レドモ吾人ハ北平ニ於テ或蒙古王族ノ代表者ニ接シタルガ彼等ハ新制度ニ對シ反對ナル事ヲ述ベタリ。現在滿洲ニ接スル蒙古人ト「滿洲國政府」トノ間ノ關係ハ明確ナラズ。而シテ「滿洲國政府」亦今日迄彼等ノ施政ニ干涉スル事ヲ抑制セリ。現在ニ於ケル是等蒙古人ノ或モノノ新政權ニ對スル支援ハ多少ノ不安ヲ交ヘ乍ラ兎モ角本心ヨリナルモ彼等ハ若シ日本ガ或將來ニ於テ彼等ノ獨立又ハ經濟上ノ利益ニ對スル脅威ナルコト明ナルニ至ラバ此ノ如キ支援ハ忽之ヲ撤去スルニ至ルベシ。

滿洲人　滿洲人ハ漢人ト殆ンド完全ニ同化セラレタリ。尤モ吉林及黑龍江ニ於テハ尙少數ノ政治上ノ重要ナラザル滿洲人ノ殖民地アリテ二國語ヲ話スモ明カニ滿洲人トシテ殘存ス。民國成立以來民族ハ其ノ特權的地位ヲ失ヒタリ。即チ民國ハ彼等ノ補助金ノ支拂ヲ繼續スベキ事ヲ約シタルモ減價セル通貨ヲ以テ支拂ハレタルガ故ニ彼等ハ餘儀ナク經驗ナキ農耕及商賣ヲ始ムルニ至レリ。「滿洲國」ニ好意ヲ寄スルモノハ屢々滿洲ノ住民ヲ以テ支那ノ他ノ住民ト人種ヲ異ニスト爲シ、最後ノ滿洲皇帝ハ現執政ナリトナスガ現存ノ明ナル滿洲人ハ新國家ノ成立ト共ニ再ビ特權的待遇ヲ得ベシトノ希望ヲ懷クモノアルベシ。滿洲人ハ斯ル希望ヲ以テ「政府」ニ入リタルモ滿洲ニ於ケル漢人ノ證人ノ言フトコロニ依レハ彼等ハ全テノ權力ハ日本人ノ手ニ握ラレ彼等ノ提議ハ顧ミラレザルヲ見テ失望ヲ感ジツツアル由ナリ。滿洲人ノ血ヲ有スル者ノ間ニハ先帝ニ對スル或精神的忠誠ノ念尙存スベシト雖モ何等顯著ナル民族意識アル滿洲人運動存在セズ。彼等ノ殆ド全ク漢人ト同化シタルヲ以テ今更滿洲人ヲ官吏ニ登用シテ以テ民族意識ノ振興ニ資セントノ企アルモ此ノ方面ヨリノ新「政府」ニ對スル支援ハ民意代表ノ名ヲ冒スニ足ル實ヲ具フルモノニアラズ。

朝鮮人　過去ニ於テ一方ニ日本官憲ノ庇護ヲ受クル朝鮮農夫ト他方ニ於テ支那ノ官吏、地主及農夫トノ間ニ多クノ軋轢アリタリ。過去ニ於テ朝鮮農夫ハ暴行及搾取ニ依リ苦シミタル事疑ナシ。本委員會ニ陳情ヲ齎シタル朝鮮代表ハ一般ニ新制度ヲ歡迎ス。然レドモ吾人ハ如何ナル範圍迄彼等ガ其ノ國體ノ代表ナリシヤヲ確ムルヲ得ズ。兎モ角政治的避難民タル朝鮮人ハ日本ノ統治ヲ遁レル爲移住セルモノ

ナルヲ以テ更ニ日本ノ統治ノ擴張ヲ歡迎スルモノトハ想像セラレズ。是等ノ避難民ハ共產主義宣傳ノ善キ目的ト成リ又朝鮮內ニ於ケル革命團體ト接觸ヲ維持シ居レリ。（第三章及特殊調査第九ヲモ參照）

白系露人　滿洲ニ於ケル一切ノ少數民族ノ團體ノ內哈爾賓及其ノ附近ニ於ケル少クモ其ノ數十萬人ヲ算スル白系露人ノ小殖民地ハ近年最モ迫害ヲ蒙リタリ。彼等ハ庇護スベキ國民政府ナキ少數民族團體ナルノ故ヲ以テ支那ノ官吏及警官ニ依リ各種ノ屈辱ヲ蒙リタリ。彼等ハ故國ノ政權ト不和ノ關係ニ在リテ滿洲ニ在リテサヘ此ノ故ニ絕エザル不安ノ裡ニ在ルモノナリ。彼等ノ內裕福ニシテ教育アル者ハ生計ヲ立テ得ルモ支那官憲ガ彼等ヲ犧牲ニ供シテ或種ノ利益ヲ「ソ」聯邦ヨリ得ラルト考フルトキハ之カ爲ニ苦シメラルルヲ常トス。ヨリ貧困ナル者ハ生活ヲ營ム事甚ダ困難ヲ見又絕エズ警察ノ手及支那法廷ニ於テ苦ヲ嘗メツツアリ。請負制度ニ依リ租稅ガ賦課徵收セラルル地方ニ於テハ彼等ハソノ支那人タル隣人ヨリモ高キ割合ノ課稅ヲ支拂フヲ要シタリ。彼等ハ其ノ取引及行動ニ關シ多クノ制限ヲ經驗セリ而シテ彼等ノ旅券ガ檢査セラレ、其ノ契約ガ認證セラレ又ハ其ノ土地ガ讓渡セラルルニハ宜吏ニ對シ賄賂ヲ贈ル事ヲ要シタリ。彼等ノ多クニトリテハ現在ヨリモ劣レル條件ヲ想像シ能ハザルヲ以テ日本人ヲ歡迎シタルハ尤ノコトニシテ今ヤ彼等ノ運命ハ新政權ノ下ニ開ケ行クベシトノ希望ヲ懷抱スル事ハ怪シムベキニ非ラズ。

吾人ハ哈爾賓ニ在リシ時白系露人ノ代表竝ニ多クノ書面ニ接シタリ而シテ吾人ハ之ニ依リ彼等ハ左記事項ヲ彼等ニ保障スル如何ナル制度ヲモ支持スベシトノ結論ヲ得タリ。

（一）庇護權
（二）公正ニシテ有效ナル警察行政
（三）法廷ニ於ケル正義
（四）衡平ナル課稅ノ制度
（五）賄賂ノ支拂ニ依ラザル取引及定住ノ權利
（六）兒童ノ教育ニ對スル便宜

彼等ノ此點ニ於ケル要求ハ主トシテ彼等ヲシテ移民セシムルニ役立ツ外國語ノ習得及彼等ヲシテ支那ニ於テ職ヲ得セシムル爲ノ技術教育ナリ。

（七）土地、定住及移住ニ關スル或援助。

結論　以上ハ滿洲ニ於ケル吾人ノ旅行中吾人ニ傳達セラレタル地方人民ノ意見ナリ。公私ノ會見、書面及聲明書等ノ形ヲ以テ吾人ニ提供セラレタル證據ヲ注意シテ研究シタル後、吾人ハ「滿洲國政府」ナルモノハ地方ノ支那人ニ依リ日本ノ手先ト見ラレ支那人一般ニ之ニ何等ノ支援ヲ與ヘ

居ルモノニ非ズトノ結論ニ達シタリ。

第七章　日本ノ經濟的利益及支那ノ「ボイコット」(註一)(註二)

日支紛爭ニ於ケル重要ナル要素タル日本貨物ニ對スル支那ノ「ボイコット」　前三章ハ主ニ一九三一年九月十八日以來ノ軍事上及政治上ノ事件ノ記述ニ止メタリ。日支間紛爭ノ討究ハ紛爭ニ於ケル他ノ重要ナル要素即チ日本貨物ニ對スル支那ノ「ボイコット」ヲ說明セザル限リ正確又ハ完全ナラザル可シ。

右「ボイコット」運動ニ於テ使用セラレタル方法及其ノ日本ノ通商ニ及シタル影響ヲ諒解センガ爲メニハ日本ノ一般經濟的地位、其ノ支那ニ於ケル經濟的財政的利益支那ノ外國貿易ニ付記述スルノ要アリ。倘滿洲ニ於ケル日本及支那ノ經濟的利益ノ範圍及性質ヲ諒解スルコト必要ニシテ右ハ次章ニ於テ討究ス可シ。

(註一)　「ボイコット」此語ハ最初愛蘭土ニ於テ使用セラレ「マヨ」縣ニ於ケル「アーヌ」伯領ノ差配「チヤーレス・カンニンガム・ボイコット」大尉（一八三二―一九七）ノ名ニ起因ス。借地人ニヨリテ定メラレタル地代ヲ一八八〇年受領スルコトヲ拒絕セルガ爲メ「ボイコット」大尉ノ生命ハ脅カサレ、彼ノ召使ハ離別ヲ餘儀ナクセラレ垣根ハ破壞サレ、手紙ハ奪取セラレ又食料ノ供給ガ阻害セラレタリ。此語ハ直ニ普通ノ英語トシテ使用セラレ且迅速ニ多數外國語ニ採用セラルルニ至レリ。「エンサイクロペデイア・ブリタニカ」一九二九年第十四版

(註二)　本問題ニ關スル特別ノ研究ニ付キ附屬第八參照

日本ノ人口過剩　前世紀ノ六十年代ニ於ケル明治維新ノ頃、日本ハ二世紀以上ニ亘ル孤立ヨリ脫却シ而テ十年ヲ俟タズシテ世界ノ第一等強國ニマデ發展セリ。以前殆ント停滯シ居リシ人口ハ急速ニ增加シ初メ一八七二年ニ三千三百萬ナリシモノガ一九三〇年ニハ六千五百萬ニ達セリ。而テ此ノ驚クベキ增加ハ一年ニ約九十萬ノ割合ヲ以テ倘繼續ス。

日本ノ人口ノ全面積ニ對スル割合ハ一平方哩ニ約四百三十七人ニシテ、北米合衆國ノ四十一人、獨逸ノ三百三十八人、伊太利ノ三百四十九人、英吉利ノ四百六十八人、白耳義ノ

六百七十人及支那ノ二百五十四人ニ對ス。

可耕地一平方哩ニ於ケル日本ノ人口ヲ他國ノ夫レニ比センニ日本ノ割合ハ例外的ニ高シ。右ハ島帝國ノ特殊ノ地理的構成ニ歸因ス。卽チ

國	人口
日本	二七七四
英吉利	二一七〇
白耳義	一七〇九
伊太利	八一九
獨逸	八〇六
佛蘭西	四六七
北米合衆國	二二九

農業地ニ高度ニ人口ガ集中シ居ル爲メ各自ノ保有地地面積ハ頗ル狹小ニシテ農夫ノ三十五「パーセント」ハ一「エーカー」未滿ヲ三十四「パーセント」ハ二「エーカー」半未滿ヲ耕作ス。可耕地ハ其ノ及ブベキ限度ニ到達シ居リ又集約農法ノ限度ニ達ス。約言スレバ日本ノ土地ハ今日以上ニ生産スルコトヲ期待スル能ハズ。又就業ノ機會ヲ今日以上ニ多ク供給スルコト能ハズ。

農業ノ困難　尙集約農法及肥料ノ普及的使用ノ結果トシテ生産費ハ嵩リ、土地ノ價格ハ亞細亞ノ如何ナル地方ヨリモ、否歐羅巴ノ人口過剰ノ地方ヨリモ遙ニ高シ。

擔ヲ痛ク課セラレ居ル人民ノ間ニ不滿存シ居ルモノノ如ク借地人ト地主トノ間ニ於ケル爭議ハ增加シツツアリ。移民ハ效濟ノ見込アル方法トシテ考慮セラレタルモ次章ニ於テ述ブルガ如キ理由ヲ以テ現在迄ノ處解決手段トナラザリキ。

日本ハ最初都會ノ人口增加ヲ支フル爲產業主義ニ轉向セルガ右ハ農產物ノ爲國內市場ヲ提供シ且內地及外國ニ於テ使用サル可キ物資ノ生產ニ勞働ヲ向ハシムベキモノナリ。爾後幾多ノ變化ヲ生ゼリ。以前日本ハ食料品供給ノ見地ヨリ觀テ自足以上ノ狀態ニアリシガ近年ハ全輸入ノ八「パーセント」乃至十五「パーセント」ハ食料品ニシテ右變動ハ國內收獲主ニ米收獲ノ變動狀態ニ歸因ス。右食料品ノ輸入及此ノ輸入必要ノ恐ラク增加スベキコトハ既ニ逆トナレル貿易勘定ヲ工業品ノ輸出增加ニヨリテ補フコトヲ要ス。

工業化ノ必要　若シ日本ガ增加シツツアル人口ニ對スル職業ヲ是以上ノ工業化ノ行程ニ於テ見出スノ要アリトセバ輸出貿易ノ發展並ニ增加シツツアル製造品及半製品ヲ吸收シ得ル外國市場ノ開拓ガ益々緊要ナリ。而テ如斯市場ハ同時ニ原料品ノ供給地タリ得ベシ、

日本ノ輸出貿易市場タル支那　今日迄發展シタル日本ノ輸出貿易ハ二ツノ主ナル方面ヲ有ス。

北米合衆國ニ主要製造品（主トシテ綿製品）ハ亞細亞ノ諸國ニ向ヒ、北米合衆國ハ輸出ノ四二・五「パーセント」、亞細亞ニ於ケル市場ハ總括シテ四二・六「パーセント」ヲ占ム。而テ後者ノ中支那、關東租借地及香港ハ二四・七「パーセント」ニシテ殘餘ノ大部分ハ亞細亞ノ他ノ地方ニ於テ支那商人ニヨリテ取扱ハル。（一九二九年ノ數字ニシテ「ジヤパン・イーヤ・ブツク」一九三一年版ニ依ル。）

一九三〇年即チ完全ナル數字ノ判明シ居ル最近ノ年ニ於テ日本ノ輸出額ハ十四億六千九百八十五萬二千圓ニシテ輸入總額ハ十五億四千六百七萬一千圓ナリ。而テ右輸出ノ中二億六千八十二萬六千圓即チ一七・七「パーセント」ハ支那（關東租借地及香港ヲ除ク）ニ向ヒ右輸入中一億六千百六十六萬七千圓即チ一〇・四「パーセント」ハ支那（關東租借地及香港ヲ除ク）ヨリ來レリ。

日本ヨリ支那ニ輸出サルル主ナル商品ヲ細別スルトキハ支那ハ日本ヨリ輸出サルル一切ノ水產物ノ三二・八「パーセント」、精糖ノ八四・六「パーセント」、石炭ノ七五・一「パーセント」、綿織物ノ三一・九「パーセント」、平均五一・六「パーセント」ヲ占ムルコトヲ見ル可シ。

尙ホ支那ヨリ輸入サルル物品ヲ細別スルトキハ日本ガ輸入スル大豆及豌豆ノ總額ノ二四・五「パーセント」、油糟ノ五三「パーセント」、植物性繊維ノ二五「パーセント」、平均三四・五「パーセント」ハ支那ヨリ來ルモノナルコトヲ示ス。

以上ノ數字ハ香港及關東租借地ヲ除キタル支那ノミニ關スルモノナルヲ以テ主ニ大連港ヲ經由シテ行ハレツツアル日本ノ對滿洲貿易ノ範圍ヲ示シ居ラズ。

日支貿易關係ノ重要性　叙上ノ事實及數字ハ明ニ日本ニ取リ對支貿易ノ重要ナルコトヲ示セリ。尙日本ノ支那ニ於ケル利益ハ單ニ貿易ニ止マラズ即チ日本ハ巨額ノ資本ヲ工業的企業竝ニ鐵道、船舶及銀行ニ投ジ此ノ方面ノ財政經濟活動ニ於テ發展ノ一般的傾向ハ最近三十年間ニ顯著ナルモノアリシナリ。

支那ニ於ケル日本ノ投資　一八九八年ニ於テ擧グルニ足ルベキ日本ノ唯一ノ投資ハ支那人トノ合辦ニ係リ約十萬兩ノ價格ヲ有スル在上海ノ小精綿工場ニ過ギザリキ。一九一三年迄ニ支那及滿洲ニ於ケル日本ノ投資見積總額ハ日本ノ海外投資見積總額五億三千五百萬圓ノ內四億三千五百萬圓ヲ占メ世界大戰ノ終期迄ニ日本ハ支那及滿洲ニ於ケル一九一三年ノ投資額ニ比シ其ノ投資ヲ倍以上ト成セリ。右增加ノ相當部分ハ有名ナル西原借款ニ基クモノニシテ右借款ハ政治的考慮ヲモ加味セラレタルモノナリ。此ノ故障アリシニ拘ラズ日本ノ支那及滿洲ニ於ケル投資額ハ一九二九年ニ

於テ海外投資二十一億圓ノ内約二十億圓ニ上レリ。(他ノ見積ニ依レバ支那(滿洲ヲ含ム)ニ於ケル日本ノ投資ハ總額約十八億圓ナリ)右ハ日本ノ海外投資ハ殆ンド全ク支那及滿洲ニ限定セラレ而モ後者カ此ノ投資ノ大部分(特ニ鐵道)ヲ吸收シタルモノナルコトヲ示ス。

右投資以外ニ支那ハ日本ニ對シ諸種ノ國債省債及市債トシテ債務ヲ負ヒ其ノ額ハ一九二五年ニ於テハ三億四百四十五萬八千圓(其大部分ハ無擔保)及利息一千八百三萬圓ナリ。

日本ノ投資ノ大部分ハ滿洲ニ於テナルガ支那本部ニ於テ工業、船舶業及銀行業ニ投ゼラレタル金額亦尠カラズ。一九二九年ニ於テ支那ノ紡績及紡織工場ニ於テ運轉セル紡錘ノ總數ノ約五十「パーセント」ハ日本人ニヨリテ所有セラレ、又日本ハ支那ニ於ケル通運業ニ於テ第二位ヲ占メ、支那ニ於ケル日本ノ銀行ノ數ハ一九三二年ニ三十ニ達シ內若干ハ日支合辦ナリ。

支那ノ對日貿易發展ニ於ケル利益 敍上ノ數字ハ日本側ヨリ觀察シタルモノナル處支那側ヨリ見ルモ其相對的重要性ヲ容易ニ知ルコトヲ得。日本トノ外國貿易ハ一九三二年迄ニ於テ支那ノ外國貿易ノ首位ヲ占メタリ。一九三〇年ニ輸出ノ二四・一「パーセント」ハ日本ニ向ヒ、同年輸入ノ二四・九「パーセント」ハ日本ヨリ來レリ。右ヲ日本側見地ヨリスル數字ニ比較センニ支那ノ外國貿易ニ於テ日本貿易トノ貿易ハ日本ノ貿易總額ニ於テ對支貿易ガ占ムル「パーセンテーヂ」ヨリモ多キコトヲ知リ得。然ルニ支那ハ日本ニ於テ何等ノ投資ヲモ銀行業又ハ船舶業ノ利益ヲモ有セズ。支那ハ多數ノ製造品ニ對スル支拂ヲ可能ナラシメ且健實ナル信用ノ基礎ヲ築キ以テ將來ノ發展ニ必要ナル資本ヲ借入レンガ爲其ノ製産物ノ輸出增加ヲ可能ナラシムルコトヲ要ス。

日支經濟財政關係ハ紛爭ニヨリテ容易ニ影響ヲ受ク 依是觀之日支經濟財政關係ハ廣汎且多岐ニシテ紛爭要因ニヨリテ容易ニ影響サレ且混亂セシメラルルモノナルコト明ナリ。尙概言センニ日本ノ支那ニ依存スルコトハ支那ノ日本ニ依存スルコトヨリモ大ナルモノノ如シ。由テ日本ハ支那トノ關係混亂スル場合ニ於テハ支那ニ比較シ一層害セラレ易ク且失フ所モ多シ。

尙一八九五年ノ日清戰爭以來兩國ノ間ニ起リタル幾多ノ政治的紛爭ガ順次ニ相互ノ經濟的關係ニ影響シタルコト明カナリ。而シテ右紛爭ニ拘ラズ兩國ノ貿易カ絕エズ增加シタルノ事實ハ政治的敵愾心モ割クコト能ハザル基本的連鎖ノ存スルコトヲ示スモノナリ。

「ボイコット」ノ起源 數世紀ニ渡ル支那人ハ商人、銀行

家ノ團體及同業組合ニ於テ「ボイコット」ヲ慣用シ、右組合ハ近代ノ情勢ニ合致スル樣變形セラレタルモ尚多數ニ存在シ、其ノ共通ノ職業的利益擁護ノ爲組合員ニ對シ絕大ナル勢力ヲ振ヒツツアルナリ。右數世紀ノ歷史ヲ有スル組合生活ニ於テ得ラレタル訓練及態度ハ現代ノ「ボイコット」運動ニ於テ近年ノ熾烈ナル國民主義ト結合セリ。而シテ國民黨ハ右國民主義ノ組織的表現ナリ。

近代ノ排外「ボイコット」　國民的基礎於テ外國ニ對スル政治的武器「右ハ支那商人相互間ニ行ハレタル職業的方便タル「ボイコット」ヨリ區別シ」トシテ使用セラルル近代ノ排外「ボイコット」時代ハ一九〇五米國ニ對シテ爲サレタル「ボイコット」ニ依リ始マリタリト云フヲ得ベシ。右「ボイコット」ハ同年改訂セラレタル米支通商條約ノ規定ガ從前ヨリモ一層嚴重ニ支那人ノ渡米ヲ制限セルニ依リ起リタリ。此ノ時以來今日ニ至ル迄規模ニ於テ國民的ト稱セラルベキ「ボイコット」ガ判然ト十回モ行ハレタリ（此ノ外ニ地方的性質ノ排外運動アリタリ）右ノ内九回ハ對日（註）ニシテ一ハ對英ナリ。

（註）之等「ボイコット」ノ年度及直接原因ハ次ノ如シ

一九〇八年　辰丸事件
一九〇九年　安奉線問題
一九一五年　「二十一ヶ條」
一九一九年　山東問題
一九二三年　旅大回收問題
一九二五年　五、三〇事件
一九二七年　山東出兵
一九二八年　濟南事件
一九三一年　滿洲　（萬寶山及天奉事件）

此等「ボイコット」運動ノ諸原因　若シ此等「ボイコット」ヲ仔細ニ研究セバ、何レモ或ル一定ノ事實、事故又ハ事件ニシテ概シテ政治的性質ヲ有シ、支那ガ同國ノ重大利益ニ反シテ行ハレ又ハ同國ノ國家的體面ヲ毀損スト解スルモノニ其ノ緣由ヲ繹ネ得ルコトヲ發見スベシ。斯クシテ一九三一年ノ「ボイコット」ハ同年六月ノ萬寶山事件ニ續イテ發生セル七月ノ鮮虐人ノ殺ノ直接ノ結果トシテ開始セラレ九月ノ奉天事件及ビ一九三二年一月ノ上海事件ニ促進セラレタルモノナリ。各「ボイコット」ハ各直接ニ繹ネ得ル原因アルモ其ノ原因自體ハ第一章ニ述ベタル群衆心理無カリセバ斯ノ如キ廣汎ナル經濟的報復ヲ生起セザリシナルベシ。此ノ心理ノ創生ニ寄與セル要素ハ不正ノ確信（不正ト考フルコトガ正シクトモ或ハ誤レルトモ）外國人ニ比シ支那ノ文化ガ優越ナリトスル相傳的信條、及西洋式ノ熾烈ナル國

民主義（目的ニ於テ主トシテ守勢的ナルモ其ノ間攻擊的傾向ヲ缺除セズ）ナリ。

一九二五年以前ノ「ボイコット」運動　國民黨ノ前身トモ見ラルル興中會ハ遠ク一八九三年ニ創設セラレ又一九〇五年ヨリ一九二五年ニ至ル總テノ「ボイコット」ハ疑モ無ク國民主義ノ矢叫ヲ以テ開始セラレタルモノナリド雖モ最初ノ國民主義者ノ國體及ビ後ノ國民黨ガ此等「ボイコット」ノ組織ニ直接關與セルノ確證ナシ。商會及學生同盟ハ孫逸仙博士ノ新綱領ニ鼓吹セラレ又實際ニ於テハ世紀ヲ經タル祕密結社、同業組合ノ經驗及心理ニ導カレ斯カル仕事ニ充分ノ能力ヲ有セリ。商人ハ專門的知識、組織方法及手續方式ヲ供シ一方學生ハ新ニ獲得セル確信及ビ國家的目的ニ對スル決意ノ精神ヲ以テ其ノ運動ヲ鼓吹シ以テ之ガ實行ヲ助成セリ。學生ハ概シテ國民主義的感情ノミニ動カサレタルモノナルガ商會ハ其ノ感情ハ同ジウスルモ「ボイコット」ノ實行ヲ支配セムトスルノ慾望ヨリ之ニ參加スルヲ賢明ト思考セリ。初期「ボイコット」ノ實際ノ方式ハ排斥セラルル國ノ商品ノ購買防止ニアリシガ其ノ活動ノ範園ハ漸次該國ニ對スル支那商品ノ輸出拒絶又ハ支那ニ於ケル該國人ニ對スル有償無償ノ奉仕拒絶ニ擴張セラレ終ニ最近ノ「ボイコット」ノ確定セル目的ハ「仇國」トノ間ノ總テノ經濟的關係ヲ完全ニ斷絶スルコトニ存スルニ至レリ。

斯ク樹立セラレタル方式ハ本報告書ニ附屬スル特別研究ニ於テ詳述セラレタル理由ニ因リ未ダ充分ニ徹底的ニハ實行セラレタルコトナキヲ指摘セザル可ラズ。概說スルニ「ボイコット」ハ北方（特ニ山東ハ之ニ對スル支援ヲ差控ヘタリ）ニ於ケルヨリモ國民主義的感情ガ最初ノ且最モ熱列ナル信者ヲ發見セシ南方ニ於テヨリ激烈性ヲ有セリ。

一九二五年以後ノ「ボイコット」運動、國民黨ノ活動　一九二五年以來「ボイコット」組織ニ確定的變化起レリ。國民黨ハ其ノ創設以來同運動ヲ支援シ順次ノ「ボイコット」ニ其ノ支配ヲ增加シ、遂ニ今日ニ於テハ其ノ實際ノ組織的、原動的、調整的及監督的要素タルニ至レリ。

之ヲ爲スニ當リ國民黨ハ委員所有ノ證據ニ示サルル如ク從前「ボイコット」運動指導ニ與リ居タル各團體ヲ除外セザリキ。同黨ハ寧ロ右等團體ノ努力ヲ調整シ、其ノ方法ヲ組織化及統一シ、其ノ運動ノ背後ニ强力ナル黨組織ノ精神的及ビ物質的ノ重ミヲ充分ニ賦與セリ。同黨ハ全國ニ支部ヲ有シ廣汎ナル宣傳及ビ情報機關ヲ所有シ强キ國民主義感情ニ刺戟セラレ居ルモノニシテ當時迄稍散在的ナリシ運動ニ組織及ビ刺戟ヲ與フルコトニ急速ニ成功セリ。其ノ結果トシテ商人及一般民衆ニ對スル「ボイコット」組織者ノ强

制的權力ハ以前ヨリハ一層强キヲ加ヘタリ尤モ同時ニ個々ノ「ボイコット」團體ニ對シ多少ノ自治權及發案權殘シ置カレタリ。

使用セラレタル方法　「ボイコット」方式ハ地方狀況ニ從ヒ變改ヲ續ケタルガ右ハ組織ノ强力化ト平行シテ爲サレ「ボイコット」團體ニ依リ使用セラレタル方法ハ一層統一的ニ、一層嚴格且效果的トナレリ。同時ニ國民黨部ハ命令ヲ發シテ日本人ニ屬スル商業家屋ノ破壞又ハ日本人ニ對スル肉體的加害ヲ禁止セリ。右ハ「ボイコット」中ニ於テ在支日本人ノ生命ガ決シテ脅カサレタルコトナキヲ意味セザルモ、概括的ニハ最近ノ「ボイコット」ニ於テハ日本人民ニ對スル暴行ハ從前ニ比シ少ク且甚シカラザリシト言フヲ得ベシ。

使用セラレタル方法ノ技巧ヲ檢討スルニ「ボイコット」ノ成功ニ必須ナル民衆感情ノ雰圍氣ハ「仇」國ニ對スル民心ヲ刺戟スル爲巧妙ニ撰バレタル標語ヲ用ヒ、全國ニ亘リ統一的ニ實行セラレタル猛烈ナル宣傳ニ依リ創生セラレ居ルヲ見ル。

反日宣傳　委員會ノ實見セル現在ノ對日「ボイコット」ニ於テハ民衆ニ對シ日貨ノ不買ガ愛國的義務ナルヲ印象スル爲有ラユル手段ガ使用セラレ居タリ。例ヘバ支那新聞紙ノ紙面ハ此ノ種宣傳ニ充タサレ、又市内ノ建築物ノ壁ハ「ポスター」ヲ以テ蔽ハレ居リタルガ、此ノ種「ポスター」ニハ屢々極端ニ激烈ナル性質ノモノアリ。(註)　反日標語ハ紙幣、書信及電報用紙ニモ印刷セラレ、「チエーン・レター」ハ轉々ト發セラレタリ。此等事例ハ決シテ茲ニ全部ヲ盡シ居ルモノニハアラザルモ使用セラレタル方法ノ性質ヲ示スニ足ルベシ。此ノ種宣傳ガ一九一四――一九一八年ノ世界大戰中歐米ノ或ル國々ニ於テ用ヒラレタルモノト本質的ニ異ナラザルノ事實ハ日支兩國間ノ政治的緊張ノ結果トシテ支那人ガ日本ニ對シテ感ズルニ至レル敵意ノ程度ヲ證スルノミ。

(註)　委員會ノ訪問セル多クノ都市ニ於テハ此ノ種「ポスター」ハ豫メ撤去セラレアリタルモ屢々此ノ種「ポスター」ノ見本ヲ所有セル信頼スベキ地方ノ證人ヨリノ言明アリタルニ依リ上記ノ事實ヲ確證セリ。尚又右見本ハ委員會ノ記錄中ニ保有シアリ。

反日會ニ依リ採用セラレタル「ボイコット」方式　「ボイコット」ノ政治的雰圍氣ハ其ノ最後ノ成功ニ缺グベカラザルモノナレドモ斯ル運動ハ若シ「ボイコット」團體ガ其ノ手續ノ方式ニ於テ或ル種ノ統一性ヲ得ルニアラザレバ決シテ效果的ナル能ハズ。一九三一年七月十七日ニ開催セラ

レタル上海反日會ノ第一回會議ニ於テ採用セラレタル四原則ハ此ノ種規則ノ主要目的ヲ例證スルニ足ルベシ。

イ、既約日貨ノ注文ヲ取消スコト。

ロ、既約日貨ニシテ積込未了ノモノハ船積ヲ停止セシムルコト。

ハ、既ニ倉庫ニ在ルモ支拂未了ノ日貨ハ受領ヲ拒絶スルコト。

ニ、既購入日貨ヲ反日會ニ登記シ其ノ賣却ヲ一時停止スルコト、登記ノ手續ハ別ニ決定ス。

同會ニ依リ採用セラレ本報告書附屬書ニ採錄セラレタル其ノ後ノ決議ハ一層詳細ニシテ有ラユル場合ニ對スル規定ヲ包含ス。

「ボイコット」ヲ勵行スル强力ナル手段ハ支那商人ノ手持日貨ノ强制登記ナリ。反日會ノ檢査員ハ日貨ノ動キヲ監視シ出所疑ハシキモノハ日貨ナリヤ否ヤヲ確ムル爲メ之ヲ檢査シ、未登記日貨ノ存在ノ嫌疑アル商店及倉庫ハ手入ヲ行ヒ、規則違反發見ノ場合ハ其ノ首領ノ注意ヲ喚起ス。斯カル規則違反ヲ犯セルヲ發見セラレタル商人ハ「ボイコット」團體ニ依リ罰金ヲ課セラレ、公然民衆ノ非難ニ曝サレ、一方其ノ所有商品ハ沒收ノ上公賣ニ附セラレ其ノ賣上金ハ反日團體ノ資金トナル。

「ボイコット」ハ商賣ノミニ限ラルルニアラズ。支那人ハ日本船ニテ旅行ヲ爲シ、日本ノ銀行ヲ利用シ、又ハ業務上家事上ヲ問ハズ如何ナル資格ニ於テモ日本人ニ仕ヘザル樣警告セラル。此等命令ヲ無視スルモノハ各種ノ非難及脅迫ヲ蒙ル。

此ノ「ボイコット」ノ今一ツノ特徵ハ前例ノ如ク單ニ日本ノ工業ヲ害スルノミナラズ從前日本ヨリ輸入セル或ル種貨物ノ生産ヲ刺戟シ支那ノ工業ヲ促進セントスル希望ナリ。其ノ主ナル結果ハ上海ニ於ケル日本人所有ノ工場ヲ犧牲トセル支那ノ紡織工業ノ擴張トナレリ。

一九三一—三二年ニ於ケル「ボイコット」運動ノ消長

上述ノ「ライン」ニ於テ組織セラレタル一九三一年ノ「ボイコット」ハ同年十二月或ル種ノ弛緩ノ顯レタル迄繼續セリ。一九三二年一月ニハ當時進行中ノ大上海市長ト同地日本總領事トノ間ノ交渉中ニ於テ支那側ハ地方反日會ヲ自發的ニ解散スルコトヲサヘ約セリ。

上海ニ於ケル敵對行爲中及日本軍撤廢直後ノ數ケ月間ニ於テハ「ボイコット」ハ決シテ完全ニ放棄セラレザリシモ緩和セラレ、晩春及初夏ニ於テハ支那各地方ニ於ケル日本トノ貿易再ビ興ルヤニサヘ見受ケラレタリ。其ノ時極メテ突然ニ七月下旬ヨリ八月上旬ニ亘レル熱河境ニ於ケル日本

軍ノ行動ノ報ト時ヲ同ウシテ「ボイコット」運動ノ顯著ナル復活ヲ見タリ。民衆ニ對シ日貨不買ヲ强調スル記事ハ支那各新聞ニ新ニ揭載セラレ、上海商會ハ「ボイコット」再開始ヲ慫慂スル公開狀ヲ發シ、同市ニ於ケル石炭商同業組合ハ日本炭ノ輸入ヲ最少限度ニ制限スルニ決セリ。同時ニ日本炭取扱ノ嫌疑アル石炭商ノ構內ニ爆彈ヲ投入シ、又ハ商店主ニ對シ手紙ヲ送リ日貨ヲ賣ルヲ止メザレバ其ノ財產ヲ破壞スベシト脅迫スル等ノ一層激烈ナル方法用ヒラルルニ至レリ。新聞ニ揭載セラレタル此ノ種脅迫狀ハ「鐵血團」又ハ「血魂除奸團」ト署名セラレ居リタリ。

斯クノ如キガ本報告書起草中ノ狀況ナリ。「ボイコット」活動ノ此ノ再發ハ在上海日本總領事ヲシテ地方官憲ニ對シ正式抗議ヲ提出セシメタリ。

「ボイコット」運動ノ物質的影響　各種ノ「ボイコット」運動及特ニ現在ノ「ボイコット」運動ハ物質的及心理的意味ニ於テ共ニ日支關係ニ重大ナル影響ヲ及ボセリ。

物質的影響ニ關スル限リ即チ貿易業ノ損失ニ於テハ支那人ハ「ボイコット」ヲ經濟的加害行爲トシテヨリモ寧ロ道德的抗議トシテ示サントスル望ヲ以テ之ヲ內輪ニ表示スルノ傾向アリ。然ルニ日本人ハ或ル種ノ貿易上ノ統計ニ餘リニ絕對的ノ價値ヲ附シ居レリ。之ニ關聯シテ兩者ニ用ヒラレタル議論ハ前述ノ附屬研究ニ檢討セラレアリ。同研究ニ於テハ正ニ相當多額ニ達セル日本ノ貿易ニ對スル實害ノ程度ニ付詳細ノ記述ヲ爲シアリ。

本問題ノ他ノ一面モ亦之ヲ述ブルヲ要ス。支那側自身ハ既ニ支拂ヲ了セル商品ニシテ「ボイコット」團體ニ登記セズ爲メニ公賣ノ爲メ押收セラレタルニ依リ、又「ボイコット」規則違反ニ對シ同團體ニ支拂ヒタル罰金ニ依リ、將又支那海關ガ其ノ收入ヲ得ザルコトニ依リ損失ヲ蒙リ居リ而シテ全般的ニ言ハバ取引ヲ失ヒタルニ依リ損失ヲ蒙リ居リ此等損失ハ相當ノ額ニ達ス。

日支關係ニ及ボセル心理的影響　「ボイコット」ノ日支關係ニ及ボセル心理的影響ハ物質的影響ヨリモ算定ニ困難ナレドモ、廣範圍ノ日本輿論ノ對支感情上ニ慘憺タル反響ヲ起シタル點ニ於テ確ニ物質的影響ニ劣ラズ重大ナリ。委員會ノ日本訪問中東京、大阪ノ兩商工會議所ハ此ノ點ヲ力說セリ。

日本ノ輿論ハ日本ガ其ノ蒙リツツアル損害ニ對シ自ラヲ保護スルコト能ハザルヲ知リテ憤激セリ。委員會ガ大阪ニ於テ會見セル商人等ハ亂暴狼籍及脅喝ノ如キ「ボイコット」手段ノ或ル種亂用過ヲ大視シ、日本ノ最近ノ對支政策ト右政策ニ對スル防禦的武器トシテノ「ボイコット」ノ實行ト

ノ間ニ存スル密接ナル關係ヲ過小ニ見積リ又ハ全然之ヲ否定スル傾向アリタリ。反對ニ之等商人ハ「ボイコット」ヲ支那ノ防禦武器トハ見ズ「ボイコット」ヲ以テ侵略行爲ト爲シ之ガ報復トシテ日本ガ軍事行動ヲ執リタルナリト主張セリ。兎ニ角「ボイコット」ハ近年日支關係ヲ深ク惡化セル諸原因中ノ一タリシコトハ疑ノ餘地ナシ。

ボイコットニ關スル論爭點

(一) 運動ハ自發的ナリヤ又ハ組織セラレタルモノナリヤ 「ボイコット」ノ政策及手段ニ關シ三箇ノ論爭點アリ。

第一ハ該運動ハ支那人自身主張スルガ如ク純粹ニ自發的ナリヤ、又ハ日本人ノ主張スルガ如ク國民黨ガ屢恐怖政治ニ均シキ方法ニ依リ人民ニ强制スル組織的運動ナリヤ否ヤノ問題ナリ此ノ點ニ就テハ双方ニ多クノ言分アルベシ。一方ニ於テハ民衆ノ强キ感情ノ基礎ナカリシナラバ廣大ナル地域ニ亙リ且長期間繼續スル「ボイコット」ヲ持續スルニ伴フ此程度ノ協力及犧牲ヲ示スコト一ノ國民ニトリテ不可能ナリト認メラルル。他方支那人ガ其ノ古キ同業公會及祕密結社ヨリ繼承セル心理狀態ト方法トヲ國民黨ガ利用シ如何ナル程度迄近時ノ「ボイコット」特ニ現在ノ「ボイコット」ヲ支配スルニ至レルカハ明カニ示サレタリ。現在ノ「ボイコット」ニ於テ諸規則、規律及「賣國奴」ニ對スル制裁ガ斯ク迄主要部分トナリ居ルコトハ該運動ガ如何ニ自發的ナリトハ言ヘ確ニ强固ニ組織セラレ居ルコトヲ示スモノナリ。

有ラユル民衆運動ハ或程度ノ有效ナル組織ヲ必要トス。凡テノ同志ガ共同目的ニ對シテ有スル忠實サハ決シテ劃一的ニ强固ナルモノニ非ズ。故ニ目的及行動ノ統一ヲ貫徹スル爲ニハ規律ヲ設クルノ要アリ。本委員會ハ支那ノ「ボイコット」ハ民衆運動タルト同時ニ組織セラレタルモノニシテ又右「ボイコット」ハ强キ國民的感情ニ胚胎シ之ニ依リ支持セラルルト雖モ之ヲ開始又ハ終熄セシメ得ル團體ニ依リ支配セラレ又命令セラルルモノニシテ且確ニ脅迫ニ等シキ方法ニ依リ强行セラルルモノナリト結論ス。「ボイコット」ノ組織中ニハ多クノ別々ノ團體アリト雖モ主タル支配的權力ハ國民黨ニアリ。

(二) 「ボイコット」ノ方法ノ適法性又ハ不法性 第二ノ論點ハ「ボイコット」運動ノ實行ニ際シ用ヒラレタル方法ハ常ニ適法ナリシヤ否ヤニ在リ。委員會ノ蒐集セル證據ニ依レバ不法行爲ハ常ニ行ハレ而モ此等不法行爲ハ官憲及法廷ニ依リ充分ニ禁壓セラレザリシ所ナリト云フ以外ニ何等カノ結論ヲ爲スコト困難ナリ。此等ノ方法ガ往時支那ニ於テ用ヒラレタルモノト大體ニ於テ同一ナリトノ事實ハ一ノ

說明ト爲ルベシト雖モ辯明トハ爲ラズ。當時支那ノ同業公會ガ「ボイコット」ヲ宣言シ被疑者タル組合員ノ家宅ヲ捜索シ、彼等ヲ公會裁判所ニ引出シ、反則ノ廉ニ依リ罰シ、科料ヲ課シ押收品ヲ賣却シタリシモ公會ハ當時ノ慣習ニ從ヒ行動シタルナリ。加之右ハ支那社會ノ内部問題タリシモノニシテ外國人ノ關係ナカリシ所ナリ。現在ノ狀態ハ右ト異ル。支那ハ近代的法典ヲ採用シタルガ此等ノ近代的法律ハ支那ニ於ケル「ボイコット」ノ傳統的手段ト兩立セザル所ナリ。支那側參與員ガ「ボイコット」ニ關スル支那側ノ意見ヲ辯護セル覺書ハ以上ノ記述ヲ駁セズ、單ニ「ボイコット」ハ一般的ニ言ハバ合法的手段ニ依リ行ハルル……」ト論ズルノミ、委員會ノ有スル證據ハ、右ノ主張ヲ支持セズ。

右ニ關聯シテ不法行爲ニシテ直接ニ在支外國人卽チ今ノ場合日本人ニ對シテ行ハレタルモノト、支那人ニ對シテ行ハレタルモ其ノ目的タルヤ明瞭ニ日本人ノ利益ヲ害スルニ在リタルモノトヲ區別セザルベカラズ。前者ニ關スル限リ此等ノ行爲ハ支那法律ニ依リ明ニ不法ナルノミナラズ、生命財產ヲ保護シ竝ニ通商、居住、往來及行動ノ自由ヲ保持スルノ條約上ノ義務ニ違反ス。之ハ支那人モ異議ナキ所ニシテ、「ボイコット」團體モ國民黨ノ當路者モ此ノ種ノ犯行ヲ豫防スルニ努メタリシモ必ズシモ常ニ成功セザリシモノノ如シ。既ニ叙ベタルガ如ク現在ノ「ボイコット」ニ於テハ此ノ種ノ行爲ハ既往ニ於ケルヨリモ少ナカリキ。

(註) 最近日本ヨリ得タル情報ニ依レバ上海ニ於テ一九三一年七月ヨリ同年十二月末迄ノ間排日諸團體員ニ依リ日本商人ノ商品ガ捕獲抑留セラレタル事件ハ三十五件ナリ、右商品ノ價格ハ約二八七、〇〇〇弗ト評價セラル。右事件ノ中一九三二年八月ニ於テ未解決ノ儘殘サレタルモノハ五件ナリ。

支那人ニ對シテ行ハレタル不法行爲ニ關シテハ支那側參與員ハ其ノ「ボイコット」ニ關スル覺書第十七頁ニ於テ曰ク、

「吾人ハ先ツ外國ハ國内法上ノ問題ヲ提起スルコトヲ許サレサルコトヲ述ヘントス。實際吾人ノ直面セル行爲ハ不法ナリト摘發セラルルモ支那人カ他ノ支那人ニ損害ヲ加ヘタルモノナリ。此等ノ行爲ノ抑壓ハ支那官憲ノ關係事項ニシテ支那ノ刑法カ加害者モ被害者モ同シク支那國籍ヲ有スル事件ニ如何ニ適用セラルルカニ對シ何人モ容喙スル權ナキヤニ認メラル。如何ナル國家ト雖モ他ノ國家ノ純然タル國内問題ノ處理ニ干涉スル權利ナシ。主權及獨立ノ相互尊重ナル原則ノ意味ス

ル所即チ之ナリ」ト。

右ノ如ク叙述セラルルトキハ右ノ議論ハ反駁ノ餘地ナシト雖モ日本側ノ苦情ハ一ノ支那人ガ他ノ支那人ニ依リ不法ニ損害ヲ蒙リタリト云フ點ニ根據ヲ有スルニハ在ラズシテ支那法ニ依リ不法ナル方法ニ依リ日本ノ利益ガ侵害セラレ而シテ右ノ如キ事情ノ下ニ於テ法律ヲ勵行セザルコトガ日本國ニ對シテ爲サレタル損害ニ對スル支那政府ノ責任問題ヲ惹起スルモノナリトノ點ニ根據ヲ有スルノ事實ヲ無視スルモノナリ。

(三)ボイコットニ對スル支那政府ノ責任　茲ニ於テ吾人ハ「ボイコット」政策ノ包含スル最後ノ論爭點即チ支那政府ノ責任ノ範圍ノ考察ニ逢著ス。支那政府ノ態度ハ「物ヲ買フニ當リ自由ニ選擇ヲ爲スコトハ個人ノ權利ニシテ如何ナル政府ト雖モ干渉シ得ル所ニ非ス政府ハ生命財産ノ保護ニ對シテハ責任ヲ有スルモ一般ニ認メラレタル如何ナル規則モ原則モ政府ニ對シ各市民ノ基本的權利ノ行使ヲ禁止シ處罰スヘシトハ要求セス」ト云フニ在リ、委員會ハ本報告書附屬第八號ニ再錄セラレタル證據資料ヲ提供セラレタリ。

該證據資料ハ現在ノ「ボイコット」ニ於テ支那政府ガ上記引用支那側覺書ノ指示スルヤニ認メラルル所ヨリモ一層直接的ナル關與ヲ爲シタルコトヲ示ス。委員會ハ政府各部ガ「ボイコット」運動ヲ支持スルノ事實ニ何等カ不適當ナルモノアリト諷示セントスルニハ非ズ。委員會ハ單ニ政府ノ奬勵ハ其ノ責任問題ヲ惹起スルコトヲ指摘セント欲ス。此ノ點ニ關シ政府ト國民黨ノ關係ノ問題ヲ考慮スルヲ要ス。後者ノ責任ニ關シテハ問題ナシ。國民黨ハ全「ボイコット」背後ニ存スル支配的且調整的機關ナリ。國民黨ハ政府ヲ作ルモノニシテ又其ノ主人ナルヤモ知レザルモ如何ナル點迄ガ黨部ノ責任ニシテ如何ナル點ヨリ政府ノ責任ガ開始スルヤヲ決定スルコトハ憲法上ノ一ノ複雜ナル問題ニシテ、本委員會ハ此ノ點ニ關シ斷案ヲ下スハ適當ニ非ズト感ズ。

批判　「ボイコット」ハ強國ノ軍事的侵略ニ對抗スル防衛ナル合法的ノ武器ニシテ特ニ仲裁裁判ノ方法ガ前以テ利用セラレザリシ場合ニ於テ然リト爲ストノ支那政府ノ主張ハ一層廣汎ナル性質ノ問題ヲ提起ス。個々ノ支那人ガ日本品ヲ買フコト、日本ノ銀行若ハ船舶ヲ利用スルコト日本人タル使用者ノ爲ニ働クコト、日本人ニ物品ヲ賣ルコト又ハ日本人ト交際スルコトヲ拒絶スルノ權利アルハ何人モ否定スルコトヲ得ザルヘシ。又支那人ガ個人的ニ又ハ組織セラレタル團體トシテモ上述ノ如キ思想ノ宣傳ヲ爲スヲ得ルコトヲ否定スルヲ得ズ、尤モ此ノ場合常ニ其ノ方法ガ國法ニ違

反セザルコトヲ要スルコト勿論ナリ。然レドモ一ノ特定ノ國家ノ商業ニ對シ「ボイコット」ヲ組織的ニ行フコトカ友好的關係ト兩立スルヤ又ハ條約上ノ義務ト合致スルヤ否ヤハ委員會ノ調査ノ題目ナリト言ハンヨリハ寧ロ國際法上ノ問題ナリ。然レドモ委員會ハ一切ノ諸國ノ利益ノ爲ニ本問題ハ近キ將來ニ於テ考慮セラレ、國際約定ニ依リ規律セラレンコトヲ希望ス。

　本章中ニ於テ、第一ニ、日本ハ其ノ人口問題ニ關聯シ其ノ產業能力ヲ增加セントシ、此ノ目的ノ爲ニ賴リ得ベキ海外市場ヲ求メツツアルコト、第二ニ、對米生絲輸出ヲ除キテハ支那ハ日本ノ輸出ノ主タル市場ニシテ同時ニ日本帝國ニ多クノ原料品及食料品ヲ供スルコトヲ示セリ。加之支那ハ日本ノ海外投資ノ殆ド全部ヲ護シ從テ現時ノ如キ混亂ト未開ノ狀態ヲ以テスラ支那ハ日本ノ諸種ノ經濟的乃至財政的活動ニ對シ有利ナル天地ヲ供ス。最後ニ、一九〇八年ヨリ今日ニ至ル迄陸續トシテ起レル種々ノ「ボイコット」ガ支那ニ於ケル日本ノ權益ニ加ヘタル損害ノ檢討ハ、此等ノ權益ハ毀損セラレ易キモノナルコトニ付注意ヲ喚起セリ。

　日本ガ支那市場ニ依存スルコトハ日本人自身モ充分之ヲ認ムル所ナリ。他方支那ハ經濟生活ノ各方面ニ於ケル發展ヲ最モ焦眉ノ急トスル國ナリ。而シテ一九三一年ニ於テ「ボイコット」ニモ不拘其ノ全貿易額ニ於テ首位ヲ占メタル日本ハ、他ノ如何ナル外國ヨリモ支那ノ經濟的ニ支那ノ友邦タルベキモノト思料セラル。

　此等二箇ノ隣邦ノ貿易上ノ相互依存ト兩國ノ利益トノ爲ニハ其ノ經濟的近接必要ナリ。然レドモ兩者ノ政治的關係ガ然ク險惡ニシテ一方ガ兵力ヲ他方ガ「ボイコット」ナル經濟的武器ヲ用フル間ハ此ノ如キ接近不可能ナリ。

第八章　滿洲ニ於ケル經濟上ノ利益（註）

（註）本章ニ關シテハ特別研究第二、第三、第六及第七參照。

　前章ニ於テ日本及支那ノ經濟上ノ要求ハ政治的理由ニ依リ妨害セラレザル限リ紛爭ヲ齎サズシテ兩國相互ノ了解及協調ヲ齎スベキコトヲ示セリ。滿洲ニ於ケル日本及支那ノ經濟上ノ利益ノ相互關係ヲ近年ノ政治上ノ出來事ト切離シ考究スルニ亦同樣ノ結論ニ到達ス。滿洲ニ於ケル兩國ノ經濟上ノ利益ハ融和シ難キモノニアラズ、滿洲ニ於ケル現在

ノ富源及將來ノ經濟的可能性ヲ其ノ最高限度迄充分ニ發展セシメントセバ、兩者ノ融和ハ洵ニ必要ナリト謂フベシ。

滿洲ニ於ケル富源ハ其ノ現實ノモノタルト未開ノモノタルトヲ問ハズ日本ノ經濟生活ニ必須ナリトノ日本輿論ノ主張ハ第三章ニ於テ充分檢討セラレタルガ、本章ノ目的ハ右主張ガ如何ナル程度迄經濟的事實ト合致シ居ルヤヲ考察スルニ在リ。

投資　南滿洲ニ於テ日本ハ最大ノ外國側投資者ナルコトハ事實ニシテ又北滿洲ニ於テハ蘇聯邦ニ付同樣ナリト謂ヒ得ベシ。三省ヲ總括シテ之ヲ見ルニ日本ノ投資ハ「ソ」聯邦ノ夫レヨリモ重要ナリ、尤モ如何ナル程度ニ重要ナリヤハ信憑スルニ足ル比較數字ヲ得ルコト不可能ナルヲ以テ之ヲ明ニスルコト困難ナリ。投資ノ問題ハ本報告書ノ附屬書中ニ於テ詳細檢討シアルヲ以テ、玆ニハ滿洲ノ經濟的開發ノ參與分子トシテ日本、「ソ」聯邦及其ノ他諸國ノ相對的重要性ヲ說明スル爲少數ノ根本的數字ヲ擧グルヲ以テ足ルベシ。

日本側ヨリ得タル報道ニ依レバ日本ノ投資額ハ一九二八年ニ於テ約十五億圓ナリシ趣ナルヲ以テ、右ノ數字ニシテ正確ナリトセバ今日ニ於テハ約十七億圓（註一）ニ增加シタルベキナリ。露國側ヨリ出デタル報道ハ日本ノ現時ノ投資額ヲ關東州租借地ヲ含ム滿洲全體ニ於テ十五億圓、東三省ニ對シ約十三億圓ナリトシ日本資本ノ大部分ハ遼寧省ニ投下セラレ居レリト稱ス。

（註一）　別個ノ日本側數字ハ一九二九年ニ於ケル日本ノ滿洲ヲ含ム對支全投資額ヲ約十五億圓ナリトス。

是等投資ノ性質ニ關シ述ベンニ、資本ノ過半ハ運輸企業（主トシテ鐵道）ニ向ケラレ、農業、鑛業及林業之ニ次グ。

事實南滿洲ニ於ケル日本ノ投資ハ主トシテ南滿洲鐵道ヲ中心トシテ集中セラレ居リ、又北方ニ於ケル蘇聯邦ノ投資モ亦多クハ直接又ハ間接ニ東支鐵道ト關聯セルモノナリ。

日本以外ノ外國ノ投資ハ之ヲ算定スルコトニ困難多ク、直接關係者ノ有益ナル援助アリシニモ拘ラズ委員會ノ得タル知識ハ貧弱ナリ。日本側ヨリ與ヘラレタル數字ノ大部分ハ一九一七年以前ノモノニシテ時勢遲レナリ。「ソ」聯邦ニ關シテハ既述ノ如ク確實ナル計算可能ナラズ。他ノ諸國ニ付テハ北滿洲ノミニ關スル露國側ノ最近ノ計算アリ、右計算ハ之ヲ檢證スルコト能ハザリシモ、是ニ依レバ英國ハ第二ノ最大投資者ニシテ千百十八萬五千金弗、日本之ニ次ギ九百二十二萬九千四百金弗、米國八百二十二萬金弗、波蘭五百〇二萬五千金弗、佛國百七十六萬金弗、獨逸百二十三萬五千金弗ニシテ、其他百二十萬九千六百金弗ノ投資ヲ合

セ總計三千七百七十八萬四千四百弗ナリ。同樣ノ計算ハ南滿洲ニ付テハ之ヲ得難シ。

日本ト滿洲トノ經濟的關係 滿洲ガ日本ノ經濟生活ニ於テ演ズル役割ヲ玆ニ分析スルコト必要ナリ。本問題ニ關スル詳細ノ研究ハ本報告書ノ附屬書中ニ採錄シアリ、右附屬書ニ依レバ該役割ハ重要ナルモノナルモ同時ニ周圍ノ事情ニ依リ制限ヲ受ケ居ルコトヲ知ルベク、此ノ點ハ看過ヲ許サズ。

過去ノ經驗ヨリ推シテ滿洲ハ大規模ノ日本移民ニ適當ナラザル地方ナルモノノ如シ。第二章ニ於テ既ニ述ベタルガ如ク山東省及直隸省ヨリノ農民及苦力ハ最近數十年間ニ滿洲ノ地ヲ取得セリ。日本人ノ移住者ハ大部分資本ノ投下各種企業ノ發展及天然資源ノ開發事業ヲ管理スル爲ニ來レル實業家、官吏及俸給生活者ニシテ、將來モ多年ノ間然ルベシ。

農業 日本ハ其ノ供給ヲ受クル農產業中滿洲ニ倚賴シ居ルハ主トシテ大豆及其ノ副產物ナリ。食料及飼料トシテノ大豆等ノ使用ハ將來更ニ增加スベキモ、今日其ノ主要用途タル肥料トシテノ重要性ハ日本ニ於ケル化學工業ノ發達ト共ニ減少スベキヤニ認メラル。然レドモ朝鮮及臺灣ノ獲得ガ日本ノ米ノ問題ノ解決ヲ少クトモ當分ノ間援助シタルニ依リ、食料問題ハ日本ニ取リテ現在ノ處緊急ナラズ。將來或ル時日ニ於テ米ノ必要ガ日本帝國ニ取リ緊急ヲ告ゲタル場合ニ於テハ滿洲ハ別個ノ補給地ヲ提供シ得ベシ。然レドモ斯ル場合ニ於テハ充分ナル灌漑組織ヲ發達セシムルガ爲多額ノ投資ヲ必要トスベシ。

重工業 滿洲富源ノ利用ノ結果同地方ニ於ケル日本ノ重工業ガ外國ヨリ獨立スベキ運命ヲ有スルモノナリト假定センニ、是等重工業ノ創設ニハ更ニ巨額ノ資本ヲ要スベキヤニ認メラル。日本ハ東三省ニ於テ何ヨリモ先ヅ日本ノ國防ニ必須ナル原料ノ生產ヲ發達セシメンコトヲ求メ居レリ。滿洲ハ日本ニ對シ石炭、油及鐵ヲ供給スルコトヲ得レドモ右供給ガ經濟上有利ナリヤ否ヤハ確實ナラズ。石炭ニ付テ謂ヘバ生產高ノ比較的小部分ガ日本ニ依リ利用セラレ居ルノミニシテ石油モ亦油母頁岩ヨリ極メテ制限セラレタル量ガ搾出セラレ居ルノミナリ。又鐵ハ明ニ損失ノ下ニ生產セラレ居ルモノノ如ク見受ケラル。然レドモ經濟的考慮ハ日本政府ヲ左右スル唯一ノ點ニ非ズ。獨立ノ鑛產物供給組織ノ發達ヲ助クル爲ニ滿洲ノ富源ヲ以テ之ニ充テントスルモノナリ。何レニスルモ日本ハ其ノ必要トスル「コークス」及或種ノ珪土不含有原鑛ノ大部分ノ供給ヲ海外ニ仰ガザルヲ得ズ。東三省ハ日本ノ國防ニ缺クベカラザル數種ノ鑛產物

ノ供給ニ付大ナル保障ヲ與フベキモ、是等鑛產物ヲ得ンガ爲ニハ大ナル財政的犧牲ヲ拂フヲ要スベシ。此ノ問題中ニ關聯セル日本ノ滿洲ニ於ケル戰略上ノ利害關係ハ別章ニ述ブル所アリタリ。尙滿洲ハ日本ガ其ノ紡績工業ニ最モ必要トスル原料ヲ供給スルコト能ハザルヤニ認メラル。

日本生產品ノ市場トシテノ滿洲　東三省ハ日本ノ生產スル加工品ニ對スル常市場ニシテ此ノ市場ノ重要性ハ東三省ノ繁榮ノ增加ト共ニ更ニ增大スベシ。尤モ大阪ハ過去ニ於テ常ニ大連ヨリモ上海ニ倚賴スル所多カリキ。

滿洲市場ハ安全性ニ於テ支那市場ニ優ルベキモ、支那市場ニ比シ其ノ範圍ニ制限アリ。

「經濟ブロック」ノ觀念ハ西洋ヨリ日本ニ迄浸透セリ。日本帝國及滿洲ヲ包括スル「ブロック」ノ可能性ニ關シテハ日本ノ政治家、學者及操觚者ノ文書中ニ屢之ヲ見受ク。現商工大臣ハ其ノ就任ノ暫ク前ニ執筆セル論說中ニ於テ世界ニ於ケル米國、「ソ」聯邦、歐洲及英帝國ノ經濟「ブロック」ノ成立ヲ指摘シ、日本モ滿洲ト共ニ斯ノ如キ「ブロック」ヲ創設スベキコトヲ述ベタリ。

右ノ如キ組織ガ實現シ得ヘキヤ否ヤ現在ノ所示スベキモノナシ。最近日本ニ於テハ其ノ同胞ニ對シ幻想ノ危險ニ付警告ノ聲ヲ擧グル者アリタリ。日本ガ其ノ貿易ニ付滿洲ニ倚賴スル所ハ其ノ米國、支那本部及英領印度ニ倚賴スル所ニ比シ遙ニ尠シ。

滿洲ハ將來ニ於テ人口過剩ノ日本ニ對シテ大ナル援助トナルコトアルベキモ其ノ可能性ノ限度ヲ辨識セザルコトハ其ノ可能性ノ價値ヲ輕視スルコトト同樣ニ危險ナリ。

支那ノ滿洲トノ經濟的關係　東三省ト東三省ヲ除ク支那トノ經濟的關係ヲ硏究スルトキハ、日本ノ場合ニ於ケルト異リ、支那ノ滿洲開發ニ對スル初期ノ主ナル貢獻ハ滿洲ノ農業上ノ大發展ニ寄與セル季節的勞働者及永住移民ヲ送リタルコトニ在ルコト明瞭ナルベシ。

然ルニ近年、殊ニ最近十年間ニ於テハ支那ノ鐵道建設、鑛產及林產ノ開發並ニ工業、商業及銀行業ニ對スル參與ハ著シキ進步ヲ示セルモノアル處、其ノ範圍ハ材料無キ爲適當ニ之ヲ示ス能ハズ。大體ニ於テ滿洲ト爾餘ノ支那トノ主要ナル連鎖ハ經濟的ヨリモ寧ロ民族的及社會的ノモノナリト謂フヲ得ベシ。

第二章ニ於テ滿洲現在ノ住民ハ大部分近時ノ移民ヨリ成レルモノナルコトヲ述ベタルガ、是等移民運動ガ自發的ニ行ハレタルニ見ルモ其ノ如何ニ實際ノ必要ニ基キタルモノナルカヲ知ルヲ得ベシ。卽チ右移民ハ飢饉ノ結果ナリ。尤モ或程度ニ於テ日本人側及支那人側双方ニ依リ獎勵セラレ

タリ。

日本人ハ多年撫順炭坑、大連築港工事及鐵道建設ノ爲支那人勞働者ヲ募レルガ、右ノ如クシテ募集セラレタル支那人ノ數ハ極メテ限リアルモノナリキ。而シテ右募集ハ一九二七年ニ至リ地方的ノ勞働供給ヲ以テ充分ナリト認メラレタル結果中止セラレタリ。

滿洲ノ地方官憲モ數次支那移民ノ來住ヲ助ケタルコトアルガ、實際ニ於テハ東三省官憲ノ活動ガ移民數ニ對シ及シタル影響ハ極メテ小ナリ。北支官憲及慈善團體モ亦或時期ニ於テ滿洲ニ對スル家族移民ヲ奬勵セリ。

移民ノ受ケタル主ナル補助ハ南滿洲鐵道、支那鐵道及東支鐵道ノ與ヘタル割引運賃ナリ。新來者ニ提供セラレタル右奬勵方法ハ南滿洲鐵道滿洲各省官憲及支那政府ニ於テ少クトモ一九三一年末迄ハ移住ニ對シ好感ヲ以テ迎ヘタルコトヲ示スモノナリ。彼等ハ何レモ東三省植民ニ依リ利益ヲ得タリ。尤モ前記移住ニ對シ彼等ノ有シタル利害關係ハ常ニ同一ナリシトハ云ヒ難シ。

滿洲ニ定着セル移民ハ支那本部ニ於ケル彼等ノ原住地トノ關係ヲ維持ス。右ハ移民ガ彼等ガ生レ故鄕ニ殘シタル家族ニ對スル送金ヲ研究スレバ尤モ明瞭ナリ。銀行及郵便局ヲ通シテ並ニ歸還移民ニ托送シテ爲サルル彼等ノ送金ノ總額ヲ算測スルコトハ不可能ナルガ前記ノ方法ニ依リ山東河北兩省ニ送ラルル金ハ每年二千萬元ニ達スルモノト信ゼラレ、又一九二八年ノ郵政統計ハ遼寧吉林兩省ヨリ山東省ニ對シ郵便爲替ニ依リ送金セラレタル額ガ支那ノ他ノ全部ノ省ヨリ山東省ニ送金セラレタル額ト同額ニ達セルコトヲ示シ居レリ。是等送金ガ滿洲支那本部間ノ重要ナル經濟的連鎖ヲ形成シ居ルコトハ疑ヲ容レズ。右ハ移民ト原住地ニ在ル其ノ家族トノ間ニ維持セラルル接觸ノ「インデックス」ナリ。右ノ接觸ハ長城ノ兩側ニ於ケル狀況ガ大差ナキ爲メ尙容易ナリ。農作物ハ大體同種ニシテ、耕作法モ亦同一ナリ。滿洲ト山東ニ於ケル農業狀況ノ最モ顯著ナル相違ハ氣候、人口ノ密度及經濟的開發狀態ノ差異ナルガ、是等ノ要因ハ東三省ノ農業ガ益々山東ニ於ケル農業狀況ニ近似スルコトヲ妨ゲズ。永年定住者ヲ有スル遼寧省ニ於ケル農村ノ狀況ハ山東ノ夫レニ酷似スルモ、近年開發セラレタル黑龍江省ニ於テハ左程迄ニ山東ニ酷似セズ。

滿洲ニ於ケル農業者トノ直接取引組織モ亦支那本部ノ狀況ト酷似ス。東三省ニ於テハ右ノ如キ取引ハ農民ノミヨリ直接購買スル支那人ノ手ニ在リ。又東三省ニ於テハ支那本部ニ於ケルト同樣信用ガ右ノ如キ地方的取引ニ重要ナル職能ヲ行フ。滿洲及支那本部ニ於ケル商業組織ノ酷似ハ單ニ

地方農村ニ於ケル地方的取引ニ於テノミナラズ市街地ニ於ケル取引ニ於テモ亦之ヲ見ルコトヲ得ルト云フモ過言ニアラズ。

實際ニ於テ滿洲ニ於ケル支那人ノ社會的及經濟的組織ハ其ノ故國ノ習慣、方言及行事ヲ其儘移植セル社會組織ニシテ唯本國ニ比シ廣汎ニシテ人口少ク且外部ヨリ影響ヲ蒙リ易キ滿洲ノ狀況ニ適合セシムルニ必要ナル變改ヲ要スルノミナリ。

茲ニ前記大量移民ハ單ナル一時的事件ナリヤ或ハ將來モ繼續スルモノナリヤノ問題アリ。南滿洲ノ地域並ニ松花江遼河及牡丹江流域ノ如キ南部及東部ニ於ケル數個ノ流域地方ヲ考慮ニ入ルルトキハ純然タル農業的見地ヨリ見ルモ滿洲ハ尙多數ノ植民ヲ收容シ得ベキコト明カナリ。東支鐵道幹部ノ最モ優秀ナル專門家ノ意見ニ依レバ滿洲ノ人口ハ四十年間ニ七千五百萬ニ達シ得ベシトノコトナリ。

然レドモ滿洲ニ於ケル人口ノ急激ナル增加ノ將來ハ經濟的條件ニ依リ制限セラルルコトアルベシ。事實經濟的條件ノミガ大豆栽培ノ將來ヲ不確實ニスルモノナリ。一方、最近滿洲ニ移入セラレタル作物、殊ニ米ノ栽培ハ同地方ニ於テ發達スベキヤニ認メラル。日本人中望ミヲ囑シタルモノアル棉花栽培ノ發達ハ或ル程度ノ制限ヲ免カレザルノ如シ。故ニ東三省ニ於ケル今後ノ移住ハ經濟的及技術的要因ニ依リ或ル程度迄制限セラルルコトアル　シ。

滿洲ニ對スル支那移民ノ減少ハ最近ニ於ケル政治上ノ出來事ノミガ其ノ唯一ノ理由ニ非ズ經濟上ノ危機ハ既ニ一九三一年ノ最初ノ六ケ月間ニ於テ季節的移民ノ重要性ヲ減殺セルガ世界的不況ハ避クベカラザリシ地方的危機ノ慘禍ヲ大ナラシメタリ。此ノ經濟上ノ危機去リ秩序ガ再ビ回復セラレタル曉ニハ滿洲ハ又支那本部ノ人口ノ捌ケ口トシテ役立ツコトアルベシ。支那人ハ滿洲移民ニ最モ適合セル人民ナリ。無定見ナル政治上ノ手段ニ依リ此ノ移民ヲ人口的ニ制限スルコトハ滿洲ノ利益並山東省及河北省ノ利益ヲ毀損スルモノナリ。

滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ連鎖ハ主トシテ民族的及社會的ナルガ、同時ニ經濟的連鎖モ不斷ニ强固トナリツツアリ、右ハ滿洲ト支那ノ他ノ部分トノ間ニ於ケル貿易上ノ關係ノ增進ニ依リ示サル。然レドモ海關統計ニ依レバ日本ハ滿洲ノ最大顧客ニシテ且第一ノ供給者ナリ。支那本部ハ次位ヲ占ム。

滿洲ヨリ支那ノ他ノ部分ニ對スル主要輸入品ハ大豆及其ノ副產物、石炭及少量ノ落花生、生絲、雜穀及極少量ノ鐵、玉蜀黍、羊毛並ニ木材ナリ。支那本部ヨリ滿洲ニ對スル主

要輸出品ハ綿織物、煙草類、絹其他ノ織物、茶、穀類及種子、棉花、紙並ニ小麥粉ナリ。斯クノ如ク支那本部ハ或種ノ食料ニ付滿洲ニ倚賴シ居リ、就中最モ重要ナルモノハ大豆及其ノ副產物ナルガ、其ノ鑛產物輸入ハ石炭ヲ除キ、又其ノ木材、動物產品及加工ノ爲ノ原料ノ輸入ハ過去ニ於テ僅少ナリキ。更ニ支那本部ハ自身ノ入超ヲ相殺スルガ爲滿洲ノ出超利益金ノ一部分ヲ利用シ得ルノミナリ。右利用ハ一般ニ想像セラレ居ルガ如ク政治上ノ連合ニ依ルニ非ズシテ主トシテ滿洲ノ郵政機關及海關ガ利益多キコト及支那移民ノ山東及河北兩省ニ在ル其ノ家族ニ對スル多額ノ送金ニ依ルモノナリ。

批判　滿洲ノ富源ハ豐富ナレドモ未ダ充分ニ實測セラレ居ラズ。之ガ開發ノ爲ニハ人口、資本、技術、組織及國內ノ安寧ヲ必要トス。住民ハ殆ド全部支那ヨリ送ラル。現在住民ノ多數ハ北支諸省ノ產ニシテ其ノ故鄕トノ家族的連絡ハ今尙密接ナルモノアリ。資本、技術及組織ハ今日迄ノ所主トシテ南滿洲ニ於テハ日本ニ依リ又長春以北ニ於テハ露國ニ依リ供給セラレ來レリ。其ノ他ノ外國モ其ノ程度少キモ東三省ヲ通ジ主トシテ大都會ニ於テ利益ヲ有セリ。是等諸外國ノ代表者ハ近年ノ政治的危急ニ際シ調停的ノ役割ヲ演ジタルガ經濟的ニ最モ優勢ナル日本ガ市場獨占ヲ企テザル限リ今後モ右役割ヲ行フコトトナルベシ。現在最モ重要ナル問題ハ住民ガ受諾シ得ベク且窮極的ノ要件ヲ充シ得ベキ卽チ法ト秩序ノ維持シ得ベキ政權ノ樹立ナリ。

如何ナル外國ト雖モ人口ノ大半ヲ爲シ且滿洲ノ土地ヲ耕シ國內ノ殆ンド總テノ企業ニ對シ勞力ヲ供給シツツアル支那民衆ノ好意及滿腔ノ協力無クシテハ滿洲ヲ開發シ又ハ之ヲ管理セントスルノ企ヨリ利益ヲ獲得スルコト能ハズ。一方支那モ是等北方諸省ガ接壤諸國ノ相反對スル野心ノ戰場トナルコトノ熄マザル限リ永久ニ憂惧ト危險トヨリ解放セラレザルベシ。故ニ支那トシテハ滿洲ニ於ケル日本ノ經濟上ノ利益ヲ滿足セシムルコト、又日本トシテハ滿洲ノ住民ノ變改スベカラザル支那人的色彩ヲ容認スルコトガ共ニ必要ナリ。

門戶開放ノ維持　上記ノ如キ了解ト並行シ、且滿洲ノ開發ニ對スル總テノ關係國ノ協力ヲ許容スルガ爲メニハ門戶開放ノ原則ヲ單ニ法律的見地ヨリノミナラズ貿易工業及銀行業ノ實際的運用ニ付維持スルコト必要ナリト認メラル。日本人以外ノ外國實業家ノ間ニハ日本商會ガ現在ノ政治狀況ヲ利用シテ自由競爭以外ノ方法ニ依リテ利益ヲ獲得スベシトノ危惧ヲ懷クモノアリ。若シ右ノ危惧ニシテ理由アルニ至ラバ外國側利害關係者ヲ失望セシメ先ヅ其ノ損失ヲ蒙

ムルモノハ滿洲住民ナルヤモ計ラレズ。貿易投資及財政上ノ自由競爭ニ依リテ表現セラルル眞實ノ門戸開放ノ維持ハ日本及支那双方ノ利益ナルベシ。（註一）

（註一）　此ノ點ニ關シ特ニ鮮滿國境及大連ヲ通ジテ爲サルル滿洲ヘノ密輸入ガ非常ナル範圍ニ亘リ居ルコトヲ指摘スルコト必要ナリ。斯カル慣行ハ單ニ海關收入ニ損失ヲ與フルノミナラズ貿易ヲ破壞シ實際上海關行政ヲ支配シ居ル國ガ他國ノ貿易ニ對シテ差別的待遇ヲ爲スコトトナルベシトノ信念ヲ其ノ當否ハ別トシテ起サシムベシ。

第九章　解決ノ原則及條件

前各章ノ再檢討　本報告ノ前各章ニ於テ日支間ノ諸懸案ハ夫レ自體ニ於テ仲裁的方法ニ依リ解決シ得ザリシニ非ザリシモ之等諸懸案特ニ滿洲問題ニ關スル懸案ヲ日支政府ニ於テ取扱ヒタル結果ハ兩國關係ヲ甚シク惡化セシメ早晩衝突ノ免レ難キモノタリシコトヲ明カニセリ。支那ガ過渡時期ニ必然伴ハルベキ有ラユル政治的紛糾、社會的混亂及分裂的傾向ヲ有スル發達途上ニアル國家ナルコトニ付テモ略述セリ。又日本ノ要求スル權利及利益ガ支那中央政府ノ無力ナル爲如何ニ甚ダシク影響ヲ受ケタルカ又日本ガ滿洲ヲ支那ノ他ノ部分ニ於ケル政府ヨリ引離シ置クコトヲ如何ニ切望シ來レルカヲモ述ベタリ。尙支那、露國及日本政府ノ滿洲ニ於ケル政策ヲ簡單ニ吟味シタル結果滿洲各省政權ハ其ノ統治者ニ依リ一再ナラズ支那中央政府ヨリ獨立セルコトヲ聲明セラレタルモ而モ支那人ガ絕對多數ヲ占ムル之等各省人民ハ未ダ曾テ支那ノ他ノ部分ヨリ分離スルヲ欲スル旨表明シタルコトナキコトヲモ明カニセリ。最後ニ吾人ハ九月十八日及其ノ以後ニ起レル事態ヲ注意深ク且十分ニ檢討シ之ニ對スル吾人ノ意見ヲ表明セリ。

問題ノ複雜性　今ヤ吾人ハ將來ニ注意ヲ集中スル時期ニ達シタルヲ以テ本章ノ考察ヲ最後トシ此上過去ニハ言及セザルベシ。前揭各章ノ讀者ニトリテハ本件紛爭ニ包含セラルル諸問題ハ往々稱セラルルガ如ク簡單ナルモノニ非ザルコト正ニ明カナルベシ。即チ問題ハ寧ロ極度ニ複雜ナルヲ以テ一切ノ事實及其ノ歷史的背景ニ關シ十分ナル知識アルモノノミ之ニ關スル決定的意見ヲ表明スル資格アリトイフベシ。本紛爭ハ一國ガ國際聯盟規約ノ提供スル調停ノ機會

ヲ豫メ十分ニ利用シ盡スコトナクシテ他ノ一國ニ宣戰ヲ布告セルガ如キ事件ニアラズ。又一國ノ國境ガ隣接國ノ武裝軍隊ニ依リ侵略セラレタルガ如キ簡單ナル事件ニモ非ズ。何トナレバ滿洲ニ於テハ世界ノ他ノ部分ニ於テ正確ナル類例ノ存セザル幾多ノ特殊事態アルヲ以テナリ。

本紛爭ハ双方トモ聯盟ノ一員タル二國間ニ於テ佛蘭西ト獨逸トヲ合シタル面積アル地域ニ關シ發生セルモノニシテ右地域ニ關シテハ日支双方ニ於テ各々諸種ノ權益ヲ有スルコトヲ主張シ而モ此等權益ハ其ノ一部ノミ國際法ニ依リ明瞭ニ定義セラレ居レリ。右地域ハ法律的ニハ完全ニ支那ノ一部分ナルモ其ノ地方政權ハ本紛爭ノ根底ヲナス事項ニ關シ日本ト直接交渉ヲナス程度ノ廣汎ナル自治的性質ノモノナリキ。

滿洲ノ事態ハ他ニ類例ナシ　日本ハ海岸ヨリ滿洲ノ中心ニ達スル鐵道及一地帶ヲ支配シ且該財産保護ノ爲約一萬ノ兵力ヲ維持シ且必要ノ場合ニハ條約上之ヲ一萬五千ニ增加スル權利アリト主張ス。又日本ハ總テノ在滿日本人ニ對シ法權ヲ行使シ且滿洲全土ニ亙リ領事館警察ヲ維持ス。

解釋ノ多岐性　問題ヲ討議スルモノハヨク敍上ノ事實ヲ考慮セザルベカラズ。宣戰ヲ布告スルコトナクシテ疑モナク支那ノ領土タル廣大ナル地域ガ日本軍隊ニ依リ强力ヲ以テ押收、占領セラレ且右行動ノ結果トシテ該地域ガ支那ノ他ノ部分ヨリ分離セラレ獨立ヲ宣言スルニ至レルハ事實ナリ。日本ハ右事實完了ニ至ラシメタル手段ハコノ種行動ノ防止ヲ目的トスル國際聯盟規約、不戰條約及華府九國條約ノ義務ニ合致スルモノナリト主張ス。更ニ本問題ニ付初メテ聯盟ノ注意ガ喚起セラレタル際漸ク開始セラレタル行動ハ其ノ後數ケ月間ニ完結セラレ且日本ハ右行動ヲ以テ九月三十日及十二月十日壽府ニ於テ其ノ代表ノ與ヘタル保障ト合致スルモノナリト主張ス。日本ノ說明ニ依レバ其ノ一切ノ軍事行動ハ正當ナル自衞行爲ニシテ右權利ハ敍上ノ多邊的條約中ニ包含セラレ又國際聯盟理事會ノ何レノ決議ニ於テモ奪ハレタルコトナシトナス。將又東三省ニ於テ支那ノ舊政權ニ代レル新政權ハ其ノ成立ガ地方人民ノ行爲ニシテ彼等ハ自發的ニ其ノ獨立ヲ宣言シ支那トノ一切ノ關係ヲ絕チ自己ノ政府ヲ樹立シタルモノナルヲ以テ正當視セラルルモノナリトナセリ。尙日本ノ主張ニ依レバ斯クノ如キ眞正ナル獨立運動ハ如何ナル國際條約若ハ國際聯盟理事會ノ決議ニ依リテモ禁ゼラレズ、且斯ル運動ノ既ニ行レタリト云フ事實ハ九國條約ノ適用ヲ著シク改變シ聯盟ニ依リ調査セラレツツアル問題ノ全性質ヲ根本的ニ變更セルモノナリトナセリ。

本紛爭ヲ特ニ複雜化且重大化スルモノハ叙上ノ如キ合法性ニ關スル主張ナリ。本件ニ付論議スルコトハ本委員會ノ機能ニ非ザルモ本委員會ハ聯盟ヲシテ紛爭國ノ名譽、威嚴及國家的利益ヲ損セズシテ紛爭ヲ解決セシメムガ爲十分ナル材料ヲ供給スルコトニ努メ來レリ。單ニ批評スルコトノミニテハ解決ヲ期シ難シ。兩者ノ調停ニ資スル爲實際的努力ナカルベカラズ。吾人ハ滿洲ニ於ケル過去ノ事件ニ關シ眞相ヲ捕捉スル爲苦心シ來レルガ卒直ニ言ヘバ右ハ吾人ノ仕事ノ僅カ一部分ニシテ而モ決シテ重要部分ニアラザルコトヲ認ム。吾人ハ使命ヲ行フニ當リ終始兩國政府ニ對シ紛爭ヲ調停スル爲國際聯盟ノ援助ノ提供方ヲ申入レタルガ今ヤ本委員會ハ其ノ使命ヲ終ラムトスルニ當リ正義ト平和トニ合致スル方法ニ依リ滿洲ニ於ケル日支ノ永遠ノ利益ヲ確保スル爲吾人ノ提議ヲ聯盟ニ提出セムトス。

解決ニ關スル不滿足ナル提議　單ナル原狀回復ガ問題ノ解決タリ得ザルコトハ如上吾人ノ述ベタル所ニ依リ明カナルベシ。蓋シ本紛爭ガ去ル九月以前ニ於ケル狀態ヨリ發生セルニ鑑ミ同狀態ノ回復ハ紛糾ヲ繰返ス結果ヲ招來スベク斯ノ如キハ全問題ヲ單ニ理論的ニ取扱ヒ現實ノ狀勢ヲ無視スルモノナリ。

ニ鑑ミ滿洲ニ於ケル現政權ノ維持及承認モ均シク不滿足ナルベシ。斯ル解決ハ現行國際義務ノ根本的原則若ハ極東平和ノ基礎タルベキ兩國間ノ良好ナル諒解ト兩立スルモノト認メラレズ。右ハ又支那ノ利益ニ違反シ又滿洲人民ノ希望ヲ無視スルノミナラズ結局ニ於テ日本ノ永遠ノ利益トナルベキヤ否ヤニ付少クトモ疑ヒアリ。

現政權ニ對スル滿洲人民ノ感情ニ付テハ何等疑問無シ。而シテ支那ハ東三省ノ完全ナル分離ヲ以テ永久的解決ナリトナシテ進ンデ之ヲ承諾スルガ如キコトナカルベシ。

滿洲ト遠隔ナル外蒙古地方トノ類似性ヲ論ズルハ其ノ當ヲ得ザルモノナリ。蓋シ外蒙古ト支那トノ間ニ何等鞏固ナル經濟的若クハ社會的紐帶ナク且人口稀薄ニシテ而モ其ノ大部分ハ支那人ニアラザルヲ以テナリ。滿洲ニ於ケル事態ト外蒙古ニ於ケル夫トハ極端ナル差異アリ。滿洲ニ定着セル數百萬ノ支那農民ハ各般ノ關係ニ於テ滿洲ヲシテ「長城」以南ノ支那ノ延長タラシメタリ。東三省ハ其ノ人種、文化及國民的感情ニ於テ支那化シ其ノ移住者ノ大部分ノ來レル隣省河北山東省ト殆ド變ルコトナシ。

然ノミナラズ過去ノ經驗ニ依レバ滿洲ノ支配者ハ支那ノ他ノ部分少クトモ北支那ニ於テ相當ナル程度ノ勢力ヲ行使

三省ヲ支那ノ他ノ部分ヨリ法律的ニ若クハ實際的ニ分離スルハ將來ニ向テ重大ナル「イルリデンテスト」問題ヲ發生シ其ノ結果常ニ支那ノ敵愾心ヲ盛ンナラシメ且恐ラク日本商品ノ「ボイコット」ヲ永續的ナラシメ以テ平和ヲ危殆ニ陥ルルモノト云フベシ。

本委員會ハ日本政府ヨリ滿洲ニ於ケル其ノ重大利益ニ關スル明確且貴重ナル「ステートメント」ヲ受領セリ。前章ニ記述セル程度以上ニ日本ノ滿洲ニ對スル經濟的依據ヲ誇張スルコトナク且右經濟的關係ハ日本ニ對シ東三省ノ政治的ハ勿論經濟的發達ヲ支配スルノ資格ヲ與フルモノナリト提言スルコトナク、日本ノ經濟的開發ノ爲滿洲ガ甚ダ重大ナルコトヲ認ムルモノナリ。將又日本ガ滿洲ノ經濟的開發ノ爲必要ナル治安ヲ維持シ得ベキ安定セル政府ノ樹立ヲ要求スルコトモ不合理ナリト考フルモノニ非ズ。然ルニ斯ノ如キ狀態ハ人民ノ願望ニ合致シ且彼等ノ感情及要望ヲ十分ニ考慮スル政權ニ依リ初メテ確實且有效ニ保障セラルベシ倚右滿洲ノ急速ナル經濟的開發ニ必要ナル資本ノ集中ハ現在極東ニ見ラレザル外部ノ信頼ト內部ノ平和ノ雰圍氣トニ於テ初メテ可能ナリ。

過剰人口增加ノ壓迫アルニ拘ラズ日本國民ハ移民ニ關スル現存ノ便益ヲ從來十分ニ利用スルコトナク、且日本政府ハ滿洲ニ其ノ國民ノ大移住ヲ計畫シタルコトナシ。而ルニ日本國民ハ農業的危機及人口問題ニ善處スル方法トシテ更ニ其ノ工業化ニ希望ヲ懸ケツツアリ。斯ノ如キ工業化ハ新タナル經濟的市場ヲ要求スベキ處日本ノ唯一ノ廣大且比較的確實ナル市場ハ亞細亞殊ニ支那ニ於テ見出サルベシ。日本ハ單ニ滿洲市場ノミナラズ全支那市場ヲ必要トスル處支那ガ統一シ近代化スル結果ハ當然其ノ生活程度向上スルニ至リ、貿易ヲ促進シ支那市場ノ購買力ヲ增加スベシ。

日本ニトリ重大利益アル右日支ノ經濟的提携ハ同時ニ支那ノ利益問題ナリ。何トナレバ支那ガ更ニ日本ト經濟的及技術的ニ合作スルコトハ其ノ國家改造ノ第一事業ヲ助成スルモノナルヲ發見スベケレバナリ。支那ハ其ノ國民主義ノ狹量ナル傾向ヲ抑壓スルコトニ依リ又友誼關係復活スルヤ否ヤ、組織的「ボイコット」ノ再現スルコトナキ旨ノ有效ナル保障ヲ與フルコトニ依リ右提携ヲ助成シ得ベシ。一方日本トシテハ滿洲問題ヲ支那關係ノ一般的問題ヨリ切離シ、支那トノ友好及合作ヲ不可能ナラシムル方法ニテ支那問題ヲ解決スルガ如キ有ラユル試ヲ放棄スルコトニ依リ右提携ヲ容易ナラシムルヲ得ベシ。

然ルニ滿洲ニ於ケル日本ノ行動及方針ヲ決定セシモノハ經濟的考慮ヨリハ寧ロ日本自體ノ安全ニ對スル懸念ナルベ

シ。日本ノ政治家及軍部ガ滿洲ハ「日本ノ生命線」ナルコトヲ常ニ口ニスルハ特ニ此ノ關係ニ於テナリトス。世人ハ右ノ如キ懸念ニ同情シ且有ラユル事態ニ於テ日本ノ國防ヲ確保スル爲重大責任ヲ負ハザルヲ得ザル右政治家及軍部ノ行動及動機ヲ了解スルニ努ムベシ。日本ノ領土ニ對スル敵對行動ノ根據地トシテ滿洲ヲ利用スルヲ防止セムトスル日本ノ關心及情勢ノ下ニ外國ノ軍隊ガ滿洲ノ國境ヲ越エ來ル場合有ラユル必要ノ軍事的手段ヲ執ルコトヲ可能ナラシメムトスル日本ノ希望ヲ假ニ認ムルトスルモ果シテ滿洲ヲ無期限ニ占領シ又之ガ爲當然必要ナルベキ巨額ノ財政的負擔ヲナスコトガ眞ニ外部ヨリスル危險ニ對スル最モ有效ナル保障ノ方法ナリヤ、將又右ノ如キ方法ニ依リ侵略ニ對抗スル場合、日本軍隊ガ若シ敵意ヲ持ツ支那ノ後援ノ下ニ不從順若ハ反抗的ナル民衆ニ依リ包圍セラルル場合ニハ甚ダシク困難ヲ感ズルコトナキヤ否ヤハ尙疑問トスベキ所ナルベシ。從テ現存ノ世界平和機關ノ基礎ヲナス原則ト、ヨリ善ク合致シ且世界ノ各地ニ於ケル他ノ強國ニ依リ締結セラレタル手續ニ類似セル方法ニ依リ安全問題ノ他ノ可能ナル解決方法ヲ考慮スルコトハ確カニ日本ノ爲利益ナリ。日本ハ亦世界ノ他ノ國家ノ同情ト好意トニ依リ而モ日本自身ハ何等ノ負擔ヲナスコトナクシテ日本ガ目下執リツツアル高價ナル手段ニ依リ得ラルルヨリ更ニ確實ナル安全ヲ得ル可能性モアリ得ベシ。

國際的利益 日支兩國ヲ別トシ世界ノ他ノ強國モ此ノ日支紛爭ニ關シ防衞スベキ重大利益ヲ有ス。吾人ハ曩ニ現行ノ多邊的條約ニ言及セリ。苟モ合意ニ依ル眞正且永續的解決ハ世界平和機關ノ根底ヲ爲ス之等原則的協定ノ條項ト兩立スルモノタルヲ要ス。華府會議ニ於ケル強國ノ代表者ヲ動カシタル諸種ノ考慮ハ今日尙有效ナリ。平和維持ノ爲必要不可缺ナル條件トシテ支那ノ改造ニ協力シ其ノ主權並ニ其ノ領土的行政的統一ヲ保全スルコトハ今日ニ於テモ一九二二年ニ於ケルガ如クニ列國ノ利益ナリ。支那ノ分裂ハ恐ラク急速ニ重大ナル國際競爭ヲ招來スベキ處右競爭ガ若シ相異レル社會組織ノ間ニ於ケル競爭ト同時ニ起ル場合ハ更ニ激烈ヲ加フベシ。最後ニ平和ノ利益ハ全世界ヲ通ジ同樣ナルベキ處聯盟規約及不戰條約ノ原則ノ適用ニ關シ世界ノ如何ナル方面ニ於テモ何等信賴ヲ失フコトアラバ斯ル原則ノ價値ト效力ハ他ノ方面ニ於テモ減少スベシ。

蘇聯邦ノ利益 本委員會ハ滿洲ニ於ケル蘇聯邦ノ利益ノ範圍ニ關シ直接ニ情報ヲ入手スルヲ得ズ。又滿洲問題ニ關スル蘇聯邦政府ノ觀察ヲ確ムルヲ得ザリキ。尤モ假令直接情報ヲ入手セザリシト雖モ本委員會ハ滿洲ニ於テ露西亞ノ

演ジタル役割若ハ蘇聯邦ガ東支鐵道ノ所有者トシテ將又支那ノ北方及東北方ニ於ケル領土ノ所有者トシテ該地域ニ於ケル蘇聯邦ノ有スル重大ナル利益ヲ看過スルヲ得ズ。蘇聯邦ノ重大利益ヲ無視セル解決方法ハ反ッテ將來ニ於ケル平和ヲ攪亂スル危險アリ、從テ永久性ナカルベキハ明カナリ。

結論　若シ日支兩國政府ガ双方ノ主要利益ノ一致セルコトヲ承認シ且平和ノ維持及相互間ニ於ケル友誼關係ノ樹立ヲモ右利益ノ中ニ包含セシムル意志アルニ於テハ兩國間紛爭解決策ノ基礎的大綱ハ叙上ノ考案ニ依リ充分明示セラルベシ。既述ノ如ク一九三一年九月以前ノ狀態ヘノ復歸ハ問題ニアラズ。將來ニ於ケル滿足スベキ政權ハ過激ナル變更ナクシテ現政權ヨリ進展セシメ得ベシ。次章ニ於テ吾人ハ之ガ爲或ル提議ヲ提出スベキモ、吾人ハ先ヅ滿足ナル解決方法トシテ準據スルヲ要スル一般的原則ヲ明カニセムト欲ス。此等原則ハ次ノ如シ。

滿足ナル解決ノ條件　(一)日支双方ノ利益ト兩立スルコト。

兩國ハ聯盟國ナルヲ以テ各々聯盟ヨリ同一ノ考慮ヲ拂ハルルコトヲ要求スルノ權利ヲ有ス。兩國カ利益ヲ獲得セサル解決ハ平和ノ爲ノ收得トナラサルヘシ。

(二)蘇聯邦ノ利益ニ對スル考慮。

第三國ノ利益ヲ考慮スルコトナク兩隣國間ニ於テ平和ヲ講スルハ公正若ハ賢明ナラサルヘク又平和ニ資スル所以ニ非サルヘシ。

(三)現存多邊的條約トノ一致。

如何ナル解決ト雖モ聯盟規約、不戰條約及華府九國條約ノ規定ニ合致スルヲ要ス。

(四)滿洲ニ於ケル日本ノ利益ノ承認。

滿洲ニ於ケル日本ノ權益ハ無視スルヲ得サル事實ニシテ如何ナル解決方法モ右ヲ承認シ且日本ト滿洲トノ歷史的關聯ヲ考慮ニ入レサセルモノハ滿足ナルモノニ非ルベシ

(五)日支兩國間ニ於ケル新條約關係ノ成立。

滿洲ニ於ケル兩國各自ノ權利、利益及責任ヲ新條約中ニ再ヒ聲明スルコトハ合意ニ依ル解決ノ一部ニシテ將來紛糾ヲ避ケ相互的信賴及協力ヲ回復スル爲ニ望マシキコトナリ。

(六)將來ニ於ケル紛爭解決ニ對スル有效ナル規定。

叙上ニ附隨的ナルモノトシテ比較的重要ナラサル紛爭ノ迅速ナル解決ヲ容易ナラシムル爲規定ヲ設クル要アリ。

(七)滿洲ノ自治。

滿洲ニ於ケル政府ハ支那ノ主權及行政的保全ト一致シ東三省ノ地方的狀況及特徵ニ應スル樣工夫セラレタル廣汎

ナル範圍ノ自治ヲ確保スル樣改メラルヘシ。新文治制度ハ善良ナル政治ノ本質的要求ヲ滿足スル樣構成運用セラルルヲ要ス。

(八)内部的秩序外部的侵略ニ對スル保障。

滿洲ノ内部的秩序ハ有效ナル地方的憲兵隊ニ依リ確保セラルヘク、外部的侵略ニ對スル安全ハ憲兵隊以外ノ一切ノ武裝隊ノ撤退及關係國間ニ於ケル不侵略條約ノ締結ニ依リ與ヘラルヘシ。

(九)日支兩國間ニ於ケル經濟的提携ノ促進。

本目的ノ爲兩國間ニ於ケル新通商條約ノ締結望マシ。斯ル條約ハ兩國間ニ於ケル通商關係ヲ公正ナル基礎ノ上ニ置キ双方ノ政治關係ノ改善ト一致セシムルコトヲ目的トスヘシ。

(十)支那ノ改造ニ關スル國際的協力。

支那ニ於ケル現今ノ政治的不安定カ日本トノ友好關係ニ對スル障害ニシテ且極東ニ於ケル平和ノ維持カ國際的關心事項タル關係上世界ノ他ノ部分ニ對スル危惧ナルト共ニ叙上ニ擧ケタル條件ハ支那ニ於テ強固ナル中央政府ナクシテハ實行スル能ハサル所ナルヲ以テ滿足ナル解決ニ對スル最終的要件ハ故孫逸仙博士カ提議セル如ク支那ノ内部改造ニ對スル一時的國際協力ナリ。

叙上ノ條件ノ實行ヨリ來ルベキ結果　若シ現時ノ事態ガ叙上ノ條件ヲ充シ叙上ノ觀念ヲ包含スルガ如キ方法ニ於テ緩和セラレ得ルニ於テハ日支兩國ハ其ノ紛爭ノ解決ヲ達成シ以テ兩國間ニ於ケル密接ナル了解及政治的協力ノ新時代ノ出發點トナスヲ得ベシ。若シ斯ル提携ガ確保セラレザルニ於テハ其ノ條件ガ如何ニモアレ如何ナル解決方法モ眞ノ效果ナカルベシ。斯ル新關係ヲ企畫スルコトハ現下ノ危機ニ際シテモ眞ニ不可能ナリヤ。青年日本ハ支那ニ於ケル強硬政策、滿洲ニ於ケル徹底政策ヲ叫ビ居レリ。右ノ如キ要求ヲナスモノハ九月十八日以前ノ時期ニ於ケル遷延策及小細工ニ厭キ果テ居レリ。彼等ハ其ノ目的ヲ達成スル爲性急ナリ。然レドモ日本ニ於テモ有ラユル目的ヲ達成スル爲適當ナル手段ヲ見出サザルベカラズ。右「積極」政策ノ更ニ熱心ナル代表者ノ若干竝ニ特ニ明白ナル理想主義及大ナル個人的熱誠ヲ以テ「滿洲國」政權ニ於ケル微妙ナル企畫ノ先覺者トナレル人士ト相識レル後日本ノ有スル問題ノ核心ニ近代支那ノ政治的發展及其進ミツツアル將來ノ傾向ニ關スル危惧ノ存スルコトヲ認識セザルヲ得ズ。此ノ危惧ハ右支那ノ發展ヲ制御シ且其ノ進路ヲ日本ノ經濟的利益ヲ確保ス

ルト共ニ同帝國ノ防衞ニ對スル軍略的要求ヲ滿足セシムル方向ニ向ケシムル目的ヲ有スル行動ニ導キタリ。然レドモ日本ノ輿論モ朧ゲナガラ滿洲ニ對スルモノト支那本部ニ對スルモノト二ツノ別個ノ政策ヲ有スルコトガ最早實行シ得ザルコトヲ知覺シツツアリ。故ニ其ノ滿洲ニ於ケル利益ヲ目標トスル場合ニ於テモ日本ハ支那ノ國民的感情ノ再興ヲ認メ同情ヲ以テ之ヲ歡迎スルヤモ知レズ。而シテ日本ハ支那ガ他ノ何レニ對シテモ支持ヲ求メザルコトヲ確保スル目的ノミヨリスルモ同國ト提携シ之ヲ誘導扶掖スルヤモ知レズ。

支那ニ於テモ亦該國家ニ對スル死活問題、眞ノ國家的問題ハ國家ノ改造及近代化ナルコトヲ認ムルニ至レル處彼等ハ右改造及近代化ノ政策ハ既ニ開始セラレ成功ノ望多キモ其ノ實現ニハ一切ノ國家特ニ其ノ最モ近隣者タル大國トノ友好的關係ノ涵養ヲ必要トスルコトヲ認メザルヲ得ザルナリ。支那ハ政治及經濟的事項ニ於テ一切ノ主要國ノ協力ヲ必要トスルモ特ニ支那ニトリ有益ナルハ日本政府ノ友好的態度及滿洲ニ於ケル日本ノ經濟的協力ナリ。新タニ目覺メタル國家主義ノ他ノ一切ノ要求ハ如何ニ正當ニシテ且緊急ナリトモ右國家ノ有效ナル內部的改造ニ對スル重大ナル必要ノ前ニハ之ヲ從トセザルベカラズ。

第十章　理事會ニ對スル考察及提議

終局的解決ヲ容易ナラシムル爲ノ提議　現在ノ紛爭解決ノ爲直接支那及日本政府ニ勸告ヲ提出スルハ本委員會ノ職務ニ非ズ。

然レドモ、「ブリアン」氏ガ本委員會創設ニ關スル決議ノ案文ヲ理事會ニ說明スルニ當リ使用セル字句ヲ借リテ云ヘバ「兩國間ニ現存スル紛爭原因ノ終局的解決ヲ容易ナラシムル」爲、吾人ハ茲ニ國際聯盟ニ對シ、聯盟ノ適當ナル機關ガ紛爭當事國ニ與フベキ確定的提案ヲ起草スルヲ助ケンコトヲ目的トセル諸提議ヲ吾人ノ研究ノ成果トシテ提出セントス。此等ノ提議ハ吾人ガ前章ニ於テ定メタル諸條件ヲ滿足セシムベキ一方法ヲ例示スルノ目的ヲ以テ爲サレタルモノト諒解セラルベシ。此等提議ハ主トシテ廣汎ナル原則

ニ關スルモノニシテ、多數ノ組目挿入ノ餘地ヲ存シ、且紛爭當事國ガ何等其ノ趣旨ニ副ヘル解決ヲ受諾スルノ意アルニ於テハ當事國ニ依ッテ多大ノ變更ヲ加ヘラレ得ベキモノトス。

假令日本ノ「滿洲國」正式承認ガ壽府ニ於ケル本報告書ノ審議以前ニ行ハルル事アリトスルモ—右ハ吾人ノ看過スル能ハザル事態ナルガ、吾人ハ吾人ノ仕事ガ徒勞ニ歸スベシトハ思考セズ。吾人ハ孰レニセヨ理事會ハ本報告ガ滿洲ニ於ケル關係兩大國ノ死活的利益ヲ滿足セシムルノ目的ヲ以テセル理事會ノ決議又ハ右兩大國ニ對スル勸告ニ役立ツベキ諸提議ヲ包含セルコトヲ見出スベシト信ズ。吾人ガ國際聯盟ノ諸原則、支那ニ關スル諸條約ノ精神及字句竝ニ平和ノ一般的利益ヲ念頭ニ置キツツ、他方現實ノ事態ヲ看過セズ、且東三省ニ現存シ目下發展ノ過程ニアル行政機關ヲ考慮ニ入レタルハ一ニ此ノ目的ニ出ヅルモノナリ。世界平和ノ至高ナル利益ノ爲、事態ガ如何ニ結着スルトモ、目下滿洲ニ於テ釀成セラレツツアル健全ナル力ヲ—理想タルト人物タルト將又思想タルト行爲タルト總テ之ヲ利用シ以テ日支兩國間ノ永續的了解ヲ確保セントスル目的ヲ以テ本報告中ノ諸提議ガ今尙日々ニ進展シツツアル事態ニ如何ニ擴張

シ適用セラルベキカヲ決定スルハ理事會ノ職務ナルベシ。

解決ヲ議センガ爲ノ當事國ノ招請　建言會議　吾人ハ第一ニ理事會ガ前章ニ示サレタル大綱ニ依リ其ノ紛爭ノ解決ヲ議センガ爲支那及日本兩國政府ヲ招請スベキコトヲ提議ス。若シ右招請受諾セラルルニ於テハ次ノ措置ハ東三省統治ノ爲特別ナル制度ノ構成ニ關シ審議シ且詳細ナル提案ヲ爲ス爲可及的速ニ建言會議ヲ招集スルコトニアリ。

右會議ハ支那及日本兩國政府ノ代表者、並ニ支那政府ニヨリ指定セラレタル方法ニヨリ選擇セラレタル者一名、日本政府ニヨリ指定セラレタル方法ニヨリ選擇セラレタル者一名、計二名ノ地方民ヲ代表スル委員ヲ以テ構成セラルベキコトヲ提議ス。當事國ノ同意アルニ於テハ、中立國「オブザーヴァー」ノ援助ヲ受クルコトヲ得ベシ。若シ右會議ガ何等特殊ノ點ニ付協定ニ達シ得ザル場合ニハ會議ハ意見相違ノ點ヲ理事會ニ提出シ而シテ理事會ハ此等ノ點ニ付圓滿ナル解決ヲ得ンコトヲ試ムベシ。

建言會議ノ開催ト同時ニ相互ノ權利利益ニ關スル日本及支那間ノ懸案ハ、別個ニ審議セラルベシ。此ノ場合ニ於テモ同意アラバ中立國「オブザーヴァー」ノ援助ヲ受クルコトヲ得ベシ。

最後ニ吾人ハ此等審議及交渉ノ結果ハ四個ノ異リタル文書ニ具現セラルベキコトヲ提議ス。

一、建言會議ノ勸告セル條件ニ基キ東三省ニ對シ特別ナル行政組織ヲ構成スヘキ旨ノ支那政府ノ宣言。

二、日本ノ利益ニ關スル日支條約。

三、調停、仲裁裁判、不侵略及相互援助ニ關スル日支條約

四、日支通商條約。

建言會議會合前右會議ノ考慮スベキ行政組織ノ概要ハ理事會援助ノ下ニ當事國間ニ協定セラルベキモノナルベキコトヲ提議ス。此ノ際考慮セラルベキ事項中ニハ左ノ如キモノアルベシ。

建言會議會合ノ場所、代表ノ性質、及中立國「オブザーヴァー」ガ希望セラルルヤ否ヤ。

支那ノ領土的及行政的保全維持ノ原則ト滿洲ニ對スル廣汎ナル自治ノ賦與。

內部ノ秩序維持ノ唯一ノ方法トシテノ特別憲兵隊創設ノ方針。

提議セラレタルガ如キ別個ノ條約ニヨツテ各般ノ懸案ヲ解決スルノ原則。

滿洲ニ於ケル最近ノ政治的發展ニ參加セル者全部ニ對スル大赦。

一度此等廣汎ナル原則ニシテ豫メ協定セラレンカ、細目ニ付テハ建言會議ニ於テ又ハ條約締結交渉ノ際當事國代表者ニ對シ能フ限リ充分ナル裁量ノ餘地ヲ殘スベシ。更ニ國際聯盟理事會ニ付議スルコトハ協定失敗ノ場合ニ於テノミ行ハルベキモノトス。

本手續ノ有利ナリト主張セラルル諸點　本手續ノ利益アル諸點中吾人ハ本手續ガ支那ノ主權ト抵觸スルコトナクシテ今日現存スル滿洲ノ事態ニ適合センガ爲メ有效且實際的ナル手段ヲ執ルコトヲ可能ナラシムルト同時ニ、今後支那ニ於ケル國內事態ノ變化ニ伴ヒ當然ナリト認メラルルガ如キ變革ヲ斟酌スルモノナルコトヲ主張ス。例ヘバ本報告ニ於テハ地方政府ノ改組、中央銀行ノ創立、外國人顧問ノ傭聘ノ如キ既ニ提案セラレタルカ又ハ現ニ實施セラレ居ル若干行政及財政上ノ變革ニ注意シタリ。此等事項ハ建言會議ニ於テモ依然之ヲ維持スルコト有利ナルヤモ知レズ。吾人ノ提議セルガ如キ方法ニヨリ選擇セラレタル滿洲住民代表者ノ本會議出席モ亦現在ノ制度ヨリ新制度ヘ一轉換ヲ容易ナラシムベシ。滿洲ニ對シテ企圖セラレ居ル自治制度ハ遼寧(奉天)、吉林及黑龍江ノ三省ニノミ施行スルヲ目的トス。

現ニ日本ガ熱河（東部內蒙古）ニ於テ享有スル權利ハ日本ノ利益ニ關スル條約中ニ於テ處理セラルベシ。

茲ニ於テ四個ノ文書ヲ順次考察スルコトヲ得ベシ。

一、宣言

建言會議ノ最終提案ハ支那政府ニ提出セラルベシ。而シテ支那政府ハ國際聯盟及九國條約調印國ニ送付セラルベキ宣言中ニ於テ之ヲ具現スベシ。聯盟國及九國條約調印國ハ右宣言ヲ了承シ、右宣言ハ支那政府ニ對シ國際約定ノ拘束的性質ヲ有スルモノナルコト明カナラシメラルベシ。

爾後必要ニヨリ本宣言ヲ改正スル場合ノ條件ハ上ニ提議セラレタル手續ニ遵ヒ協定セラレタル所ニヨリ宣言自體中ニ規定セラルベシ。宣言ハ東三省ニ於ケル支那中央政府ノ權力ト自治地方政府ノ權力トヲ區分スベシ。

中央政府ニ保留セラルベキ權力　中央政府ニ保留セラルベキ權力ハ左ノ如クナルベキコトヲ提議ス。

一、別ニ規定ナキ限リ一般條約及外交關係ノ管理。但シ中央政府ハ宣言ノ規定ニ牴觸スル國際約定ヲ爲サザルモノト了解セラル。

二、稅關、郵便局及鹽稅竝ニ能フ限リ印花稅及煙酒稅ノ事務ノ管理。中央政府東三省間ノ此等收入ヨリノ純收入ノ衡平ナル配分ハ建言會議ニ依ッテ決定セラルベシ。

三、宣言中ニ規定セラルベキ手續ニ依ル東三省政府執政ノ少クトモ第一次ノ任命權。缺員ハ同樣ノ方法又ハ建言會議ニ依ッテ同意セラレ且宣言中ニ挿入セラレタル東三省ニ於ケル或種ノ選任制度ニ依ッテ充タサルベシ。

四、東三省執政ニ對シ、東三省自治政府ノ管轄下ニアル事項ニ付中央政府ガ結ベル國際約定ノ履行ヲ確保スルニ必要ナルベキ命令ヲ爲スノ權。

五、本會議ニ依ッテ同意セラレタル其他ノ權力。

地方政府ノ權力　他ノ權力ハ總テ東三省自治政府ニ歸屬ス。

地方輿論ノ表現　能フ限リ商會、同業公會及其他ノ民間團體等ノ傳統的機關ヲ通ジテ政府ノ政策ニ關スル民意ノ發現ヲ得セシムル爲何等實際的制度ヲ案出シ得ベシ。

少數民族　白系露人及其他ノ少數民族ノ利益ヲ保全スル爲ニモ亦何等規定ヲ設クルノ要アルベシ。

憲兵隊　外國人教官ノ協力ヲ以テ特別憲兵隊ヲ組織スベキコトヲ提議ス。右憲兵隊ハ東三省ニ於ケル唯一ノ武裝隊タルベシ。

特別憲兵隊ノ組織ハ豫メ決定セラレタル期間內ニ完成セ

ラルルカ、又ハ完了ノ時期ハ宣言中ニ規定セラルベキ手續ニ從ヒ決定セラルルコトヲ要ス。該特別憲兵隊ハ東三省領域ニ於ケル唯一ノ武裝隊ナルベキヲ以テ之ガ組織完成ノ曉ニハ該領域ヨリ日支双方ノ何レニ屬スルヲ問ハズ有ラユル特別警察隊又ハ鐵道守備兵ヲ含ム他ノ總テノ武裝隊ノ撤收行ハルベシ。

外國人顧問　自治政府ノ執政ハ適當數ノ外國人顧問ヲ任命スベク其ノ内日本人ガ充分ナル割合ヲ占ムルコトヲ要ス。之ガ細目ハ前掲ノ手續ニ依リテ決定セラルベク且宣言中ニ陳述セラルベキモノトス。小國ノ國民モ大國ノ國民ト同樣ニ選定セラルルコトヲ得ベシ。

執政ハ聯盟理事會ヨリ提出スベキ人名簿中ヨリ二名ノ異レル國籍ニ屬スル外國人ヲ任命シ（一）警察（二）財務行政ヲ監督セシムベシ。右二名ノ官吏ハ新制度ノ組織期間及試驗期間中廣汎ナル權限ヲ有スベク其ノ權限ハ宣言中ニ明定セラルベシ。

執政ハ國際決濟銀行理事會ヨリ提出スベキ人名簿ヨリ一名ノ外國人ヲ東三省中央銀行ノ總顧問ニ任命スベシ。

外國人顧問及官吏ノ任用ハ支那國民黨ノ創立者ノ政策及現國民政府ノ政策ニ合致スルモノナリ。吾人ハ東三省ニ於ケル現下ノ狀態並ニ同地方ニ於ケル外國ノ權益及勢力ノ複雜性ガ平和及良好ナル施政ノ爲メニ特別ナル措置ヲ必要ナラシムルコトハ支那ノ輿論ガ之ヲ認識スルニ難カラザルベキコトヲ期待ス。然レドモ茲ニ提議セル外國人顧問及官吏（新制度組織ノ期間ニ於テ例外的ニ廣汎ナル權限ヲ行使スベキ外國人ヲ含ム）ノ存在ハ單ニ國際協力ノ形式ヲ表現スルニ過キザルモノナルコトハ吾人ノ特ニ強調セント欲スル所ナリ。之等外國人顧問及官吏ハ支那政府ノ受諾シ得ベキ形式ニ依リ又支那ノ主權ニ合致セル方法ニ於テ選任セラレザルベカラズ。彼等ハ從來海關及郵政ノ組織ニ傭聘セラレタル外國人又ハ支那人ト協力セル國際聯盟ノ技術的機關ノ場合ニ於ケルト同樣、任命セラレタル曉ニハ任命セル政府ノ雇傭人ナリト自覺セザルベカラズ。此ノ點ニ關シ内田伯ガ一九三二年八月二十五日日本議會ニ於テ爲シタル演說中ノ左ノ一節ハ興味アルモノナリ。

「、、、、現ニ我國ノ如キモ明治維新後多數ノ外國人ヲ官吏又ハ顧問トシテ傭聘シテ居タノデアリマシテ、例ヘハ明治八年頃ニ於ケル是等外國人ノ總數ハ五百名ヲ超過シテ居タノデアリマス、、、、」

尙日支協力ノ雰圍氣ノ中ニ比較的多數ノ日本人顧問ガ任

命セラルルコトハ彼等ヲシテ特ニ地方的狀況ニ適合セル訓練及知識ヲ供與セシメ得ベキ點ニ於テモ亦之ヲ强調スルヲ要ス。過渡期ヲ通ジテ目標トスベキハ結局ニ於テ外國人ノ傭聘ヲ不必要ナラシムベキ支那人ノミニ依リテ組織セラレタル文官制度ノ創立ナリ。

二、日本ノ利益ニ關スル日支條約

本報告書中ニ提議セル日支間ノ三條約締結ノ交渉ニ當ルベキ者ニ對シテ完全ナル自由裁量ヲ殘スベキコトハ勿論ナルモ、彼等ガ處理スベキ事項ヲ指示スルコトハ有用ナルベシ。

東三省ニ於ケル日本ノ利益及熱河ニ於ケル或種ノ日本ノ利益ニ關スル日支條約ハ主トシテ日本人ノ特定ノ經濟的權及利鐵道問題ヲ取扱フベキモノトス。

條約ノ目的 即チ該條約ノ目的ハ左ノ如クナルヲ要ス。

一、滿洲ノ經濟的開發ニ對スル日本ノ自由ナル參加、尤モ右ハ同地方ヲ經濟的又ハ政治的ニ支配スル權利ヲ伴ハザルモノトス。

二、熱河ニ於テ現ニ日本ガ享有シツツアル權利ノ存續。

三、居住權及商租權ヲ全滿洲地域ニ擴張スルコト及之ニ伴ヒテ治外法權ノ原則ヲ多少修正スルコト。

四、鐵道運行ニ關スル協定。

日本人ノ居住權 今日迄ノ所日本人ノ居住權ハ南滿洲及熱河ニ限定セラレ居リタリ尤モ南北滿洲ノ間ニハ何等確定的境界存セズ。而シテ之等權利ハ支那ガ受諾シ得ズト認メタル條件ノ下ニ行使セラレ其ノ結果絕エズ軋轢紛爭ヲ醸シタリ。課稅及司法ニ關スル治外法權的地位ハ日本人及朝鮮人ノ双方ノ爲ニ主張セラレ、後者ニ付テハ不明確ニシテ且論爭ノ原因ヲ爲セル特別規定存セリ。本委員會ニ提出セラレタル證據ヨリ見テ支那ハ治外法權的地位ガ伴ハザルニ於テハ現在ノ限定的居住權ヲ全滿洲ニ擴張スルニ同意ヲ與フルモノト信ズベキ理由アリ。治外法權的地位ガ之ニ伴フニ於テハ支那領域內ニ日本人國家ヲ創立スルノ結果ヲ招來スベシト主張セラレタリ。

居住權ト治外法權トハ密接ナル關係ヲ有スルコト明ナリ。然レドモ司法及財政制度ガ從來滿洲ニ於ケルヨリモ遙カニ高キ程度ニ到達スル時期迄ハ日本人ハ治外法權的地位ノ放棄ニ同意セザルベキコトモ同樣ニ明ナリ。

茲ニ二種ノ妥協方法アリ。一ハ治外法權的地位ヲ伴フ現行ノ居住權ハ之ヲ維持シ、治外法權的地位ヲ伴ハザル居住權ヲ日本人及朝鮮人双方ノ爲ニ北滿洲及熱河ニ擴張スベシ

ト云フニアリ。他ハ日本人ハ滿洲及熱河ノ何處ニ於テモ治外法權的地位ノ下ニ居住スルノ權利ヲ與ヘラルベク、朝鮮人ハ治外法權的地位ヲ伴ハザル同樣ノ權利ヲ與ヘラルベシトスルニアリ。右二種ノ提議ハ何レモ或程度ノ長所ヲ有スルモ同時ニ比較的重大ナル故障アリ。本問題ノ最モ滿足ナル解決方法ハ之等地方ノ行政ヲ治外法權的地位ヲ必要トセザル程度ニ有能ナラシムルニアルコト明ナリ。此ノ見地ヨリシテ吾人ハ少クトモ二名ノ外國人顧問（內一名ハ日本國籍ヲ有スルコトヲ要ス）ガ最高法院ニ配屬セラレンコト及他ノ顧問ガ他ノ法院ニ配屬セラルルコトノ有利ナルコトヲ勸告ス。之等法院ガ外國人關係事項ニ關シ判決スルコトヲ求メラレタル有ラユル事件ニ付之等顧問ノ意見ハ公開セラルベシ。吾人ハ右ノ外改組期間中ニ於テ外國人ガ財務行政ニ關シ或種ノ監督ヲ有スルコト望マシト思考シ宣言ニ關シ右ノ趣旨ノ提議ヲ存シ置キタル次第ナリ。

尙右ノ外日支何レカノ政府ガ其ノ名ニ於テ又ハ人民ニ代リテ提起スベキ苦情ヲ處理スベキ仲裁判所ヲ調停條約中ニ於テ設立スルコトハ更ニ一段ノ保障ヲ取付クル所以ナリ。

複雜ニシテ困難ナル本問題ノ決定ハ條約締結交涉ノ當事國側ニ殘サルベキモノナルモ、朝鮮人ノ如ク多數ニシテ現ニ人口增加ノ途ニアリ且支那住民ト斯ク迄モ密接ナル關係ノ下ニ居住スル少數民族ニ對シテ現在ノ如キ外國ニ依ル保護ヲ爲スコトハ必然的ニ感情ノ衝突ヲ頻發セシメ延イテハ地方的事件ノ發生及外國ノ干涉ヲ招クモノナリ。本件ノ如キ軋轢ノ源泉ガ除去セラルルコトハ平和ノ見地ヨリシテ望マシ。

日本人ニ對シテ與ヘラルベキ有ラユル居住權ノ擴張ハ「最惠國」條項ノ利益ヲ享有スル他ノ有ラユル列國ノ國民ニ對シテ同樣ノ條件ノ下ニ適用セラルベキモノトス。但シ右ハ治外法權國ガ支那トノ間ニ同樣ノ條約ヲ締結セル場合ニ限ル。

鐵道　鐵道ニ關シテハ第三章ニ於テ日支双方鐵道建設者及鐵道當局ノ間ニ廣汎ニシテ双互ニ利益ヲ齎ス如キ鐵道計畫ヲ目標トスル協力ハ過去ニ於テ皆無又ハ殆ンド無カリシコトヲ指摘セリ。若シ將來ニ於ケル軋轢ヲ避ケントセバ過去ニ於ケル競爭制度ヲ終熄セシメ之ニ代フルニ諸線ニ於ケル貨客運賃ニ關スル共通ノ了解ヲ以テスルノ規定ヲ本條約中ニ設クルコト必要ナリ。本問題ハ本報告ニ附屬スル特別研究第一ニ於テ檢討セラレ居レリ。吾人ノ意見ニ依レバ二ツノ解決方法アリ。右二方法ハ何レカ一ツヲ選擇スルヲ得

ルト共ニ一個ノ終局的解決ノ段楷トモ見ルコトヲ得ベシ。

其ノ一ハ其ノ範圍ニ於テ稍制限セラレタルモノニシテ日支兩國鐵道當局ノ協力ヲ容易ナラシムベキ右兩當局間ノ業務協定ナリ。日支兩國ハ協力ノ原則ノ上ニ滿洲ニ於ケル各自ノ鐵道系統ヲ經營スルコトニ同意スベク且日支混合鐵道委員會ハ少クトモ一名ノ外國人顧問ヲ加ヘ或ル他國ニ存スル理事會ノ職能ニ類似セル職能ヲ行使スベシ。更ニ徹底的ナル解決ハ日支兩國ノ鐵道ノ利益ヲ合同スルコトニ依リ與ヘラルベシ。而シテ斯ル合同ハ若シ協定セラレ得ルニ於テハ實ニ本報告ガ確保セントスル目的ノ一タル眞ノ日支兩國ノ經濟的協同ノ標徵トナルベシ。右ハ支那ノ利益ヲ保障シツツ滿洲ニ於ケル凡テノ鐵道ニ對シテ南滿洲鐵道ノ偉大ナル技術的經驗ノ利益ヲ提供スルヲ得シムベク且過去數ケ月間ニ於テ滿洲ニ於ケル諸鐵道ニ適用セラレタル制度ヨリ容易ニ進展セラレ得ベキモノナリ。右ハ將來ニ於テ東支鐵道ヲ含ム更ニ度汎ナル國際協定ノ成立ニ至ルノ途ヲ開クニ至ルヤモ知レズ。斯クノ如キ合同ニ關スル詳細ナル記述ハ實行ノ可能性アル事項ノ例トシテ附屬書ニ之ヲ揭載セルモ詳細ナル計畫ハ當事者間ニ於ケル直接交渉ニ依リテノミ進展セラルベシ。鐵道問題ノ斯ノ如キ解決ハ南滿洲鐵道ヲシテ純然タル商業的企業トナスベク且一度特別憲兵隊ガ完全ニ組織セラルルニ於テハ右憲兵隊ニ依リ與ヘラルル安全ハ鐵道守備隊ノ撤退ヲ可能ナラシメ相當莫大ナル費用ヲ節約シ得ベシ。若シ右ニシテ爲シ得ベクムバ豫メ鐵道附屬地內ニ特別土地章程及特別市政ヲ施行シ南滿洲鐵道及日本國民ノ既得權ヲ保障スベキナリ。

敍上ノ大綱ニ依ル條約ニシテ協定シ得ベクムバ東三省及熱河ニ於ケル日本人ノ權利ニ對スル法律的根據ハ認メラレ且右根據ハ少クトモ現行條約及協定同樣日本ニ有利ナルト共ニ支那ニハヨリ以上ニ受諾シ得ベキモノナルヲ以テ支那ハ一九一五年ノ條約ノ如キ條約及協定ニ依リ日本ニ爲シタル一切ノ確定的讓與ヲ新條約ニ依リ廢棄又ハ修正セラレザル限リ承認スルニ困難ヲ有セザルベシ。日本ノ要求スル一切ノ比較的重要ナラザル權利ニシテ其ノ效力ニ付爭アルモノハ協定ノ題目タルベシ。若シ協定成立セザルニ於テハ調停條約ニ揭ゲタル手續ニ訴フベシ。

三、調停、仲裁裁判、不侵略及相互援助ニ關スル日支條約

本條約ノ題目ニ付テハ多クノ先例及現存實例存スルヲ以テ詳細ニ記述スルノ必要ナシ。

斯ル條約ハ日支兩國政府間ニ發生スルガ如キ一切ノ紛爭ノ解決ヲ援助スル機能ヲ有スル調停委員會ニ付規定スベク又法律的經驗及極東ニ關スル必要ナル知識ヲ有スル人士ヲ以テ構成スル仲裁裁判所ヲ設置スベシ。右裁判所ハ宣言又ハ新條約ノ解釋ニ關スル日支兩國政府間ニ於ケル一切ノ紛爭及調停條約中ニ特ニ規定セラルルガ如キ他ノ範疇ニ屬スル紛爭ヲ處理スベシ。

最後ニ本條約ニ挿入セラレタル不侵略及相互援助ニ關スル規定ニ基キ當事國ハ滿洲ガ漸次非武裝地帶トナルコトニ同意スベシ。右ノ目的ヲ以テ憲兵隊ノ組織ガ實行セラレタル後ニ於テ兩當事國ノ一方又ハ第三國ニ依ル非武裝地域ノ侵犯ハ侵略行爲ヲ構成スルモノトナシ他ノ當事國又ハ第三者ノ攻擊ノ場合ニハ兩當事國ガ聯盟規約ノ下ニ行動スベキ聯盟理事會ノ權利ヲ害スルコトナク非武裝地域ヲ防禦スルニ適當ナリト思考スル一切ノ措置ヲ執ルノ權利ヲ有スベシ。

若シ蘇聯邦政府ニシテ斯ル條約中ノ不侵略及相互援助ニ關スル條章ニ參加セムト欲スルニ於テハ別個ノ三國協定中ニ適當ナル條項ヲ包含セシメ得ベシ。

四、日支通商條約

通商條約ハ當然他國ノ現存條約上ノ權利ヲ保障シツツ能フ限リ日支兩國間ニ於ケル交易ヲ增進シ得ベキ條件ノ設定ヲ目的トスルモノナルベシ。本條約ハ支那人消費者ノ個人的權利ヲ害スルコトナク日本人ノ商業ニ對スル組織的「ボイコット」運動ヲ禁壓スル爲其ノ權限内ニ於ケル一切ノ措置ヲ講ズベキ旨ノ支那政府ニ依ル約定ヲ包含スベシ。

批判　前揭宣言及條約ノ對象ニ關スル叙上ノ提議及考察ハ聯盟理事會ニ提出シ其ノ考慮ニ供セラルベシ。將來ニ於ケル協定ノ細目ノ如何ニ拘ラズ最モ重キヲ置クベキ點ハ交涉ガ與フ限リ速ニ開始セラレ且相互信賴ノ精神ニ依ッテ行ハルベキコトナリ。

吾人ノ任務ハ終了セリ。

滿洲ハ過去一年間爭鬪及混亂ニ委セラレタリ。

廣大、肥沃且豐饒ナル滿洲ノ人民ハ恐ラク曾テ經驗シタルコトナキ悲慘ナル狀態ニ遭遇セリ。

日支兩國間ノ關係ハ假裝セル戰爭關係ニテ將來ニ付テ、憂慮ニ堪ヘザルモノアリ。

吾人ハ右ノ如キ狀態ヲ創造セル事情ニ關シ報告セリ。

何人ト雖モ聯盟ノ遭遇セル問題ノ重大性及其ノ解決ノ困難ニ付充分了知スル所ナリ。

吾人ハ其ノ報告ヲ完了セントスル際新聞紙上ニ於テ日支兩國外務大臣ノ二個ノ聲明ヲ閲讀セルガ其ノ双方ニ付最モ重大ナル一點ヲ拔萃スベシ。

八月二十八日羅文幹ハ南京ニ於テ左ノ如ク聲明セリ。

「支那ハ現事態ノ解決ニ對スル如何ナル合理的ナル提案モ聯盟規約、不戰條約及九國條約ノ條章及精神並ニ支那ノ主權ト兩立スヘキモノタルヲ要シ又極東ニ於ケル永續的平和ヲ有效ニ確保スルモノタルヲ要スト信ス。」

八月三十日内田伯ハ東京ニ於テ左ノ如ク聲明セリト傳ヘラル。

「帝國政府ハ日支兩國關係ノ問題ハ滿蒙問題ヨリ更ニ重要ナリト思惟ス。」

吾人ハ本報告書ヲ終了スルニ當リ右兩聲明ノ基調ヲ爲ス思想ヲ再錄スルヲ以テ最モ適當ト思考スルモノナリ。右思想ハ吾人ノ蒐集セル證據、問題ニ關スル吾人ノ研究、從テ吾人ノ確信ト正確ニ對應スルモノニシテ吾人ハ右聲明ニ依リ表示セラレタル政策ガ迅速且有效ニ實行セラルルニ於テハ必ズヤ極東ニ於ケル二大國及人類一般ノ最善ノ利益ニ於テ滿洲問題ノ滿足ナル解決ヲ遂ゲ得ベキヲ信ズルモノナリ。

昭和七年十月十八日印刷
昭和七年十一月一日發行

中央公論（第四十七年第十二號）附錄
リツトン報告書（英文和文）

發行兼編輯人　牧野武夫
東京市牛込區榎町七番地
印刷人　堀修造
東京市丸ノ内ビルヂング五八八區
印刷所　日清印刷株式會社
發行所　中央公論社
電話丸の内五三三五番
振替東京三四番
振替（代理部用）東京七八四七五番